

# 釜ノ口遺跡 II

— 6・7・8次調査 —

1997

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財團

埋蔵文化財センター

# 釜ノ口遺跡 II

— 6・7・8次調査 —



1997

松山市教育委員会

財團法人松山市生涯學習振興財團

埋蔵文化財センター



卷頭図版(I) 編み物



卷頭図版(2) 8次調査 S D 3 出土鏡



卷頭図版(3) 8次調査出土ガラス玉

## 序

釜ノ口遺跡が所在する松山市小坂4丁目周辺は、東方の東野台地から舌状に延びた微高地の端に位置しています。昭和47年の国道11号バイパスの建設工事に伴って確認された1次調査以降、開発事業の増加に伴って8次調査まで行われ、当該地域における遺跡の特徴が浮き彫りになってきました。

本書は、釜ノ口遺跡6～8次調査の発掘調査報告書です。まず昭和60年度に行われた6次調査は、マンションの建設に伴って発掘調査され、堅穴式住居址1棟、円形特殊造構1棟などが検出されています。特に堅穴式住居址SB1は、弥生時代後期の円形焼失住居と考えられています。また平成2年度の7次調査では、堅穴式住居址4棟ほかを検出し、いずれも前述の6次調査同様、焼失住居の可能性があります。特に堅穴式住居址SB1は、良好な残存条件のもとにあったため、4本の柱使用材が残存していました。更に平成7年度に行われた8次調査では、松山平野で2例目となる花弁形の堅穴式住居址1棟のほか、掘立柱建物などの諸造構を検出しています。

その他、特筆すべきこととして、8次調査において検出した貯蔵穴があります。この貯蔵穴には、弥生時代後期の土器と共に種子、果実の核、木器、編み籠状の植物遺体などが当時のままの姿で発見されています。

これらから、当時の住居の構造や食生活の様子などを復元することが可能になり、私たちの祖先の暮らしを垣間見ることができることでしょう。

本書の刊行にあたり、当遺跡の発掘調査についてご指導・ご協力を頂きました関係各位、ならびに関係機関に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも埋蔵文化財の発掘調査に関して、より一層のご協力をお願い申しあげます。

さらに本書が、松山市民をはじめ一人でも多くの方々に、埋蔵文化財に対する理解向上と調査研究のために、ご活用いただければ幸いです。

平成9年8月15日

財團法人 松山市生涯学習振興財團  
理事長 田 中 誠 一

## 例　　言

1. 本書は、松山市教育委員会及び財松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが昭和60年～平成8年の間に、松山市小坂4丁目内で実施した3遺跡についての発掘調査報告書である。
2. 遺構の略号は、住居址：S B、土坑：S K、溝：S D、柱穴：S P、不明遺構：S Xとし、遺跡ごとに通し番号を1から付記した。
3. 遺構の測量は、調査担当者及び担当者の指示のもと補助員が実施した。
4. 遺物の実測及び掲載図の製図は、高尾和長・相原秀仁の指示のもと、眞木潔・白石公信・田丸竜馬・水口あをい・田崎真理・中村紫・宮内真弓・越智令子・森川利恵・松本美知子・岡根なおみ・新出寿美子・山下満佐子・平岡直美・村上規子・伊藤みわこ・竹内真琴・中平久美子・長岡千尋・山下純代・渡辺いづみ他が行った。
5. 掲載の遺構図・遺物図は、スケールドに縮尺を表記した。
6. 写真図版は、遺構の撮影は担当者と大西朋子が、遺物の撮影は大西朋子が担当し、図版作成は担当者と協議のうえ大西朋子が行った。
7. 本書の執筆は高尾和長・相原秀仁・宮内慎一・山本健一・梅木謙一が行い、浄書は白石公信の協力を得た。
8. 調査及び報告の作成にあたり、京都大学上原真人・愛媛大学下條信行・平井幸弘・田崎博之・村上恭通の各先生からご指導とご助言を賜った。記して感謝申し上げます。
9. 自然科学分析では、勝古環境研究所に分析及び助言をいただいた。
10. 本報告書に関する資料は、松山市立埋蔵文化財センターが保管・収蔵している。
11. 編集は高尾和長が担当し、編集・校正においては梅木謙一の協力を得た。

## 本文目次

第1章 はじめに	〔高尾〕
1. 調査に至る経緯	1
2. 刊行組織	
3. 環境	2
第2章 父ノ口遺跡6次調査地	〔高尾〕
1. 調査の経緯	7
2. 層位	8
3. 遺構と遺物	12
4. 小結	22
第3章 父ノ口遺跡7次調査地	〔高尾〕
1. 調査の経緯	31
2. 層位	32
3. 遺構と遺物	35
4. 小結	49
第4章 父ノ口遺跡8次調査地	〔相原・山本・宮内〕
1. 調査の経緯	55
2. 層位	58
3. 遺構と遺物	63
4. 小結	123
第5章 自然科学分析	〔古環境研究所〕 147
第6章 考察：松山平野における弥生時代集落出土のガラス玉	〔梅木〕 181
第7章まとめ	〔高尾〕 189

## 挿図目次

### 第1章 はじめに

第1図 篠ノ口遺跡周辺の遺跡分布図(1) (縮尺 1/25,000) ..... 3

第2図 篠ノ口遺跡周辺の遺跡分布図(2) (縮尺 1/5,000) ..... 4

### 第2章 篠ノ口遺跡6次調査地

第3図 調査位置図 (縮尺 1/800) ..... 7

第4図 調査地上層図 (縮尺 1/80) ..... 9

第5図 造構配置図 (縮尺 1/200) ..... 10

第6図 S B 1 測量図 (縮尺 1/60) ..... 11

第7図 S B 1 炉調景図 (縮尺 1/20) ..... 12

第8図 S B 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/4、1/2、1/1) ..... 13

第9図 S D 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/4) ..... 14

第10図 S D 2 出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4) ..... 15

第11図 S D 2 出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4) ..... 16

第12図 S D 4 出土遺物実測図 (縮尺 1/4) ..... 17

第13図 S K 1 測量図 (縮尺 1/40) ..... 18

第14図 S K 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/4) ..... 19

第15図 円形周溝状造構測量図 (縮尺 1/40) ..... 20

第16図 円形周溝状造構出土遺物実測図 (縮尺 1/4) ..... 21

第17図 その他の出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4) ..... 21

第18図 その他の出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4) ..... 21

### 第3章 篠ノ口遺跡7次調査地

第19図 調査位置図 (縮尺 1/600) ..... 31

第20図 調査地土層図 (縮尺 1/80) ..... 33

第21図 造構配置図 (縮尺 1/150) ..... 34

第22図 S B 1 測量図 (縮尺 1/40) ..... 36

第23図 S B 1 出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4) ..... 37

第24図 S B 1 出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4、1/2、1/1) ..... 38

第25図 S B 1 出土遺物実測図(3) (縮尺 1/4) ..... 39

第26図 S B 1 出土遺物実測図(4) (縮尺 1/4) ..... 40

第27図 S B 1 出土遺物実測図(5) (縮尺 1/4) ..... 41

第28図 S B 1 出土遺物実測図(6) (縮尺 1/4) ..... 42

第29図 S B 2 測量図 (縮尺 1/40) ..... 44

第30図 S B 2 出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4、1/1) ..... 45

第31図 S B 2 出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4) ..... 46

第32図 S B 3 測量図 (縮尺 1/40) ..... 46

第33図 S B 3 出土遺物実測図 (縮尺 1/4、1/1) ..... 47

第34図	S B 4 測量図 (縮尺 1 / 40) .....	48
第35図	S B 4 出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4)	
<b>第4章 築ノ口遺跡8次調査地</b>		
第36図	調査地位置図 (縮尺 1 / 1,500) .....	56
第37図	調査地区割図 (縮尺 1 / 300) .....	57
第38図	調査区東壁土層図 (縮尺 1 / 40) .....	59
第39図	調査区北壁土層図 (縮尺 1 / 40)	
第40図	遺構配置図 (縮尺 1 / 150) .....	61
第41図	S B 2 測量図 (縮尺 1 / 50) .....	65
第42図	S B 2 区割図 (縮尺 1 / 60) .....	67
第43図	S B 2 建て替え前測量図 (縮尺 1 / 60) .....	68
第44図	S B 2 炉測量図 (縮尺 1 / 20) .....	69
第45図	S B 2 S D①～④測量図 (縮尺 1 / 20) .....	70
第46図	S B 2 建て替え後測量図 (縮尺 1 / 60) .....	71
第47図	S B 2 出土遺物実測図(1) (縮尺 1 / 4) .....	73
第48図	S B 2 出土遺物実測図(2) (縮尺 1 / 3) .....	74
第49図	S B 2 ガラス小玉出土状況図 (縮尺 1 / 60) .....	75
第50図	S B 2 出土ガラス小玉実測図 (縮尺 1 / 1) .....	76
第51図	S B 2 炉出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4、1 / 3、1 / 1) .....	77
第52図	S B 3 測量図 (縮尺 1 / 50) .....	79
第53図	S B 3 区割図 (縮尺 1 / 50) .....	81
第54図	S B 3 建て替え前測量図 (縮尺 1 / 50) .....	82
第55図	S B 3 炉①測量図 (縮尺 1 / 20) .....	
第56図	S B 3 炉②測量図 (縮尺 1 / 20) .....	84
第57図	S B 3 貼床①出土遺物実測図 (縮尺 1 / 3) .....	
第58図	S B 3 貼床①ガラス小玉出土状況図及び実測図 (縮尺 1 / 50、1 / 1) .....	85
第59図	S B 3 炉②出土遺物 (縮尺 1 / 4、1 / 3、1 / 1) .....	86
第60図	S B 3 建て替え後測量図 (縮尺 1 / 50) .....	88
第61図	S B 3 炉③測量図 (縮尺 1 / 20) .....	89
第62図	S B 3 貼床②ガラス小玉出土状況図及び実測図 (縮尺 1 / 50、1 / 1) .....	90
第63図	S B 3 出土遺物実測図(1) (縮尺 1 / 4) .....	91
第64図	S B 3 出土遺物実測図(2) (縮尺 1 / 3) .....	92
第65図	S B 3 出土遺物実測図(3) (縮尺 1 / 4) .....	93
第66図	S B 3 ガラス小玉出土状況図及び実測図 (縮尺 1 / 50、1 / 1) .....	94
第67図	S B 3 焼上・炭化材・炭化物検出状況図 (縮尺 1 / 50) .....	95
第68図	S B 3 出土柱材実測図(1) (縮尺 1 / 6) .....	96
第69図	S B 3 出土柱材実測図(2) (縮尺 1 / 6) .....	97
第70図	S D 3 と思われる遺物実測図 (縮尺 1 / 4) .....	

第71図	S B 1 測量図 (縮尺 1/50) .....	99
第72図	S B 1 出土遺物実測図 (縮尺 1/4、1/6、1/1) .....	100
第73図	S B 4 測量図 (縮尺 1/50) .....	101
第74図	S B 4 炉測量図 (縮尺 1/20) .....	102
第75図	S B 4 出土遺物実測図 (縮尺 1/4、1/3) .....	102
第76図	掘立1測量図 (縮尺 1/80) .....	103
第77図	掘立1出土遺物実測図 (縮尺 1/4、1/3) .....	104
第78図	掘立2測量図 (縮尺 1/80) .....	104
第79図	S K 1 測量図 (縮尺 1/20) .....	105
第80図	S K 1 遺物出土状況図(1) (縮尺 1/20) .....	106
第81図	S K 1 遺物出土状況図(2) (縮尺 1/20) .....	106
第82図	S K 1 出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4、1/3) .....	107
第83図	S K 1 出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4) .....	108
第84図	S K 1 湿・湿度図 .....	109
第85図	S K 2 測量図 (縮尺 1/20) .....	110
第86図	S K 2 遺物出土状況図(1) (縮尺 1/20) .....	111
第87図	S K 2 遺物出土状況図(2) (縮尺 1/20) .....	111
第88図	S K 2 出土遺物実測図 (縮尺 1/4、1/3) .....	112
第89図	S D 7 断面図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/20、1/4、1/3) .....	114
第90図	S D 3 断面図 (縮尺 1/20) .....	115
第91図	S D 3 出土遺物実測図(1) (縮尺 1/4) .....	116
第92図	S D 3 出土遺物実測図(2) (縮尺 1/4、1/1、1/3) .....	117
第93図	S D 3 出土遺物実測図(3) (縮尺 2/3) .....	118
第94図	S D 2 断面図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/20、1/4) .....	119
第95図	S D 4 断面図 (縮尺 1/20) .....	120
第96図	S D 1 断面図及び出土遺物実測図 (縮尺 1/20、1/4、1/3) .....	120
第97図	S D 5・6 断面図 (縮尺 1/20) .....	121
第98図	ピット水田址出土遺物実測図 (縮尺 1/3) .....	121
第99図	第III層出土遺物実測図 (縮尺 1/3、1/4) .....	122
第100図	その他の出土遺物実測図 (縮尺 1/4、1/3) .....	123

## 第5章 自然科学分析

第101図	釜ノ口7次調査柱材の顕微鏡写真 .....	149
第102図	釜ノ口8次調査の花粉・胞子遺体・寄生虫卵 .....	157
第103図	植物珪酸体の顕微鏡写真(1) .....	159
第104図	植物珪酸体の顕微鏡写真(2) .....	160
第105図	釜ノ口遺跡8次調査出土種実(1) .....	172
第106図	釜ノ口遺跡8次調査出土種実(2) .....	173
第107図	釜ノ口遺跡8次調査出土木材の顕微鏡写真(1) .....	179

第108図 釜ノ口遺跡8次調査出土木材の顕微鏡写真(2).....	180
第6章 考察：松山平野における弥生時代集落出土のガラス玉	
第109図 遺跡位置図.....	184
第7章 まとめ	
第110図 釜ノ口遺跡8次調査S B 3変遷図.....	191

## 表 目 次

第1章 はじめに	
表1 調査地一覧.....	4
第2章 釜ノ口遺跡6次調査地	
表2 竪穴式住居址一覧.....	23
表3 溝一覧	
表4 上坑一覧	
表5 周溝状遺構一覧	
表6 S B 1出土遺物観察表（土製品）	
表7 S B 1出土遺物観察表（石製品）.....	24
表8 S D 1出土遺物観察表（土製品）	
表9 S D 2出土遺物観察表（土製品）	
表10 S D 4出土遺物観察表（土製品）.....	25
表11 S K 1出土遺物観察表（土製品）	
表12 円形周溝状遺構出土遺物観察表（土製品）	
表13 その他の出土遺物観察表（土製品）.....	26
第3章 釜ノ口遺跡7次調査地	
表14 竪穴式住居址一覧.....	50
表15 S B 1出土遺物観察表（土製品）	
表16 S B 1出土遺物観察表（石製品）.....	51
表17 S B 1出土遺物観察表（装身具）	
表18 S B 1出土遺物観察表（木製品）	
表19 S B 2出土遺物観察表（土製品）.....	52
表20 S B 2出土遺物観察表（装身具）	
表21 S B 2出土遺物観察表（木製品）	
表22 S B 3出土遺物観察表（土製品）	
表23 S B 3出土遺物観察表（装身具）	
表24 S B 4出土遺物観察表（土製品）	
第4章 釜ノ口遺跡8次調査地	
表25 S B 2出土装身具一覧 .....	126
表26 S B 3出土装身具一覧	

表27	堅穴式住居址一覧	127
表28	堅穴式住居址の炉一覧	
表29	堅穴式住居址検出の土坑一覧	
表30	堅穴式住居址検出の溝一覧	128
表31	掘立柱建物址一覧	
表32	土坑一覧	
表33	溝一覧	129
表34	S B 2 出土遺物観察表（土製品）	
表35	S B 2 出土遺物観察表（石製品）	130
表36	S B 2 出土遺物観察表（装身具）	131
表37	S B 2 炉出土遺物観察表（土製品）	133
表38	S B 2 炉出土遺物観察表（石製品）	
表39	S B 2 炉出土遺物観察表（装身具）	134
表40	S B 3 貼床①出土遺物観察表（石製品）	
表41	S B 3 貼床①出土遺物観察表（装身具）	
表42	S B 3 炉②出土遺物観察表（土製品）	
表43	S B 3 炉②出土遺物観察表（石製品）	135
表44	S B 3 炉②出土遺物観察表（装身具）	
表45	S B 3 貼床②出土遺物観察表（装身具）	
表46	S B 3 出土遺物観察表（土製品）	
表47	S B 3 出土遺物観察表（石製品）	136
表48	S B 3 出土遺物観察表（装身具）	137
表49	S B 3 出土遺物観察表（木製品）	
表50	S D 3 出土と思われる遺物観察表（土製品）	
表51	S B 1 出土遺物観察表（土製品）	138
表52	S B 1 出土遺物観察表（装身具）	
表53	S B 1 出土遺物観察表（木製品）	
表54	S B 4 出土遺物観察表（土製品）	
表55	S B 4 出土遺物観察表（石製品）	
表56	掘立1出土遺物観察表（土製品）	139
表57	掘立1出土遺物観察表（石製品）	
表58	S K 1 出土遺物観察表（土製品）	
表59	S K 1 出土遺物観察表（石製品）	
表60	S K 1 出土遺物観察表（木製品）	140
表61	S K 2 出土遺物観察表（土製品）	
表62	S K 2 出土遺物観察表（石製品）	141
表63	S K 2 出土遺物観察表（木製品）	
表64	S D 7 出土遺物観察表（土製品）	

表65	S D 7 出土遺物観察表（石製品）	141
表66	S D 3 出土遺物観察表（土製品）	142
表67	S D 3 出土遺物観察表（石製品）	144
表68	S D 3 出土遺物観察表（装身具）	
表69	S D 3 出土遺物観察表（鉄製品）	
表70	S D 2 出土遺物観察表（土製品）	
表71	S D 1 出土遺物観察表（土製品）	
表72	S D 1 出土遺物観察表（石製品）	145
表73	S P 19 出土遺物観察表（石製品）	
表74	水川址出土遺物観察表（石製品）	
表75	第III層包含層出土遺物観察表（土製品）	
表76	その他の出土遺物観察表（土製品）	146
表77	その他の出土遺物観察表（石製品）	

## 第5章 自然科学分析

表78	釜ノ口遺跡7次調査柱材の樹種同定結果	147
表79	釜ノ口遺跡8次調査SK1における花粉分析結果	153
表80	釜ノ口遺跡8次調査SK2における花粉分析結果	154
表81	釜ノ口遺跡8次調査SK1における花粉組成図	155
表82	釜ノ口遺跡8次調査SK2における花粉組成図	156
表83	植物珪酸体の顕微鏡写真	158
表84	釜ノ口遺跡8次調査SB3モモ <i>Prunus persica</i> Batsch.核の同定結果	165
表85	釜ノ口遺跡8次調査SK2モモ <i>Prunus persica</i> Batsch.核の同定結果	
表86	釜ノ口遺跡8次調査掘立1モモ <i>Prunus persica</i> Batsch.核の同定結果	
表87	釜ノ口遺跡8次調査SK1ヒヨウタン類 <i>Lagenaria sicararis</i> Standi.種子の同定結果	166
表88	釜ノ口遺跡8次調査SK1モモ <i>Prunus persica</i> Batsch.核の同定結果	167
表89	釜ノ口遺跡8次調査出土種実同定結果	168
表90	釜ノ口遺跡8次調査SK1水洗選別(0.25mm篩)における種実同定結果	
表91	釜ノ口遺跡8次調査SK1出土モモ核計測値(完形のみ)	169
表92	釜ノ口遺跡8次調査SK1土器241内下層検出のモモ核計測値(完形のみ)	170
表93	釜ノ口遺跡8次調査SK1出土ヒヨウタン類種子の計測値	171
表94	釜ノ口遺跡8次調査出土木材の樹種同定結果一覧表	178

## 第6章 考察：松山平野における弥生時代集落出土のガラス玉

表95	松山平野のガラス玉出土の弥生時代竪穴式住居址一覧	184
表96	松山平野の弥生時代竪穴式住居址出土のガラス小玉一覧	185

## 第7章 まとめ

表97	釜ノ口遺跡出土竪穴式住居址一覧	190
-----	-----------------	-----

## 図版目次

- 卷頭図版 1 築ノ口遺跡 8 次 S K 1 出土編み物
- 卷頭図版 2 築ノ口遺跡 8 次 S D 3 出土の鏡
- 卷頭図版 3 築ノ口遺跡 8 次 S B 2 出土ガラス玉
- 第2章 築ノ口遺跡 6 次調査地
- 図版 1 1 調査地全景（南より）
- 2 遺構検出状況（北西より）
- 図版 2 1 S B 1 遺存状況（南より）
- 2 S B 1 遺物出土状況（南より）
- 図版 3 1 S B 1 検出状況（南より）
- 2 円形周溝状遺構・S D 1 遺存状況（北より）
- 図版 4 1 円形周溝状遺構検出状況（西より）
- 2 S D 2 遺物出土状況（北より）
- 図版 5 1 S B 1 出土遺物（7・13・15）、S D 1 出土遺物（18）、S D 2 出土遺物（35）、その他の出土遺物（55・57・66）
- 第3章 築ノ口遺跡 7 次調査地
- 図版 6 1 遺構遺存状況①（東より）
- 2 遺構遺存状況②（北西より）
- 図版 7 1 遺構検出状況（南東より）
- 2 S B 1 遺存状況（北より）
- 図版 8 1 S B 1 遺物出土状況①（東より）
- 2 S B 1 遺物出土状況②（南より）
- 図版 9 1 S B 1 炭化材出土状況（東より）
- 2 焼土出土状況（東上より）
- 図版 10 1 S B 1 検出状況（東より）
- 2 S B 1 内 S P①・S P②柱材出土状況（東より）
- 図版 11 1 S B 1 内 S P①柱材出土状況（東より）
- 2 S B 1 内 S P②柱材出土状況（東より）
- 3 S B 1 内 S P③柱材出土状況（西より）
- 4 S B 1 内 S P④柱材出土状況（西より）
- 図版 12 1 S B 2 遺存状況（北東より）
- 2 S B 2 遺物出土状況（西より）
- 図版 13 1 S B 2 内 S P①柱材出土状況（南より）
- 2 S B 2 内 S P②柱材出土状況（南より）
- 図版 14 1 S B 3・S B 4 検出状況（南東より）
- 2 S B 3 遺物出土状況（北より）
- 図版 15 1 S B 4 遺物出土状況（南東より）

2 S B 4 検出状況（南より）

図版16 1 S B 1 出土遺物（10・13・14・16・17）、S B 2 出土遺物（27）、S B 3 出土遺物（30・31）

図版17 1 S B 1 出土柱材・礎板①（18～24）、S B 2 出土柱材①（28・29）

図版18 1 S B 1 出土柱材・礎板②（18～24）、S B 2 出土柱材②（28・29）

#### 第4章 築ノロ遺跡8次調査地

図版19 1 造構造存状況①（南より）

図版20 1 造構造存状況②（南より）

2 造構造存状況③（西より）

図版21 1 造構検出状況①（北西より）

2 造構検出状況②（北西より）

図版22 1 東壁上層（西より）

2 北壁上層（南より）

図版23 1 S B 2 造存状況（南西より）

2 S B 2 貼床検出状況（北より）

図版24 1 S B 2 検出状況（南西より）

2 S B 2 上層（東より）

図版25 1 S B 2 遺物出土状況（南より）

2 S B 2 燃土Na2出土状況（北東より）

図版26 1 S B 2 内S P⑥柱材出土状況（南より）

2 S B 2 内S D①・S D②検出状況（南より）

図版27 1 S B 3 造存状況（西より）

2 S B 3 検出状況（西より）

図版28 1 S B 3 上層（南より）

2 S B 3 貼床②検出状況（北東より）

図版29 1 S B 3 炉②検出状況（南西より）

2 S B 3 貼床①検出状況（北東より）

図版30 1 S B 3 炭化材・焼土出土状況①（北東より）

2 S B 3 炭化材・焼土出土状況②（北東より）

図版31 1 S B 3 内S P①柱材出土状況（南より）

2 S B 3 内S P②柱材出土状況（南より）

3 S B 3 内S P③柱材出土状況（南より）

4 S B 3 内S P④柱材出土状況（南より）

図版32 1 S B 1 検出状況（北東より）

2 S B 1 遺物出土状況（南より）

図版33 1 S B 1 内S P①柱材出土状況（南より）

2 S B 1 内S P①礎板出土状況（南より）

3 S B 1 内S P②状況（南東より）

- 4 S B 1 内 S P ⑥状況（南より）
- 図版34 1 S B 4 検出状況（北より）  
2 S B 4 炉完掘状況（南より）  
3 S B 4 内 S P ⑤柱材出土状況（南より）
- 図版35 1 S K 1 遺物出土状況①（北より）  
2 S K 1 遺物出土状況②（東より）
- 図版36 1 S K 2 遺物出土状況①（南西より）  
2 S K 2 遺物出土状況②（北西より）
- 図版37 1 S K 2 遺物出土状況③（南西より）  
2 S K 2 検出状況（南西より）
- 図版38 1 掘立1 検出状況（北西より）  
2 S D 7 検出状況（北西より）
- 図版39 1 S D 3 検出状況①（北より）  
2 S D 3 検出状況②（北東より）
- 図版40 1 S D 3 検出状況③（北より）  
2 S D 3 検出状況④（南東より）
- 図版41 1 S B 2 出土遺物
- 図版42 1 S B 2 炉出土遺物  
2 S B 4 出土遺物  
3 S B 3 貼床①出土遺物（135）、S B 3 丸②出土遺物（151・153）
- 図版43 1 S B 3 出土遺物①
- 図版44 1 S B 3 出土遺物②  
2 S B 1 出土遺物
- 図版45 1 S K 1 出土遺物①
- 図版46 1 S K 1 出土遺物②
- 図版47 1 S K 1 出土遺物③
- 図版48 1 S K 2 出土遺物
- 図版49 1 S D 3 出土遺物  
2 S D 2 出土遺物  
3 第III層出土遺物  
4 掘立1 出土遺物
- 図版50 1 S K 1 出土遺物（244）、S D 3 出土遺物（313）、S D 1 出土遺物（324）、その他の出土遺物（351）  
2 S D 7 出土遺物（272・273）、S D 1 出土遺物（325）、S P 19（326）、水田址出土遺物（328）
- 図版51 1 S B 2 ・ S B 3 出土ガラス小玉

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経緯

昭和60年～平成7年の間に、松山市小坂4丁目36、小坂4丁目19-5、小坂4丁目28-1他の3ヶ所について、埋蔵文化財の確認願いが開発関係者より、松山市教育委員会文化教育課に提出された。

確認願いが申請された小坂4丁目36、小坂4丁目19-5、小坂4丁目28-1他は、松山市が指定する『釜ノ口遺物包含地』内にあり周知の遺跡地として知られている。

また申請地周辺は、発掘調査の結果（釜ノ口遺跡1～5次）弥生時代～古代の集落遺跡であることが明らかとなっている。

文化教育課では、確認申請が提出された三地点について、埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲や性格を確認するため、順次試掘調査と書類申請を実施した。調査結果、申請地内には遺構や遺物が検出され、遺跡の存在が想定される状況にあった。

試掘調査及び書類審査の結果より、文化教育課と申請者及び関係者は、発掘調査について協議を行い、遺跡が消失する地域に対し、弥生時代から古代の集落域やその構造を明らかにすること目的とした調査を実施することとした。

発掘調査は、文化教育課及び財松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが主体となり、申請者及び関係者の協議のもと、昭和60年、平成2年、平成7～8年に実施した。

## 2. 刊行組織（平成9年8月15日現在）

松山市教育委員会	教育長	池田尚郷
生涯教育部	部長	三好俊彦
	次長	丹下正勝
	次長	河口雄三
文化教育課	課長	松平泰定
財松山市生涯学習振興財團	理事長	田中誠一
	事務局長	池田秀雄
	事務局次長	河口雄三
埋蔵文化財センター	所長	河口雄三
	次長	田所延行
	調査係長	田城武志
	主任	栗田正芳（文化教育課職員）
	担当	高尾和長
		梅木謙一
		山本健一
		相原秀仁
		大西朋子

### 3. 環 境

調査地は松山平野北東部を西流する石手川と川付川に挟まれた扇状台地上に立地する。扇状地上には古くより遺跡の存在が知られ、弥生時代から中世に至る遺跡が多数発見されている。

#### 縄文時代

東本遺跡4次調査地からはアカホヤ火山灰にともなって石器10点が出土しており、松山平野においても数少ない貴重な資料がある。

#### 弥生時代

前期：樽味遺跡より前期前半の土坑（SK5）と溝（SD4）、樽味高木遺跡からは前期後半の土器を検出している。桑原田中遺跡2次調査地、東本遺跡4次調査地においても土器片が出土している。

中期：樽味高木遺跡1～3次調査地からは中期後半の土器が出土している。特に2次調査地SB1と3次調査地SX1からは遺存状況の良い夔形土器・壺形土器・高环形土器が出土している。

後期：釜ノ口遺跡1次調査地1～3号住居址と釜ノ口遺跡4・5次調査地土坑状遺構からは多量の土器が出土している。また、拓南中学校遺跡SK3からは、大型複合口縁壺、大型器台などの土器が出土している。さらに、本調査地北部に位置する中村松田遺跡からは竪穴式住居址8棟を検出されている。SB4からは後期後葉の土器が多数出土し、その中には検出例の少ない鳥形注入土器がある。このように本調査地周辺では、弥生時代後期の集落関連遺構が多数確認されている。

#### 古墳時代

素鷺小学校遺跡からは竪穴式住居址1棟、掘立柱建物址9棟が検出されている。釜ノ口遺跡一帯では古墳時代の遺跡の検出例は少なく、素鷺小学校周辺の調査は期待されるところである。

#### 古 代

当地区には白鳳時代に比定される中村廃寺の存在が知られているが、具体的な位置は現在までに確認されていない。ただし、中村松田遺跡からは奈良時代の掘立柱建物址1棟を検出していることから、調査地周辺が古代において集落であったことは確かである。

#### 中 世

七ノ坪遺跡より土師器、黒色土器、灰釉陶器が出土し、西天山遺跡からも11世紀後半の土師器が出土している。これら出土遺物は、集落が存在した可能性を示す資料である。

#### 〔文献〕

梅木謙一・宮内慎一 1992 「樽味高木遺跡の調査」『桑原地区の遺跡』松山市教育委員会、御松山市生涯学習振興財团

梅木謙一・山本健一 1994 「桑原田中遺跡2次調査地、樽味高木遺跡2・3・4次調査地」『桑原地区的遺跡Ⅱ』松山市教育委員会、御松山市生涯学習振興財团

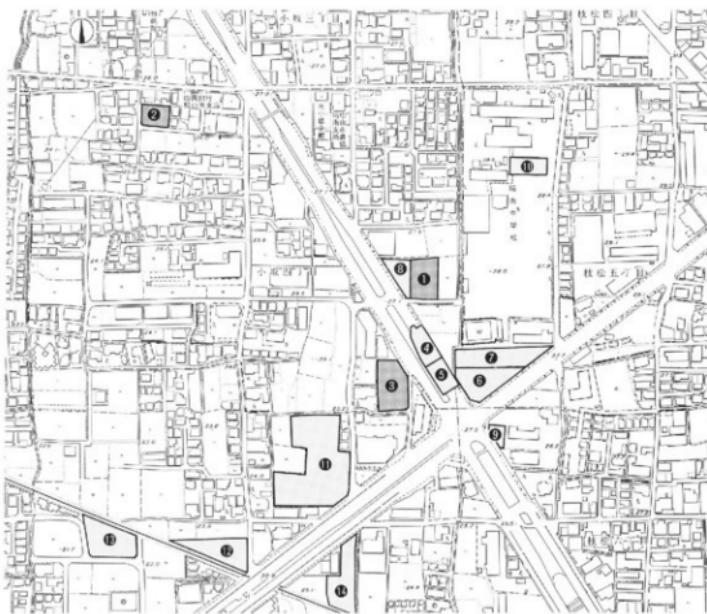
大山正風・長井教秋 1973 「釜ノ口遺跡調査報告書」松山市教育委員会

歷史的環境



第1図 釜ノ口遺跡・周辺主要遺跡分布図(Ⅰ) (S=1:25,000)

はじめに



第2図 釜ノ口遺跡周辺の遺跡分布図(2) (S=1:5,000)

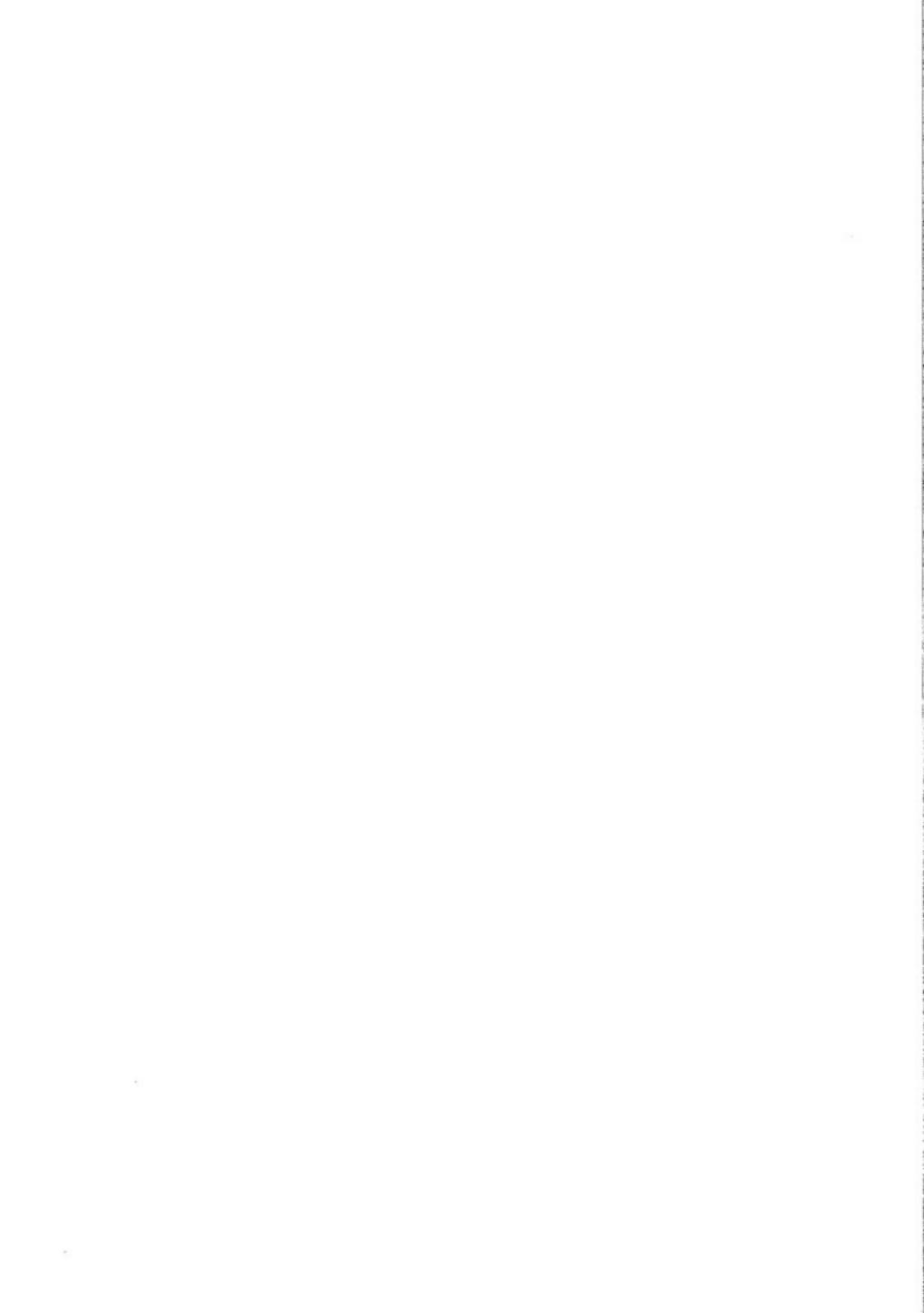
表1 調査地一覧

No.	遺跡名	所 在	面 積	調査期 間
1	釜ノ口遺跡6次	小坂4丁目36	1,220.18m <sup>2</sup>	昭和60年10月1日～同年10月22日
2	釜ノ口遺跡7次	小坂4丁目19-5	707.17m <sup>2</sup>	平成2年5月1日～同年7月13日
3	釜ノ口遺跡8次	小坂4丁目28-1-1他	1,485.92m <sup>2</sup>	平成7年12月11日～8年3月21日
4	釜ノ口遺跡1次	11号バイパス	800.00m <sup>2</sup>	昭和47年12月19日～48年2月23日
5	釜ノ口遺跡2次	11号バイパス	660.00m <sup>2</sup>	昭和48年2月23日～同年3月31日
6	釜ノ口遺跡3次	枝松5丁目100-1他	1,657.00m <sup>2</sup>	昭和51年2月21日～同年3月31日
7	釜ノ口遺跡4次	枝松5丁目105他	1,328.00m <sup>2</sup>	昭和51年10月6日～同年11月10日
8	釜ノ口遺跡5次	小坂4丁目37-1	644.00m <sup>2</sup>	昭和53年1月10日～同年1月25日
9	枝松遺跡1次	枝松6丁目98-2他	1,832.00m <sup>2</sup>	昭和50年10月25日～同年11月20日
10	拓南中遺跡	枝松5丁目4-39他	600.00m <sup>2</sup>	昭和59年7月15日～60年3月30日
11	榎田遺跡	小坂5丁目295-1他	5,058.00m <sup>2</sup>	平成元年5月29日～同年6月30日
12	西天山遺跡1次	小坂5丁目336-3他	1,208.00m <sup>2</sup>	平成元年9月20日～同年11月16日
13	西天山遺跡2次	小坂5丁目341-4他	1,612.00m <sup>2</sup>	平成3年6月15日～同年9月7日
14	小坂八斗蔵遺跡	小坂5丁目312-3	1,064.00m <sup>2</sup>	平成3年5月20日～同年7月31日

第 2 章

# 釜ノ口遺跡

—6次調査地—



## 第2章 篠ノ口遺跡6次調査地

### 1. 調査の経過

#### (1) 調査に至る経緯

1984(昭和60)年10月、有限会社 沖原不動産より、松山市小坂4丁目36番1・36番2における共同住宅建設にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包含地『篠ノ口遺物包含地』内にあたり、これまでにも多くの調査が実施されており、周知の遺跡として知られている。同包蔵地内には、弥生時代後期の住居址を検出した篠ノ口遺跡1次・2次・5次調査地などがある。

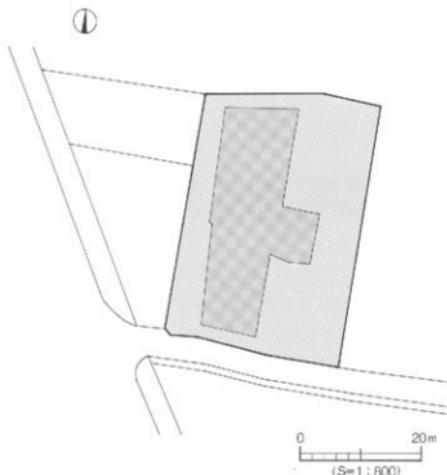
のことより、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため1984(昭和60)年10月に文化教育課は試掘調査を実施した。

試掘調査では、造構及び弥生土器を含む遺物包含層を確認した。

この結果を受け、文化教育課と有限会社 沖原不動産の二者は、遺跡の取り扱いについて協議を行い、宅地開発によって失われる遺構について、記録保存のため発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、弥生時代の集落範囲の確認を主目的とし、文化教育課が主体となり、有限会社 沖原不動産の協力のもと1984(昭和60)年10月1日に開始した。

本調査地は、石手川にかかる国道11号線の永木橋より南850mの地点で、標高26.80mに立地する。



第3図 調査位置図

## (2) 調査組織

調査地 松山市小坂4丁目36番1・36番2  
遺跡名 釜ノ口遺跡 6次調査地  
調査期間 野外調査1984(昭和60)年10月1日～同年10月22日  
調査面積 1220.18m<sup>2</sup>  
調査協力 有限会社 沖原不動産  
調査担当 西尾幸則(現 松山市教育委員会文化教育課係長)  
松村 淳(平成7年退職)  
池田 学(平成7年退職)  
作業員 宮内慎一、高尾和長、木下公一、石丸直樹、渡部一郎、浅山慎一、宮崎泰好、他

## 2. 層位(第4図)

本調査地では、第I層から第VI層までの土層を確認した。

第I層：灰色土である。調査区全域で15～20cmの堆積を測る。現在の耕作土である。

第II層：黄褐色土である。調査区全域で15～30cmの堆積を測る。耕作上床土である。

第III層：暗茶褐色土である。調査区全域で5～10cmの堆積を測るが、中央部では部分的に未検出である。

第IV層：黒色土である。調査区北側と南側で5～15cmの堆積を測る。

第V層：茶褐色土である。調査区中央部で5～15cmの堆積を測る。

第VI層：黄色土である。(地山)

遺構は、第VI層上面での検出であり、竪穴式住居址1棟、溝4条、土坑1基、柱穴56基、円形周溝状遺構1基を検出した。第VI層上面の地形は、調査区南東から北西に向かって、緩やかに傾斜している。

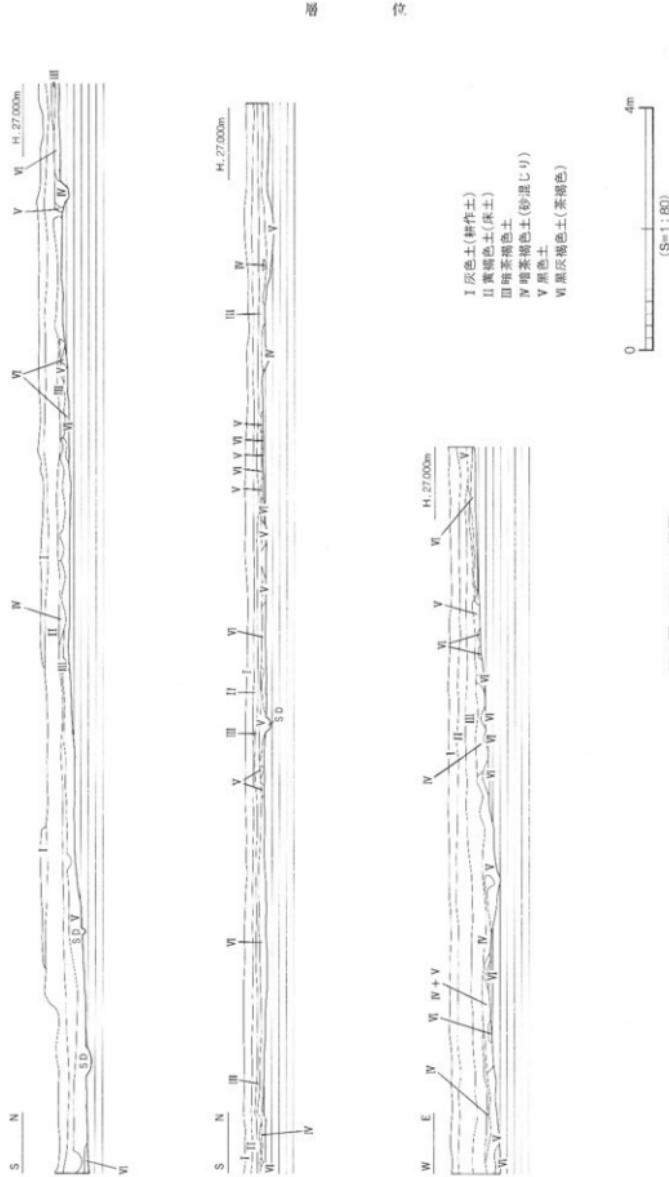
## 3. 遺構と遺物

本調査における遺構は全て第VI層上面で検出した。検出遺構は弥生時代後期の竪穴式住居址1棟、溝3条、土坑1基、円形周溝状遺構1基と時期不明の溝1条、柱穴56基である。

### (1) 竪穴式住居址(SB)

#### S B 1 (第6図、図版2・3)

調査区中央西のD 8～F 9区に位置し、S D 2を切る。平面形態は円形で、規模は長軸710cm、短軸670cm、壁高15cmを測る。埋土は黒色土である。内部施設には主柱穴とかがある。主柱穴は5本で、平面形態は円形を呈し、規模は直径28～44cm、深さ60～78cmを測る。炉は住居址中央より南側に位置する。平面形態は梢円形を呈し、規模は長軸100cm、短軸52cm、深さ60cmを測る。埋土は黒色粘質土と褐色粘質土からなり、灰が出土している。遺物は、床面より甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高环形土器、石鎚、石庖丁、勾玉が出土している。また、床面からは焼土と炭化物を多く検出している。焼土は主柱穴の周囲に集中し、主柱穴を結ぶ線よりはとんどのものが外側に位置する。



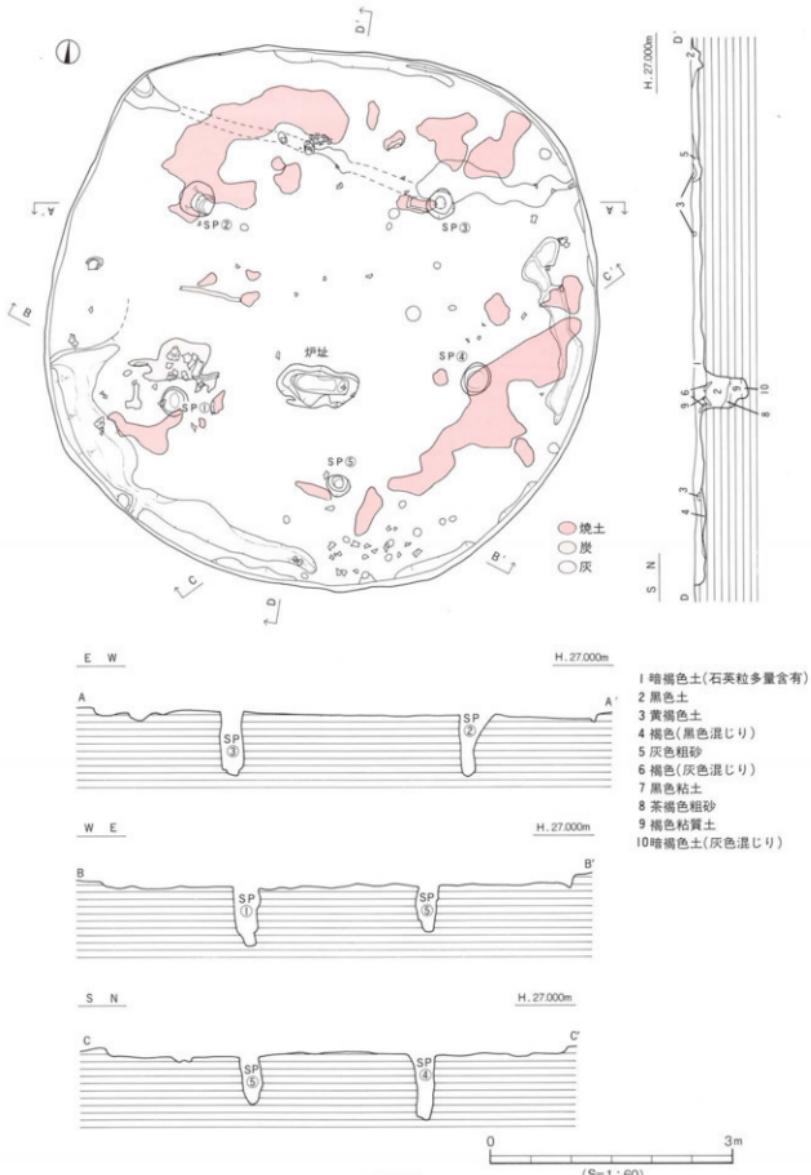
第4図 調査地土層図

釜ノ口遺跡 6次調査地

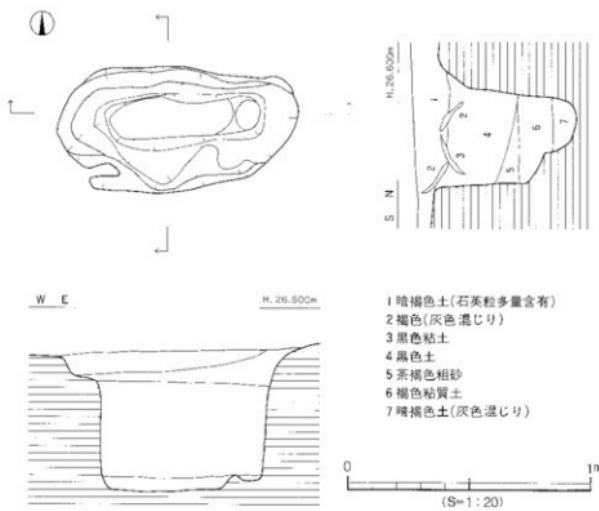


第5図 遺構配置図

遺構と遺物



第6図 SBI測量図



## 出土遺物（第8図、図版5）

壺形土器（1） 半底の底部片。外面にハケ、内面に指頭痕が残る。

壺形土器（2～10） 2・3は口縁部片。2は大きくラップ状に開く口頸部。3の頸部は直口気味に立ち上がり、口縁部は短く外反する。4・5は頸部片。頸部に凸帶を貼り付け、凸帶上に斜行文と斜格子文を施す。6・7は複合口縁壺。6は口縁拡張部が剥ぎ落ち擬円錐が看取できる。7は接合部がタガ状を呈し、拡張部に横沈線文と山形文を施す。8は直立気味に立ち上がる頸部に横沈線文4条を施す。9は半底の底部片。器壁が厚い。10は直口口縁壺。端部は先細りで指頭痕あり。

高環形土器（11） 浅い環部。口縁部は短く明瞭な段をもって反り気味に外反する。

鉢形土器（12） 繩文土器。刻目凸帶を貼り付ける。

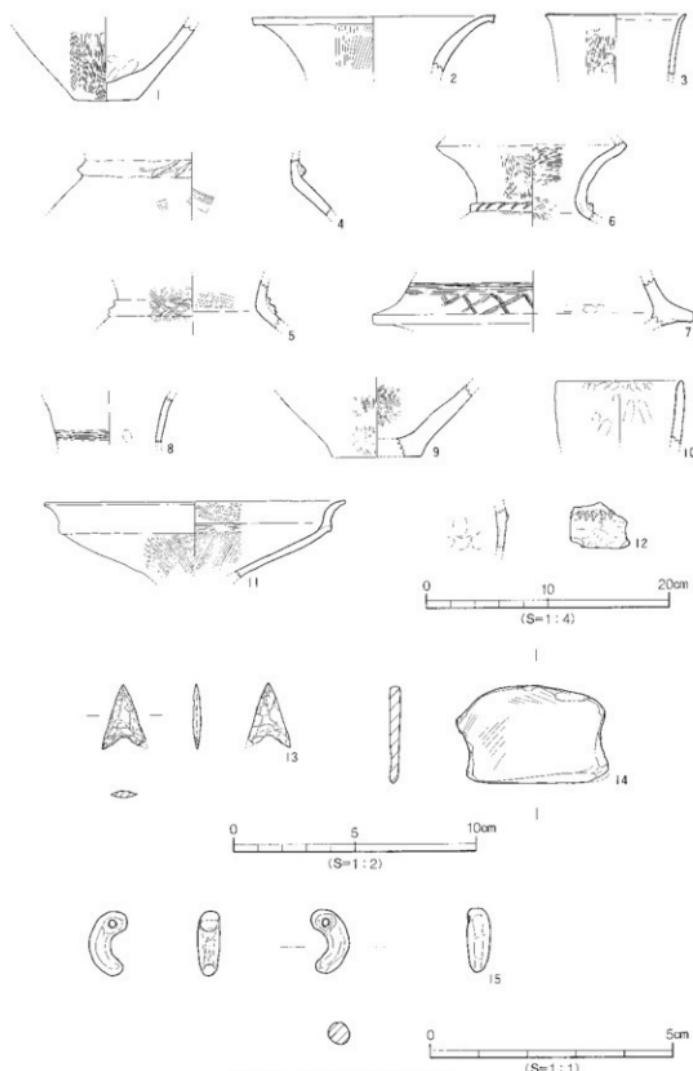
石鎌（13） 凹基式である。法量は、長さ2.6cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm、重さ0.896gを測る。材質はサスカイトで風化がはげしい。

石庖丁（14） 完形品。法量は、長さ6.3cm、幅4.0cm、厚さ0.4cm、重さ22.388gを測る。側面に抉りを施し刃は両面から磨かれる。一部自然面が残る。

勾玉（15） 玉製の完形品。法量は、長さ1.3cm、幅0.45cm、厚さ0.45cm、重さ0.551gを測る。濃緑色で丁寧に研磨されている。片面から穿孔されている。

時期：出土遺物2の壺は大きく開く口頸部である。この口頸部の形態は、弥生時代後期後葉の特徴を示すものであり、本住居址の廃棄・埋没時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

遺構と遺物



第8図 SBI出土遺物実測図

## (2) 溝 (SD)

## SD 1

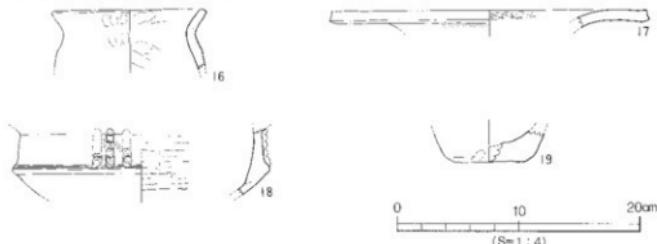
調査区南半のA14～B9区に位置し、円形周溝状遺構を切る。規模は検出長14.0m、幅60cm、深さ15cmを測る。断面形態は皿状である。溝底は北から南に傾斜し、B9区で消滅する。遺物は甕形土器、壺形土器、鉢形土器が出土している。

## 出土遺物 (第9図、図版5)

甕形土器 (16) ゆるやかに外反する短い口縁部。端部は丸味のある「コ」字状。

壺形土器 (17～19) 17は大きく水平に開く口縁部。口端面は強いヨコナデにより凹む。18は胴部に2条の貼付凸帯。凸帯上に1条の沈線。凸帯間にはキザミをもつ3本1組の棒状浮文。19は丸味のある平底。器壁は厚い。

時期：出土した少ない遺物の形態と弥生後期前葉の円形周溝状遺構を切っていることから本溝の廃棄・埋没時期は弥生後期後葉と考える。



第9図 SD 1出土遺物実測図

## SD 2

調査区中央部のA7～F8区に位置し、SB1に切られる。規模は検出長16.5m、幅60cm、深さ20cmを測る。断面形態は舟底状である。埋土は暗茶褐色土と黒色土である。溝底は東から西に傾斜し、部分的に深い所がある。遺物は甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高杯形土器、支脚形土器が深い所に集中して出土している。

## 出土遺物 (第10・11図、図5)

甕形土器 (20・21) 20の口縁部は直口気味に立ち上がり中位で外反する。端部は「コ」字状を呈する。21の口縁部は外傾気味に立ち上がり端部は丸味のある「コ」字状。外面にタタキが残る。

壺形土器 (22～29・35) 22はラッパ状に開く頭部。端面は強いヨコナデにより上にやや拡張される。23は複合口縁壺。口縁端部は「コ」字状を呈する。24・25は肩部～胴部にかけての残存である。24は肩部に斜行押圧文あり。25はなで肩の胴部。26～29は平底の底部。35は断面三角形の凸帯が残る。

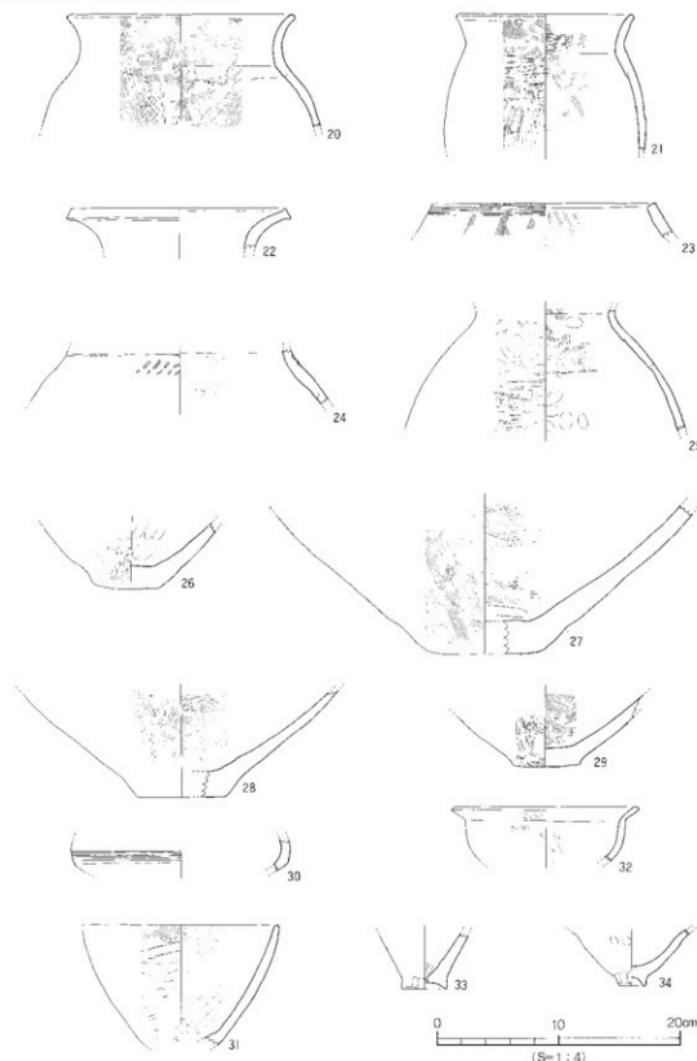
高杯形土器 (30) 内湾ぎみに立ち上がる口縁部に3条の凹線あり。

鉢形土器 (31～34) 31は直口口縁。端部は「コ」字状を呈する。外面にタタキ痕が残る。32の口縁部は短く外反し端部は「コ」字状を呈する。33はくびれの上げ底。34は突出した小さな上げ底。

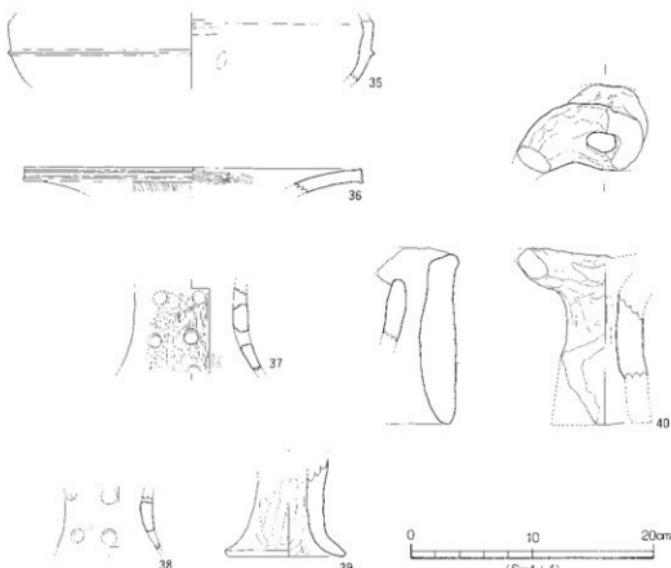
器台形土器 (36～38) 36は水平に開く口縁部。端面下方をやや拡張し凹線2条を施す。37・38は柱部から裾部の残存。37は円孔が3段、38は2段残る。

支脚形土器 (39・40) 39は中空の円筒状の胴部。40は受部に角状突起をもつ。

時期：出土遺物21の壺の形態は、弥生後期後葉の特徴を示すものである。よって本溝は弥生時代後期後葉に施棄・埋没したと考える。



第10図 S.D. 2 出土遺物実測図(1)



第II図 SD 2 出土遺物実測図(2)

## SD 3

調査区中央北西部のC 6 ~ E 5 区に位置する。規模は検出長5.5m、幅40cmを測り、C 6 区で消滅する。遺物は出土していない。

時期：遺物が出土していないために不明である。

## SD 4

調査区北部のA 3 ~ B 2 に位置する。規模は検出長6.0m、幅60cm、深さ15cmを測る。断面形態は皿状である。埋土は黒色土である。溝底は北から西に傾斜している。遺物は壺形土器、壺形土器、鉢形土器が出土している。

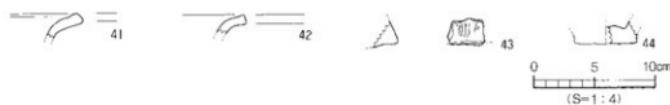
## 出土遺物（第12図）

壺形土器（41・42）ともに反り気味に大きく外反する口縁部。

壺形土器（43）複合口縁壺。拡張部に5条以上の波状文。

鉢形土器（44）突出気味の平底。底部内面も平坦な面をもつ。

時期：少ない出土遺物の形態と埋土より、他の構造と同じく弥生時代後葉に埋没したと考える。

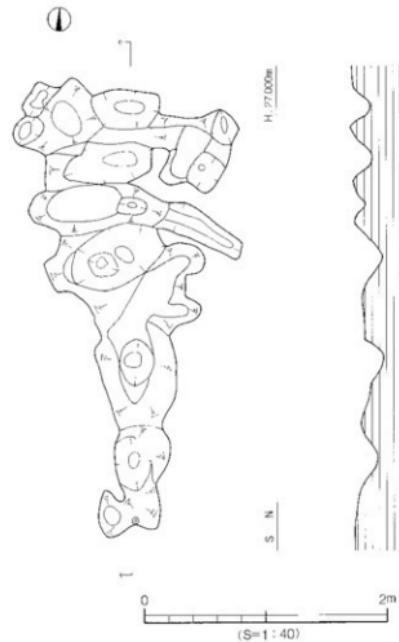


第12図 SD 4出土遺物実測図

## (3) 土坑(SK)

## SK 1 (第13図)

調査区西部のA 8～9区に位置する。平面形態は不整形である。規模は長軸310cm、短軸60cm、深さ10～24cmを測る。断面形態はレンズ状の浅いピットが縦に長く集まつた形態である。床面は凸凹がはげしい。遺物は、壺形土器と高環形土器の小片が出土している。



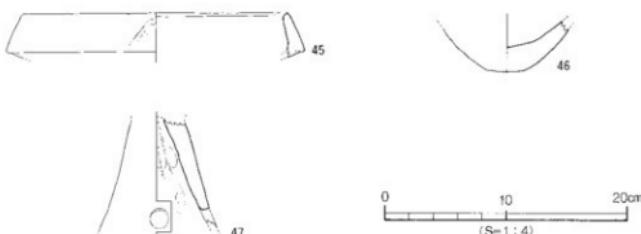
第13図 SK 1測量図

## 出土遺物（第14図）

壺形土器（45・46） 45は複合口縁壺。端部は「コ」字状を呈する。拡張部外面に施文。46は丸味のある不安定な平底。

高環形土器（47） 柱部に円孔が2ヶ所残る。内面に絞り痕が残る。

時期：出土遺物の形態より、本土坑の埋没時期は弥生時代後期後葉と考える。



第14図 SK I 出土遺物実測図

## （4）円形周溝状造構（第15図、図版3・4）

調査区南部のB11区に位置し、SD1に切られる。平面形態は円形である。北東部で一部分途切れ。規模は直径4.0mの内側にそって、幅45cm、深さ15cmの溝が巡る。溝の断面形態は「U」字状である。遺物は壺形土器、鉢形土器、器台形土器が出土している。

## 出土遺物（第16図）

壺形土器（48） 口縁部は短く外反する。端面は上下に拡張し凹線を4条施す。

鉢形土器（49・50） ともに括れの上げ底である。端部は丸味をもつ。

器台形土器（51） 柱部に円孔が3段残る。

時期：出土遺物48の甕は、弥生時代後期前葉の形態を示すものであり、本造構の廃棄・埋没時期は、弥生時代後期前葉と考える。

## （5）柱穴（SP）

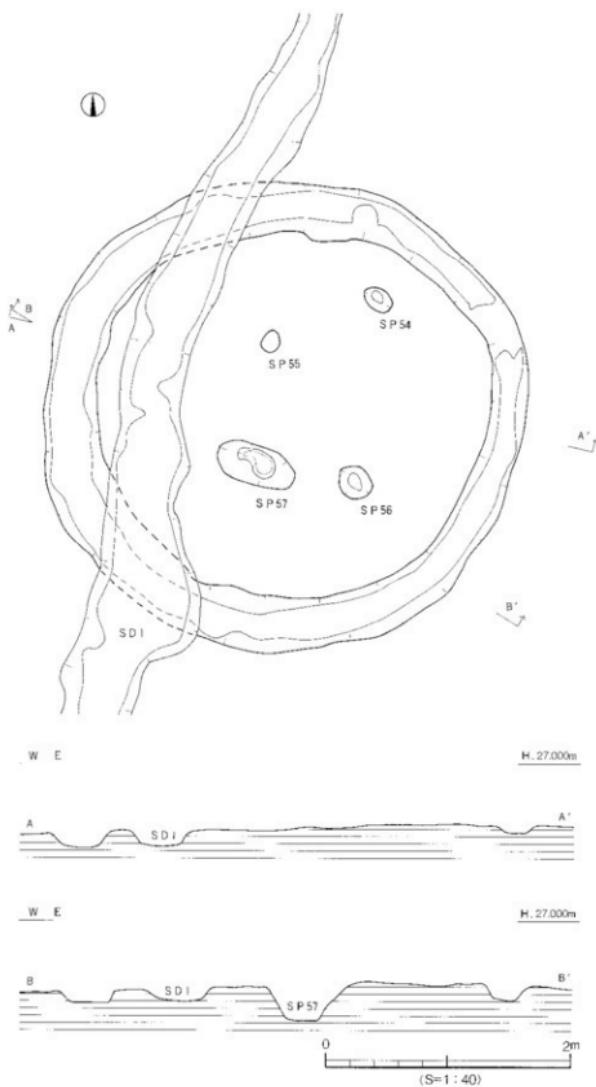
調査区全域で56基の柱穴を検出した。遺物は出土しておらず埋土も不明であり時期は確定できない。

## （6）その他の出土遺物（第17・18図、図版5）

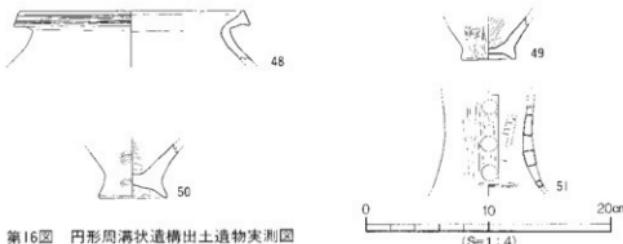
壺形土器（52・53） 52の口縁部は「く」字状に外反し端面はヨコナデによりやや凹む。53の口縁部は急角度で外反する。端面は強いヨコナデにより上下にやや拡張する。

壺形土器（54～60） 54～60は複合口縁壺の口縁部片。54の端部は肥厚し丸味をもつ。55・57の端部は「コ」字状を呈する。56は短い拡張部。端部は先細りでやや外反する。58は短い拡張部に横沈線と縱沈線を施す。59の接合部はタガ状に突出し端面に2条の沈線を施す。60は拡張部に3条の波状文を施す。61はラッパ状に開く口縁部。端面に凹線を3条施す。62は二重口縁壺。拡張部は短く反り気

造構と遺物



第15図 円形周溝状造構測量図



第16図 円形周溝状造構出土遺物実測図

味に外反し端部は先細りする。63は長頸壺。頸部は直口気味に立ち上がる。64~67は頸部片。64・65は頸部に凸帯を貼り付け、ヘラ状工具による斜行文を施す。66・67は頸部に断面三角形の凸帯を貼り付ける。66は頸部と胴部に施文あり。68は肩部の小片。径1.3cmの竹管文あり。

高環形土器 (69・70) 69は壺部。口縁部は短く直口気味に立ち上がる。端部は明瞭な「コ」字状である。70は柱部。径0.9cmの円孔が3ヶ所残る。

鉢形土器 (71) 外反する口縁部。端部は丸味をもち下方がやや突出する。

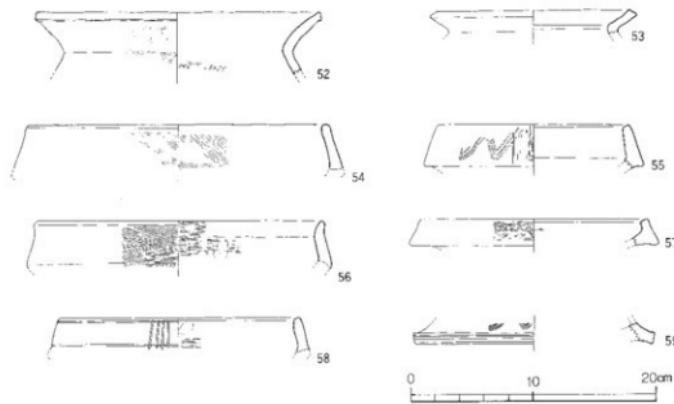
壺形土器 (72) 丸味のある平底の中央に径1.6cmの焼成前の穿孔あり。

ミニチュア (73・74) 73は丸味のある不安定な平底。74は括れの上げ底。

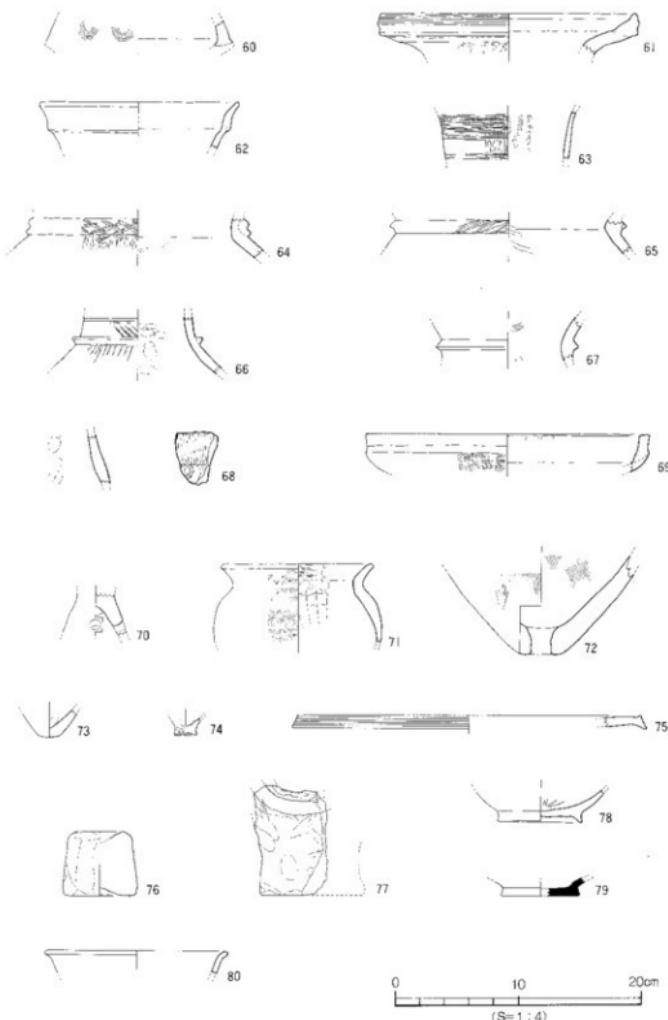
器台形土器 (75) 口縁部は水平に開き端面には3条の凹線が巡る。

支脚形土器 (76・77) 76は台形状。上面・下面に凹みをもつ。77は中実。受部に突起をもつ器形か。

その他の上器 (78~80) 78と80は壺。78は断面三角形の貼付高台をもつ。80は口縁部は外反し端部は丸味をもつ。79は円盤高台の壺。



第17図 その他の出土遺物実測図(1)



第18図 その他の出土遺物実測図（2）

## 4. 小 結

今回の調査では、弥生時代の造構と遺物を確認することができた。

造構は、竪穴式住居址1棟、溝3条、土坑1基、円形周溝状造構1基がある。

竪穴式住居址SB1は、出土遺物より後期後葉の円形住居址であり、床面からは大量の焼土が出土している。SB1は焼土の検出状況より、焼失住居の可能性が考えられるものである。

土坑は1基を検出した。平面形態は不整形であり、出土遺物も少なく、住居、溝と同時期と考えるが関連性は確認できない。

溝は3条を検出している。溝の方向は、3条とも異なるが出土遺物からは時期的な差は見られない。よって、溝は住居と同じく弥生時代後期後葉の同時期に存在していたと考えられる。

円形周溝状造構の検出は、松山平野の中では、愛媛大学構内の文京遺跡第10次調査SX14に検出例がある。本調査の円形周溝状造構と比較すると文京遺跡第10次調査検出の円形周溝状造構SX14は直径3.9mと同規模であるが溝幅70~90cm、深さ45~50cmと本調査の造構より溝幅が広く深いという違いがある。また、本調査の円形周溝状造構は一部分長さ70cm途切れる所がある。出土遺物についても本調査の円形周溝状造構からは弥生上器片が少量の出土であるが、文京遺跡第10次調査の円形周溝状造構SX14からは、完形の土器が多数出土しており遺物出土状況にも違いがある。このような円形周溝状造構は現在までに松山平野での検出例は少ないものであり、その明確な性格はわかつていない。

このように本調査地では弥生時代後期前葉～後葉の竪穴式住居址と円形周溝状造構を検出したことより本調査地も釜ノ口地区の集落内であることがわかった。

### 造構・遺物一覧 一凡例一

(1) 以下の表は、本調査地検出の造構・遺物の計測値及び観察一覧である。

造構一覧・遺物観察表は高尾・田崎が作成した。

(2) 遺物観察表の各掲載について。

法量欄 ( )：復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( )中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長(1~4)、多→「1~4mmの大砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

## 造構と遺物

表2 穫穴式住居址一覧

竪穴 (S B)	時 期	平 地 形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	主柱穴 (本)	内 部 施 設		周壁溝	備 考
					高床	土坑	炉	
S B 1	弥生後期後葉	円形	7.1×6.7×15	5		○		

表3 溝一覧

溝 (S D)	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
S D 1	A14~B 9 区	圓状	14×0.6×0.15		弥生	弥生後期後葉	
S D 2	A 7~F 8 区	舟底状	16.5×0.6×0.2	暗茶褐色 黑色土	弥生	弥生後期後葉	
S D 3	C 6~E 5 区		5.5×0.4		なし	不明	C 6 区で消滅する
S D 4	△ 3~B 2 区	皿状	6×0.6×15	黑色土	弥生	弥生時代	

表4 土坑一覧

土坑 (S K)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
S K 1	A 8~9 区	不整形	レンズ	3.1×0.6×0.1~0.24		弥生	弥生後期後葉	

表5 周溝状造構一覧

周溝状 造構	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
	B 11 区	円形	「U」字状	4.0×0.45×0.15		弥生	弥生後期後葉	S D 1 に切られる

表6 S B 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内側)	胎 土 燒 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	甕	底径 5.2 残高 6.3	平底。底部内面に擦痕が残る。器壁が厚い。	ハケ(12本/cm)	マメツ(指痕痕)	乳黃色 灰乳白色	石・長(1~3) ◎		
2	壺	口徑 (19.9) 残高 4.8	大さくラック状に開口部がある。口縁部、口縁端部 内面と端面は、ヨコナデのためやや凹む。	(口縁)ヨコナデ (口縁)ハケ(5本/cm) 〔内〕マツツ	(口縁)ヨコナデ (口縁)ハケ(5本/cm)	淡茶褐色 乳灰茶色	石・長(1) 金 ◎		
3	壺	口徑 (16.3) 残高 5.1	直口氣味に立ち上がる頸部。口縁部は、 よく外反する。端部は先端りで丸味をもつ。	〔口〕ヨコナデ 〔口〕ハケ(8本/cm) 〔内〕ナダ	〔口〕ヨコナデ 〔口〕ハケ(8本/cm)	乳茶褐色 乳灰黃色	石・長(1) ◎		
4	壺	残高 4.8	頸部に断面V形の貼付凸巻。凸巻上に ハケで調整工具による斜行文を施す。小片。	〔口〕ヨコナデ 〔口〕ハケ(5本/cm) 〔内〕ナダ	ハケ(7本/cm)	淡灰茶色 淡乳黃色	石・長(1~2) ◎		
5	壺	残高 4.1	頸部に貼付凸巻。凸巻上にハケで調整工具 による斜行文を施す。小片。	〔口〕ハケ(6本/cm) 〔内〕ナダ+施文 〔内〕ナダ	〔口〕ハケ(4~5本/cm) 〔内〕ナダ	褐色 黃褐色	石・長(1~4) 金 ◎		
6	壺	残高 6.5	複合口縁型。口縁部が剥落し、操作 縁を残す。端部に貼付凸巻。凸巻 にハケ工具による斜行文。	〔口〕ハケ 〔口上〕ハケ(9本/cm) 〔内〕ヨコナデ	ハケ(9本/cm)	黄褐色 暗黃褐色	石・長(1~5) ◎		
7	壺	残高 4.0	複合口縁型。口縁部はタガ執 〔口上〕都状工具による沈頭孔以上。 〔口下〕都状工具による3条の山形文。	〔口〕ナダ+施文 〔口〕ヨコナデ	〔内〕ミガギ 〔内〕ヨコナデ	黃褐色 橙褐色	石・長(1~6) 金 ◎	5	
8	壺	残高 3.8	直口氣味に立ち上がる頸部。都状工具 による横沈線文4条。	ナダ+施文	ナダ	灰茶褐色 結構褐色	石・長(1~2) ◎		
9	壺	底径 (7.1)	平底。器壁が厚い。	〔内〕ハケ(9本/cm) 〔内〕ナダ 〔内〕ハケ	ナダ	黃茶色 乳白色	石・長(1~4) ◎		
10	壺	口徑 (9.2) 残高 5.3	直口縁。端部は先端りで指痕痕が並 ふ。	ナダ(指痕痕)	ナダ(指痕痕)	暗灰茶色	石・長(1) 金 ◎		
11	高環	口徑 (27.0) 残高 6.4	浅い環型。口縁部は短く、明瞭な段をもつて、そり気味に外反。端部は丸味のある「コ」字形。	〔口上〕ヨコナデ 〔口下〕ハケ(10本/cm)	〔口上〕ヨコナデ 〔口下〕ヨコナデ 〔内〕ミガギ 〔内〕ミガギ	暗褐色	石・長(1~3) 金 ◎		
12	鉢	残高 3.7	斜口凸唇を貼付。中位に粘土接合痕。 小片。	〔口〕ヨコナデ+施文 〔内〕貝紋杂质	ナダ	暗灰茶褐色	石・長(1~2) ◎	縄文	

## 釜ノII造跡6次調査地

表7 SB1出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
13	石鏨	ほぼ完形	サスカイト	2.6	1.8	0.3	0.896	四面式。	5
14	石削丁	ほぼ完形	緑泥片岩	6.3	4.0	0.4	22.388	側面に抉り。	5
15	勾玉	完形	碧玉	1.3	0.45	0.45	0.551	濃緑色。	5

表8 SD1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外側) (内側)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
16	甕	口径(11.8) 残高 5.1	内外面ともに棱をもたずややかに外反する短い口縁部。端部は丸味ある「コ」字状。	(上)ヨコナデ (板状工具) (側板ナデ)	灰茶色 灰茶褐色	石・長(1~2) ◎			
17	甕	口径(25.6) 残高 1.4	大きめ水平に近く聞く口縁部。端部は強いヨコナデにより凹む。	(口上)ヨコナデ (1)ハケ(6~7本/cm) (側)ハケ(6~7本/cm)	灰褐色	石・長(1~2) ◎			
18	甕	口径 5.5 残高	胴部に2条の貼付凸帯。凸帯上に1条の沈線。凸帯面にはキザミをもつ3本1組の棒状浮き。	(胴上)ハケ(7本/cm) (1)ナダ・施文、板ナデ (胴下)ハケ→ナデ	黄茶色 黑色	石・長(1~3) ◎			5
19	甕	底径(5.6) 残高 2.6	丸味のある平底。器壁は厚い。	マメツ	マメツ	灰茶褐色 灰黄色	石(1~2)+ 瓦(1~3) ◎		

表9 SD2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外側) (内側)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
20	甕	口径(18.1) 残高 9.4	口縁部は内面だけに弱い棱をもって頂口のみに立ち上がり、中位で外反。端部は「コ」字状。内面に接合痕。	(口上)ナデ (1)ハケ(7本/cm) (側)ハケ(7本/cm)→ハケ(10本/cm)	ハケ(7本/cm)→ (10本/cm)	灰茶色	石・長(1~4) ◎	黒斑	
21	甕	口径(14.6) 残高 11.2	口縁部は内面だけに弱い棱をもって外傾のみに立ち上がり、端部は丸味のある「コ」字状。内面に接合痕。	(1)ハケ(8本/cm) (側)ハケ(8本/cm)→平行タタキ (4本/cm)→ハケ	(1)ハケ(8本/cm) ハケ→ナデ	茶褐色	石・長(1~2) ◎		
22	甕	口径(14.8) 残高 3.1	ラッパ状に聞く口縁部。強いヨコナデにより端面は下にやや被覆される。	ヨコナデ	マメツ	灰茶褐色 茶褐色	石・長(1~4) ◎		
23	甕	口径(18.4) 残高 2.8	複合練版。口縁端部は「コ」字状。 (板状工具による横浅彫線5本。 板状工具による5条の山形文)	マメツ 施文	マメツ (工具痕)	黄茶色	石・長(1~3) ◎		
24	甕	口径 4.6 残高	肩部にハケ日調整工具による斜行押任せ文。	マメツ 施文	マメツ(箱頭痕)	黄茶色 灰茶色	石・長(1~3) ◎		
25	甕	口径 9.9 残高	なで脣の刷痕。内面だけに弱い棱をもつて頸部が立ち上がる。内面に磨す接合痕が確認。	平行タタキ(2本/cm) →ハケ(9本/cm)→ハケ(9本/cm)	ハケ(9本/cm)→ ナデ	乳茶色 乳茶褐色	密 ◎		
26	甕	底径 5.0 残高 5.6	丸味のある不安定な平底。	ミガキ	ナデ上げ	淡乳茶色 淡茶褐色	石(1~2)+ 瓦(1~3) ◎	黒斑	
27	甕	底径 8.7 残高 12.2	丸味のある平底。	(1)ハケ(4本/cm)→ ナデ ナデ→ナデ (側)ハケ	(1)ナデ (側)ハケ(4本/cm)	淡乳茶色	石・長(1~2) ◎	黒斑	
28	甕	底径(7.7) 残高 8.6	やや突出ぎみの平底。	(1)ナデ (側)ハケ(9本/cm) +ミガキ	ハケ(9本/cm)	灰茶褐色 茶褐色	石・長(1) ◎	墨斑	
29	甕	底径 5.4 残高 5.9	やや突出ぎみの丸味ある平底。	(1)ナデ (側)ハケ(7~8本/cm)	(側)ハケ(7~8本/cm)	茶褐色	石・長(1) ◎	黒斑	

## 出土遺物観察表

SD 2 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内側)	胎 土 燒 成	備考	因版
				外 面	内 面				
30	高环	残高 2.6	口縁部は外面だけに弱い後をもつて内溝 がみに立ち上がる。接面上に3条の向線。	マメツ	マメツ	灰茶黄色 灰黄色	石・長(1) ◎		
31	鉢	口径 (21.8) 残高 9.9	直口口縁部、端部は「コ」字状。	(L)平(1タタキ(2 本/cm)→ハ・タ(8 本/cm)) 平行タタキ タタギ	ハケ(6本/cm) ナデ(指痕)	黄茶色 灰黄色			
32	鉢	口径 (14.8) 残高 4.5	浅鉢、口縁部は短く外反する。端部は「コ」 字状、腹部は丸味をもつ。	(L)コナデ (R)ハケ(9~10本/ cm)→ナデ	ハケ(9~10本/cm) →コナデ	灰茶黄色	長(1) 來 ◎		
33	鉢	底径 (3.6) 残高 4.5	くびれの上げ底、端部は先振りで丸味を もつ。底部周辺に指痕が並ぶ。	ナデ(指痕)	ナデ	灰黄色	石・長(1~2) ◎	黒理	
34	鉢	底径 2.1 残高 4.7	突出した小さな上げ底。底部周辺に指痕 が並ぶ。口縁部は緩やかに外反する。	ナデ(指痕)	ナデ	乳黃褐色 黃茶褐色	石・長(1~3) ◎		
35	壺	残高 5.1	断面三角形の粘付凸沿が1条残る。腹部 中位での粘土合面が看取できる。	マメツ	マメツ	茶褐色	石・長(1~2) 金・密 ◎		5
36	器台	口径 (27.8) 残高 2.0	水平に近く聞く口縁部。端部下方をやや 拡張し、凹縫を施す。	(口端)コナデ (板状工具) (L)ミガキ		淡黃茶色	石・長(1~2) ◎		
37	器台	残高 7.0	柱部から端部に向かって緩やかに広がる 型態になると思われる。径1.1cmの円孔が 3段残る。	ハケ(6本/cm) ナデ		淡白褐色 乳茶褐色	石・長(1~4) ◎		
38	器台	残高 4.8	柱部から腹部にかけての小片。径1.3cmの 円孔が2段残る。	ハケ(7本/cm)→ ナデ	ナデ	茶褐色	石・長(1~4) 金 ◎		
39	支脚	底径 9.4 残高 8.0	中空。円筒状の端部がやや斜め方向に立 ち上がる。端部は丸味をもつ。指おさえ による凹凸が激しい。	ナデ(指痕)	ナデ(指痕)	灰茶黄色	石(1~2) 長(1~3) 金 ◎		
40	支脚	底径 (8.2) 残高 14.5	受部に角状突起(1本欠損)。受部一底部 まで貫通する丸をもつ。  (R)ハケ(8本/ cm)・ナデ (S)ナデ(指痕)		絞り痕	暗棕茶色 (一部灰茶色)	石・長(1~8) ◎		

表10 SD 4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内側)	胎 土 燒 成	備考	因版
				外 面	内 面				
41	甕	残高 2.0	そり気味に大きく外反する口縁部。粘土 を貼付し端部を肥ませる。端部内側に は接合痕が明顯に残る。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒茶色 乳灰茶色	石・長(1~2) ◎		壺台質
42	甕	残高 1.6	そり気味に大きく外反する口縁部。端部 内側がやや凹む。極めて小片。	マメツ	マメツ	灰茶黄色 灰茶色	石・長(1) 金 ◎		
43	壺	残高 2.2	複合口縁部。拡張部に5条以上の波状紋。 極めて小片。	(R)コナデ→ 施文 (R)コナデ		暗黃灰色	石・長(1~5) ◎		
44	鉢	底径 (4.4) 残高 1.9	突出気味の平底。内底も平坦な面を有す る。	マメツ	ナデ	褐色	石・長(1) ◎		

表11 SK 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内側)	胎 土 燒 成	備考	因版
				外 面	内 面				
45	甕	口径 (21.4) 残高 3.6	複合口縁部。端部は「コ」字状。拡張部 外面に施文のごく一部が残る。小片。	マメツ	マメツ	茶褐色	石(1~3) 長(1~2) ◎		

筆ノ口遺跡 6次調査地

SK1出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内側)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
46	壺	底径 3.4 残高 3.2	かなり丸味のある不安定な平底。器壁が厚い。	マツツ	ナデ	黄褐色 乳白色	石・長(1~5) 金		
47	窓環	残高 9.3	径1.5cmの円孔が2ヶ所残るが、全体としては3方向に穿たれていたと思われる。	マツツ	絞り痕(縮縫痕)	淡褐色 乳白色	石・長(1~4) 金		

表12 円形周溝状構造出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内側)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
48	壺	口径 (18.0) 残高 4.2	口縁部は短く外反、端面を上に押張して、細底T足による浅い凹溝4条を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 淡黃茶色	石・長(1~3) 金		
49	鉢	底径 (4.2) 残高 3.5	くびれの上げ底。端部は丸味をもつ。底部周辺に指痕痕が並ぶ。	⑥ナデ(指痕痕) ヨコナデ上げ	⑥ナデ ヨコナデ	灰茶黄色 灰色	石・長(1~2) ○		
50	鉢	底径 5.4 残高 4.5	くびれの上げ底。端部は丸味をもつ。	⑥ナデ ヨコナデ ハケ(5本/cm) → ナデ	⑥ナデ ヨコナデ ハケ(4~5本/cm) → ナデ	灰黄色 灰茶黄色	石(1~7) 長(1) ○		
51	器台	残高 6.9	柱部から端部に向かって緩やかに広がる器壁と思われる。径1.3cmの円孔が3段残る。小片。	ミガキ	(柱上)板ナデ (柱下)ハケ(5本/cm)	淡褐色	石・長(1~4) 金		

表13 その他の出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内側)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
52	壺	口径 (22.9) 残高 5.15	「く」字形に外反する口縁部。端面はヨコナデによりやや凹む。端面下方がやや突出する。	(口縁)ヨコナデ (柱)ハケ(12本/cm) → ヨコナデ	(口縁)ヨコナデ (柱)ハケ(12本/cm) → ヨコナデ	暗茶褐色 淡灰褐色	石・長(1~5) 金		
53	甕	口径 (15.4) 残高 2.1	口縁部は急角度で外反。端部内側と端面の強いヨコナデにより、端面は上にやや膨張する。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗茶褐色 黄茶茶色	石・長(1~3) 金		
54	壺	口径 (24.4) 残高 3.7	複合口縁部。口縁部との接合面を截取できる。端部はやや肥厚し、丸味をもつ。	(口縁)ヨコナデ ヨコナデ ハケ(5本/cm) → ヨコナデ	(口縁)ヨコナデ ヨコナデ ハケ(8木/cm) → ヨコナデ	暗茶褐色	石・長(1) ○		
55	壺	口径 (15.4) 残高 3.6	複合口縁部。端部は「コ」字形。柱部には3条の波状文と2条1組の横溝線文。	ヨコナデ	マツツ	淡白茶色	石・長(1~3) 金		5
56	壺	口径 (23.0) 残高 4.0	複合口縁部。口縁部との接合面を截取できる。弱い斜張部。端部は先細りで、やや外反する。	ハケ(8~9木/cm) (指痕痕)	ハケ(8~9木/cm) (指痕痕)	淡茶色 白茶色	石・長(1~2) ○		
57	壺	口径 (19.5) 残高 2.2	複合口縁部。弱い斜張部に4条の波状文。端部は「コ」字形。	ヨコナデ → 施文	ヨコナデ	暗褐色	石・長(1~3) ○		5
58	壺	口径 (19.7) 残高 2.6	複合口縁部。口縁部との接合面を截取できる。弱い斜張部に横沈線2条と、4条1組の横沈線。	ヨコナデ → 施文	ヨコナデ(指痕痕)	淡茶色	石・長(1~3) 金		
59	壺	残高 1.7	複合口縁部。	ヨコナデ → 施文	マツツ	淡灰褐色 淡茶色	石・長(1~3) 金		
60	壺	残高 2.3	複合口縁部。口縁部との接合面を截取できる。柱部に3条の波状文。	ヨコナデ → 施文	ヨコナデ	暗茶褐色	石・長(1~5) 金		
61	壺	口径 (20.0) 残高 3.6	ラック凹間に聞く口縁部に柱上を接合し端部を軽張する。端面には凹線3条。器壁が厚い。	(口縁)ヨコナデ ヨコナデ (柱)ハケ(6木/cm) → ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 淡褐色	石・長(1~6) 金		

## 出土遺物観察表

その他の出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	構造		(外側) 色調 (内側)	施土 焼成	備考	因縁
				外面	内面				
62	壺	口径(15.9) 残高 3.9	直口縁部。抵觸部は短く、ややそり気味に外反する。端部は丸彫り。接合部は丸味をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰茶黄色 ○	石・長(1) ○		
63	壺	残高 4.6	直颈壺。頸部は直口ぎみに立ち上がる。 <small>(頭上) 沈線10条以上。 (頭下) 沈線2本以上。</small>	ミガキ+施文	ハケ(10本/cm)→ <small>ヨコナデ</small>	茶褐色 濃灰茶色	石・長(1) ○		
64	壺	残高 3.3	頸部に貼付凸唇。凸唇上にはヘラ状工具による斜格子文を施す。小片。	<small>(1)ナデ→施文 (頭上)ハケ(9本/cm) 残る</small>	マツツ わざかにハケが 残る	黄茶色 灰茶色	石・長(1~3) 金 ○		
65	壺	残高 2.8	頸部に貼付凸唇。凸唇上にはヘラ状工具による斜行文を施す。	マツツ	<small>(頭上)ナデ (板)ナデ</small>	黄茶褐色	石・長(1~2) ○		
66	壺	残高 4.7	<small>頭上)沈線1条以上。斜行押印文。断面三角形の貼付凸唇。</small> <small>頭下)ハケ調整工具による斜行押印文。</small>	<small>(頭上)ハケ(6本/cm) →施文 (頭下)ナデ+施文</small>	ナデ(指痕底)	淡茶褐色	石・長(1~4) 金 ○		5
67	壺	残高 3.7	頸部に断面三角形の貼付凸唇。小片。	ヨコナデ	板ナデ	暗茶黄色 灰茶色	石(1~4) 長(1) 金 ○		
68	壺	残高 4.0	肩部小片。径1.3cmの竹背文あり。	ハケ(4本/cm)(一部ナデ)	ナデ	茶褐色	石・長(1~3) ○		
69	高环	口径(23.0) 残高 3.1	口縁部は短く、直口気味に立ち上がる。端面は水平で幅広。端部は明瞭な「コ」字状。	<small>(口上)ヨコナデ (口下)ハケ(8本/cm)(指痕底)</small>	<small>(口上)ハケ(8本/cm) (口下)ナデ(指痕底)</small>	暗茶黄色 ○	石(1) 長(1~3) ○		
70	高环	残高 3.5	径0.9cmの円孔が3ヶ所に残る。全体としては4方向に穿たれていたと思われる。	マツツ	ナデ(工具痕)	乳茶灰色 乳黃茶色	石・長(1~2) 金 ○		
71	鉢	口径(11.9) 残高 6.45	内面だけに弱い棱をもつて外反する口縁部。端部は丸味をもつて下方がやや突出する。肩部が張る。	<small>(口上)ハケ(8本/cm) (口下)ナデ(指痕底) (頭下)ハケ</small>	<small>(口上)ハケ(8本/cm) (口下)ナデ(指痕底) (頭下)ハケ</small>	灰茶黄色	石・長(1) ○		
72	瓶	底径(3.5) 残高 8.1	丸味のある平底。底部中央に径1.6cmの焼成前の穿孔があり。器壁が厚い。	<small>(口上)ナデ (口下)ハケ(6本/cm) →ナデ</small>	<small>(口上)ナデ (口下)ハケ(6本/cm) →ナデ</small>	淡黃褐色 淡茶色	石・長(1~7) 金 ○		
73	ミニチュア	底径(1.7) 残高 2.4	丸味のある不安定な平底。	マツツ	マツツ	淡黃茶色 茶褐色	石・長(1~3) ○		
74	ミニチュア	底径 1.4 残高 1.9	くびれの上げ底。底部周辺に指痕痕が並ぶ。	ナデ(指痕底)	ナデ	淡黃褐色	石・長(1~4) 金 ○		
75	器台	口径(27.8) 残高 1.2	水平に広く開く口縁部。端面は上下に拡張され、3条の凹溝が進る。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶色 茶褐色	石・長(1) 金 ○	相重複	
76	支脚	上部径(4.8) 器高 5.3 底径(5.8)	台形状。側面を面取りする。上面下面とも中央部に径2.5~3.5cmの凹溝をもつ。	ナデ	ナデ	暗茶褐色	石・長(1~4) 金 ○		
77	支脚	底径(8.4) 残高 9.1	中央。受部に突起をもつ壺型か?	<small>(頭上)板ナデ(ケズ リ風) (頭下)ナデ(指痕底)</small>		灰黃褐色	石・長(1~5) 金 ○		
78	陶	底径 6.8 残高 2.7	断面三角形の貼付凸唇。	<small>(頭上)ヨコナデ(高 台内貼付沿ナデ)</small>		乳白色	青 ○		
79	坏	底径(6.2) 残高 1.5	円盤状高台。内底に平坦面をもちヨコナデによる後が明瞭に残る。	<small>(頭上)ナデ (頭下)ヨコナデ</small>	ヨコナデ	灰色	石・長(1~2) ○		
80	壺	口径(14.8) 残高 1.9	口縁部が外反。端部は丸味をもつ。内外とも施釉。實質陶磁器の可能性有り。	施釉	施釉	淡茶褐色(施) (半透明)	青 ○		



# 釜ノ口遺跡

第3章

—7次調査地—



## 第3章 釜ノ口遺跡7次調査地

### 1. 調査の経過

#### (1) 調査に至る経緯

1988(平成元)年10月、夏目ハウジング株式会社より、松山市小坂町422-2・7の開発にあたって、当該地における埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。当該地は、松山市の指定する埋蔵文化財包含地の『釜ノ口遺物包含地』内にあり、これまでにも多くの調査が実施されており、周知の遺跡として知られている。同包含地内には、弥生時代後期の集落遺構を検出した釜ノ口遺跡1~6次調査地、柘南中学校構内遺跡などがある。

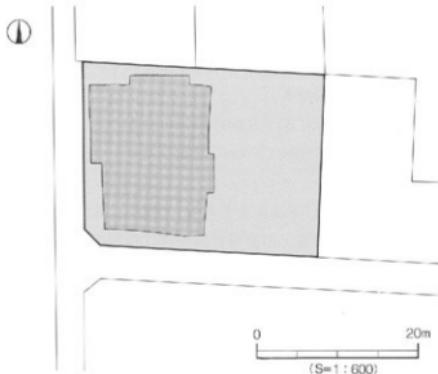
文化教育課は当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため1988(平成元)年10月に試掘調査を実施した。

試掘調査は、調査地の数カ所にトレンチを掘り、遺構と遺物の検出を行った。その結果、竪穴式住居址4棟、柱穴24基、弥生土器を確認した。

この結果を受け、文化教育課と夏目ハウジング株式会社の二者は、遺跡の取扱いについて協議を行い、宅地開発によって失われる遺構について、記録保存のため本格調査を実施することになった。

発掘調査は、弥生時代集落の範囲の確認を主目的とし、文化教育課が主体となり、夏目ハウジング株式会社の協力のもと1988(平成元)年5月1日に開始した。

本調査地は、国道11号線の石手川にかかる永木橋より南方300m地点の標高25.70mに位置する。



第19図 調査地位置図

## ( 2 ) 調査組織

調査地	松山市小坂町422-2・422-7
遺跡名	釜ノ口遺跡 7次調査地
調査期間	野外調査1988(平成元)年5月1日～同年7月13日
調査面積	707.17m <sup>2</sup>
調査協力	夏日ハウジング株式会社
調査担当	川城武志 高尾和長 眞木 深(平成4年退職)
作業員	山邊伸也、志賀夏行、原田英則、高市英治、羽田野修三、帆野祐治、仙波ミリコ、仙波千秋、金子育代、高尾久子、池内カヨ子、田頭真喜、白井あさこ、乃万富美子、他

## 2. 層位 (第20図)

本調査地では、第I層から第VII層までの土層を確認した。第IV層以下は深掘りトレーナーでの検出である。第VI層は3層に、第VII層は2層にそれぞれ細分される。

第I層：造成土及び耕作土で30～40cmの堆積を測る。

第II層：黄褐色土で調査地全域に5～18cmの堆積を測る。

第III層：暗灰褐色土である。調査区北西部を除く全域で4～12cmの堆積を測る。

第IV層：黒褐色土である。調査区北西部を除く全域で5～18cmの堆積を測る。

第V層：灰茶褐色土である。調査区全域で20～35cmの堆積を測る。

第VI層はAT火山灰である。土色の違いにより3層に細分する。

第VI①層：黄色土である。西壁・南壁で2～18cmの堆積を測る。

第VI②層：灰黄色土である。調査区全域で25～35cmの堆積を測る。

第VI③層：暗灰黄色である。調査区全域で5～15cmの堆積を測る。

第VII層は粘性の違いにより2層に細分する。

第VII①層：青灰砂質土である。北西隅で20～40cmの堆積を測る。

第VII②層：青灰粘質土である。調査区全域で80cmの堆積を測る。

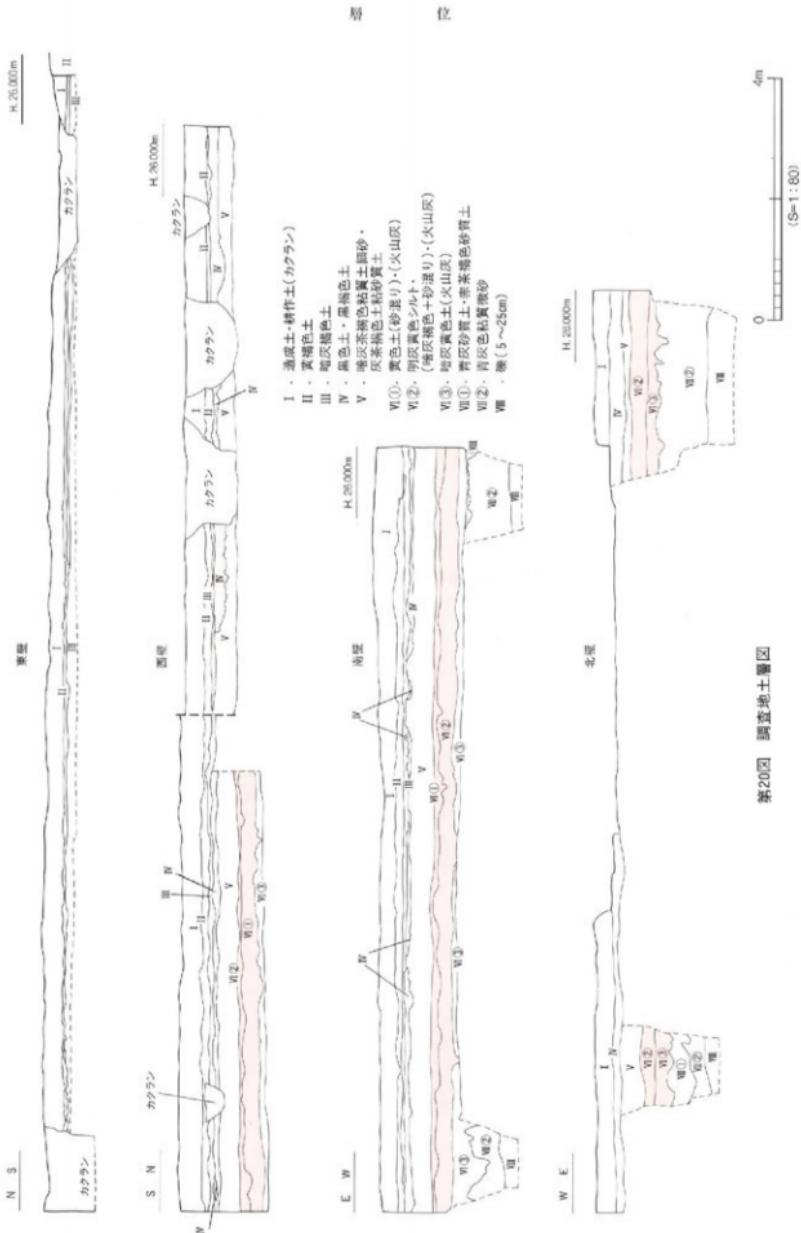
第VIII層：疊である。

第I層は造成土及び耕作土である。第II層は床土である。第III層は弥生時代後期の造構を覆う層で、弥生時代後期以降の堆積層となる。第IV層・第V層は弥生時代後期の造構に切れられ、AT火山灰の上層である。よって、弥生時代後期以前、AT火山灰堆積以降(22,000年)の堆積層となる。

第VI層はAT火山灰である。AT火山灰は、22,000年前に姶良・丹沢地方から噴出した火山灰が堆積したものである。本調査地東800mに位置する東本遺跡4次調査地からは、厚さ80～160cmの1次堆積層を800mにわたり検出している。本調査地検出の第VI層は、東本遺跡4次調査地検出のAT火山灰と堆積状況が類似しており1次堆積の可能性がある。

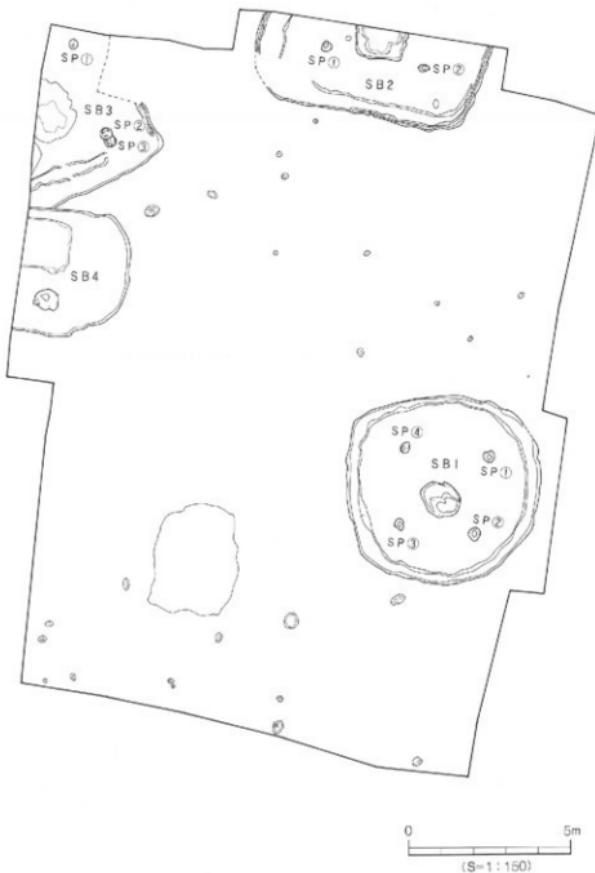
第VIII層の疊層は、本調査地北300mを西流する右手川の旧氾濫域と考えられる。第VIII層は、AT火山灰層の下部層であり、22,000年以前の堆積層である。

造構は第IV層上面で検出し、堅穴式住居址4棟、柱穴24基である。



釜ノ口遺跡7次調査地

①



第21図 遺構配置図

### 3. 遺構と遺物

本調査地で検出した遺構は、弥生時代の竪穴式住居址4棟、柱穴24基である。遺構はすべて第IV層上面での検出である。

#### (1) 竪穴式住居址 (S B)

##### S B 1 (第22図、図版7~11)

本調査地東側のE 5~6区に位置する。平面形態は円形である。規模は長軸5.5m、短軸5.1m、壁高20cmを測る。埋土は黒色土である。内部施設は主柱穴、火、高床部がある。主柱穴は4基を検出し、平面形態は円形を呈し、規模は径28~32cm、深さ50~65cmを測る。4基の柱穴内からは柱材が出土している。その内の2基、S P①とS P②からは、柱材の下に柱材と同じ材質の板(礎板)が2点ずつ出土している。

火は住居中心よりわずかに南に位置し、平面形態は橢円形を呈する。規模は長軸105cm、短軸84cm、深さ10cmを測り、南側は橢円形状を呈しわずかに深い。埋土は黒色土である。炉内からは土器とガラス小玉が1点出土している。

高床部は周壁に沿って幅25cm、高さ12cmで、地山を削り出して作られている。

遺物は床面より甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高環形土器、器台形上器、石鎌、石斧、石磨丁が出土している。さらに、床面からは焼土と炭化材が出土している。焼土は主柱穴4基の上面及び周辺に集中し、炭化材は住居の中心に向かって出土遺物を覆うように放射状に検出した。

##### 出土遺物 (第23~28図、図版16~18)

甕形土器 (1・2) 1は緩やかに外反する口縁部の端部は「コ」字状である。肩部に板状工具による斜行文を施す。2は突出した上げ底。底部周辺に指頭痕あり。

壺形土器 (3~7) 3の口縁部は粘土を接合し肥厚させる。4は口縁部に粘土を貼り付け拡張し端面に櫛状工具による山形文を施す。5は複合口縁壺。口頭部はほぼ直立し拡張部に横沈線文と刻目文を施す。6は大きめの平底。7は丸味のある平底。

鉢形土器 (8・9) 8はくびれの上げ底。底部に粘土を充填する。9は台付鉢。

高環形土器 (10~12) 10は環部。充填技法である。口縁部は環部中位で段をもち外反する。11・12は柱部。11は円孔が残る。12はさし込み技法か? 裂部との境は不明瞭。

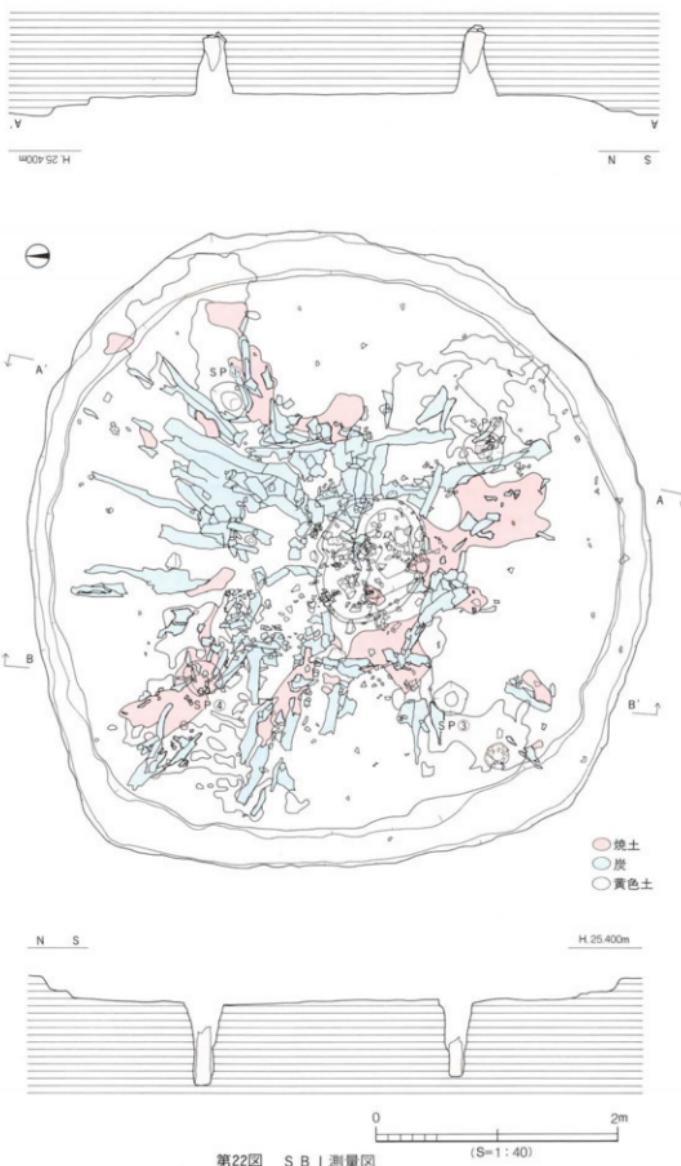
器台形上器(13) 口縁端面は上部を面取りし、中位に棱をもつ。底部端面は1条の凹線。側には、3条と5条のヘラ描き沈線文を施す。

石製品 (14~16) 14は四基式の石鎌である。先端部を欠く。法量は長さ1.7cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.73gを測る。石材はサスカイトである。15は石斧。基部周辺の残存である。断面は隅丸方形を呈する。法量は長さ3.7cm、幅3.4cm、厚さ1.5cmを測る。全体に丁寧な研磨を施す。石材は結晶片岩である。16は杏仁形、法量は長さ8.9cm、幅4.3cm、厚さ0.6cm、重さ38.80gを測る。2ヶ所に穿孔有り。穿孔は金属器を使用している可能性が高い。刃は両面から研がれている鎌は甘い。背は面取りが行われ全体に丁寧な研磨を施す。片側は中央部付近に凹みがある。

装身具 (17) 17はガラス小玉の完形品。法量は長さ0.39cm、幅0.40cm、孔径0.12cm、重さ0.075gを測る。色は青色である。

木製品 (18~24) 18はS P①出土の柱材である。法量は長さ35.5cm、直径13.7cmを測る。木取りは芯持ち材である。表面には加工痕が見られる。柱の端部には柱穴の底に敷いていた礎板が付着して

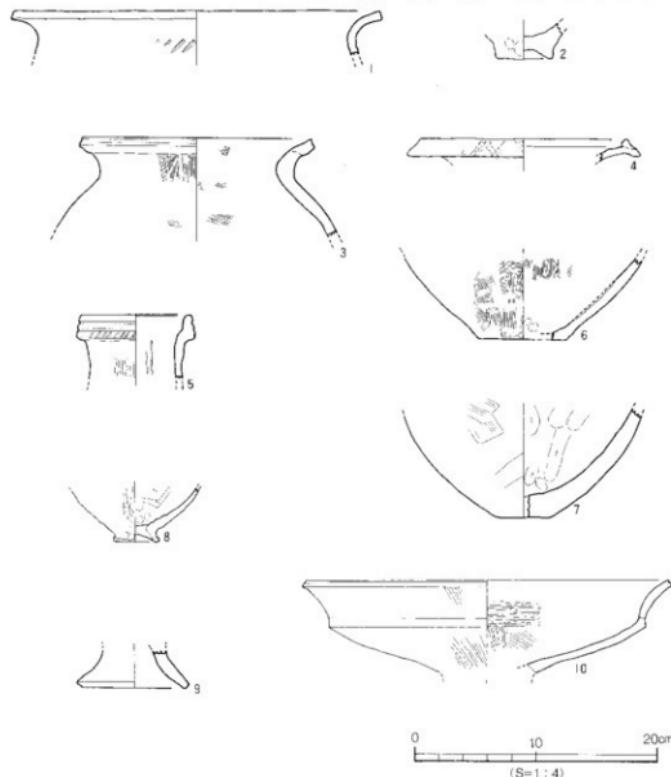
釜ノ口遺跡 7 次調査地



第22図 S B I 測量図

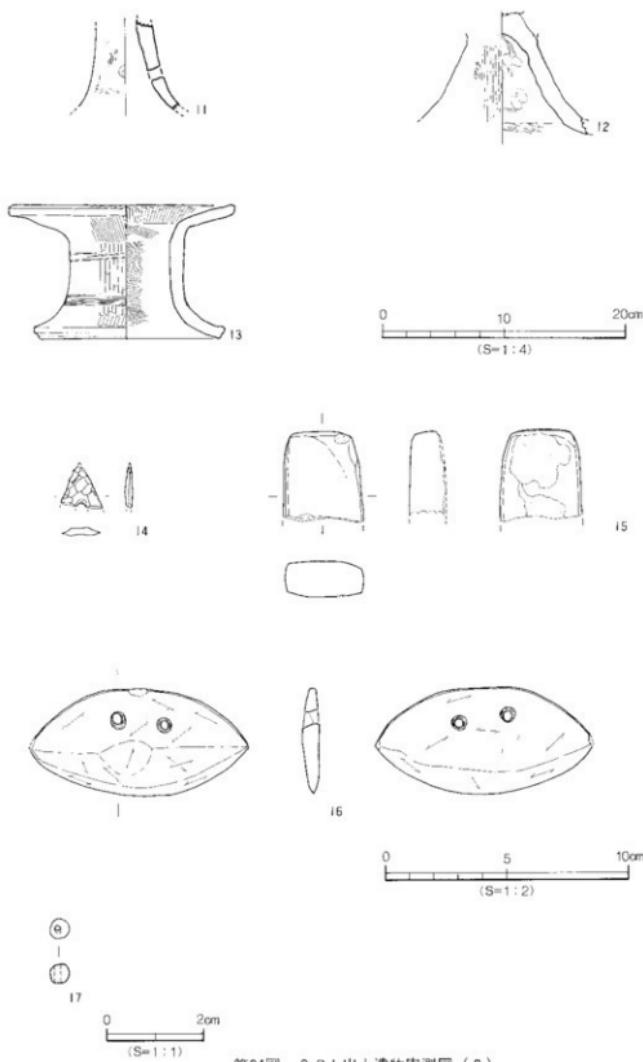
いる。礎板の法量は長さ9.2cm、幅7.2cm、厚さ4.0cmを測る。19はS P①出土の礎板である。平面形態は方形を呈し断面形態は台形状である。法量は $100 \times 9.8\text{cm}$ 、厚さ4.0cmを測る。20はS P②出土の柱材である。法量は長さ36.4cm、直径は長軸15.6cm、短軸13.5cmを測る。木取りは芯持材である。表面に加工痕が見られる。21・22はS P②出土の礎板である。21は平面形態台形状で断面形態は三角形を呈する。法量は $13.4 \times 11.5\text{cm}$ 、厚さ5.0cmを測る。小口に加工痕が見られる。22の平面形態は長方形で断面形態は台形状を呈する。法量は $10.3 \times 8.7\text{cm}$ 、厚さ3.1cmを測る。木取りは角が芯にかかっている。23はS P③出土の丸い柱材である。法量は長さ36.0cm、直径12.8cmを測る。小口は加工されており丸味をおびる。24はS P④からの出土の丸い柱材である。法量は長さ48.2cm、直径13.0cmを測る。木取りは芯持材である。表面及び小口に手斧と思われる加工痕が見られる。なお、18~24の樹種はアカガシ亜属である。

時期：出土遺物4・5の壺の口縁部は、弥生時代後期前葉の形態を示すものである。他の出土遺物にも時期幅がないことより、SB 1は弥生時代後期前葉～中葉に廃棄・埋没したと考えられる。

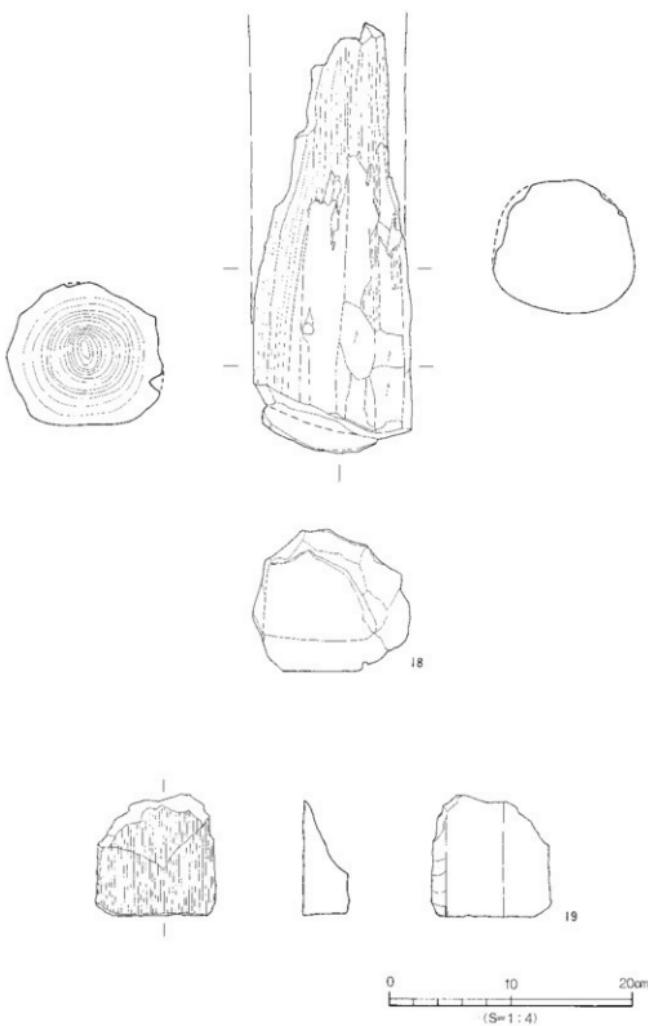


第23図 S B 1出土遺物実測図 (I)

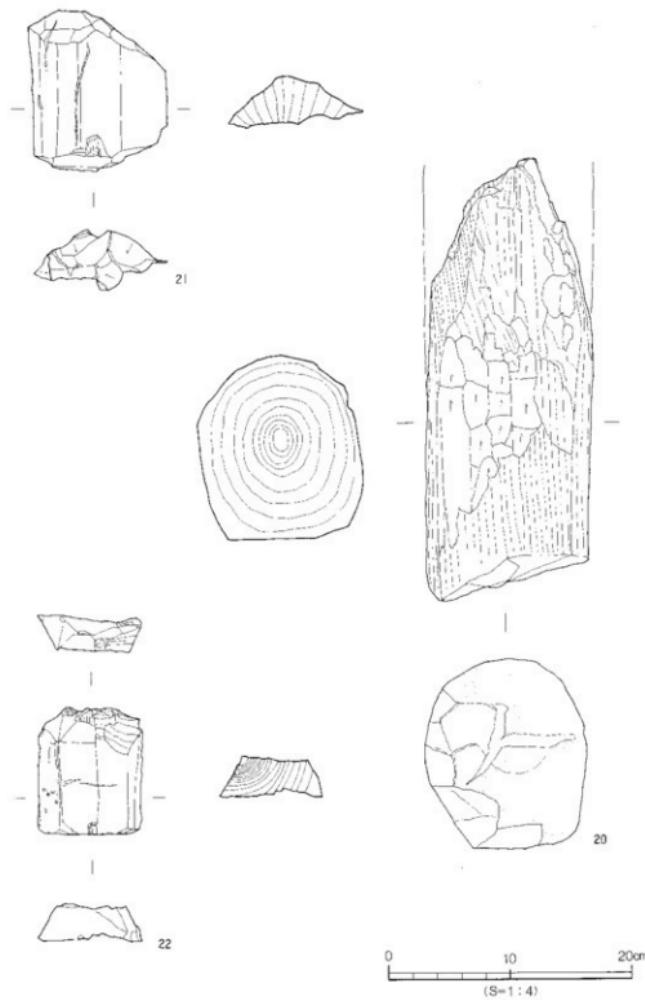
釜ノ口流域7次調査地



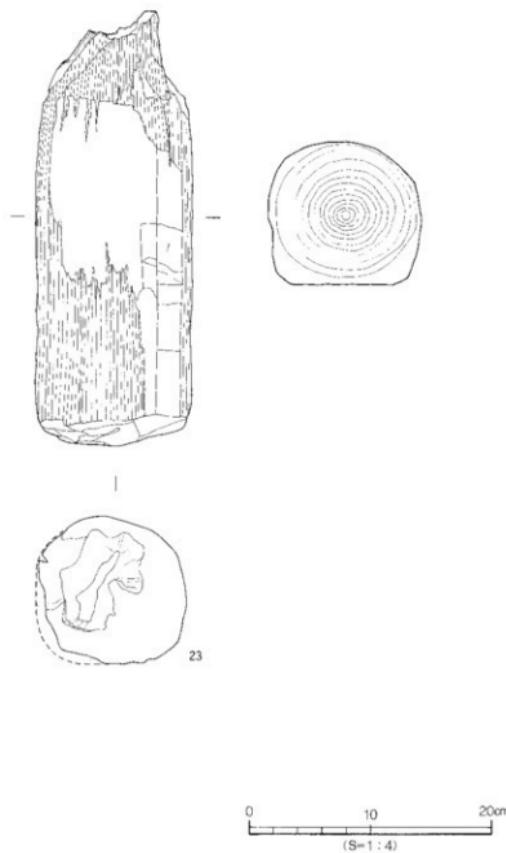
第24図 SB1 出土遺物実測図 (2)



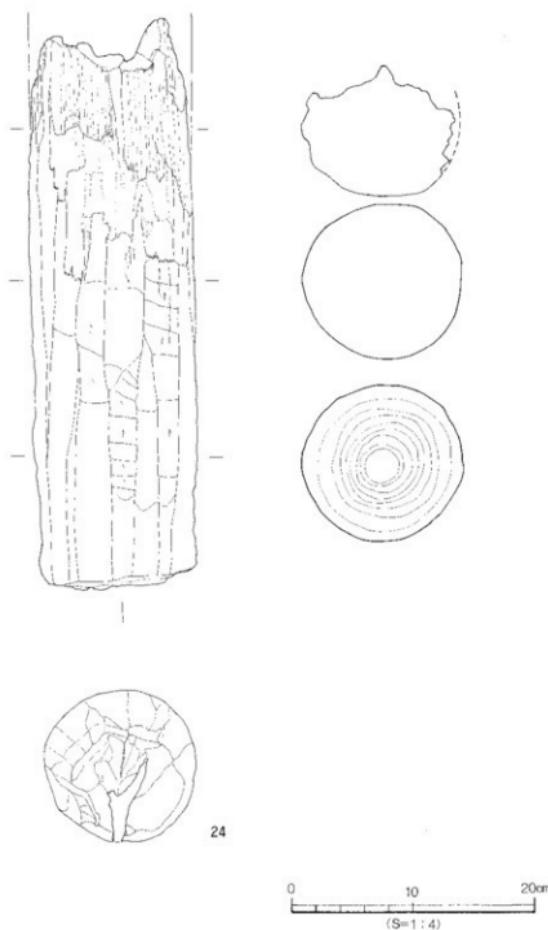
第25図 SBI 出土遺物実測図 (3)



第26図 SB1 出土遺物実測図(4)



第27図 SB I 出土遺物実測図(5)



第28図 SB I 出土遺物実測図(6)

## S B 2 (第29図、図版12・13)

本調査地北側のC 1 ~ E 2 区に位置し、北側は調査区外につづき、南西部は試掘トレンチにより切られる。平面形態は、コーナー部を2ヶ所検出したため隅丸方形ないし隅丸長方形と考えられる。規模は東西6.2m、南北2.4m+ $\alpha$ 、壁高14cmを測る。埋土は黒色土である。内部施設には、主柱穴・炉・周壁溝・高床部がある。

主柱穴は2基を検出した。平面形態は円形を呈し、規模はS P①は径35cm、深さ64cm、S P②は径44cm、深さ68cmを測る。埋土は暗灰茶褐色粘質土である。柱穴内からは柱材が出土している。S P①の柱材は四角に加工されている。

炉は住居址の東西方向の中心に位置するが北側は調査区に切られる。平面形態は、コーナー部を2ヶ所検出したため方形及び長方形と考える。規模は東西135cm、南北80cm+ $\alpha$ 、深さ24cmを測る。埋土は黒色土に焼土と炭が混入しているものである。炉内からは、弥生土器とガラス小玉が1点出土している。

周壁溝は壁体に沿って検出したが、南側の中央部から南西部までは途切れる。規模は幅15cm、深さ8cmである。埋土は黒色土である。

さらに住居内には焼土と炭が出土している。高床部は西側から南東部まで検出し、規模は幅30cm、厚さ4cmを測る。高床部は削り出して構築される。

遺物は、床面より弥生時代の斐形土器、高环形土器が出土している。

## 出土遺物 (第30・31図、図版16~18)

斐形土器 (25) 突出した上げ底の底部片。内外面にハケ調整が見られる。黒斑有り。

高环形土器 (26) 充填技法。充填部周囲に内面より粘土を補充している。

装身具 (27) ガラス小玉の完形品。法量は長さ0.25cm、幅0.39cm、孔径0.15cm、重さ0.053gを測る。色は青色である。

木製品 (28・29) 28はS P 1から出土の丸い柱材である。法量は長さ16.6cm、直径13.3cmを測る。木取りは、一部が芯にかかる取り方である。表面と小口に手斧と思われる加工痕が見られる。29はS P 2から出土の角い柱材である。法量は長さ41.7cm、長辺15.4cm、短辺8.9cmを測る。木取りは芯をはずれた取り方である。表面と小口に手斧と思われる加工痕が見られる。なお28・29の樹種はモチノキ属である。

時期：出土遺物の形態からS B 1と同時期の弥生時代後期前葉～中葉に廃棄・埋没したと考えられる。

## S B 3 (第32図、図版14)

調査区北西隅のA 1 ~ B 2 区に位置し、北側と西側は調査区外につづき、南側はS B 4に切られる。平面形態は全容が不明であるが、コーナー部を検出したため方形ないし長方形と考えられる。規模は長軸4.56m+ $\alpha$ 、短軸3.57m+ $\alpha$ 、壁高8cmを測る。埋土は黒色土である。内部施設には主柱穴・炉・周壁溝・溝がある。

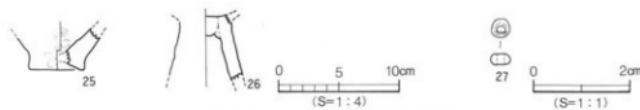
主柱穴は東側に3基を検出している。S P②、S P③は切り合ひ関係にあり、S P②がS P③を切っている。平面形態は円形であり、規模はS P①は径28cm、深さ52cm、S P②は径30cm、深さ55cm、S P③は径30cm、深さ30cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土砂質混じりである。S P①からは柱を固定するためと思われる石が出土している。

炉は住居内西側で検出し、西側は調査区外になる。平面形態は不整形な円形を呈する。規模は長軸173cm、短軸100cm+ $\alpha$ 、深さ15cmを測る。埋土は黒色土で、焼土と炭が出土している。炉内からは弥生

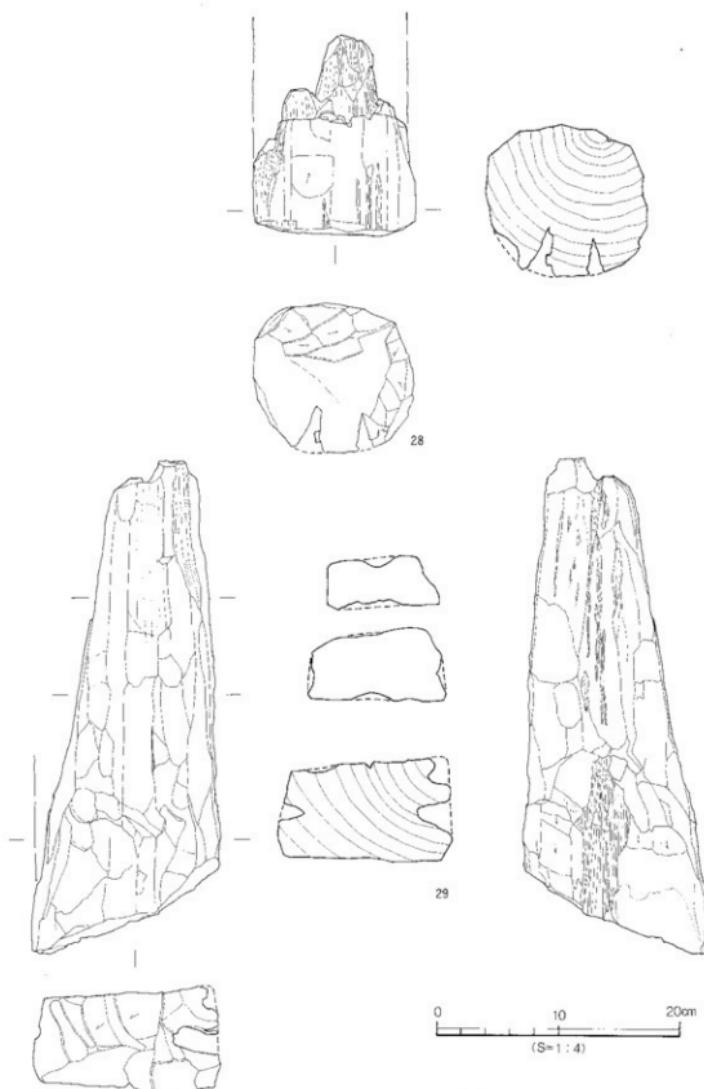
釜ノ口道路7次調査地



第29図 S B 2 測量図



第30図 S B 2 出土遺物実測図 (1)



第31図 SB 2 出土遺物実測図 (2)

釜ノ口遺跡 7 次調査地

土器とガラス小玉が 1 点出土した。

周壁溝は東側に検出した。規模は長さ 100cm、幅 10cm、深さ 3cm を測る。断面形態は「U」字状である。埋土は黒色土である。

溝は南壁に平行して検出した。規模は全長 230cm、幅 38cm、深さ 3cm を測る。断面形態は皿状である。埋土は黒色土である。

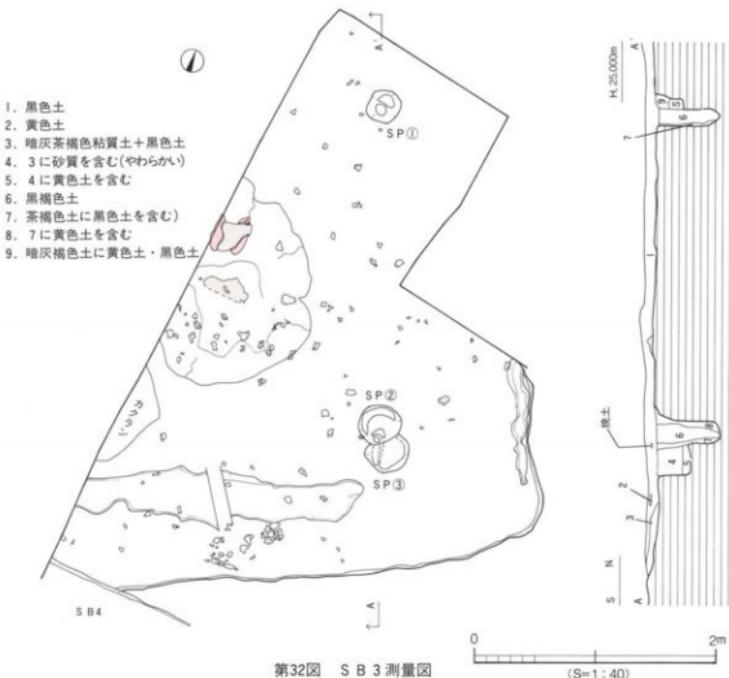
遺物は、弥生土器の壺形土器、壺形土器、鉢形土器が出土している。さらに住居内では、焼土と炭が出土している。

出土遺物（第33図、図版16）

鉢形土器（30） 台付の鉢の完形品。壺状の壺部の口縁部はやや内湾し端部は丸味をもつ。脚部は「ハ」字状を呈する。

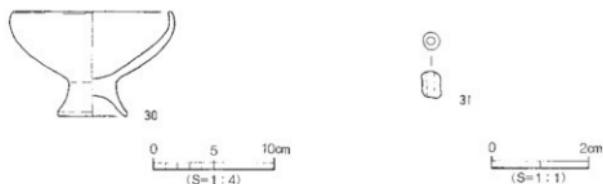
装身具（31） ガラス小玉の完形品。法量は長さ 0.50cm、幅 0.39cm、孔径 0.17cm、重さ 0.094g を測る。色は青緑色である。

時期：出土遺物鉢30の形態と埋土より、SB1と同じく、弥生時代後期前葉～中葉に廃棄・埋没したと考える。



第32図 SB3 測量図

(S=1:40)



第33図 S B 3出土遺物実測図

## S B 4 (第34図、図版14・15)

調査区西側のA 3～B 4区に位置し、北側はS B 3を切り、西側は調査区外につづく。住居内は近現代坑に切られている。平面形態はコーナー部を2ヶ所検出しており、隅丸方形ないし隅丸長方形と考えられる。規模は長軸3.0m+α、短軸3.35m+α、壁高10cmを測る。埋土は黒色土である。内部施設は柱穴と炉を検出している。

柱穴は住居検出部分のはば中央部に位置する。平面形態は北側部分は消失しているが、円形と考えられる。規模は径12cm、深さ40cmを測る。埋土は黒色土である。柱穴の断面観察では柱材の掘り込みはなく、柱材は直接打ち込んだ可能性が考えられる。

炉は住居中央の南側に位置する。平面形態は不整形な円形である。規模は長軸62cm、短軸56cm、深さ20cmを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は黒色土に暗灰茶褐色粘質土が混入する土である。炉内からは壺形土器が出土している。遺物は住居床面より壺形土器、壺形土器、鉢形土器、高环形土器が出土している。弥生土器のほかに焼土と炭が出土している。

## 出土遺物 (第35図)

壺形土器 (32・33) 32はそり気味に外反する口縁部の端部内面及び端面は強いヨコナデにより凹みをもつ。33は短く外反する口縁部。端面は強いヨコナデにより上下に拡張する。

壺形土器 (34) 長頸壺。頭部は直立気味に立ち上がり口縁部付近で大きく外反する。端部は「コ」字状である。

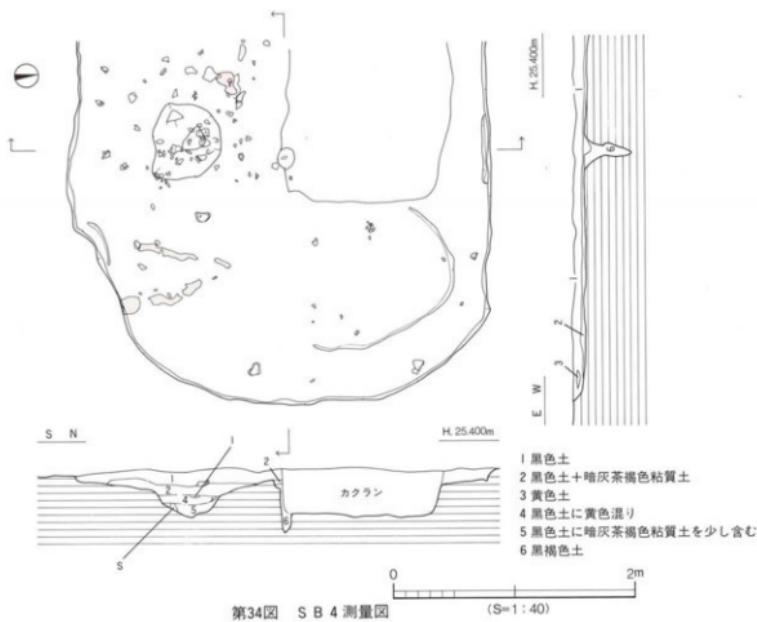
高环形土器 (35・36) 35は外傾気味に立ち上がる口縁部。端部は丸味をもつ。36は差し込み技法。环部との接合面を看取できる。

時期：S B 4は弥生時代後期前葉のS B 3を切っていることと、出土遺物32・34の形態より他の住居址よりわずかに新しい弥生時代後期中葉と考えられる。

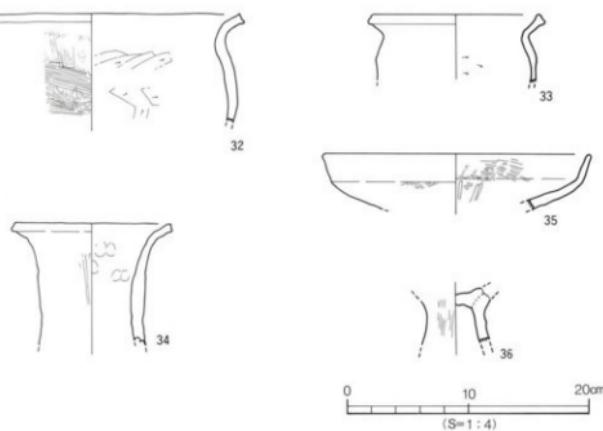
## (2) 柱穴 (SP)

柱穴は調査区南側に13基、北側に11基の計24基を検出した。平面形態は円形及び橢円形である。規模は径10～42cm、深さ4～25cmを測る。埋土は黒色土である。遺物は出土していないが埋土は、住居址埋土と同じであり、埋没時期は弥生時代後期と考える。

釜ノ口道路7次調査地



第34図 SB 4 測量図



第35図 SB 4 出土物実測図

## 4. 小 結

本調査では、AT火山灰及び弥生時代の遺構と遺物を検出することができた。

### (1) AT火山灰

AT火山灰は22,000年前に姶良・丹沢地方から噴出した火山灰である。AT火山灰は、本調査の東に位置する桑原地区の梅味遺跡、博味四反地遺跡、東本遺跡4次調査地より検出されており、特に東本遺跡4次調査地からは、厚さ80~160cmの1次堆積層を800mにわたり検出している。本調査の第VI層は、東本遺跡4次調査地のAT火山灰と堆積状況が類似しており1次堆積の可能性が考えられる。

このようにAT火山灰は、松山平野の中では石手川左岸に位置する桑原地区から釜ノ口地区に堆積していることが明らかになった。

### (2) 弥生時代

本調査で検出した弥生時代の遺構は、竪穴式住居址4棟、柱穴24基である。検出した竪穴住居址の中には注目すべき点が2点ある。それは、1) 焼失住居(SB1)の検出、2) 柱材の出土(SB1・SB2)である。

1) 焼失住居(SB1) SB1からは多量の炭化材と焼土が出土した。炭化材は出土遺物を覆うように住居の中心に向かって放射状に検出した。炭化材は樹種同定の結果アカガシ亜属(ブナ科)、サカキ(ツバキ科)と判明した。これらは出土状況より住居の建築部材として使用されていたと考えられる。

焼土は、炭化材上部の主柱穴上面及び主柱穴の周囲で集中的に出土した。焼土の分析では、スキ属に由来するものと考えられるネザサ節やウシクサ族が検出された。焼土は屋根を補強する補強材として使用されたと考えている。

2) 柱材の出土 柱材はSB1とSB2の柱穴内から6点出土した。SB1からは4基の主柱穴内から各1点の柱材と、礎板がSP①とSP②から2点ずつ計4点出土した。SP①から出土した2点の内1点は柱材に付着して出土している。柱材は4点とも丸材の芯持ち材である。表面と小口に加工痕が見られる。SB2からは、検出された2基の柱穴内から柱材が各1点出土した。SP①出土の柱材は丸材、SP②出土の柱材は角材である。ともに表面と小口に加工痕が見られる。

このほかSB1・SB2・SB3の炉内からは、ガラス小玉が1点ずつ出土している。また、SB2・SB3からは、炭化材が少量出土しており焼失住居とも考えられる。

本調査では、多量の炭化材と柱穴内より6点の柱材、炉内よりガラス小玉が出土し、弥生時代の竪穴式住居の上屋構造や、住居廃棄の様相を考える一資料を得ることになった。

### [文献]

- 柳木謙一・宮内慎一 1992 「桑原地区的遺跡」「梅味遺跡」「博味四反地遺跡」松山市教育委員会、財松山市生涯学習振興財團  
高尾和長 1996 「東本遺跡4次調査・枝松遺跡4次調査」(附) 松山市生涯学習振興財團

## 遺構・遺物一覧 一覧例

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

遺構一覧・遺物観察表は高尾・田崎が作成した。

(2) 遺物観察表の各掲載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部→底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長 (1~4)、多→「1~4 mmの大砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表14 整穴式住居址一覧

整穴 (SB)	時期	平面形	現高 長さ×幅×深さ(m)	支柱穴 (本)	内部施設			周壁溝	備考
					高床	土坑	炉		
S B 1	共生後期前葉 ~中葉	円形	5.5×5.1×0.2	4	○	○			
S B 2	共生後期前葉 ~中葉	満丸方形	6.2×2.4(-α)×0.14	2	○	○		○	
S B 3	共生後期前葉 ~中葉	方形 or 長方形	4.56(+α)×3.57(-α)×0.8	2		○		○	南壁と平行に溝がある。
S B 4	共生後期中葉	満丸方形	3.0(+α)×3.35(+α)×0.1	1		○			

表15 S B 1 出土遺物観察表 土製品 (1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外側)	胎土 焼成	備考	因版
				外面	内面				
1	甕	口径(29.4) 残高3.8	内外面ともに棱をつくりらず、緩やかに外反する口縁部、漏部は「コ」字状。肩部に板状工具の小口による斜刃文。	ヨコナデ	マツツ	淡白褐色 端条褐色	石(1~3)* 長(1~4) ○		
2	甕	底径4.7 残高3.0	突出した上げ底。底部周辺には指詰痕が並ぶ。	(脚下) 梱工具によるヨコナデ (脚下) ナデ上げ	ナデ	暗茶褐色 黒色	石・長(1~4) 金○		
3	甕	口径(18.6) 残高8.1	口縁端部に粘土を接し、肥厚させる。 端面に薄いヨコナデによる凹みが見られる。	(口端) ハケ(12~13本/cm) (脚下) ハケ→ナデ	(口端) ヨコナデ (脚下) ヨコナデ(12~13本/cm)→ナデ	淡褐色 橙褐色	石(1~4) ○		
4	甕	口径(18.6) 残高1.9	粘土を貼付し、括張した端面に櫛状工具により9~11箇の山形文を施す。	(口端) ヨコナデ→施文 (口端) ハケ(3本/cm)	(口端) ヨコナデ (口端) ナデ	淡黄褐色 淡赤褐色	石(1~4)* 長(1~2) ○		
5	甕	口径(8.4) 残高5.3	複合口縁部。口縁部はほぼ直立。括張部に2条の横沈线文とハケ目調整工具による刻みを施す。	(口端) ヨコナデ→施文 (口端) ナデ	(口端) ヨコナデ (口端) ナデ(1T工具) (脚下) ハケ(7本/cm)	淡褐色	石・長(1~3) ○		
6	甕	底径(7.3) 残高6.8	大きめの平底。	(口端) ナデ (口端) ハケ(12~13本/cm)→ナデ	(口端) 指詰えさ (口端) ハケ(12~13本/cm)	白褐色 淡灰褐色	石(1~4)* 長(1~5) 金○		
7	甕	底径4.4 残高9.0	やや丸味のある平底。器壁が厚い。	(口端) ナデ (口端) ハケ(5~6本/cm)→ナデ	(口端) 指詰えさ (口端) ハケ上げ	淡灰黃褐色 淡青灰色	石・長(0.5~3) ○		
8	鉢	底径3.4 残高4.5	くびれの上げ底。底部中央に径1.5cmほど の粘土を充填する。底面部に粘土を貼付する。	(口端) ナデ (口端) ハケ(10本/cm)・ミガキ	(口端) 指詰えさ (口端) 板状工具によるヨコナデ	乳白色・灰色 乳白色・茶褐色	長(1~2) ○	黒斑	
9	鉢	底径8.4 残高3.0	油部は「コ」字状	ヨコナデ	(口端) ナデ(1T工具) (脚下) 板状工具によるヨコナデ	淡暗灰褐色	石・長(0.5~4) 金・第○		
10	高杯	口径29.6 残高7.6	充填技法。充填部との接合面を看取でき(口端) ヨコナデ (口端) ハケ(5~6本/cm)・ミガキ	(口端) ナデ(1T工具) (脚下) ハケ(5~6本/cm)・ミガキ	(口端) ナデ・ミガキ	淡褐色	石・長(1~2) 金○		16

## 出土遺物観察表

S B 1 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	構造		色調(外側) (内側)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
11	高環	残高 7.4	5方向の円孔が1段残る。	ハケ(8本/cm) × 披き痕 ミガキ(?)	ナデ	淡白黄色 淡灰茶褐色	右・長(1~4) 金○		
12	高環	残高 10.0	光沢み枝法か? 环部との接合面を看取 できる。柱部は「ハ」字形に広がり、輪 部との境は不明瞭。	ハケ(4~5本/cm) ハケ(4~5本/cm)	ナデ	淡明茶褐色 淡灰茶褐色	右・長(0.5~3) 金○	黒魔	
13	器台	口径 17.8 底径 14.6 高さ 11.0	口縁中位に縦を有する。底部端面には1 柔の内縁。側面部には3柔と5柔のヘラ擦 き沈擦文。	①ハケ(5~6本/cm) ②ミガキ ③ハケ(5~6本/cm) ④ミガキ ⑤ヨコナデ	ナデ	暗赤褐色	右・長(1~2) 金○		16

表16 S B 1 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
14	石鏸	先端と芯部を 欠く。	サスカイト	1.7	1.5	0.3	0.730	同基式	16
15	扁平片刃石斧	基部削刃	結晶片岩	3.7	3.4	1.5	37.654	断面は隅丸長方形。 丁寧な研磨。	
16	石包丁	ほぼ完形	結晶片岩	8.9	4.3	0.6	38.801	2ヶ所穿孔。全器器で穿孔 されている可能性大。	

表17 S B 1 出土遺物観察表 裝身具製品

番号	器種	遺存状態	材質・色	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
17	小玉	完形	ガラス・青色	0.39	0.10	0.12	0.075	炉内出土	16

表18 S B 1 出土遺物観察表 木製品

番号	器種	遺存状態	樹種	法量				木取り	備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	直径(cm)			
18	柱材		アカガシ亜属	35.5			13.7	芯持材	S P①	17 18
19	礎板		アカガシ亜属	10.0	9.8	4.0		S P① 22.1回	—	17 18
20	柱材		アカガシ亜属	36.4			長軸15.6 短軸13.5	芯持材	S P②	17 18
21	礎板		アカガシ亜属	13.4	11.5	5.0			S P②	17 18
22	礎板		アカガシ亜属	10.3	8.7	3.1			S P② 19と同	17 18
23	柱材		アカガシ亜属	36.0			12.8	芯持材	S P③	17 18
24	柱材		アカガシ亜属	48.2			13.0	芯持材	S P④	17 18

## 釜ノ口遺跡7次調査地

表19 SB 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外側) 色調 (内側)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
25	甕	底径 残高	1.5 3.4	突出した上げ底。	④ナデ、指おさ え ⑤ハケ(6本/cm)	ハケ(6本/cm)・ ナデ	茶褐色 暗黄茶褐色	石(1~3)・ 長(1~4) ○	黒度
26	高环	残高	5.5	充填技法。脚部内面より、光澤部周間に 粘土を捺している。	マツツ	④上)紋り痕 脚)ナデ	淡褐色	石(1~3)・ 長(1~5) ○	

表20 SB 2 出土遺物観察表 装身具製品

番号	器種	遺存状態	材質・色	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
27	小玉	完形	ガラス・青色	0.25	0.39	0.15	0.053	炉内出土	16

表21 SB 2 出土遺物観察表 木製品

番号	器種	遺存状態	樹種	法量				木取り	備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	直径(cm)			
28	柱材		モチノキ属	16.6			13.3		丸材	17 18
29	柱材		モチノキ属	41.7	15.4	8.9			角材	17 18

表22 SB 3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外側) 色調 (内側)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
30	臼付鉢	口径(13.2) 底径(5.5) 高さ(8.6)	底状の環部。口縁部はやや内凹し、端部 は丸味をもつ。脚部は「ハ」字状。	マツツ	ミガキ (マツツのため不明瞭)	淡茶褐色	石・長(1~2) ○		16

表23 SB 3 出土遺物観察表 装身具製品

番号	器種	遺存状態	材質・色	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)		
31	小玉	光形	ガラス・青緑色	0.50	0.39	0.17	0.094	炉内出土	16

表24 SB 4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外側) 色調 (内側)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
32	甕	口径(24.2) 底径(9.0)	そり気味に外反する口縁部。強いヨコナ ダにより端部内凹及び端面は凹みをも つ。	④ハケ(6本/cm) →ヨコナダ ⑤ハケ	①ヨコナダ →ヨコナダ ⑥板ナダ	淡黄褐色	石・長(1~3) ○ 様付蓋		
33	甕	口径(11.8) 底径(5.6)	よく外反する口縁部。端面は強いヨコナ ダにより上にやや抵張。肩部に甘い接 合をもつ。	④ヨコナダ ⑦ヨコナダ	①ヨコナダ →ヨコナダ ⑧ケズリ	暗灰茶褐色 暗茶褐色	石・長(0.5~4) ○ 金		
34	甕	口径(12.7) 底径(10.0)	長頸甕。頸部は直立気味に立ち上がり口 縁付近で大きく外反する。渠部は「コ」 字形。	④ヨコナダ ⑨わずかにハケ	①ヨコナダ ⑩ナダ(指頭直) 乳白色	乳白褐色 乳白色	石・長(1~3) ○ 黒斑		
35	高環	口径(21.8) 底径(4.5)	外相気味に立ち上がる細い口縁部。端部 は丸味をもつ。	⑩ナダ(指頭直) ⑪ヨコナダ ⑫ハケ	⑪ヨコナダ ⑫ハケ(6本/cm) ⑬ハケ→ミガキ	淡白黃褐色	石・長(0.5~4) ○ 金		
36	高環	残高 4.5	充填技法。环部との接合面を看取できる。	ハケ(5本/cm)	⑭ミガキ? ⑮ナダ	淡黄褐色	石・長(1~3) ○ 金		

# 釜ノ口遺跡

第4章

8次調査地

# 釜ノ口遺跡

第4章

8次調査地



## 第4章 釜ノ口遺跡8次調査地

### 1. 調査の経過

#### (1) 調査に至る経緯

1995(平成7)年10月13日、御松山ニューグランドホテルより松山市小坂4丁目1-2、8-1-1、8-1-2内における土地開発にあたり、埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。

本調査地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No.113枝松5丁目遺物包含地」内に所在する。調査地の北方には文京遺跡〔西田栄一1976〕、松山大学構内遺跡〔梅木謙一1991〕などの道後城北地区が、南方には来住廐寺跡〔小笠原好彦1979〕、久米高畠遺跡〔西尾幸則1989〕などの久米地区、東方には梅味遺跡〔愛媛大学農学部構内〕〔宮本一夫1990〕、東本遺跡4次調査地〔高尾和長1996〕などの桑原地区がある。このように周辺地域には弥生時代から中世にかけての集落が多数存在している。

釜ノ口遺跡は既に7次の調査が実施され、とくに本調査地東側の6次調査地からは、弥生時代後期の竪穴式住居址、土坑、溝が検出されている。また、7次調査地からは弥生時代後期の竪穴式住居址4棟を検出し、このうちのSB1からは、住居址床面より多量の炭化材が出土している。このように釜ノ口遺跡は、弥生時代後期の集落関連遺構が多数検出されている遺跡である。

これらのことから当該地における埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲や性格を確認するため、1995(平成7)年11月13日に文化教育課は試掘調査を実施し、竪穴式住居址、溝、柱穴と弥生土器、有茎石器を検出した。

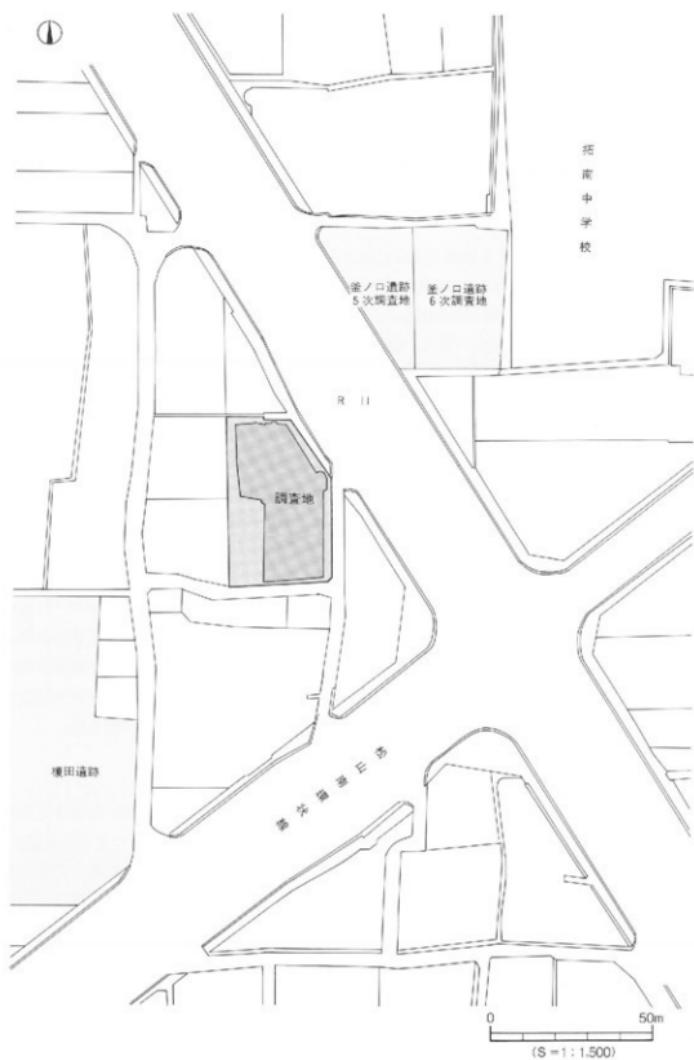
この結果を受け、財松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター(以下、埋文センター)と御松山ニューグランドホテルの両者は遺跡の取扱いについて協議を重ね、土地開発によって失われる造構と遺物について、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、弥生時代から中世にかけての当該地及び周辺地域の集落構造や、住居構造の解明を目的とし、埋文センターが主体となり、御松山ニューグランドホテルの協力のもとに1995(平成7)年12月1日に開始した。

#### (2) 調査の経緯

1995(平成7)年12月7日、試掘調査の結果をもとに土層確認を行い、地表下20~30cmまで重機による剥ぎ取り作業を開始した。排土はすべて調査地外に搬出したため表土剥ぎ取りに3日間を費やした。

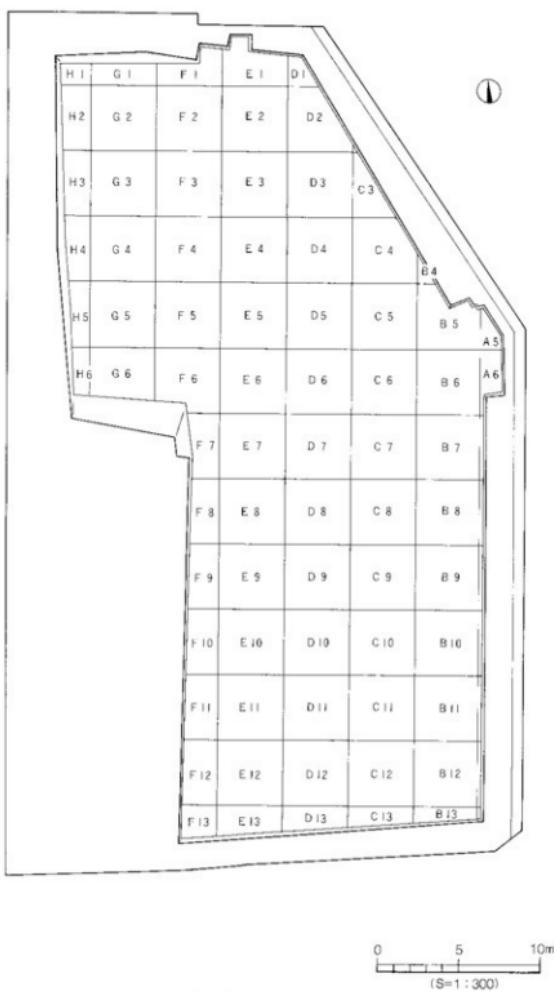
調査は、北半部と南半部に分け、12月13日より作業員を増員して北半部より本格的な調査を開始した。包含層は調査区南半部の一部に存在する。12月23日に第VIA層と第VII層上面にて造構検出を行い、竪穴式住居址、掘立柱建物址、溝、柱穴を検出した。1月10日からSB2の掘り下げと遺物検出を中心に行う。2月14日に写真撮影を行い、北半部の調査を終了した。2月16日より南半部の調査に着手する。南半部には一部包含層が存在するため掘り下げを行い、その後造構検出を行う。造構は、竪穴式住居址、土坑、溝を検出し、SB3から掘り下げを行う。2月26日に測量を行い、SB3とSK1の遺物を取り上げ、サンプル採取を行う。3月2日に現地説明会を行なう。3月21日に出土遺物、調査用具等を撤去し調査を終了する。

釜ノ口道路 8 次調査地



第36図 調査地位置図

調査の経過



第37図 調査地区割図

## (3) 調査組織

調査地 松山市小坂4丁目1-2, 8-1-1・2  
 遺跡名 釜ノ口遺跡8次調査地  
 調査期間 1995(平成7)年12月1日~1996(平成8)年3月21日  
 調査面積 1485.92m<sup>2</sup>  
 調査協力 伊松山ニューグランドホテル  
 調査担当 山本健一、相原秀仁

## 2. 層位 (第38・39図)

本調査は、右手川中流域南岸、標高25.8mに立地する。

基本層位は、第I層灰色土(耕作土)、第II層灰黄色土(床土)、第III層灰黄褐色土(遺物包含層)、第IV層褐色土、第V層黒灰色土(水田址埋土)、第VIa層暗灰黄色土、第VIb層灰黄色土、第VII層茶褐色土(地山)、第VIII層淡黄色土、第IXa層黄褐色土、第IXb①層黄色土(A T火山灰2次堆積)、第IXb②褐色土(A T火山灰1次堆積)、第X層は灰褐色土上、第XI層青灰色土である。なお、第XII層から下層は、部分的な深掘りを行い堆積状況を確認したものである。

第I層：近現代の造成工事及び農耕による客土である。造成土は調査地の西半部、耕作土は東半部に堆積がみられる(14~80cm)。

第II層：水田耕作に伴う床土である(5~20cm)。

第III層：調査地の東半部に堆積がみられる(8~17cm)。弥生土器、土師器、須恵器の小片を含む。

第IV層：調査区の南西隅で検出された。水田址を覆う(3~12cm)。

第V層：水田址の埋土と考えられる(8~27cm)。

第VIa層：サクサクとした質感である。調査区の中央部に堆積がみられる(2~3cm)。本層上面にて造構を検出した(SB2・SD1)。

第VIb層：調査区の中央部に堆積がみられる(3~6cm)。サクサクとした質感である。

第VII層：西半部の一部を除くとほぼ全域に堆積がみられる(8~23cm)。西半部は削平されているため東半部との比高差は10~20cmである。本調査における最終の造構検出面で、堅穴式住居址や掘立柱建物址、溝、土坑などを検出した。無遺物層である。

第VIII層：北壁で堆積がみられる(18~26cm)。

第IXa層：北壁の一部と東壁で堆積がみられる。東壁では安定した堆積だが、北壁では一部砂質土が堆積し、部分的な堆積となる(10~35cm)。A T火山灰の2次堆積である。

第IXb層はA T火山灰の1次堆積である。粒子の大きさにより2層に分層できる。

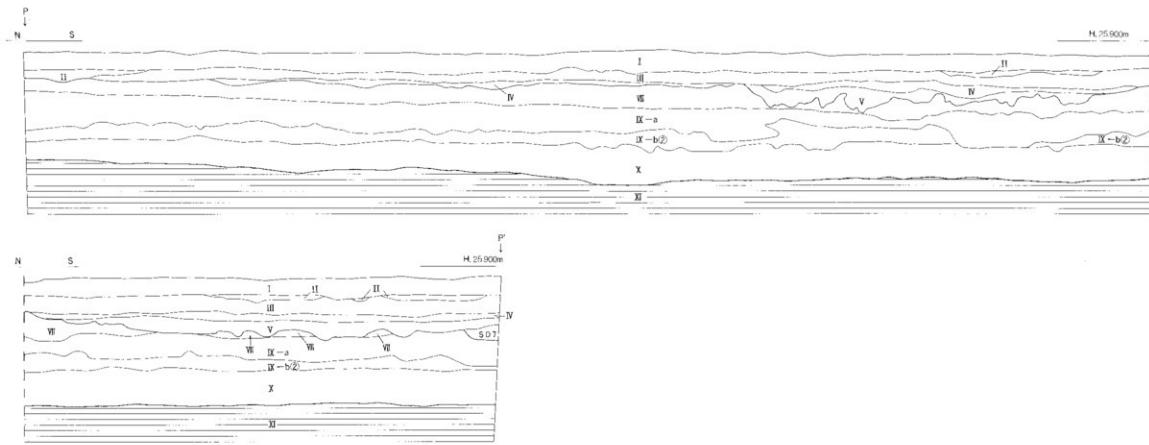
第IXb①層：北壁で堆積する(21~28cm)。

第IXb②層：北壁と東壁に堆積する(8~26cm)。

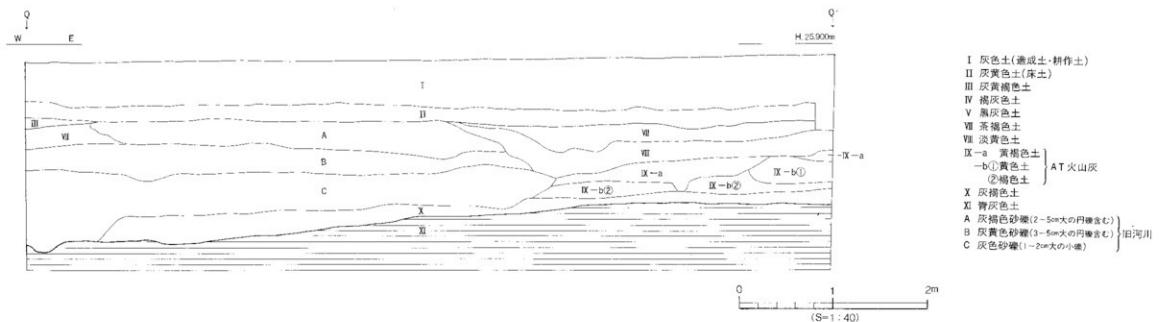
第X層：北壁と東壁に堆積がみられる(10~43cm)。

第XI層：北壁と東壁に堆積がみられる。

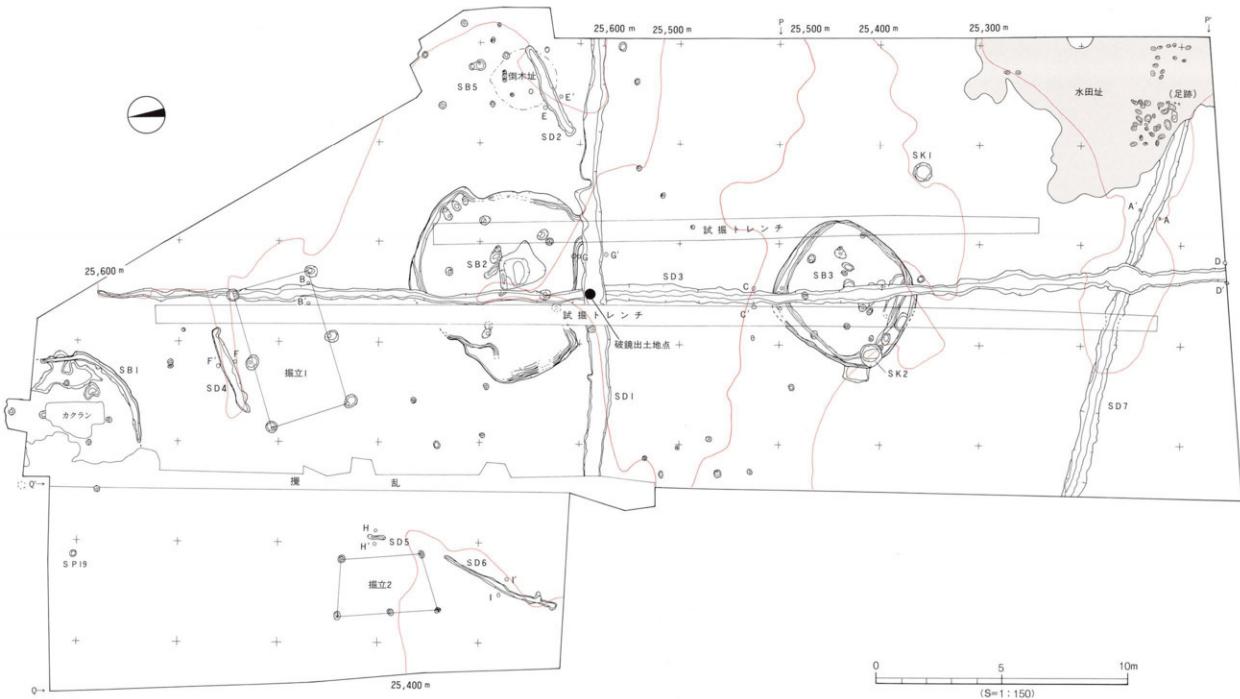
造構は、第VIa層及び第VII層上面で検出した。第VIa層上面では堅穴式住居址1棟(SB2)、溝1条(SD1)、第VII層上面では堅穴式住居址3棟、掘立柱建物2棟、溝6条、貯藏穴2基、柱穴31基(弥



第38図 東塙土層図



第39図 北塙土層図



第40図 造構配置図

生時代後期)、水田址(中世)を検出した。遺構は、北に行くにつれ削平が大きく、深さが浅いものであった。調査区北西部の深掘りにて、自然流路と考えられる砂の落ち込みを検出した。

遺物は、遺構内および第Ⅲ層から弥生土器、須恵器、土師器が出土し、特にSD3からは破鏡(中國鏡)が出土した。第VII層上面の標高は調査区北東部が最も高く、漸次南西へ向かって傾斜している。なお、調査にあたり調査区内を4m四方のグリットに分けた(第37図)。

### 3. 遺構と遺物

本調査においては、弥生時代から中世の遺構を検出した。

#### (1) 積穴式住居址(SB)

本調査で検出した積穴式住居址は4棟である。SB2は第VIa層上面、その他はすべて第VII層上面での検出である。

##### i) 調査工程と検出遺構

さて、SB2は住居の拡張と拡張後の床面修復により計2回の改築・改修が行われている。よって、平面形態の検出には困難をきわめた。ここでは発掘調査時の工程をふまえながら、検出遺構を説明する。

本住居址は第VIa層上面で検出した。検出時の平面形態は多角形を呈していたため、円形と方形の住居2棟が重複しているものと考え調査を進めた。

まず、住居址内に東西及び南北のトレンチを設定し、土層観察を行った。その結果、黒褐色土〔住居址埋土〕と、黒色土と明褐色土の混合土〔貼床土〕の2層を確認した。なお、住居址南側では住居址埋土は検出されず、貼床上が露出する状況であった。

つぎに、住居址埋土である黒褐色土の掘り下げを開始した。埋土中からは弥生土器、石器、ガラス小玉が出土した。ガラス小玉が出土したことから、住居址内および住居周辺を1m四方の小グリット(①～⑩区)に区分け、埋土はすべて採取した(第42図)。

埋土を完掘すると、貼床土及び周壁溝〔建て替え後〕が検出された。貼床土上面では、径10cm前後の小ピットSP①・②・⑥・⑧(その後の調査で柱痕と判明)と、住居址のほぼ中央部に不整形の炉を検出し、張り出し部からは3基のピットSP⑨・⑩・⑪が検出された。

つづいて、遺構の掘り下げをおこない、終了後は貼床土の掘り下げを始めた。貼床上内からは石器とガラス小玉が1点出土した。

貼床土を完掘すると、住居の基底面が検出された。基底面には周壁溝〔建て替え前〕と大小10基のピット(SP①～⑧・⑫・⑬)があり、このうちSP①・②・⑥・⑦・⑧の5基と、SP③・④・⑤の3基は掘り方埋土が異なっていた。そのほか、炉の下面で4条の小溝が検出された。

##### ii) SB2(建て替え前)

構築当初の住居は遠存する周壁溝から平面形態は円形で、扇形の張り出し部を2箇所に付設するも

のであった（第43図）。規模は円形部分が径6.4m、北東部の張り出し部は幅0.7m、長さ4.5m、北西部の張り出し部は幅1.5m、長さ4.4m、住居全体の床面積は40.34m<sup>2</sup>である。住居址床面は第IX層AT火山灰に達しており凹凸が著しい。

主柱穴は5本でS P①・②・③・④・⑤と考えられ、主柱穴の間隔は240～250cmであった。S P①・②は、建て替え時に柱穴を掘り直していることから、柱穴の構造は判断できない。S P③・④・⑤は掘り方の平面形態が円～楕円形を呈し、規模は径25～50cm、深さ30～70cmを測る。掘り方埋土は黒色土と褐色土の混合土である。S P③では柱痕が検出され、径16cm、深さ40cmを測る。遺物はS P③・④から弥生土器片が数点出土している。

周壁溝は部分的に未検出部分がある。規模は幅10～28cm、深さ3～7cmを測る。埋土は明褐色土（黒色土混入）で、貼床土に類似する。また、北西部の張り出し部からは周壁溝より内側にて2条の小溝が検出された。埋土は周壁溝埋土と同じである。周壁溝からは弥生土器片とガラス小玉が1点出土している（詳細な出土地点は特定できず）。

炉は住居址中央やや南西寄りに位置する。貼床土上面で検出したが、基底面に壇とされる施設がないことから、構築当初にも使用されていたものと考えられる。平面形態は不整な台形を呈し、規模は長さ1.85m、幅1.62m、深さ22cmを測る。断面形態はわずかに舟底状を呈する。炉の北壁部分には径22×80cm、深さ8cmの楕円形のピットが検出された。

炉の埋土は上位に埋土①の黒色土（茶褐色土混入）、埋土中位には南半部には黒褐色土が混入する埋土②、北半部に灰黄色土と黄色土が混入する埋土③、基底面付近には埋土④黒褐色土（茶褐色土と黄色土混入）がみられた。

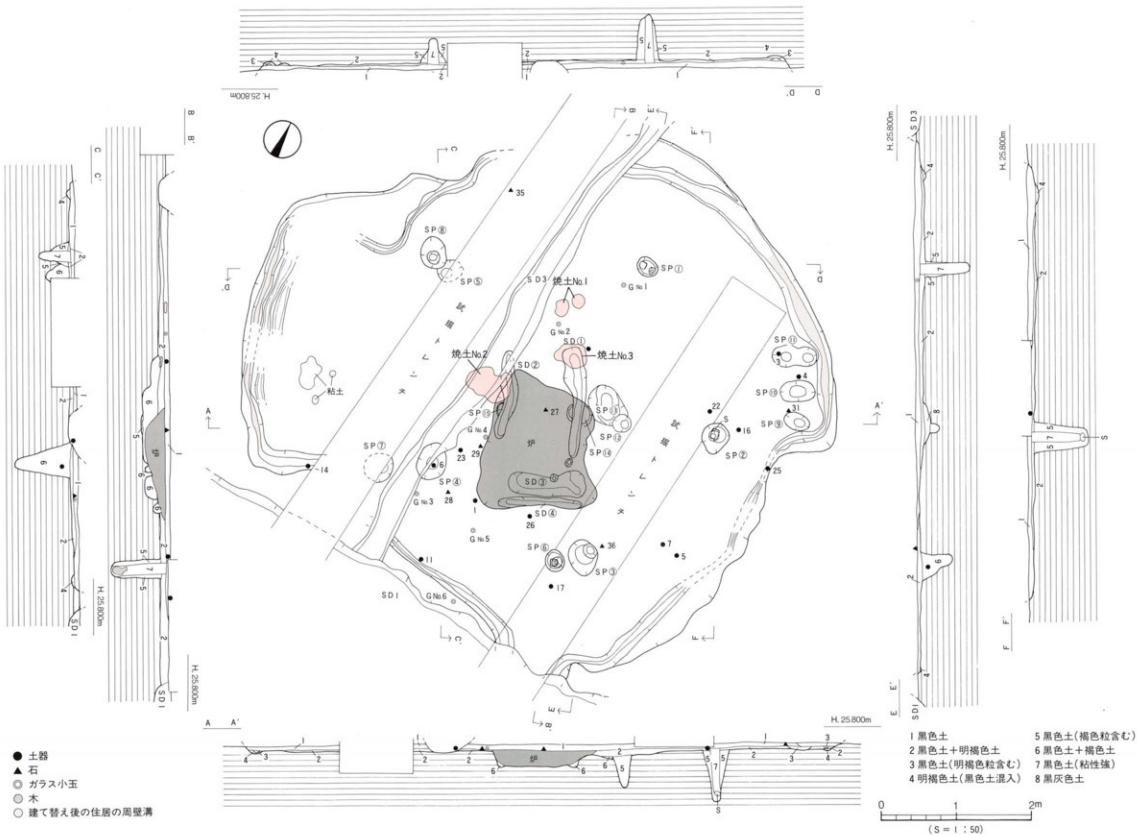
炉出土の遺物は大半が埋土①から出土したものである。弥生土器片、石器、骨片のほか、ガラス小玉が6点出土している（ガラス小玉の詳細な出土地点は不明）。骨の細片は埋土①上面から2点が出土しているが、種別は不明である。また、埋土①中からは40×60cmの範囲に厚さ5cm程度の焼上が検出されている。

また、炉の下面では「コ」字状に配列する4条の小溝が検出され、小溝①と②はやや湾曲していた。小溝①は長さ1.45m、幅14～32cmを測り、基底面は2段掘りになる。したがって、溝の北半部は深さ10cm、南半部は深さ18cmを測る。小溝②は長さ1.18m、幅14～20cmで、溝底は小溝①と同様に2段掘りになり、北半部は深さ8cm、南半部は15cmを測る。小溝③は長さ1.05m、幅24～36cm、深さ8cmであり、基底面は中央部付近がやや盛り上がる。小溝④は長さ1.12m、幅8～12cm、深さ6cmで、溝底は平坦である。いずれの溝も埋土は黒色土と褐色土の混合土で、遺物の出土はない。さらに、小溝の周辺では小溝①の上面付近にて30×40cmの範囲で厚さ3～5cmの焼上と、小溝①と小溝②の下面に2基の小穴が検出された（S P⑩・⑪）。小穴の埋土はいずれも黒色土で、遺物の出土はない。これら4条の溝は炉の下面にあることや焼土が検出されていることより炉に関係する施設と考えられる。

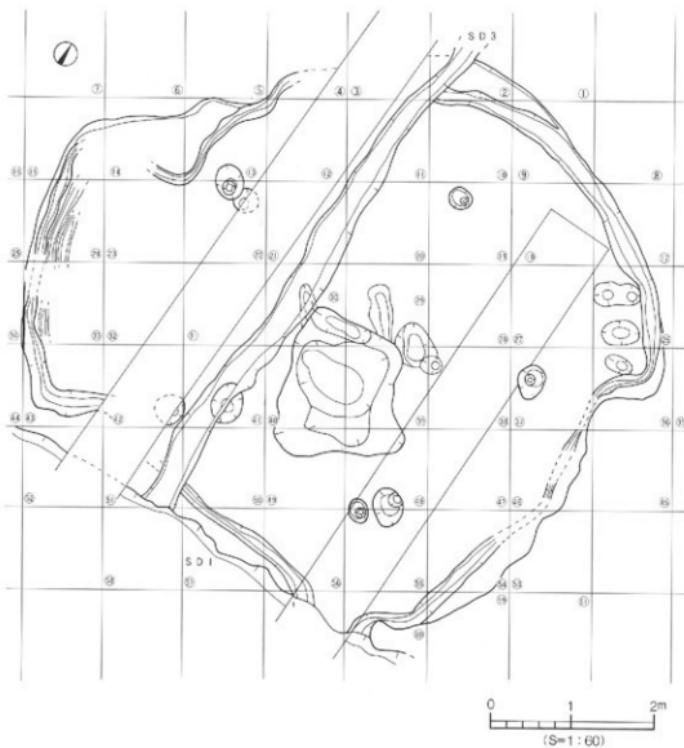
このほか、住居址中央部ではS P⑫・⑬を検出した。埋土は黒色土と褐色土の混合土で、遺物の出土はない。住居に伴うものかは判断できない。

### iii) SB 2 (建て替え後)

建て替え後の住居は、建て替え前の住居よりもやや大きくなる（第46図）。住居は、建て替え後に貼床土（黒色土と明褐色土の混合土）を用い、床面一度改修している。よって、建て替え当初の床面



第41図 SB 2測量図

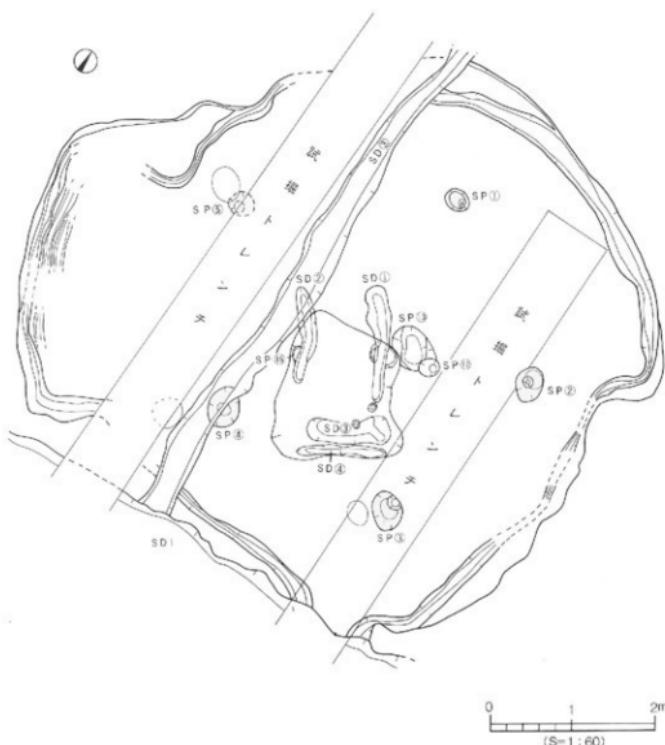


第42図 S B 2 区割図

については判断ができないため、本稿では改築後で貼床が施された住居の構造と内部施設について説明を行なう。

建て替え後の主柱穴は S P①・②・⑥・⑦・⑧の 5 本柱で構成される。S P⑥・⑦・⑧は、建て替え前の主柱穴よりやや壁体側に配置される。柱穴の掘り方は円・楕円形を呈し、規模は径 25~40cm、深さ 45~70cm を測る。柱掘り方は建て替え前のものと比べてやや深くなっている。埋土は黒色土（褐色土粒含む）で、建て替え前の S P③・④・⑤とはやや異なる。主柱穴の間隔は 260~270cm で、建て替え前より 10~20cm 広くなる。柱痕は S P①・②・⑥・⑧で検出され、径 10~16cm、深さ 45~70cm を測る。柱痕埋土は粘性の強い黒色土である。S P①の基底面付近には径 10~15cm 大の扁平な石が詰められ、S P②の基底部では柱痕の下に径 8~12cm 大の石が検出された。S P⑥の基底面には柱材（腐敗が著しい）がわずかに残っており、樹種同定より、コナラ属コナラ節の柱材であることが判明した。

住居址北東部の張り出し部からは S P⑨・⑩・⑪のピット 3 基が検出された。埋土はいずれも黒褐



第43図 SB 2 建て替え前測量図

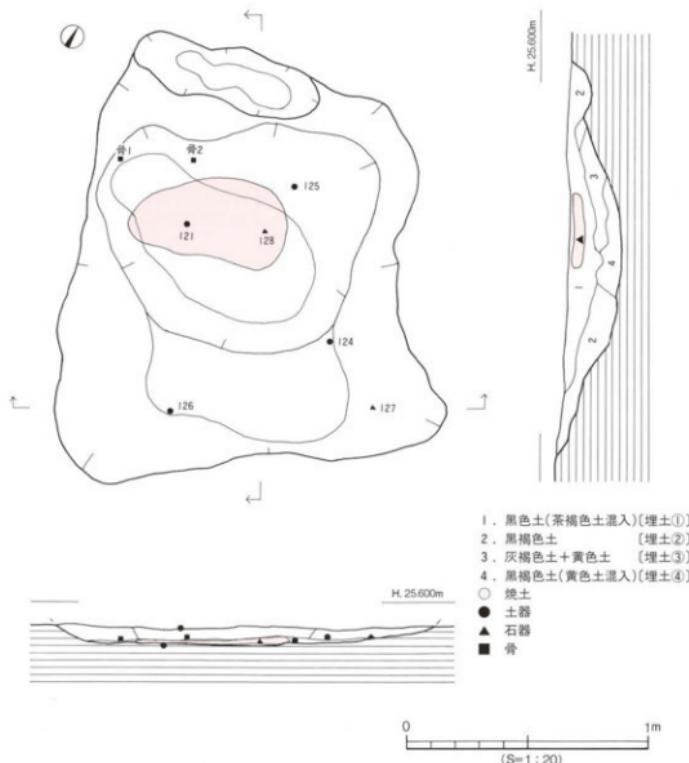
色土で、住居址埋土と類似する。SP①内からは弥生土器片が出土している。

このほか、焼土と粘土塊が検出された。住居址中央部やや北寄りの基底面では焼土を2箇所検出した(焼土No.1)。焼土は円~楕円形を呈し、 $15 \times 20\text{cm}$ 、 $15 \times 25\text{cm}$ の範囲で、厚さ3~5cmを測る。また、炉の北西部床面においても焼土を検出した(焼土No.2)。焼土は $40 \times 60\text{cm}$ の範囲で、厚さは2~4cmを測る。粘土塊は住居址北西部の張り出し部基底面で検出した(粘土No.1)。粘土は黄白色を呈し、厚さ3~5cmを測る。

住居内からの遺物は埋土中及び床面付近から出土し、弥生土器や石器のはかガラス小玉が大量にある。土器は大半が破片であり、炉の南側付近や北半部の張り出し部付近に集中している。石器は炉の周辺から石鐵が2点、北東部張り出し部から砥石が1点出土している。SB 2出土のガラス小玉は埋土中87点、周壁溝内1点、貼床土内1点で計89点となり、完形品は82点である。

埋土出土品は、出土地点を特定しえるものは6点にかぎられ(第41図、第49・50図37~42)、5点は貼床土上面付近からの出土であり、残りの1点は住居址外からの出土品となる。また、43~90の48点は小グリットの取り上げ品で、91~117の27点は埋土からの出土品であるか、それ以上の詳細な地点は判断できないものである。

ガラス小玉は出土地点の特定しうる54点(37~90)を対象に、ガラス小玉の径と色に注目して出土状況を第49図に掲載した。径は、破片については復元により数値を求めている。ガラス小玉の出土状況は住居址北西部の張り出し部や炉周辺に多く分布する傾向がうかがえ、ガラス小玉廃棄の意図的行為が考えられる。

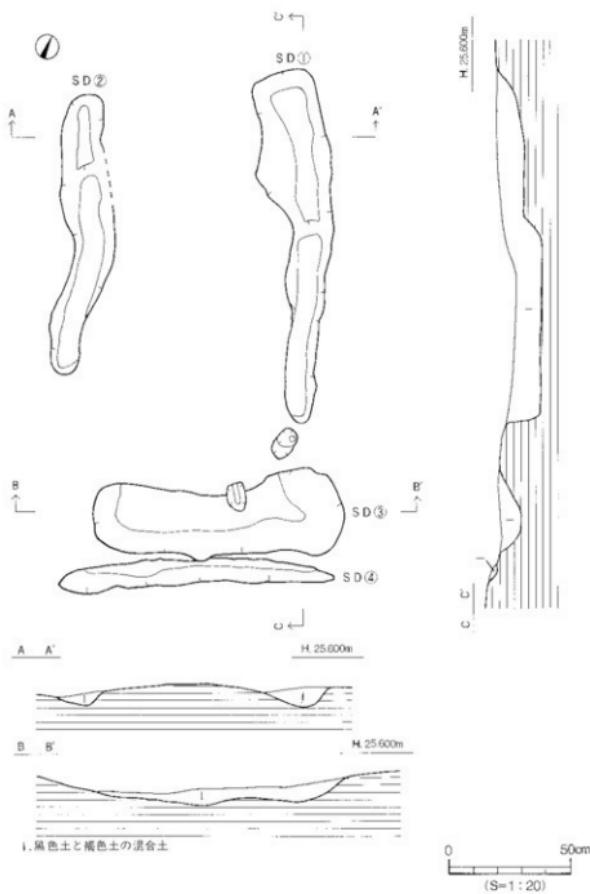


第44図 S B 2 炉測量図

茶ノ口遺跡 8次調査地

周壁溝出土 (118) 及び貼床土内出土 (119) のガラス小玉は、詳細な出土地点は不明である。

また、貼床上内からは炉の西側で石庵 1 点とガラス小玉 1 点が出土している（詳細な出土地点は不明）。さらに、直径 1 ~ 2 cm 大の球形の川原石が貼床及び炉内より 2 点出土している。

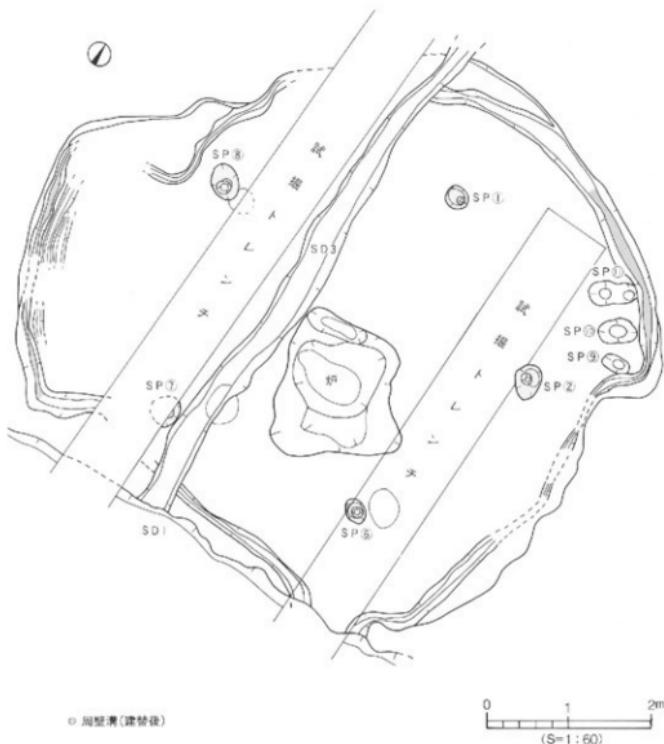


第45図 S B 2 - S D ①~④測量図

## iv) 所見

まず、主柱穴は柱穴の形態や埋土から、建て替え前は S P ①・②・③・④・⑤の 5 本、建て替え後は S P ①・②・⑥・⑦・⑧の 5 本と考えた。このうち S P ①・②・⑥・⑧は、貼床土上面で検出した小ピットは柱底で、基底面検出のピットは柱穴の掘り方であることが判明している。

つまり、構築時は S P ①・②・③・④・⑤の 5 本柱であったものが、建て替え後は S P ①・②はそのままの位置で改めて柱穴を掘り直し柱をすえ、S P ③～⑤は使用せず、新たに S P ⑥・⑦・⑧を主柱穴として設置したのである。よって、改築は、一部の主柱穴と炉はそのままの位置で、貼床土による床面改修をしたものと考えられる。



第46図 SB 2 建て替え後測量図

## v) SB2出土遺物（第47~50図、図版41・51）

構築当初の遺物はなく、遺物は貼床時と廃絶時に伴うものである。出土品には弥生土器や石器のほか、ガラス小玉が95点ある。ガラス小玉のうち6点は炉内から出土したものである。出土地点には住居址埋土中・炉・柱穴と貼床土内がある。

變形土器（1~3） 2は主柱穴SP③、3はSP⑪から出土した變形土器である。1は口縁端部をやや拡張し、口縁端面に3条の沈線文を施す。頸部下に板状工具の木口による「ノ」字状文を施す。2は口縁端面はナデにより面取りする。3は「く」字状口縁で、頸部下端にヘラ状工具の押圧による「ノ」字状を施す。胴部内部にケズリ調整を施す。

壺形土器（4~12） 4~6は短頸壺の口縁部片である。4は北東部の張り出し部、5は東側から出土したものである。4は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に2条の沈線文を施す。5は口縁端面は強いヨコナデにより凹み、6は不明瞭な沈線文が1条施される。7・8は長頸（直口）壺の口縁部片である。7は主柱穴SP④出土品。8は口縁端部をヨコナデし面取りする。9は広口壺の口縁部小片。10は複合口縁壺である。口縁部は折り曲げた後、上方に拡張する。口縁部外面に凹線文に類似した沈線文を5条施す。11は肩部片である。上端にヘラ状工具による列点文とその下に横描波状文を5条施す。12は弥生時代前期の胴部片である。ヘラ状工具による木葉文を施す。混入品。

鉢形土器（13） 13は鉢形土器の口縁部片である。口縁部下内面にケズリ調整を施す。

高環形土器（14~20） 14は北西部張り出し部の周壁溝内出土の高環形土器の环部である。口縁部を折り曲げ、口縁端部を上方に拡張する。口縁端面に2条の沈線文を施す。环部下位内面にミガキ調整を施す。15は主柱穴SP④出土の环部小片である。外傾し、わずかに外反するものである。内外面ともにミガキ調整を施す。16~20は高環形土器の脚部である。18は主柱穴SP④から出土したものである。16・17は充填技法を看取した。19は脚端部を拡張し、脚端面に不明瞭な凹線文を2条施す。色調や胎土が讃岐地方のものに類似することから、搬入品の可能性もある。20は大きく外反する脚底部である。脚端面は「コ」字状に仕上げる。

底部（21~26） 21~23は變形土器、24~26は壺形土器の底部である。25は周壁溝から出土したものである。21・22はわずかにくびれる上げ底、23は平底となる。24・25は突出気味の平底である。

石鎌（27・28） サスカイト製の四基無茎鎌である。

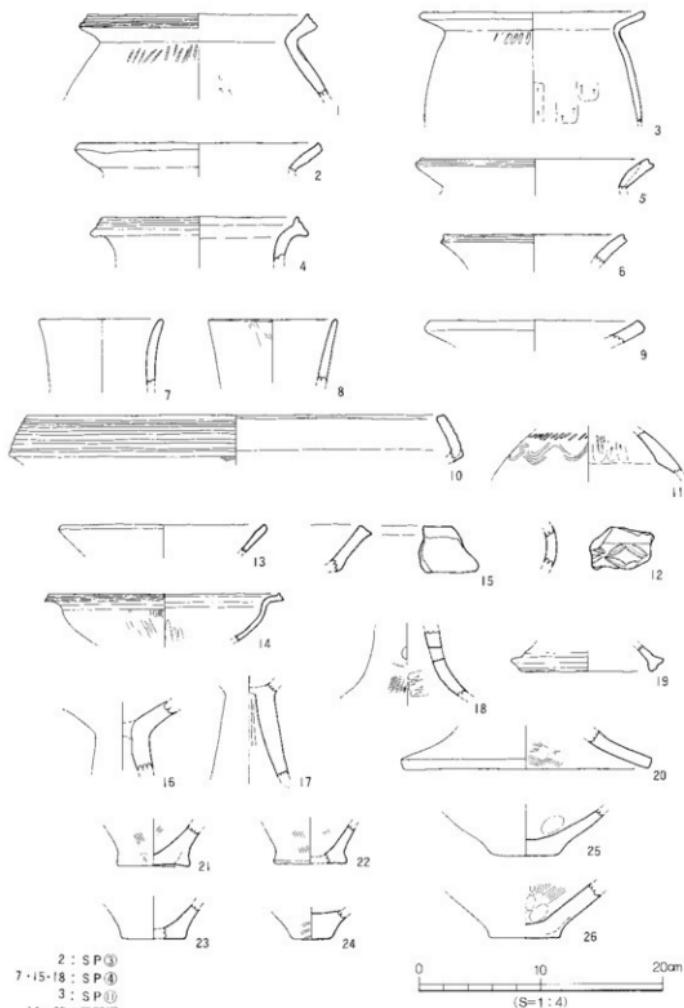
石庖丁（29・30） 29・30は結晶片岩製の石庖丁である。29は貼床土内出土したもので、背部をわずかに面取りする。穿孔は2箇所に施すが貫通していない。30はわずかに穿孔が残るが不明瞭である。刃付は両刃である。

砥石（31・32） 31は北東部の張り出し部出土である。上端部は欠損する。扁平な石の両面を使用している。32は手持ち使用的の砥石である。砂岩製。

磨石（33） 重量37.22gである。

台石（34） 34は主柱穴SP⑧出土である。器表面が一部黒化している。

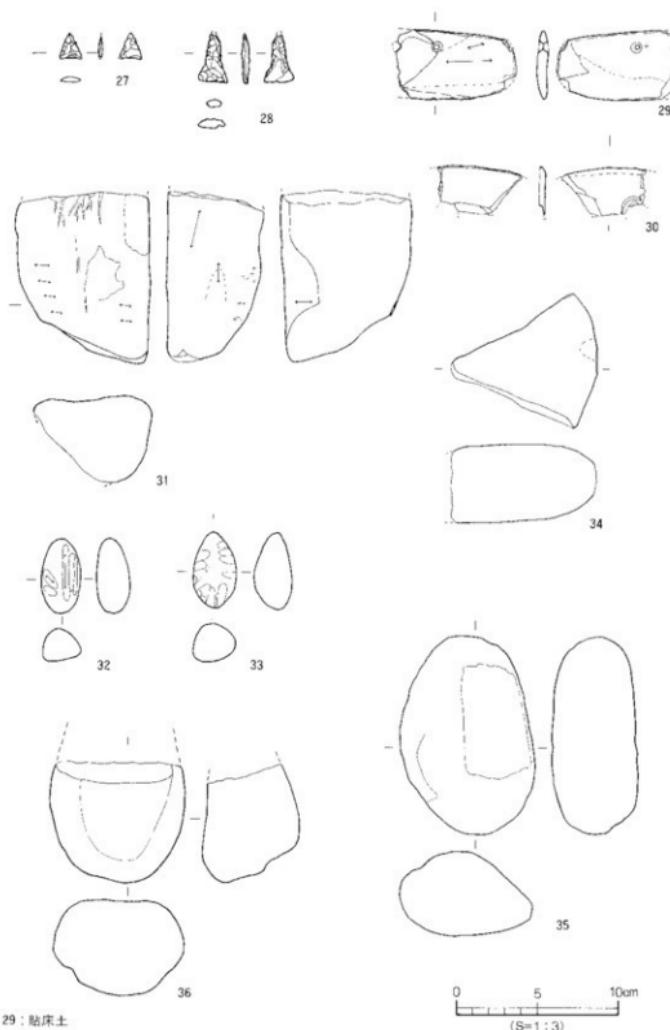
用途不明品（35・36） 35は片面、36は両面に研磨が施されている。两者共に器表面が一部黒化している。



第47図 S B 2 出土遺物実測図(1)

2 : SP③  
7・15・18 : SP④  
3 : SP⑤  
14・25 : 周壁溝

釜ノ口道路 8 次調査地



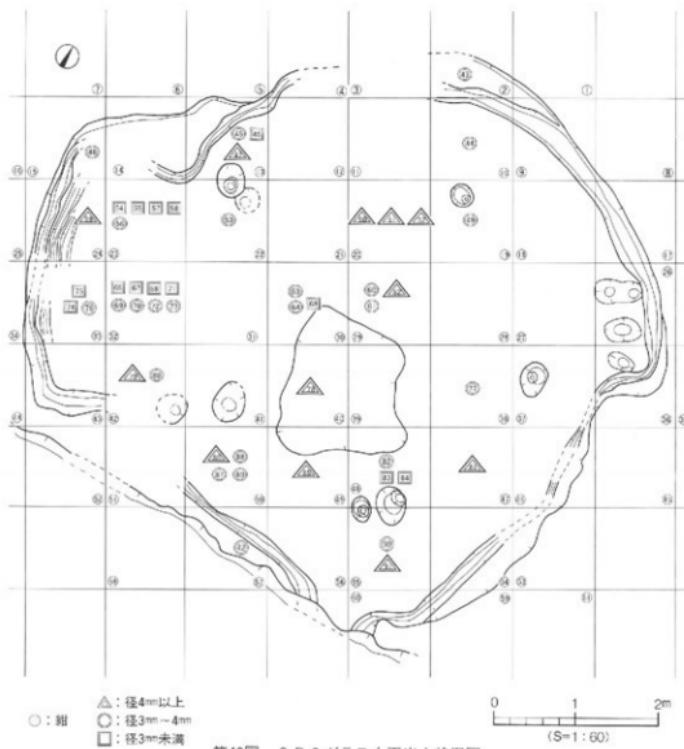
29: 脳床土  
34: SP ⑧

第48図 SB 2 出土遺物実測図 (2)

ガラス小玉 (37~119) 埋土中出土のうち6点は細片であり図化せず、本稿ではこの6点を除く83点の実測図を掲載した(第50図)。83点のガラス小玉は、径の大きさで大きく3種類に分かれ、径4mm以上が22点、径3~4mmが45点、径2~3mmが16点となる。最大は径4.8mm(137)、最小は径2.4mm(55)である。また、北西の張り出し部周辺では径2~3mmの小型品が多く分布する。

色調は青色が55点、紺色が27点で大多数を占め、1点だけ緑色を呈するもの(117)がある。青色のなかには、やや黄緑がかったものが3点あり(83・97・108)、紺色ではやや薄紺色のものが3点(72・86・90)、やや濃紺色を呈するものが4点(81・99・103・107)みられる。

長さは1.1~4.5mmで、2~3mm大が約5割を占めている。孔径は1mm前後、1.5mm前後、2mm前後の3種類がある。重量は最も軽いものが0.012g(74)、最も重いものが0.097g(59)となる。



第49図 SB 2 ガラス小玉出土状況図

## S B 2 炉出土遺物（第51図、図版42・51）

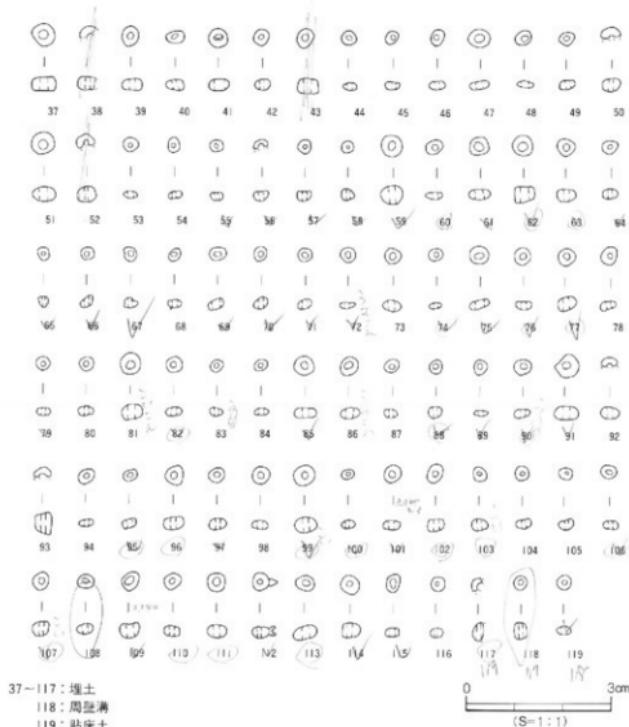
炉内からは弥生土器片や石器のほか、ガラス小玉が6点出土している。土器や石器はすべて炉内の埋土①からの出土で、ガラス小玉は詳細な出土地点が不明である。

夔形土器（120・121） 120・121は夔形土器の口縁部である。120は口縁端部をやや拡張し、頸部下に木口による「ノ」字状文を施す。胴部は内外面共に刷毛目調整を施す。121の口縁端部はヨコナデにより面をなす。

壺形土器（122・123・126） 122・123は壺形土器の口縁部片である。122は口縁部を上方に拡張し、口縁端面に3条の弦線文を施す。123の口縁端面はナデにより凹みをもつ。126は平底である。

高环形土器（124・125） 両者共に脚端部は拡張し、脚端面はナデにより凹む。径1cm大の円孔を穿つ。内面はケズリ調整を施す。

石器（127・128） 127・128は用途不明の石器である。



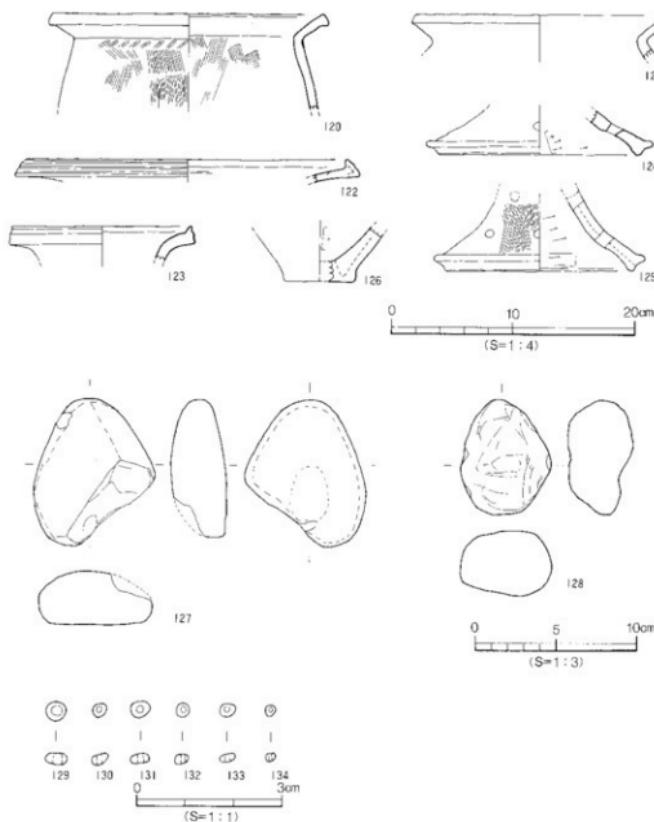
第50図 S B 2 出土ガラス小玉実測図

## 遺構と遺物

ガラス小玉 (129~134) 炉内からは6点のガラス小玉が出土している。径は2.1~4.1mmを測り、134がやや小型品である。色調は131のみ緑色であり、他はすべて青色を呈する。長さは約2mm前後である。孔径は最大のもので2.0mm (129) を測り、他は1.0~1.2mmである。重量は最も軽いもので0.015g (134)、最も重いもので0.042g (129) である。

最後にS B 2出土のガラス小玉89点(炉内6点を含む)を一覧表にまとめた(表36・39)。

時期：住居址埋土中や床面付近及び周壁溝内から出土した土製品は弥生時代後期前葉の特徴を示している。溝S D 3(弥生末)に切られることや、出土遺物の特徴などから本住居の廃棄・埋没時期は弥生時代後期前葉に比定する。



第51図 S B 2 炉出土遺物実測図

## S B 3 (第52~56・60・61図、図版27~31)

調査区中央やや南寄り、C 9 ~ E 10区に位置する。住居址南西部は土坑 S K 2 (弥生末~古墳初頭)に切られ、北西部から南東部は S D 3 (弥生末~古墳初頭)及び2本の試掘トレンチに切られる。S B 3は3回の改築がなされた住居址であり、1回目は床面を貼床により改修し、2回目は住居の規模を替え、3回目は貼床による床面の改修を行っている。なお、本住居は最終期に火災に遭い、焼失している。

## i) 調査工程と検出遺構

ここでは発掘調査時の工程をふまえながら、検出遺構を説明する。

S B 3は第VII層上面で検出し、検出時の平面形態は隅丸方形を呈し、住居址南西部には長方形状の張り出しを確認した。まず、住居址の中央部に東西及び南北トレンチを設定し、土層観察を行った。その結果、住居上面から埋土①黒褐色土、埋土②黒褐色土(灰黄色土混入)、貼床土②黒褐色土と黄白色土の混合土、貼床土①灰黃褐色土(黒色土混入)の順に上層の堆積を確認した。

次に、住居址埋土と考えられる埋土①及び埋土②の掘り下げを行った。埋土②の掘り下げ時には炭化材や炭化物、焼土が検出され、焼失住居であることが判明した。また、埋土②からは土器、石器のほか、ガラス小玉が2点出土した。掘り下げ時にガラス小玉が出土したことから、出土後は、住居址内を1m四方の小グリット(①~⑩区)に分け、埋土はすべて採取した(第53図)。また、⑩区から径2cmの河原石が少量(9点)出土した。

埋土②の掘り下げが完了すると、貼床土②及び周壁溝が検出された。貼床土②は床面はほぼ全域で検出され、貼床土上面にて径10~25cmの大ビット S P ①・②・③・④を検出した(その後の調査で柱痕であることが判明)。このほか、住居址中央部に炉③と S P ⑩、南側の壁体沿いに土坑 S K ⑤、北壁中央部付近に径20~30cmの大の礫を検出した(この礫の下面には、S P ⑤が存在する)。作業は検出遺構の掘り下げにつづき、貼床土②の掘り下げを進め、貼床土②内からはガラス小玉が11点出土した(すべて採取した土壤内からの出土品)。

貼床土②を完掘すると、住居の基底面と、壁体の内側に貼床土①及び周壁溝が現れた。貼床土①上面ではS P ①~⑨と、住居址中央やや南寄りに炉②を検出し、ガラス小玉が2点出土した。また、貼床土①内からは石磨丁や磨石のほか、ガラス小玉が11点出土している。

貼床土①を完掘すると、住居の基底面を検出した。基底面では住居址中央やや東寄りに炉①、南東隅付近に土坑 S K ②、床面より S P ⑤(径25~35cm:柱穴掘り方)とビット3基(S P ⑩~⑫)を検出し、掘り下げを行った。

以上が調査の工程である。本住居は調査の結果、3回の改築・改修がなされていたことが判明した。

## 〔建て替え前〕

I期: S B 3構築当初。基底面を床面とする。

II期: 床面の改修後。貼床①を床面とする。

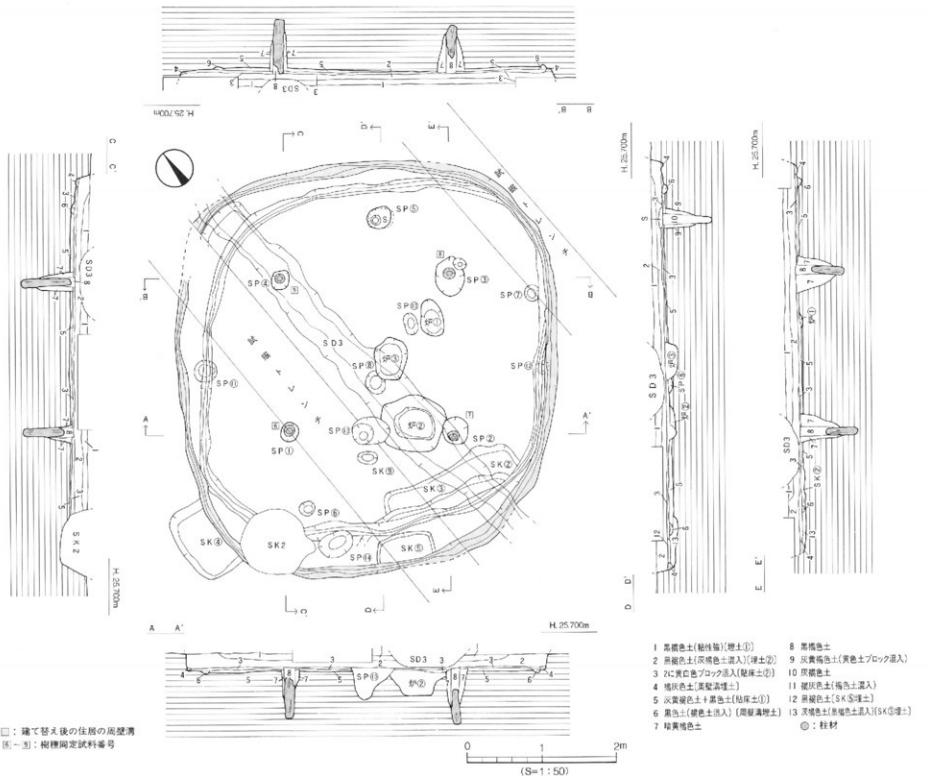
## 〔建て替え後〕

III期: 規模を拡張した時期。床面はII期の床面と一部重複。

IV期: 床面の改修後。貼床②を床面とする。

以下、I期からIV期に分けて報告を行うこととする。

なお、III期の床面は一部が、II期の床面と重複しているため、貼床土①上面で出土した遺物はIIないしIII期のものとなるが、報告ではこれ等の遺物は便宜上II期のものとした。



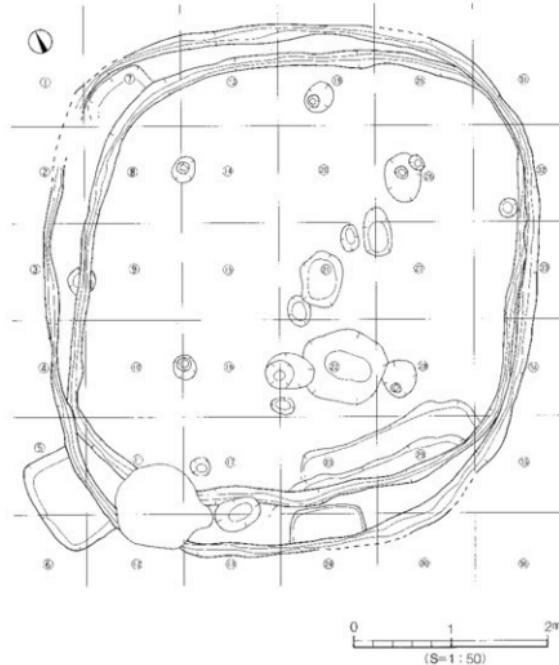
第52図 S B 3測量図

## ii) SB3 I期(構築当初)

平面形態は不整の隅丸方形を呈し、規模は北東一南西4.75m、北西一南東4.60m、床面積は21.9m<sup>2</sup>である(第54図)。壁体は住居の拡張に伴い造存せず、周壁溝の検出に限られた。周壁溝はほぼ全周し、幅10~18cm、深さ5cmである。

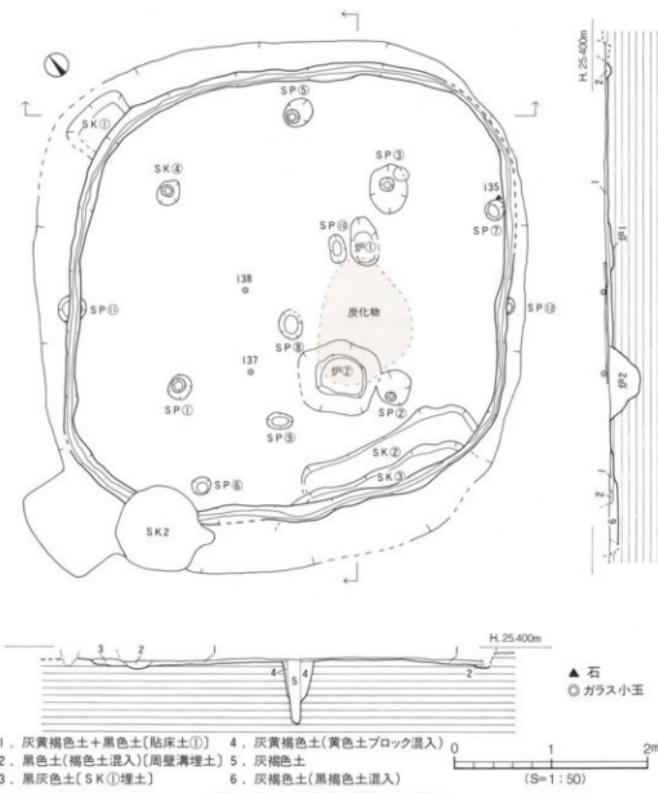
主柱穴はSP①~⑤の5本で構成されている。住居の主柱穴はSP①~④地点に存在した柱穴とSP⑤の5本からなる。ただし、SP①~④の地点は拡張時に掘り直され、I期の柱穴は焼失し、掘り方の形状や規模は明確にはわからない。SP⑤は平面形態は楕円形を呈し、規模は長径32cm、短径27cm、深さ46cmを測る。掘り方埋土は灰黄褐色土(黄色土+ブロック混入)である。柱底は径14cm、深さ66cm、埋土は灰褐色土である。

炉は住居址中央やや東寄りに位置する(炉①)。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径0.50m、短径0.32m、深さ約8cmを測る。断面形態は皿状を呈し、焼上と炭化物で埋まる。炉①上面には貼床上①が覆っている。炉①からの遺物の出土はない。また、この炉には付帯施設としてSP⑩がある。SP⑩は炉①の内隣にあり、平面形態は楕円形を呈し、長径28cm、短径16cm、深さ約6cmを測る。SP⑩からは遺物の出土はないが、焼上が少量検出された。

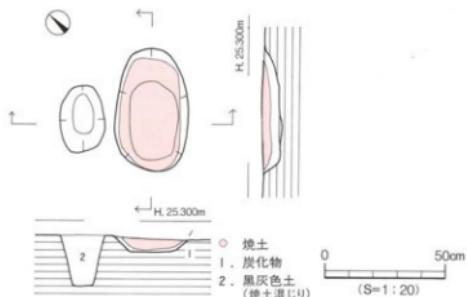


第53図 SB3 区割図

釜ノ口道路 8 次調査地



第54図 S B 3 建て替え前測量図



第55図 S B 3 炉①測量図

そのほか、床面では、土坑SK②と大小7基のピット（SP⑥～⑫）を検出した。SK②は住居址南東隅付近にあり、平面形態は長方形を呈する。規模は長さ1.9m、幅0.6m、深さ約5cmを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、基底面は壁体に向かって緩やかに傾斜する。SK②からの遺物の出土ではなく、SK②は貼床土①で埋まる。SK②は周壁溝に切られることからI期以前の遺構と考えられる。

SP⑥～⑨・⑪・⑫は、埋土がすべて黒灰色土である。SP⑪・⑫は周壁溝に切られていることから、I期以前の遺構と考えられ、他の4基は住居に伴うものかは判断しえない。

また、SK②の基底面では土坑SK③を検出している。平面形態は定かではなく、長さ1.92m、幅0.2m、深さ約10cmを測る。埋土は黒灰色土（黒褐色土混入）であり、遺物の出土はない。SK③は周壁溝より外側に続くことから、I期以前の遺構と考える。

I期に伴う遺物の出土はない。

### iii) II期（貼床①を床面とする）

II期はI期の床面と貼床により改修した時期である（第54図）。主柱穴はI期と同じ5本である。貼床は灰黄褐色土と黒色土の混合土からなり、厚さは3～5cmで範囲は主柱穴SP⑤の柱部分と南東壁付近を除き、ほぼ床面全域に施されている。これはSP⑤の柱が立ったままの状態で貼床がなされたことを示している。また、南西部の貼床上面において130×90cmの範囲で炭化物を検出したが、この炭は貼床全体に薄くみられた。

炉は住居址中央や南寄りに位置する（炉②）。平面形態は不整の円形を呈し、規模は長径0.88m、短径0.77m、深さ約34cmを測る。基底面は二段構造で、埋土は3層からなり、上位が灰褐色土と黒褐色土の混合土〔埋土①〕、中位が炭化物層〔埋土②〕、下位が粘性の強い黒褐色土〔埋土③〕である。埋土上面には建て替え後の貼床土②が覆っている。なお、貼床上面で検出した炭化物層は埋土②に混入していることから、炉②はII期に使用されていたものと判断した。

住居址北西隅では土坑SK①を検出した。遺構の南半部は一部周壁溝と重複する。平面形態は長方形を呈し、規模は長さ0.72m、幅0.36m、深さ約8cmを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、埋土は黒灰色土である。SK①からの遺物の出土ではなく、SK①上面は貼床土②が覆う。周壁溝と重複するが、貼床土②が覆うことからII期以前の遺構と考えておく。

住居の埋土は黒色土（褐色土混入）からなる。

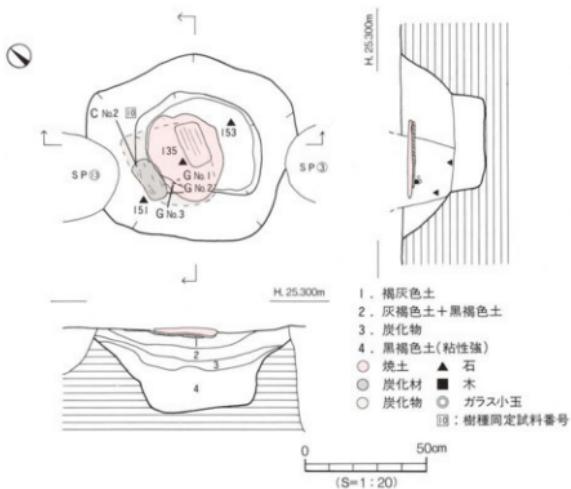
本期に伴う遺物は貼床土①及び炉②内から出土したものである。貼床土①内からは石器2点とガラス小玉11点、モモの核片5点が出土している。ガラス小玉は2点が貼床土①上面、9点は採取した土壤内からの出土である。炉②からは弥生土器片が数点と、石器3点、ガラス小玉10点、モモの核片3点が出土している。石器は炉の埋土③から出土したものである。ガラス小玉は炉の埋土①上面付近で3点が出土し、他の7点は採取した土壤から出土したものである。本稿では出土したガラス小玉のうち8点を掲載した（残りの2点は細片のため未実測）。

#### 貼床土①出土遺物（135～147）（第57・58図、図版42・51）

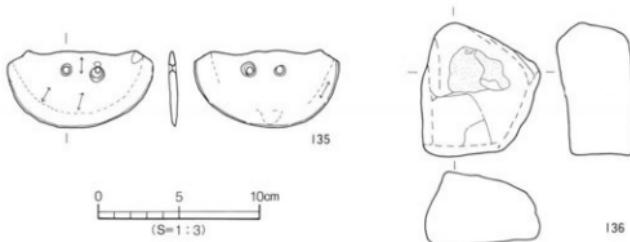
石刀（135） 135は完形品で外湾刃半月形態をなす。穿孔は2箇所に両面から施されるが貫通はしない。刃部の研ぎ出しは両面から行われている。結晶片岩製。

用途不明品（136） 136は出土地の特定できない石器である。用途は不明であるが、わずかに研磨面を残す。

釜ノ口遺跡 8次調査地



第56図 SB 3 炉(2)測量図

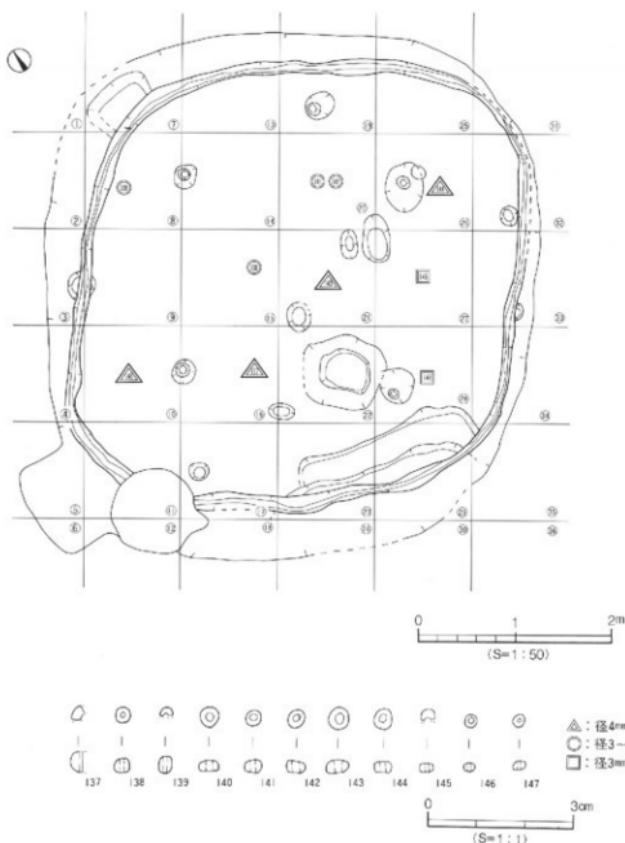


第57図 SB 3 貼床土①出土遺物実測図

ガラス小玉 (137~147) 137・138は貼床土①上面からの出土品である。他の9点はグリット毎に採取した土壤内からの出土品である。ガラス小玉の径の計測は破片については復元により数値を求めている。ガラス小玉は径より3種類に分かれ、径が4mm以上のもの4点 (137・140・143・144)、径3~4mmのものの5点 (138・139・141・142・145)、径3mm未満のもの2点 (146・147)となる。色調はすべて青色であるが、146は薄青色となる。重量は最も重いものが0.051g(144)、最も軽いもので0.011g (146)である。

SB 3 炉(2)出土遺物 (148~161) (第59図、図版42・51)

夔形土器 (148) 148は夔形土器の口縁部片である。「く」字状口縁を呈し、口縁端部は丸みのある「コ」字状を呈する。



第58図 S B 3 貼床土①ガラス小玉出土状況図及び実測図

支脚形土器 (149) 149は支脚形土器の脚部片と思われる。脚端部は丸く仕上げる。

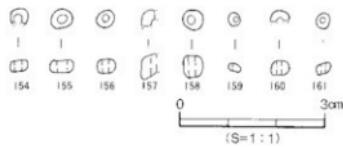
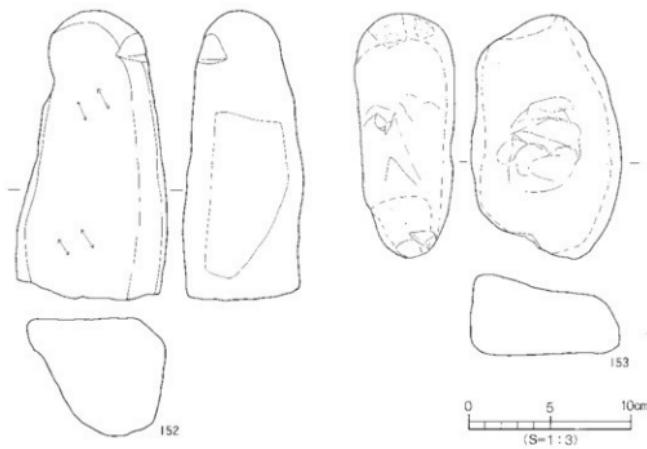
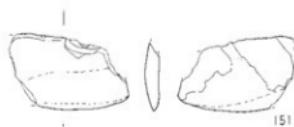
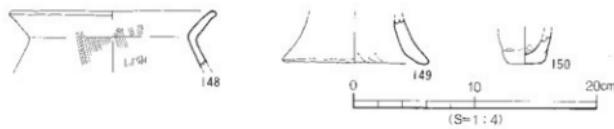
ミニチュア土器 (150) 150はミニチュア土器である。内外面共に爪跡を残す。

石庖丁 (151) 151は側部に再加工された痕跡があり破損した石庖丁を作り直したものと考えられる。結晶片岩製。

砥石 (152) 152の平面形態は長方形を呈する。全面研磨され、使用の際の凹みが認められる。重量は1.110kgである。

用途不明品 (153) 153は用途は不明であるが、中央部分に使用痕を残す。

釜ノ口遺跡 8次調査地



第59図 S-B 3炉(2)出土遺物実測図

ガラス小玉 (154~161) 154~156は第56図 G No.1 ~ G No.3 地点出土品であるが、他の5点は採取した土壤内から出土したものである。径は4mm以上のもの3点(155・157・158)径3~4mmのもの4点(154・156・160・161)、径3mm未満の1点(159)がある。色調はいずれも青色を呈する。重量は最も重いもの0.112g(158)、最も軽いもので0.017g(159)がある。

#### iv) III期(建て替え後)

III期は、II期の北西隅及び南東部分を約40cm拡張した時期である(第60図)。平面形態は比較的整った隅丸方形を呈し、規模は北東~南西5.60m、北西~南東5.15m、床面積28.8m<sup>2</sup>を測る。床面積はI・II期より約1.3倍大きくなる。埋土は上位の埋土①黒褐色土、下位の埋土②黒褐色土(灰褐色土混入)からなる。壁体は鋭く立ち上がり、壁高は25cmを測る(貼床土②を含む)。周壁溝はほぼ全周し、幅8~22cm、深さ3~7cmを測り、埋土は褐灰色土である。床面はII期の床面を利用し、拡張部分は第V層が床面となる。

主柱穴はS P①・②・③・④の4本と考えられ、埋土はすべて暗黄褐色土である。II期とはほぼ同じ位置にあるが、建て替え時には柱穴を掘り直し、新たに柱を据え替えたと推測される。S P①・②・③・④の柱穴掘り方は円~梢円形を呈し、規模は径20~50cm、深さ30~55cmを測る。掘り方基底面は第IX層A T火山灰層に及んでいる。柱穴間隔はS P①~②、③~④間が2.2m、S P①~④、②~③間が2.0mである。柱痕はすべての柱穴で確認され、径12~16cm、深さ65~75cmを測る。柱痕埋土は黒褐色土である。いずれの柱穴にも柱材が残っており、遺存状況はS P①が最も良好で、遺存長61.5cmを測る。なお、II期にあった主柱穴S P⑤は掘り方埋土がS P①~④とは異なることや、径20~30cmの大の扁平な石がS P⑤をふさぐ状況で検出されたことより、建て替え時にS P⑤は抜き取られ、埋められたものと思われる。

炉は住居址ほぼ中央部に位置する(炉③)。平面形態は梢円形を呈し、規模は長径0.55m、短径0.43m、深さ約15cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は粘性の強い黒褐色土である。炉③からの遺物の出土はない。なお、II期の炉②は、本期の主柱穴S P③の掘り直しに際し一部が削平されていることから、III期には使用されていないものと判断される。

このほか、南壁中央にてピットS P⑩を検出した。平面形態は梢円形を呈し、規模は径33~46cm、深さ約7cmを測る。埋土は貼床土②で、遺物の出土はない。

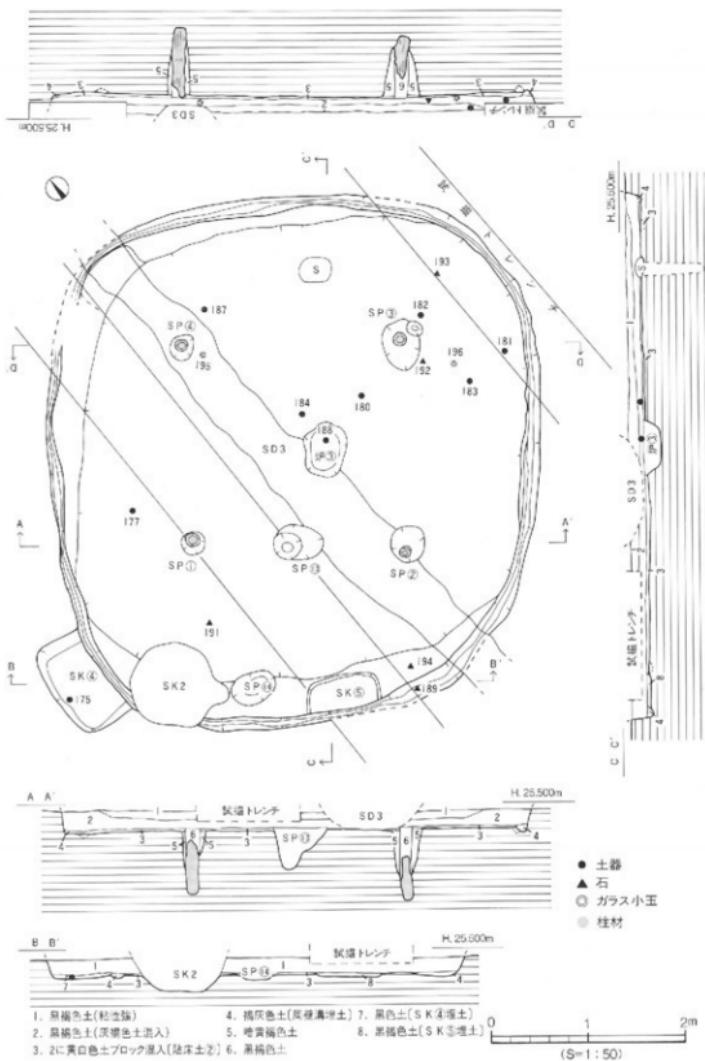
III期に伴う遺物の出土はない。

#### v) IV期(最終使用期)

IV期は規模には変化なく、床面を貼床②により改修したものである(第60図)。主柱穴はIII期と同様4本柱である。貼床土②(黒褐色土に黄白色土ブロック混入)は、主柱穴S P①・②・③・④の柱痕部分と炉③、および住居址中央部東寄りの地域を除き用いられ、厚さは3~5cmとなる。炉はIII期に引き継ぎ炉③を使用している。

床面のうち貼床土②上面には、土坑1基(S K⑤)とピット2基(S P⑪・⑫)がある。S K⑤は南壁中央付近にて検出し、遺構の南側は住居の周壁溝と重複する。平面形態は長方形プランを呈し、規模は長さ0.76m、幅0.35m、深さ4cmを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、埋土は黒褐色土である。

釜ノ口遺跡 8次調査地



第60図 S B 3 建て替え後測量図



第61図 S B 3 壷③測量図

S K ④からは埋土下位にて弥生時代後期前葉の彫形土器が1点出土している。S K ④検出状況や造構埋土、出土遺物からS B 3に伴う遺構と考えられる。ただし、時期はⅢ期かⅣ期か判断しがたい。

IV期の遺物は貼床土②内から、弥生土器片とガラス小玉が11点出土している。ガラス小玉はすべてグリット別に採取した土壤内からの出土品で、埋土中や貼床土②上面及び周壁溝、土坑内からも弥生土器や石器、ガラス小玉が出土し、貼床土②の採取した土壤内からはモモ核の破片が6点出土している。また、主柱穴内からは柱材が出土している。

ところで、S B 3はIV期に火災に遭い焼失している。住居の中心部から壁体に向かって放射状に炭化材や焼土、炭化物が検出された（第67図）。

#### 貼床土②出土遺物（第62図）

貼床土②からは弥生土器片やガラス小玉が出土だが、土器は細片のため同化しうるものはない。ガラス小玉の径と色に注目して分布状況を図示した（第62図）。

ガラス小玉（162～172） 162～172の11点があり、170～172の3点は出土グリットが不明なものである。径が4mm以上のもの1点（167）、3～4mmのもの7点（163・164・166・168・169・171・172）、3mm未満のもの3点（162・165・170）がある。色調は162と168が薄緑色、他はすべて青色である。ただし、171はやや黄緑がかった青色となる。重量は最も重いもので0.056g（164）、最も軽いもので0.011g（162）である。

#### 埋土・周壁溝・土坑出土遺物（第63～66図、図版43・51）

埋土からは弥生土器、石器、ガラス小玉、モモ核が出土し、土器はほとんどが破片である。土器の中には搬入品と思われるものも出土している。ガラス小玉は28点が出土し、出土地点が特定したものは2点で、他はすべて小グリット別に採取した土壤内からの出土品である。ガラス小玉は19点を掲載した（残りの9点は細片のため未測）。埋土からはこのほか、採取した土壤内からモモ核の破片が4点出土している。周溝内からは石庭丁が1点、土坑SK④からは弥生土器が1点出土している。

彫形土器（173～177） 173は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に3条の沈線文を施す。色調や胎土が在地のものと異なることから、おそらく安芸地方からの搬入品と考えられる。174は口縁端部を

S K ⑤からの遺物の出土はない。

S P ⑩は壺②を切る状況で検出された。平面形態は橢円形を呈し、規模は長径52cm、短径36cm、深さ43cmを測る。埋土は黒灰色土で、遺物の出土はない。S P ⑪は主柱穴S P ④の付近で検出した径15cmの大いなビットであり、埋土は黒灰色土である。S P ⑫からの遺物の出土はない。

これら2つのビットはIV期の住居に伴う可能性はあるが、明確には判断しえない。

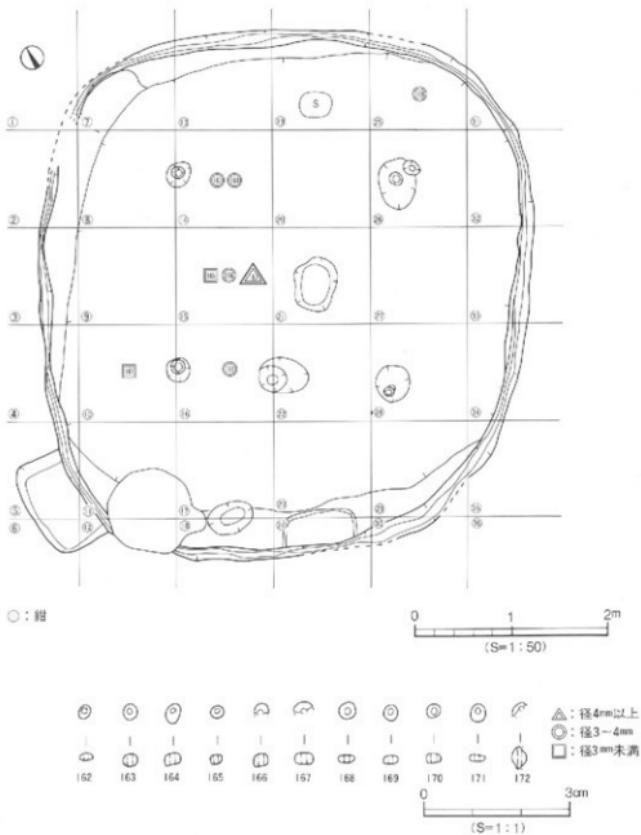
このほか、住居址南西隅には土坑S K ④がある。平面形態は長方形プランを呈し、造構東側は周壁溝と重複する。規模は長さ1.04m、検出幅0.54m、深さ18cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は住居址埋土①に類似する黒褐色土である。

釜ノ口遺跡 8次調査地

ナデにより面取りする。175・177はSK④から出土したものである。175・176は口縁端部をわずかに拡張し、177は先細りする。

壺形土器 (178~181) 178・179は広口壺の口縁部である。178は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に2条の沈線文を施す。179は周壁溝から出土したもので、口縁端部に沈線文3条が施される。180・181は短頸壺である。

高環形土器 (182) 182は环部である。口縁部は大きく外反し、口縁端面に沈線文を1条施す。环部下位外面に丁寧なミガキ調整を施す。形態が在地にはみられないことから、搬入品の可能性もある。



第62図 S B 3 貼床土②ガラス小玉出土状況図及び実測図

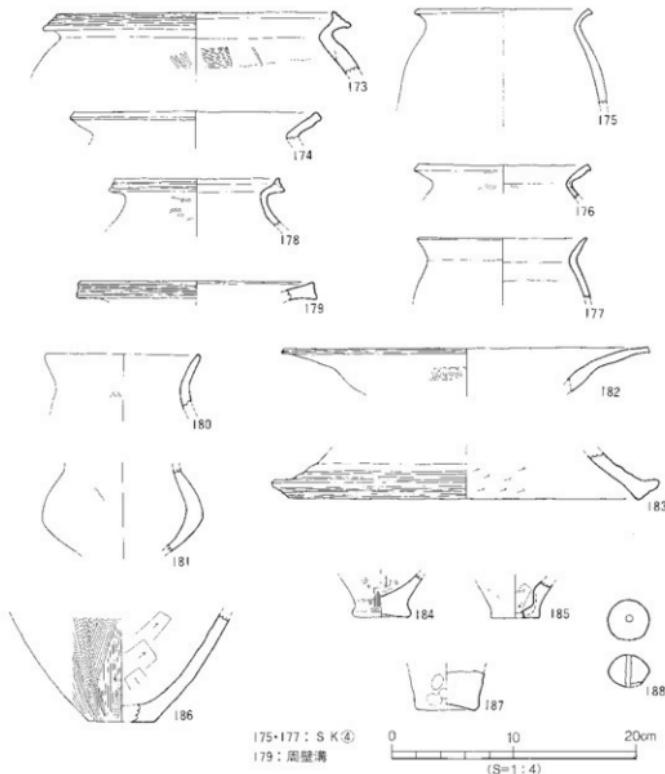
器台形土器（183） 183は脚端部は上下方に拡張し、脚端面に3条の凹線文を施す。内面には横方向のケズリ調整を施す。

底部（184～186） 184・185は甕形土器、186は壺形土器の底部である。184はわずかにくびれる上げ底、185・186は平底である。

支脚形土器（187） 187は外面に指頭痕を顯著に残す。

土玉（188） 188は完形品。やや扁球形を呈し、径0.6cm大の孔が貫通する。重量は9.2gである。

石庖丁（189・190） 189は周壁溝内出土の石庖丁である。形態は長方形を呈し、側部は使用により磨滅している。研磨は全面に施され、刃部の研ぎ出しが両面から行われる。色調は暗赤褐色を呈し、材質は結晶片岩である。松山平野では、この石材による石庖丁の出土はあまり例がなく、愛媛県内で



第63図 S.B.3 出土遺物実測図(1)

は東予地方に多く産出される石材であり、瀬戸内海沿岸では徳島県にこの石材を使用した石垣が多く出土している。190は⑧区出土の石垣木製品である。刃部の研ぎ出しは片面のみである。

石斧 (191) 191は刃部は欠損する。結晶片岩製。重量は450gである。

磨石 (192) 192は楕円形を呈し、重量は140gを測る。

砥石 (193) 193は砂岩製の不定形状のもので、片面のみを使用する。重量は5,100gである。

用途不明品 (194) 194は石器である。用途は不明であるが、わずかに研磨面を残す。

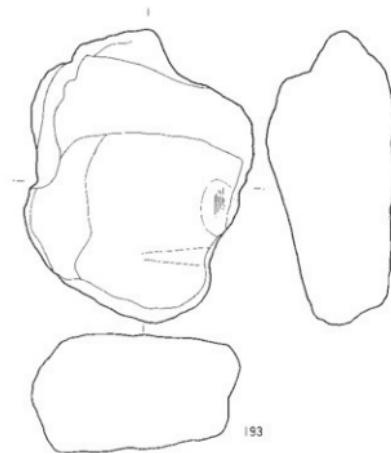
ガラス小玉 (195~213) 195・196は出土地点が明確である。202は出土地点不明なものである。他の16点はすべて小グリット別に採取した土壤内からの出土品である。これらのガラス小玉は出土状況と実測図を第66図に掲載した。19点のガラス小玉は径により3種類に分類される。径 $\geq 4$ mm以上のもの4点 (195・196・205・209) 、径3mm未満のもの2点 (200・211) があり、他の13点はすべて径3~4mm以下のものである。色調は緑色と青色の2種類があり、緑色には薄緑色1点 (207) 、濃緑色1点 (212) 青色には透明感のある薄青色1点 (200) 、黄緑がかった青色1点 (203) となる。重量は最も重いもので0.086g (205) 、最も軽いもので0.009g (200) がある。

主柱穴出土の柱材 (214~217) (第68・69図、図版44)

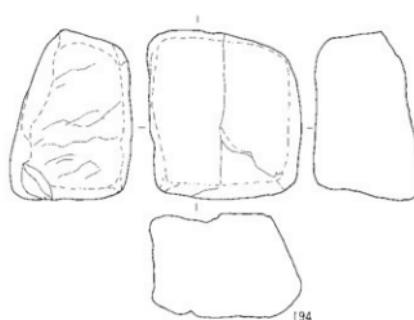
主柱穴S P ①・②・③・④内からは柱材が出土している。214はS P ①出土の柱材である。断面形態は丸みをもち、柱下半部から下端部にかけてケズリにより部分的に面取りされている。上半部は腐蝕が進んでいるがわずかに樹皮を残す。現存長61.5cm、現存最大径14.1cmである。215はS P ②出土の柱材である。柱下端部は3方向からケズリ出されている。下半部は自然面を残し、一部樹皮や節を残す。



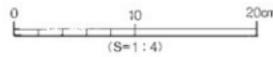
第64図 S B 3 出土遺物実測図(2)



193

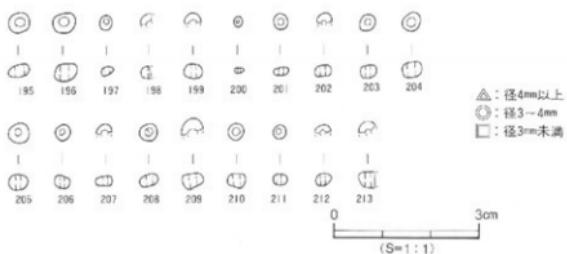
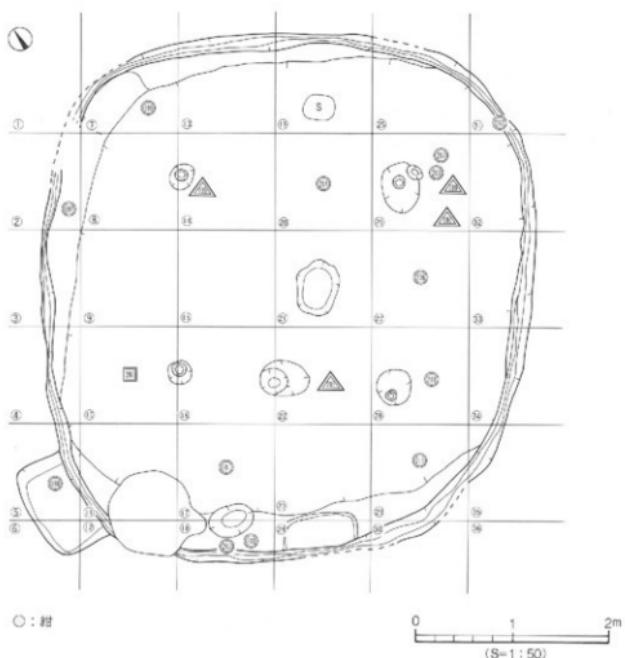


194



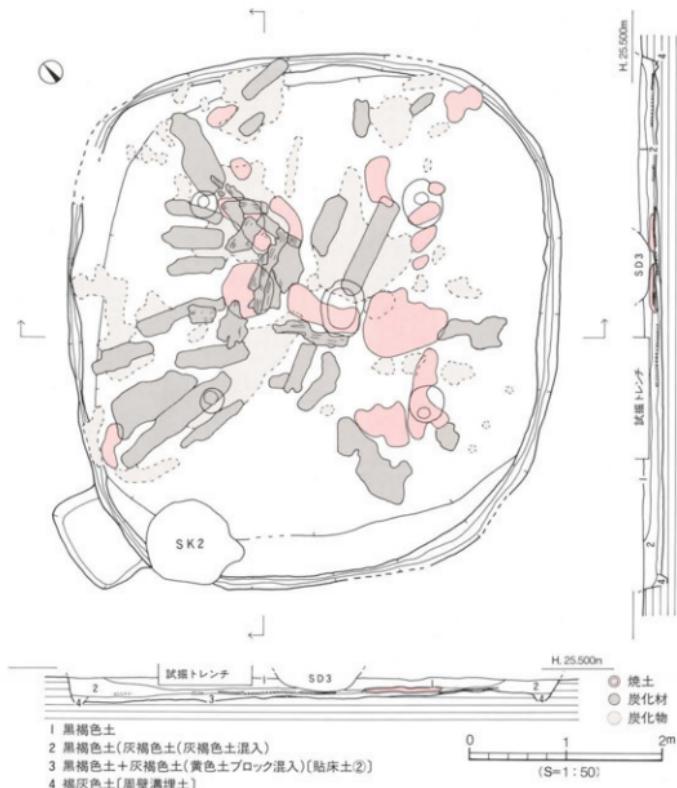
第65図 S B 3 出土遺物実測図（3）

釜ノ口遺跡 8次調査地



第66図 SB3ガラス小玉出土状況図及び実測図

現存長45.8cm、現存最大径10.3cmである。216はS P③出土の柱材である。断面形態はやや扁平な梢円形を呈する。柱上端部を除き、一部に樹皮が残る程度で、大半は樹皮がはげた状況である。下端部にはケズリ痕を残す。現存長40.0cm、現存最大径11.6cmである。217はS P④出土の柱材である。断面形態は丸みのある方形を呈する。柱上端部のみ一部樹皮が残るが、ほとんどはケズリにより面取りされる。下半部には数カ所に割れがみられる。現存長56.5cm、現存最大径12.1cmである。樹種同定の結果、S P①出土の柱材はサクラ属、S P②～④出土の柱材はいずれもコナラ属アカガシ亜属の木材であることが判明した。



第67図 S B 3 焼土・炭化材・炭化物検出状況図

## vi) S D 3 と考えられる遺物 (218~223)

S B 3 から出土した遺物のうち明らかに時期が異なるものが数点ある。これらは S B 3 を切る溝 S D 3 (弥生末~古墳初頭) の遺物と考えられるものである。

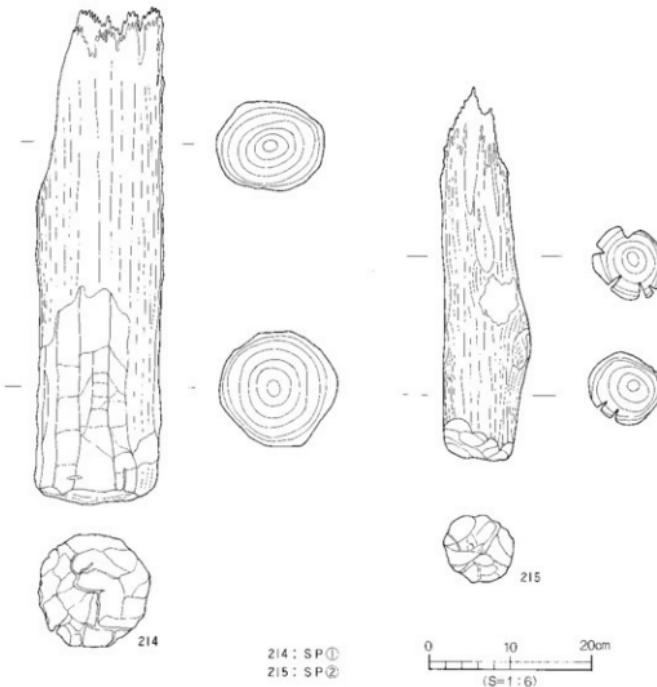
甕形土器 (218) 218は甕形土器の口縁部片である。口縁端部は丸く仕上げられる。頭部下に刺突文を施す。

壺形土器 (219・220) 219は広口壺の口縁部片である。口縁端部はわずかに上下方に拡張され、口縁端面に3条の沈線文を施す。220は突出する平底の底部である。

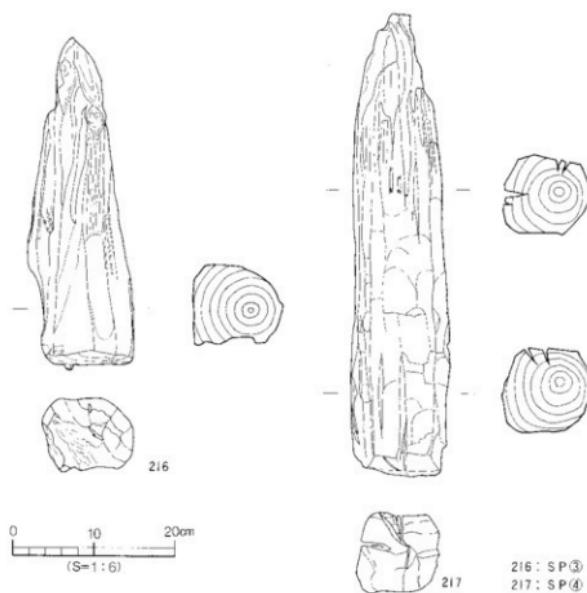
鉢形土器 (221・222) 221は台付鉢の脚部である。脚襟部は大きく外反し、端部は丸みをおびる。

高環形土器 (223) 223は高環形土器の柱部である。器壁は厚い。

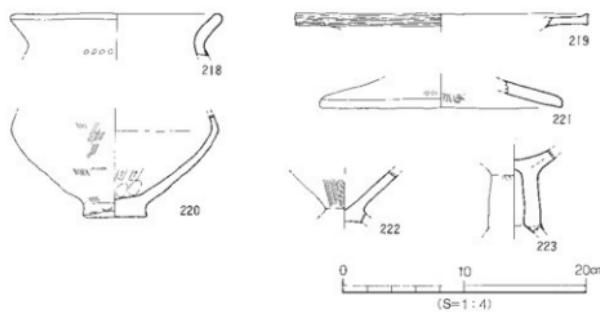
時期: II期とIV期の遺物には大きな時期差は認められない。S B 3 はおそらく短期間のうちに改築が行われたものと推測される。くわえて出土遺物は概ね弥生時代後期前葉の特徴を示している。よって、本住居址の廃棄・埋没時期は弥生時代後期前葉と考えられる。



第68図 S B 3 出土柱材実測図 (1)



第69図 S B 3 出土柱材実測図（2）



第70図 S D 3 と思われる遺物実測図

## S B 1 (第71図、図版32・33)

調査区北部、E 2区に位置する。住居址の西側は試掘トレンチに切られ、中央部は近現代の造成により削平される。北半部は調査区外に続いている。壁体は削平され、柱穴と周壁溝、土坑を検出した。住居の平面形態は周壁溝の形状より円形を呈すると考えられる。

主柱穴はS P①・②・③・④の4本を検出した。ただし、検出状況からすると北西部の調査区外に1本が推定でき、主柱穴は計5本と考えられる。主柱穴の平面形態は円形を呈し、径22~25cm、深さ43~50cm、柱穴間2.2~2.7mを測り、柱穴埋土は茶褐色土である。柱痕はS P①・②・④で検出され、径10~12cm、深さ35~50cm、柱痕埋土は黒褐色土である。

周壁溝は、南東部の検出に限られ、規模は幅15~30cm、長さ596cm、深さ4~8cmを測る。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は黒色土(茶褐色土混入)である。S P①・②の間では土坑SK①を検出した。平面形態は円形で、規模は長径63cm、短径60cm、深さ6cmを測り、埋土は黒色土である。SK①からの遺物の出土はない。

住居址の東側には不整形の落ち込みSK②を検出している。周壁溝に切られ、規模は長軸2.80m、短軸1.60m、深さ5cmを測る。埋土は茶褐色土(茶褐色土混入)である。周壁溝に切られているため住居址に伴うものではないと考えている。

遺物は周壁溝から弥生土器の壺口縁部、住居址中央部の床面からは白色のガラス小玉1点が出土している。また、主柱穴S P①からは柱材と礎板、S P②からは径16cmと径25cmの根石が2点柱穴基底面付近から検出され、S P③・④からは柱痕部分に木片が出土している。

## 出土遺物(第72図、図版44)

壺形上器(224・225) 224・225は周壁溝内出土品である。224は長頸壺の口縁部片である。口縁端部は丸く仕上げられ、ヘラ状工具により刻目が施される。225は口縁部の小片である。器種は壺とした。口縁端部は丸みをおびる。内外面に板状工具でのナデ<sup>ガ</sup>が看取される。

ガラス小玉(226) 226はガラス製小玉である。長さ3.0mm、径4.8mm、孔径1.5mm、重さ0.125gを測る。色は白色である。本調査で出土したガラス小玉で白色はこの1点に限られる。

柱材(227) 227は現存長193cm、現存径160cmである。工具痕はみられない。樹種同定の結果、シヤシャンボ、ツツジ科と判明した。

礎板(228) 228は長さ18.0cm、幅10.4cm、厚さ2.9cmである。木種はスダジク、ブナ科と判明した。

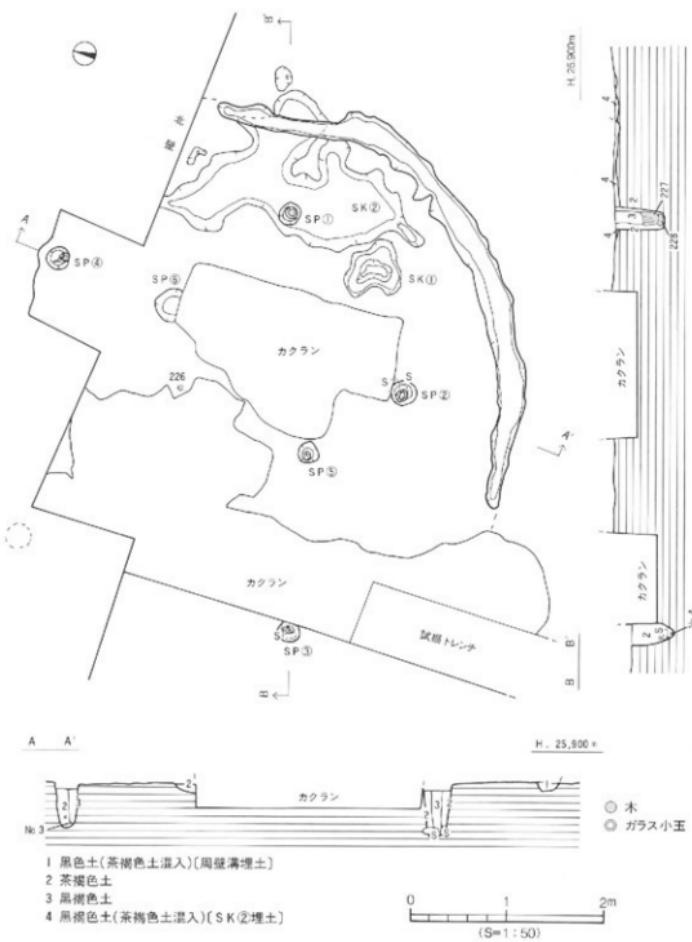
時期：出土遺物と、柱穴・周溝の埋土より弥生時代後期に埋没したと考えられる。

## S B 4 (第73・74図、図版34)

調査区の東部、A 5~B 6区に位置する。壁体は削平され、住居の範囲は特定できないが、主柱穴5本と炉を検出したことより竪穴式住居址と認定した。

主柱穴の平面形態は円形及び梢円形を呈し、径20~30cm、深さ26~58cmを測る。柱穴間は1.95~2.05mを測り、ほぼ等間隔になる。掘り方埋土は黒褐色土(暗褐色土及び黄色土ブロック混入)である。柱痕はすべての柱穴で検出され、径10~15cm、深さ30~50cmを測る。柱痕埋土は黒褐色土である。

炉は住居址中央部の南寄りに位置する。平面形態は円形を呈し、大小2つの穴からなる。規模は大きい方が径35~40cm、深さ20~37cm、小さい方は径25cm、深さ15cmである。埋土は黒褐色土(暗褐色土粒混入)である。また、大きい方の炉からは径14cm、厚さ5cmの扁平な石が<sup>ガ</sup>壁体に沿って斜めに埋

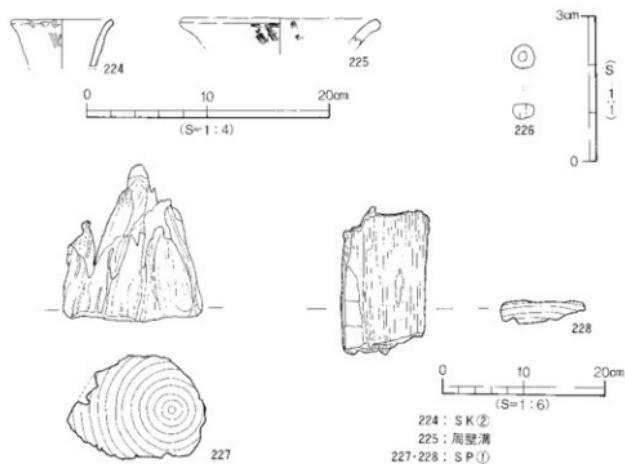


第71図 SBI測量図

まった状態で出土した。さらに、この石の上面には焼土が一部覆っている。そのほか、焼土下面の埋土中からは弥生土器の壺口縁部が出上している。焼土は23×28cmの範囲で、厚さ4～5cmを検出した。

遺物は、SP①から弥生土器の壺胴部、SP⑤から弥生土器の壺底部と礎板が出土している。

釜ノ口遺跡 8 次調査地



第72図 S B I 出土遺物実測図

出土遺物（第75図、図版42）

230・233は炉内、229・231はS P⑤、232はS P③出土品である。

壺形土器（229～231） 229は頸部片である。頸部に1条の断面三角形状の凸帯を貼付、ヘラ状工具による斜格子目文の刻目が施される。230は広口壺の口縁部片である。口縁端部は粘土を貼り付けて、上下に拡張されている。口縁端面に櫛描き波状文が施される。部分的に剥離し、擬口縁が看取される。231は厚みのある平底である。内外面はハケで調整されている。内面は目のつまっているものと、粗いもの2種類のハケ調整が看取される。

壺形土器（232） 232は口縁部から胴部にかけての残存である。折り曲げにより口縁部を形成するもので口縁端部に刻目、胴部にヘラ描きによる沈線文4条が施される。弥生時代前期の土器であり混入品である。

石製品（233） 233は台石である。側面に部分的に研磨痕がみられる。重量は1,950gである。

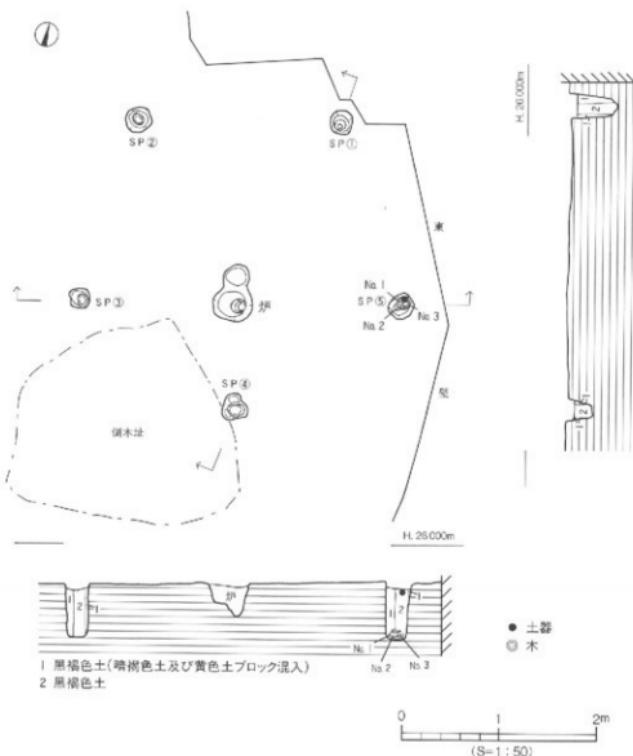
時期：柱穴や炉から出土した壺形土器が弥生時代後期後半の特徴を示している。よって本住居址の廃棄・埋没時期は弥生時代後期後半と考える。

（2）掘立柱建物址（掘立）

本調査で検出した掘立柱建物址は2棟である。いずれも第VII層上面での検出である。

掘立1（第76、図版38）

調査区中央やや北、D 3～E 4区に位置する。建物は6基の柱穴から構成されている。そのうちS P⑩はSD 3を切っている。建物は1間×2間の東西棟で、方位はN-77°-Eである。規模は桁行長5.



第73図 S B 4 測量図

50m、梁行長3.18mを測り、平面形態は長方形を呈する。各柱穴は円形及び梢円形を呈し、規模は径40～60cm、深さ15～20cmを測り、埋土は黒色土（茶褐色土混入）である。柱痕はすべての柱穴で検出され、径10～12cm、深さ約10cmを測り、柱痕埋土は黒色土である。

遺物は、SP⑨から底部片、SP⑩から高环彫土器の脚部片と石庖丁が出上した。いずれも埋土上層からの出土である。

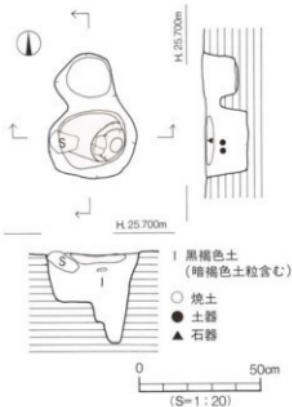
#### 出土遺物（第77図、図版49）

234・237はSP⑩、235・236はSP⑨出土品である。

高环彫土器（234） 脚部片である。外面はハケで調整を行ったのちミガキがなされる。脚端部は丸みを帯びた面をなす。

夔形土器（235・236） 235はくびれの平底である。くびれ部の突出部は貼り付けられている。外面

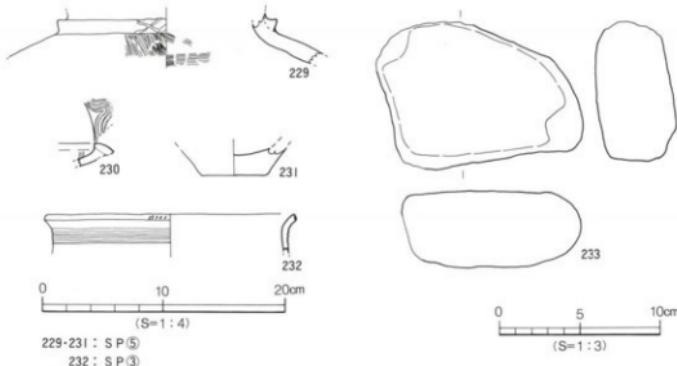
## 釜ノ口道路8次調査地



第74図 S B 4 炉測量図

生土器の細片が出土している。

時期：遺物の出土は稀少であり、他の造構との切り合いもなく時期は判断できない。



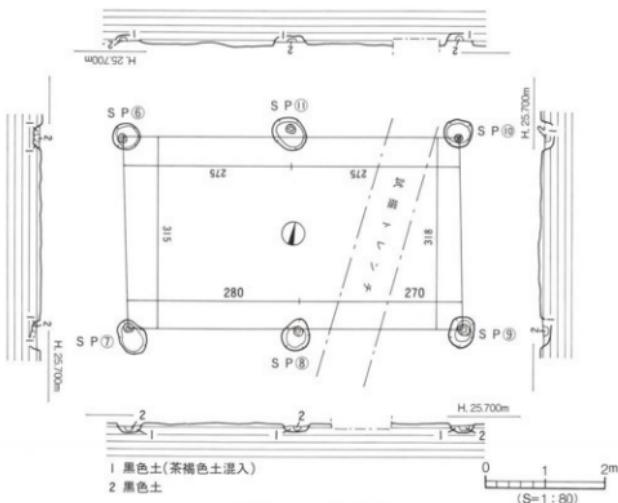
第75図 S B 4 出土遺物実測図

### (3) 貯蔵穴 (S K)

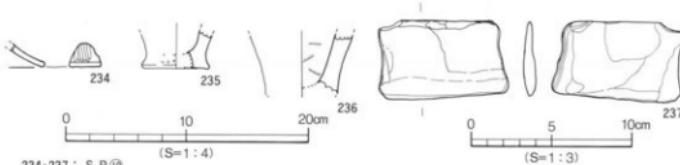
本調査で検出した貯蔵穴は2基である。第VII層上面での検出であった。

#### S K 1 (第79~81図、図版35)

調査区南部、C10区に位置し、S B 3 から東2.7mの地点にある。平面形態は円形で、規模は径78cm、深さ56cmを測り、断面形態は「U」字状を呈するが、基底面はわずかに起伏がある。なお、土坑に北接し、径7cmの半円形小穴が検出された。埋土は5層に分層され、①層黒灰色土(12cm)、②層黒色土(黄色土混入、23cm)、③層黒色土(やや粘性強い、27cm)、④層黒色細砂(1cm)、⑤層黒褐色土(6cm)



第76図 挖立Ⅰ測量図



第77図 挖立Ⅰ出土遺物実測図

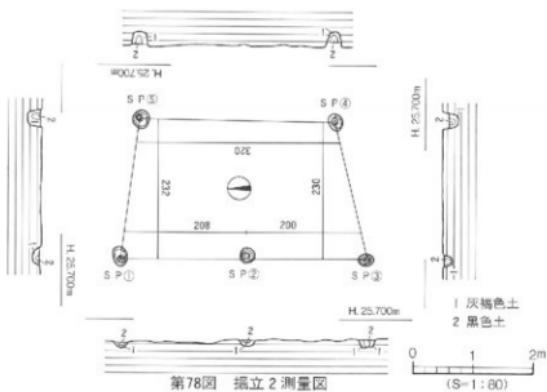
cm) である。

遺物は①～③・⑤層で出土し、④層からは遺物が出土していない。①層は弥生土器片が数点で②・⑤層は完形品を含む大型破片が出土している。②層下部からは木片(W No 1、幅6cm、長さ30cm、厚さ2cm)と核、③層からは完形品の甕(238)、口縁部が欠損した壺(241)、甕の胴下半部(239)、甕の底部片(242)、植物遺体(核、種子、編み物)、⑤層からは木製品(245)と木片(W No 11)、核・種子が出土した。

③層上部から出土した完形の甕(238)は、口縁部が斜め上向き土器そのものが押しつぶされた状況であった。この甕の下には、241の壺と239の甕が並んで出土している。欠損品は、意図的に割ったものか、割れたものを転用したのかは判断できなかった。なお、甕239と壺241内からはモモ核が出土し、239には完形1点、241には完形33点、破片9点がある。

また、③層の最下部では編み物が出土している。編み物は壁体付近にて2個体が重なる様に出土し

釜ノ口遺跡 8次調査地



たが、上下の一部がつながっていたため、一個体であることを確認した。取り上げは上部(A)と下部(B)に分けて行い、取り上げ後に表面の精査をした。上部の個体には中央に把手と考えられる部分、下部では縁材部分を確認した。さらに、上部は下方向に湾曲、下部は上方向に湾曲しており、編み物上部は外面を上に、下部は内面を上にした状態で出土していたことがわかった。このほか、③層からはモモ核(完形74点、半形15点、破片8点)、ヒヨウタン類の種子(完形36点、破片11点)が出土し、特に編み物の上部からは多数の出上をみた。

⑤層からは木製品(第81・83図)と核6点がした。木製品(245)はA面が上になり、前述の編み物の直下にある。

このほか、SK1からは埋土中及び土器内から、ヒヨウタン類とウリ類(メロン種子、1点)種子が出土し、種実ではチトメグサ属、カラツリグサ属が多く、241からはシロシクモ属の卵胞子も検出されている。

出土遺物(第82・83図、図版45~47・50)

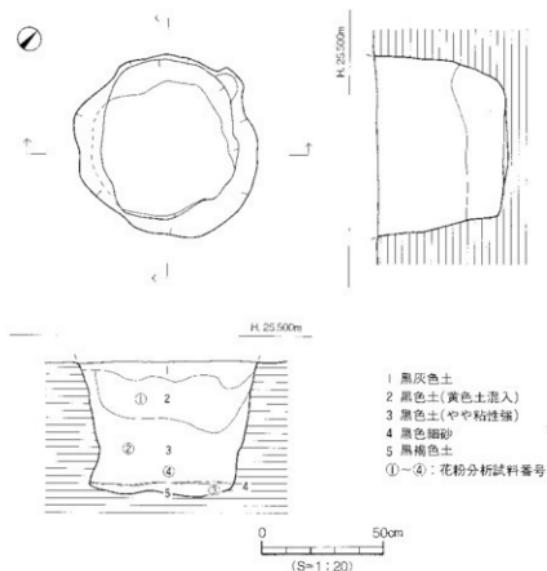
壺形土器(238・239) 238は壺形土器。完形品である胴部上位は何かに押されたような状況で凹んでおり底部はその形質で大きくゆがんでいる。口縁部はやや反り気味にのびる。口縁端部はヨコナデにより少し下方に肥厚する。胴部上位に張りをもつ。底部はやや小さい平底である。内外面にナデ後ハケ調整が看取される。239は胴部から底部の残存である小さい平底。内外面にハケ目調整が看取される。胴部最大径が胴上位にあり、小さい平底をもつ胴長の器形である。

壺形土器(240~242) 240は、頸部片である。頸部は上方に向かってのびる。貼付によるわずかな段を有する。241は壺形土器である。口縁部を欠損する。胴部中位が張り、底部は丸みをおびる平底である。内面はケズリ後、ハケ調整が施される。242は壺形土器。肩部から上を欠損する。胴部中位が張る。平底である。内外面はハケ調整が施される。

鉢形土器(243) 243は鉢形土器の口縁部小片。口縁端部は丸みをおびる。口縁端部は先細りである。外面はハケ後ミガキ調整が施される。

石製品(244) サスカイト製の凹基無茎式の石鏃である。重量は0.957gである。

木製品(245) 長さ46.7cm、幅13.0cm、厚さ1.7cmを測る。形状は半梢円形を呈し、湾曲する部分

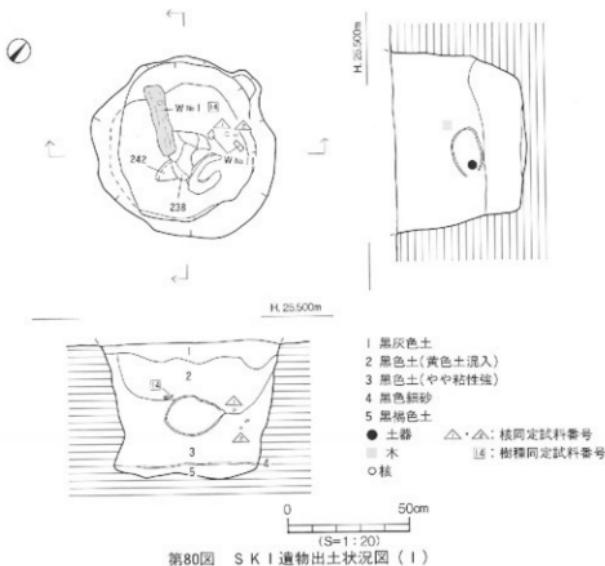


第79図 SKI測量図

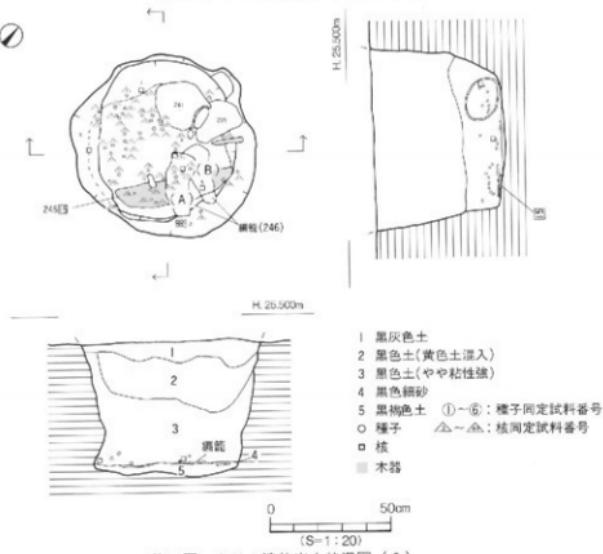
には突出する部分をもつ。直線部分は三角形状の切り込みが見られる。A面には湾曲部に沿って2.0~1.6cmの幅で5mm程度の高まりをもつ。一部編み物の繊維が付着する。B面には直線部分にケズリ痕がみられ、表面全体をハツリにより丁寧に整えている。樹種はコナラ属、アカガシ亜属である。用途はわからないが、樹種同定の結果から、農工具の再加工による転用品と考えられる。

**編み物 (246A・B)** 上部A (図版46) は端端が欠損するもので、長さ (縦方向) 約26cm、幅 (経方向) 約9cmを測る。経方向に木質の棒状 (長さ7cm) と半円形の把手 (外径2.8cm) が編み物外面に付く。棒状・把手とも縫より約11cmのところに付き、棒状のものは把手より縫側の部分で編み込まれているかは不明である。それ以外は編み物本体には編み込まれておらず延長されるものと思われる。把手は棒状のものを把手材で編み物本体と固定させ、ねじりながら把手本体としている。棒状のものは、本体と縫材や把手を固定するための補強材と考えられる。下部B (図版47) は縫材が残るもので、長さ24cm、幅11cmを測る。上下の総長は約50cmになる。木質の縫材が編み物本体縫内面に付く。縫材は板状で長さ13.5cm分、幅2.5cm、厚さ0.3cmを測る。編み方は縫から約11cmまでは経方向と縦方向を編み込んだ後に、縦方向一本ずつを巻き込んで編み込んでいる。それ以外では経方向2本1組を「1本越え・1本潜り」、縦方向は1本を「2本越え・2本潜り」で編み込んでいる。この縫材は編み物本体と蔓状様のもので巻き込み固定される。確認できる部分では約8回巻き込みされており、それから左3cmの所にも2回の巻き込みが認められる。

釜ノ口遺跡 8次調査地

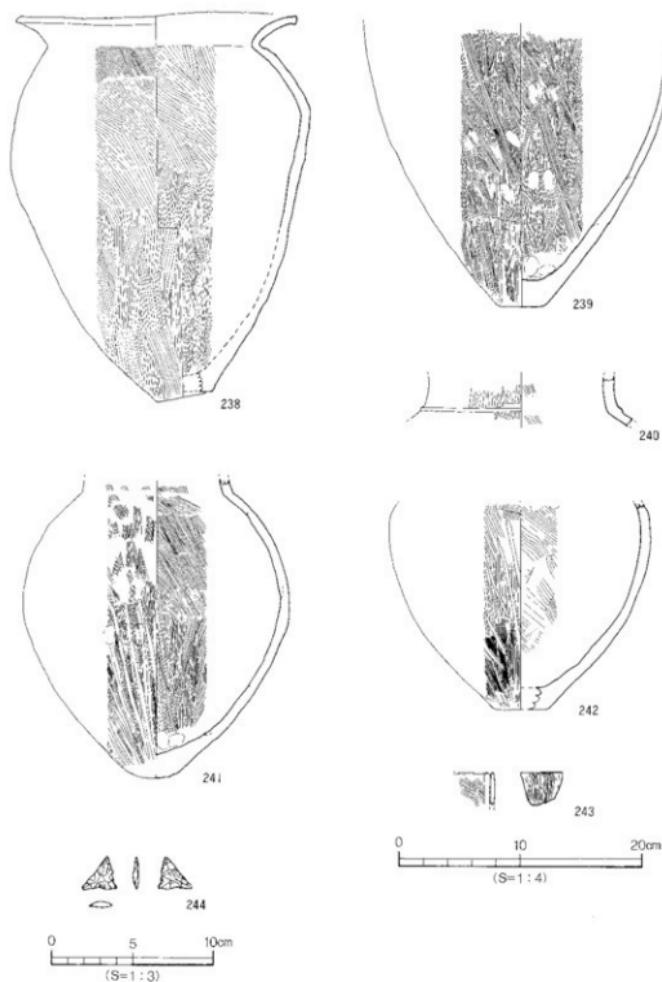


第80図 SK I 遺物出土状況図 (1)



第81図 SK I 遺物出土状況図 (2)

遺構と遺物

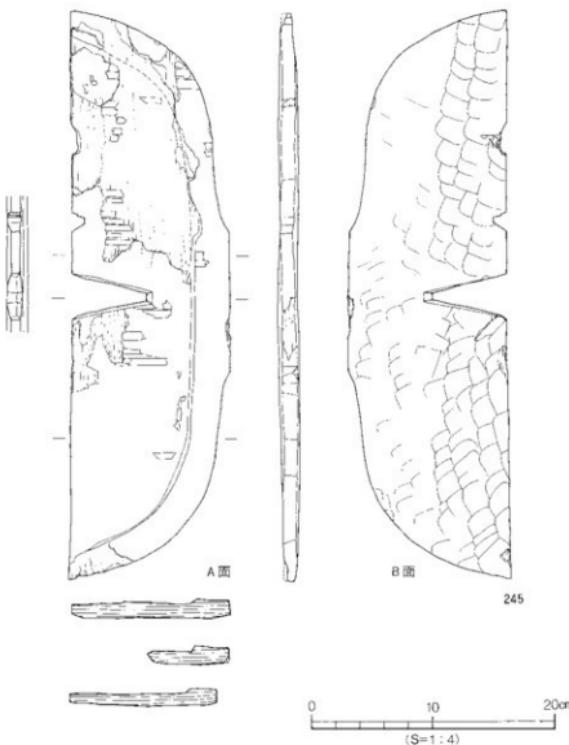


第82図 SK I 出土遺物実測図 (I)

編み物の材質は、編み物本体は科学分析から植物珪酸体を残さない植物という結果が得られた。編み物の種類は、糞の様なものではないかと考えている。

## 核・種子

モモ核は平均値で長さ20.4mm、幅17.0mm、厚さ13.4mm、色調は茶褐色～黒褐色である。梢円形を呈し、表面は比較的なめらかなものである。このうち、1点のみ核の表面に小孔が多類あり、他の核とは異なるタイプである。形態より中国原産とされる栽培植物であるという結果が得られた。SK1出土上のモモ核は、花粉分析過程において表皮毛が検出されなかったことから、果実ではなく核の状態で堆積したものと考えられる。



第83図 SK1出土遺物実測図(2)

## 貯蔵穴（SK 1）内外の温・湿度測定（第84図）

貯蔵穴内から木・編み物の木製品が出土したことから貯蔵穴内外の温度・湿度に関係があると考え、測定を行った。測定は遺物が内部にある状態で行い。計測器を貯蔵穴内に設定し、ベニヤ板で蓋をした。さらに、その上には雨水が進入しない様にビニールシートで覆いをした。外部の測定は雨が直接かかる場所で地表面から15cm上げた状態で計測器を設置した。

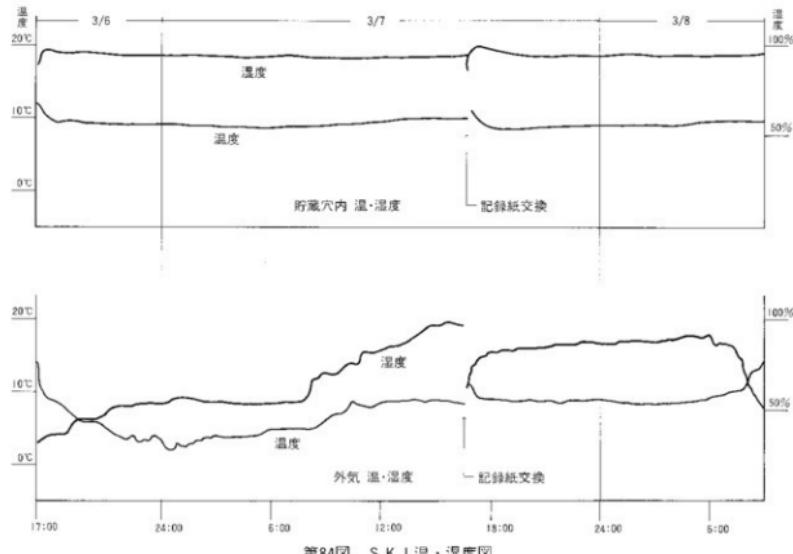
測定日時：平成8年3月6日から平成8年3月8日9時15分まで

天気：3月6日 晴、3月7日 雨、3月8日 晴

使用測定器：株式会社計量器製作所 ラトナ型電子式自記温湿度計（MODEL R-704）

測定結果：外気は温度・湿度ともに変化がみられた。一方、貯蔵穴内は変化がありなく、温度は9°C前後、湿度は95%前後を保っていた。本測定資料は今後、貯蔵穴の温度・湿度と木製品の関係を研究する上での一資料としている。

時期：出土した土器が弥生時代後期後葉（弥生後期II-2）の特徴を示している。よって、SK 1の時期も弥生時代後期後葉と考えられる。



第84図 SK 1温・湿度図

## SK 2 (第85~87図、図版36・37)

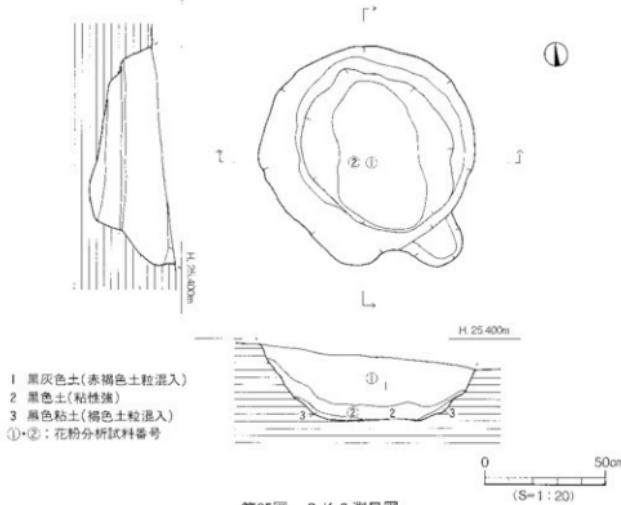
調査区南部、D~E 9区に位置し、SB 3を切る。平面形態は円形で、南東に半円形の小穴（径15cm）が検出された。規模は径91cm、深さ31cmを測り、断面形態は逆台形状を呈し、底面はやや凸凹がある。埋土は3層に分層でき、①層黒灰色土（赤褐色土粒混入）は厚さ20cm、②層黒色土（粘性強い）は厚さ5cm、③層黒色粘土（褐色土粒混入）は厚さ2cmである。③層は基底部付近の壁体で、少量が検出されたにすぎない。

遺物には上器・木片・種子がある。完形の甕(253)は①層下部の南東部壁体沿いで出土し押しつぶされた状況であった。また、①層下部では北東部と北西部に土器片が散在し、モソ核1点(No.1)と木片数点も出土した。②層からは、土器片と石器1点、モソ核No.2~6（完形1、半形3、破片2）、木片及び植物遺体が出土している。モソ核は南東部で出土し、木片は中央から北東部、植物遺体は北西部の基最下部にあった。③層からは底面付近部から木片が1点出土している。

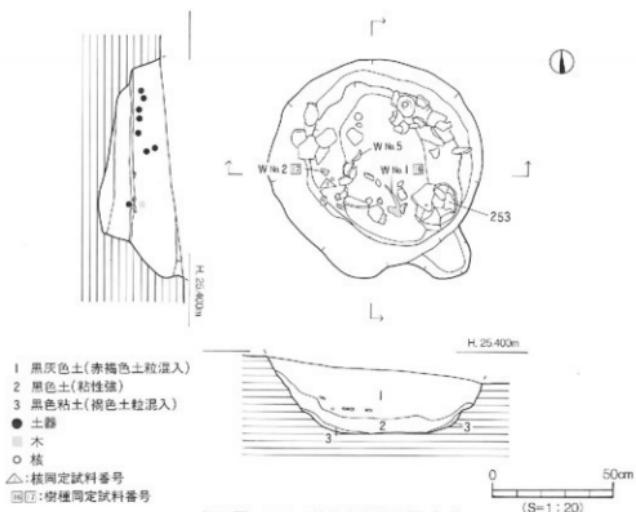
## 出土遺物（第88図、図版48）

甕形土器(247~253) 247~253は甕形土器である。253は復元完形品である。球形の胴部に丸みのある底部をもつものである。これらの甕形土器は口縁部はすべて外反し、端部は丸く仕上げるもの(247・251・253)、面をもつもの(248・250)がある。249・251を除き、他はいずれも器壁が薄く仕上げられている。247・253の外面には細かなタタキ調整、247・251・253はケズリ調整を施す。内面はすべて明瞭な棱をもつ。

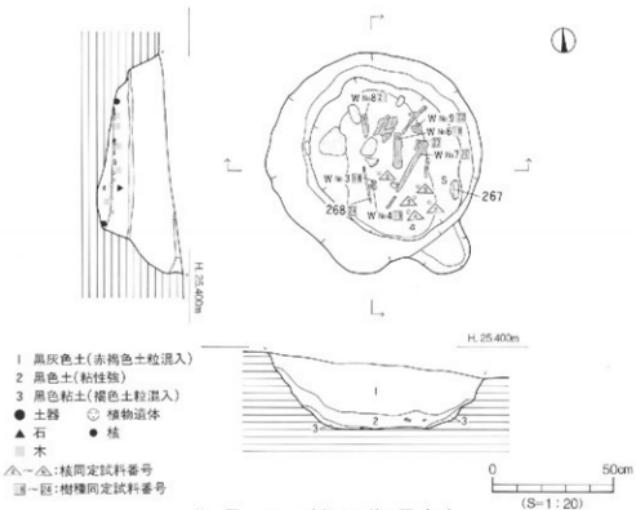
壺形土器(254~258) 254は直口口縁壺である。口縁部は外上方にのび口縁端部は強いヨコナデにより平坦面をなす。内外面ともハケメ調整が施される。255は広口壺である。やや反り気味に外反する



第85図 SK 2測量図

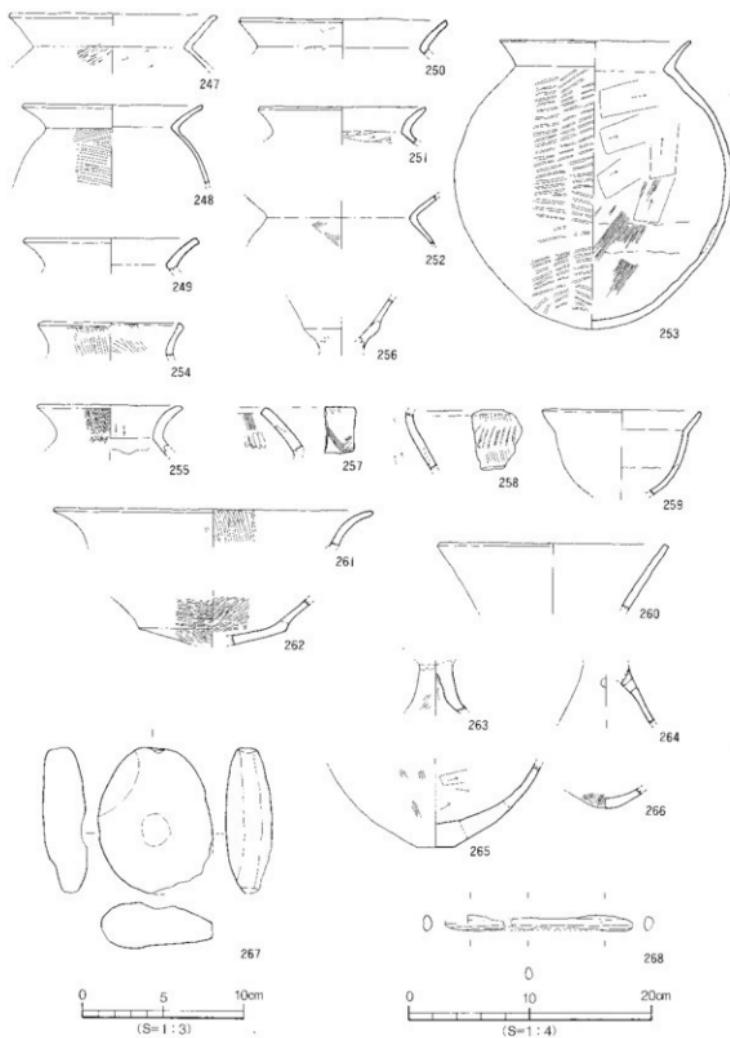


第86図 SK 2 遺物出土状況図（1）



第87図 SK 2 遺物出土状況図（2）

峯ノ口遺跡 8 次調査地



第88図 SK 2 出土遺物実測図

口縁部をもつ。口縁端部は、先細りで丸く仕上げている。頸部の内面に明瞭な稜をもつ。256・257は複合口縁壺である。256は口縁拡張部は外上方にのびる。257は大きく内傾してのび、口縁端部は平坦面をなす。外面に櫛描き波状文が5条施される。258は肩部片である。ゆるやかに湾曲する。貝殻文が8条施される。

鉢形土器（259・260） 259は外上方に短くのびる口縁部をもつ。口縁端部は丸く仕上げている。小型品である。260は大型品である。

高環形土器（261～264） 261は外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸く仕上げられる。262は环部下位に丸みをおびた段をもつ。内外面にミガキ調整を施す。263・264は脚部である。263は器壁が厚く接合法は差し込み技法である。264は器壁が薄く、径8mm大の円孔を穿つ。265・266は壺の底部である。265は小さい平底。266は丸底で外面にハケメ調整を施す。

石製品（267） 267は敲石である。器面の中央を機能面として利用しており、わずかに凹んでいる。重量は590gである。

木製品（268） 268は用途不明品である。現存長15.0cm、最大厚1.3cm、最小厚0.7cm、最大厚0.65cm、最小厚0.50cmを測る。散孔材である。中央部は細く、両端はやや膨れている。表面にわずかに面取りされる痕跡がみられる。

時期：復元完形の夔形土器や、複合口縁壺、高環形土器の形態が弥生時代末～古墳時代初頭の特徴を示している。よって、SK2は弥生時代末～古墳時代初頭に時期比定される。

#### （4）溝（SD）

本調査で検出した溝は7条である。SD1は第VIa層上面、他の6条は第VII層上面で検出した。溝の断面図のポイント（A-A'、B-B'……I-I'）は、第40図遺構配置図に位置を記している。

##### 1) 弥生時代

弥生時代の溝はSD2・3・4・7の4条である。

##### SD7（第89図、図版38）

調査区南部、A13～F11区に位置し、溝SD3に切られている。溝の西端は調査区外に続き、東端は近・現代の水田に切られ消失している。南東から北西に向て流れ、比高差10cmを測り、溝底は比較的平坦である。規模は検出長18.8m、上場幅58～85cm、深さ9～26cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は2層に分層され、上層は黒色土、下層は黒色土（白色砂粒混入）である。遺物は上層から弥生土器と石器が出土した。

##### 出土遺物（第89図、図版50）

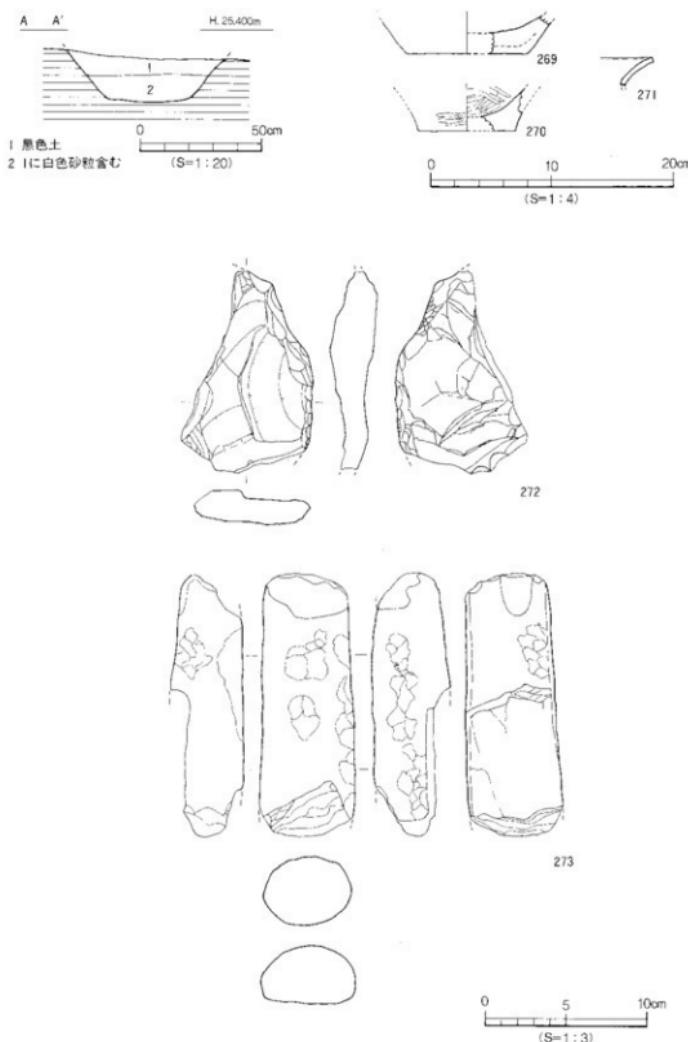
壺形土器（269・270） 269・270は壺形土器の底部である。<sup>270</sup>269は外面にミガキ調整がみられる。両者とも厚い平底である。

夔形土器（271） 271は夔形土器の口縁部小片である。口縁部は短くのび外反する。口縁端部に沈線文1条を施す。

石製品（272・273） 272は用途不明品である。273は伐採斧である。刃部が大きく欠損する。

時期：土器の特徴とSD3（弥生時代後期葉～末）に切られていることから、SD7の時期は弥生時代後期葉と考えておく。

釜ノ口遺跡 8次調査地



第89図 SD 7断面図及び出土遺物実測図

## S D 3 (第90図、図版39・40)

調査区中央部、D 2～13区に位置する。S B 2・S B 3・S D 7を切り、S D 1に切られる。溝南端は調査区外に続き、北端は消失する。北から南に向て流れる溝で、比高差14cmを測り、溝底は凹がみられる。規模は検出長44.5m、上場幅30～48cm、深さ3～18cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は上下2層に分層され、上層は黒灰色土、下層は黒灰色土(暗褐色土微粒砂含む)である。下層は砂を含んでおり、水が流れていると考えられる。遺物は上層から弥生土器とガラス小玉2点が出土し、弥生土器はD 7～8区に集中してみられ、ガラス小玉はS B 3と重複する部分からの出土である。下層からはS D 1と交差している地点から破鏡が出土している(第93図)。



第90図 S D 3 断面図

## 出土遺物 (第91～93図、図版49・50)

彫形土器 (274～280) 274～276は外反する口縁部をもつ。口縁端部は274・275が丸く仕上げられており、276は平坦面をなす。278は短くのびて外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸く仕上げている。277・279は大型品である。279は球形の胴部にゆるやかに外反する口縁部をもつ。口縁端部はやや凹む。口縁部外にタテ、内面はヨコ方向のヘラミガキ調整を残す。胴部は外側はハケメ、内面は一部ミガキ痕を残す。279は内外面にミガキ痕が取看される。280は口縁端部が欠損する。頸部の内外面に明瞭な棱をもつ。

壺形土器 (281～289) 281から283は複合口縁壺である。281・282は口縁拡張部が内傾し、端部は面をもつ。283は口縁接合部がたが状にのびる。284は直口壺、285は広口壺である。284はゆるやかに外反する口縁部をもつ。口縁端部は強いヨコナデにより下方にやや拡張される。285はやや外方に外反する口縁部をもつものである。286・287は口縁端部に3条の沈線文が施される。288は大型品である。外上方にのびる口縁部をもち、頸部に断面三角形状の貼り付け凸帯をもつ。289は無頸壺の口縁部で径6mmの大円孔を穿つ。

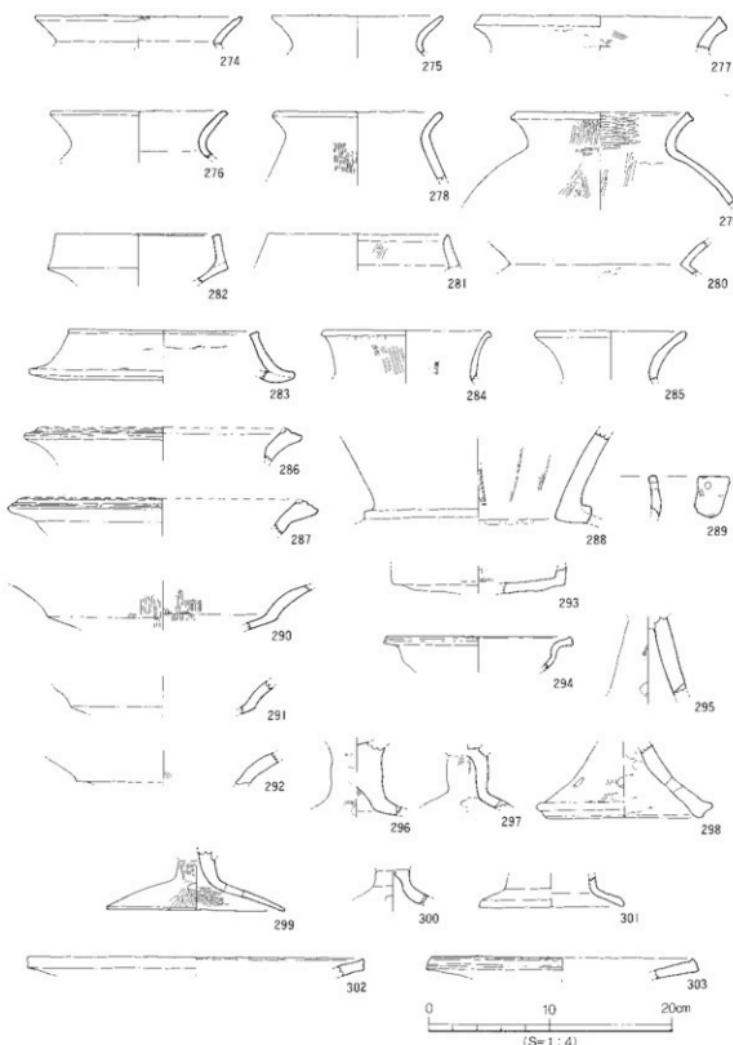
高环形土器 (290～298) 290から294は環部片である。環部下位に棱をもつ。293は口縁部が直立する。294は口縁部が外方に短くのびる。口縁端部に2条の沈線文をもつ。295から298は脚部である。いずれも円孔を穿つ。

鉢形土器 (299・300) 299・300は台付鉢の脚部と考えられる。299は外面にミガキ調整を施す。

支脚形土器 (301) 301は支脚形土器の脚部片である。脚端部は丸みのある面をもつ。

器台形土器 (302・303) 302は口縁端部がヨコナデによりやや上方に肥厚する。303は口縁端部に2条の沈線文が施されている。

釜ノ口遺跡 8 次調査地



第91図 S D 3 出土遺物実測図 (1)

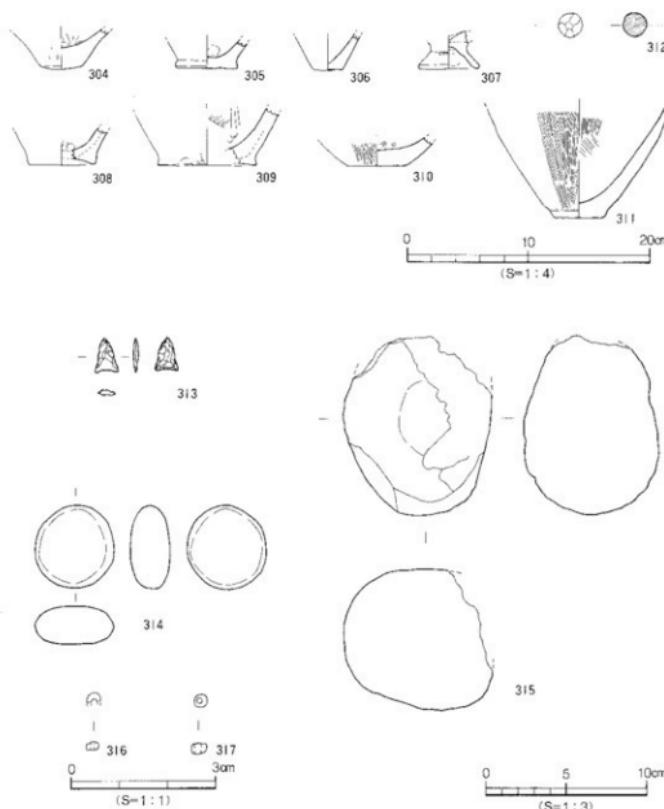
## 造構と遺物

底部(304~311) 304~306は表形土器、308~311は表形上器、307は右付鉢の底部である。304~306は小さい平底である。305・308・309はわずかにくびれる平底である。

土玉(312) 312は土玉である。断面形態は球形でナゲにより面をもつ。径1.8cm、重量24.2gを測る。

石製品(313~315) 313はサスカイト製の四基無蓋式の石鎌である。314は用途不明である。完存品。315は用途不明品である。遺存状況4/5である。

ガラス小玉(316・317) 316は長さ2.0mm、径2.8mm、孔径1.0mm、重さ0.015gを測る。色調は青色である。317は完形品で長さ2.0mm、径3.0mm、孔径1.2mm、重さ0.022gを測る。色調は青色である。

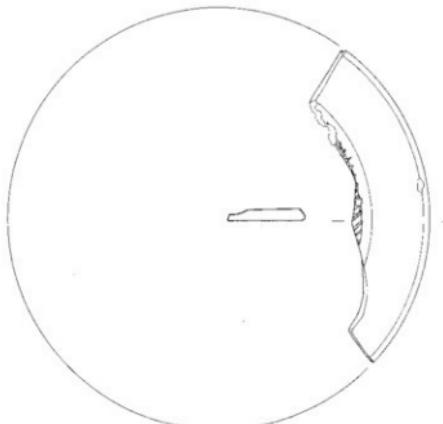


第92図 SD 3 出土遺物実測図(2)

釜ノ口遺跡 8次調査地

金属製品(318) 銅鏡の外縁部片である。長さ6.5cm、幅1.55cm、厚さ0.255cmで外区には斜行櫛齒紋帶がみられる。復元径8.7cm。

時期：出土した土器には多少の時期差が認められるが、S D 7（弥生後期後葉）を切ることから弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺構と考える。



第93図 S D 3 出土遺物実測図 (3)

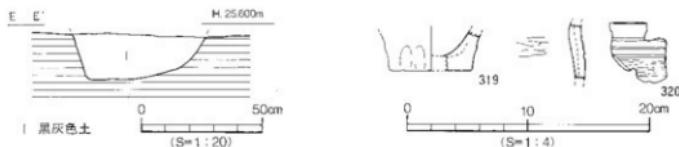
S D 2 (第94図)

調査区東部、A～B 6区に位置し、倒木痕を切る。溝底は平坦であるが、南西部が北東部よりやや高い。規模は検出長4.1m、上場幅30～56cm、深さ6～18cmを測る。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は黒灰色土である。遺物は埋土中から弥生土器の壺底部と胴部片が出土している。

## 出土遺物（第94図、図版49）

壺形土器（319・320） 319は平底の底部。320は脚部片である。320の外面はヘラ描き沈線文を3条施す。弥生前期。

時期：遺物の出土は稀少である。SD3、SB2、SB3の埋土と類似していることから、弥生時代後期の遺構と考えられる。



第94図 SD2断面図及び出土遺物実測図

## SD4（第95図）

調査区中央部、D～E3区に位置する。溝底は平坦となり、規模は検出長3.6m、上場幅30～50cm、深さ3～6cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒灰色土である。遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期判断は困難である。あえて時期を求めるならば、埋土がSD3と類似することから、弥生時代後期末～古墳時代初頭以降の遺構と考える。

## 2) 中世

## SD1（第96図）

調査区中央部、A～F7区に位置し、SB2とSD3を切る。東から西に向けて流れ、溝の両端は調査区外に続く。規模は検出長17.1m、上場幅40～90cm、深さ2～8cm、溝底の比高差は10cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は2層で、上層が灰褐色土、下層が灰褐色土（砂混入）である。遺物は下層から弥生土器、土師器、石庖丁が出土している。

## 出土遺物（第96図、図版50）

环（321） 底部を欠損する。体部はやや内湾気味に立ち上がり口縁端部は丸く仕上げている。

鉢形土器（322） 大きく外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸く仕上げる。

高環形土器（323） 脚端面に凹線文が1条施される。

石製品（324・325） 324は石庖丁である。外湾刃半月形態で鏃はあまり。325は砥石である。片面を機能面とし部分的に凸凹がみられる。重量は960gである。

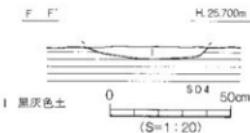
時期：322は弥生時代後期末の特徴をもつ土器であるが、SB2・SB3と切り合い関係にあることから混入品と考えられる。环が13世紀後半の特徴を示すことから、SD1は13世紀後半の遺構と考える。

## 3) 時期不明

## SD5（第97図）

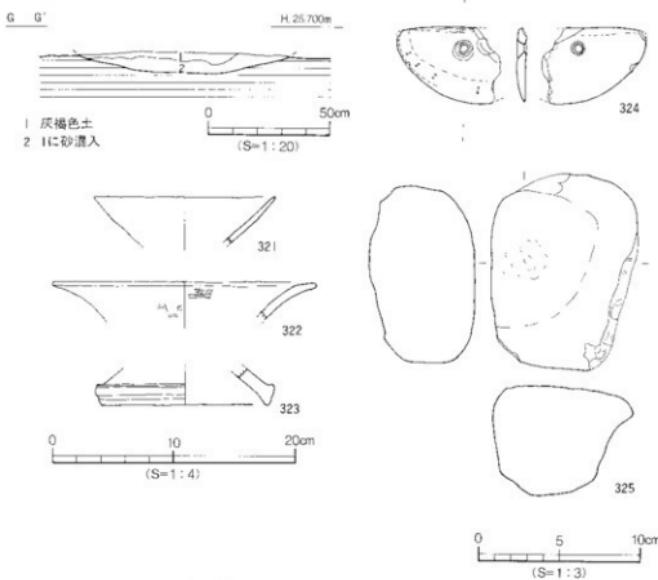
調査区西部、F4～5区に位置する。規模は検出長80cm、上場幅12～16cm、深さ3～10cmを測る。断面形態は「U」字状を呈し、埋土は茶褐色土である。遺物の出土はない。

時期：遺物の出土がなく、切り合い関係もないことから、溝の時期は判断できない。



第95図 SD4断面図

釜ノ口遺跡8次調査地



第96図 SD-I断面図及び出土遺物実測図

SD 6 (第97図)

調査区西部、G 5・6に位置する。溝底は平坦になり、北東部が南西部より高く、比高差は5cmを測る。平面形態は不定形で、規模は検出長4.9m、上場幅10~28cm、深さ3~11cmを測る。

断面形態はレンズ状を呈し、埋土は茶褐色土である。検出位置が近いことや、埋土が同じであることから、SD 5と同一の溝と考えられる。遺物の出土はない。

時期：遺物の出土がなく、時期は判断できない。

(5) その他の遺構と遺物

1) ピット (S P)

本調査において検出したピットは32基で、すべてが第VII層上面で検出した。

平面形態は円形23基、橢円形9基で、埋土の違いにより4つに分類され、黒褐色土18基、暗褐色土7基、黑色土2基、黒灰色土5基となる。遺物は埋土中より弥生土器の細片や石器が出土した。

S P 19は調査区西北端G 1区に位置する。平面形態は円形で、規模は径25×23cm、深さ17.5cmを測る。

埋土は暗褐色上で、遺物は埋土上面より石製品が出土している。326は器種不明品である。重量は226gである。

### 2) 倒木痕 1

本調査では倒木痕を1基検出した。

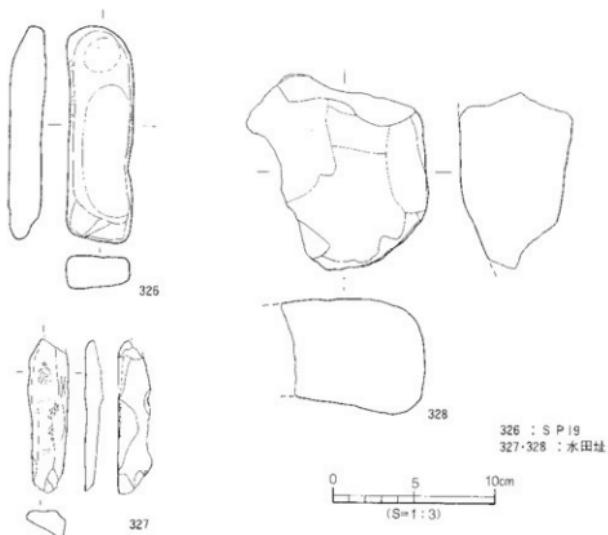
調査区東、B 6区に位置し、SD 2に切られる。平面形態は楕円形で、規模は長径2.6m、短径2.0m、深さ1.0mを測る。平面形態を確認した後、長軸方向に半裁すると、下部にあるAT火山灰の2次堆積層が東側に直立する状況で検出されたことから、北西方向に倒壊したものと判断される。

時期：SD 2に切られており、弥生時代後期以前のものである。

### 3) 水田址（第98図、図版50）

調査区南東部、B 10～C 13区に位置し、SD 7を切る。水田址の東と西は調査区外に続く。規模は南北10m、東西6mを測る。第V層の掘り下げ後、第VII層上面で人の足跡を検出した。足跡は39個あり、長さ22～30cm、幅7～12cm、深さ7～12cmを測る。埋土は第V層黒灰色である。遺物は石製品2点が出土している。327・328は用途不明品であり、一部研磨面が看取される。重量は327が50g、328が1.035kgである。

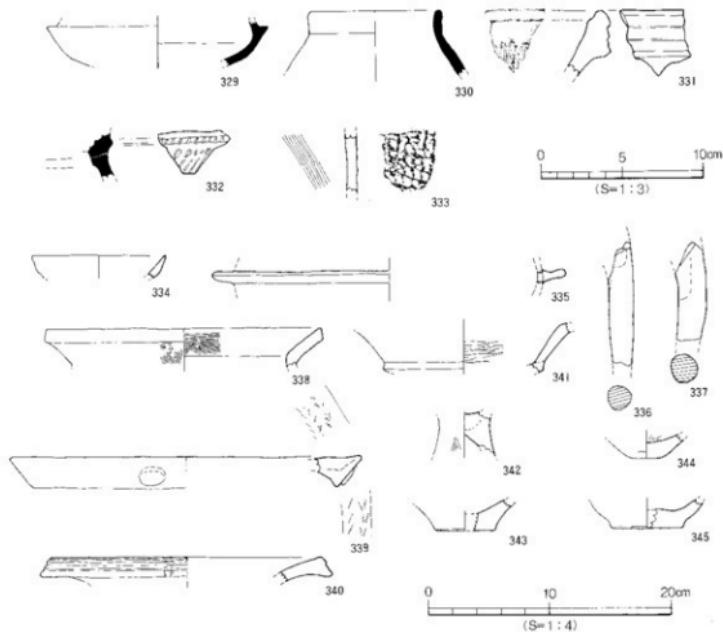
時期：明確な時期判断はしかねるが、東壁の土層観察により、第III層（古墳時代～中世）堆積時より多く、弥生時代後期後葉よりは新しい時期の遺構と考えられる。



第98図 ピット・水田址出土遺物実測図

## 4) 第III層出土遺物 (第99図、図版49)

329・330・332は須恵器である。329は環身片でたちあがりは欠損する。断面三角形状の受部をもつ。330は短頭壺の口縁部片である。直立て短くのびる口縁部をもつ。口縁端部は丸く仕上げられる。332は器台の柱部である。刻み目と列点文、刺突文が施される。333～337は土師器である。333は胴部片でタタキ痕が顕著に残る。334は皿である。口縁部は内湾し立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げられる。335～337は三脚土釜である。335はツバ部である。やや長く横方向にのびる。336・337は脚部である。336は直線ぎみにのび、337は湾曲しながらのびる。338～345は弦文土器である。338は夔形土器の口縁部である。短く外反しのびる口縁部をもつ。339は器台形土器の口縁部である。円形浮文と櫛描きの山形文を施す。340は壺形土器の口縁部片。口縁端面に2条の沈線文が施される。341～342は高環形土器である。341は环部である。环部下位に段を有する。342は脚部である。短い柱部で接合法は充填技法である。343・344は甌の底部である。両者とも厚い平底で343はやや丸みをおびる。345は鉢の底部で突出する平底である。



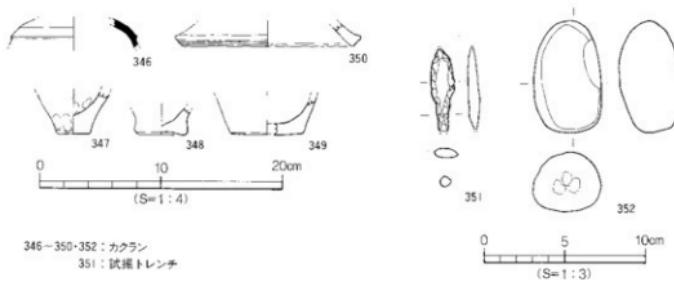
第99図 第III層出土遺物実測図

## 5) その他の出土遺物 (第100図、図版50)

346～350・352は近代坑、351は試掘トレンチからの出土品である。

346は須恵器の環蓋である。断面三角形のシャープな稜をもつ。347～350は弥生土器。347・348は甕の底部である。両者とも平底である。347は小さい平底で、348はややくびれる上げ底である。349は壺の底部で平底である。350は高环の環部で裾端部に凹線文2条が施される。

石製品 (351・352) 351はサスカイト製の石錐である。頭部の一部と先端部を欠く。352は敲石である。片面を機能面として使用している。



第100図 その他の出土遺物実測図

## 4. 小 結

本調査ではAT火山灰と弥生時代、古墳時代、中世の遺構と遺物を検出した。

## (1) 層位

本調査では、深掘り調査によりAT火山灰の1・2次堆積層を検出した。2次堆積は第IXa層、1次堆積は第IXb①層、第IXb②層になる。

AT火山灰は松山平野では数か所で検出され、調査地の北東600mに位置する東本遺跡4次調査地では、1次堆積層と2次堆積層を630mの長さで検出している。東本遺跡4次調査地と本調査のAT火山灰を比べると、2次堆積第IXa層は東本遺跡第VI層風、1次堆積第IXb①層は東本遺跡第VI①層、1次堆積第IXb②層は東本遺跡第VI②層に対応し、東本遺跡と同じ堆積状況であることが分かる。これは当地が桑原地区、樽味遺跡、樽味四反地遺跡、東本遺跡4次調査地が立地する微高地の縁辺部にあたり、AT火山灰の1・2次堆積層が広い範囲に分布することを示している。

次に調査区内地形形成であるが、AT火山灰以下の第X層と第XI層は現在の地形と同じく、北から南に向かって緩傾斜している。これは当地がすでにAT火山灰堆積以前の22,000年前に現在と同じ地形になっていたことが明らかになった。

また、調査区北西部にはAT火山灰を切る流路があり、砂層が87～110cm堆積している。AT火山灰が部分的な検出であるのは、この流路が要因である。流路はAT火山灰を切り、弥生時代後期までの堆積層（第VII層）が両端部を覆うことから、22,000年以後で弥生時代後期以前の時期となる。

## (2) 弥生時代

弥生時代の造構は、竪穴式住居址4棟(SB1~4)、貯蔵穴1基(SK1)、溝3条(SD2・3・7)である。

### 1) 竪穴式住居址

竪穴式住居址には注目する点が3点ある。1つには住居の改築、2つには柱材の検出、3つには多量のガラス小玉の出土である。

#### ①改築

改築はSB2とSB3で行われている。この2棟は弥生時代後期前葉の住居址である。SB2は円形住居で、長方形の張り出し部を付設し、花弁型住居に類似するものである。SB2の主柱は5本柱で、北側と東側の柱は移動せず、南側と西側の3本を西方に移動させ住居を改築したと考えられる。また、SB3は、改築以前は5本柱で、西側に改築を行った際、4基は同じ柱穴を使用するが、北側の1基は石で蓋をし使用していない。これは竪穴住居の拡張に関する主柱穴の利用法を示したものである。さらに、SB2・3はともに貼り床による改修を行っており、改築・改修が繰り返されたことを示す資料になる。よって、SB2・3は竪穴式住居の改築や改修の典型例といえる。

#### ②柱材

竪穴式住居址4棟(SB1~4)の主柱穴からは柱材6点、礎板2点が良好な状態で出土した。柱材と礎板はすべて火山灰層に包含されて、SB1・2から柱材1点と礎板1点、SB4から柱材1点、SB3から柱材4点が出土している。ところで、このように主柱穴から保存状態が良い柱材が出土した例は周辺にいくつかあり、釜ノ口遺跡1次調査地SB2の4点、釜ノ口遺跡2次調査地SB3の4点、釜ノ口遺跡7次調査地SB1・SB2の6点があげられる。このうち釜ノ口遺跡7次調査地の柱材は釜ノ口遺跡8次調査地と同じく火山灰に包含されていた（なお、1・2次調査については詳細が不明である。）

釜ノ口遺跡検出の柱材が良好な遺存であるのは、柱材が火山灰で覆われていることと、湿地性の土地であることが考えられ、興味深い現象といえる。

#### ③ガラス小玉

竪穴式住居址の3棟(SB1~3)と溝SD3からは158点のガラス小玉が出土した。遺構別の点数は、SB2が最も多く95点、それに続くのがSB3の60点、以下SB1が1点、SD3が2点である。色調は、青と紺の2種類があり、出土量は青色が多く、紺色は少ない。さらに、紺色は濃紺・薄紺に分けられ、青色には薄青色と黄緑がかかった青色がみられる。なお、SB1出土のガラス小玉は白色で、稀少例といえる。

出土地点には、炉内、埋上及び貼床からのものがある。炉内出土にはSB2の6点、SB3の10点があり、釜ノ口遺跡2次調査SB3、同7次調査SB1~3にも出土事例がみられる。

さて、松山平野の弥生時代竪穴式住居址からのガラス小玉出土例は、釜ノ口遺跡1次調査SB1、同2次調査SB3、同7次調査SB1~3、松山大学構内遺跡2次調査SB7、祇迦面山遺跡SB4があるが、これらの住居址では出土数は1~14点であり、本資料は桁外れに多いことになる（詳細は第6章を参照）。

ところで、今回は調査中に87個、整理作業中に71個のガラス小玉を検出した。竪穴式住居址内から

多量のガラス小玉が検出できたのは、住居埋土を採集し、調査終了後にふるい作業を行う方法をとった結果である。住居址の調査では可能な限り埋土を採集し、ふるい作業を行う必要があろう。

## 2) 貯蔵穴

S K 1 は植物遺体と完形にちかい土器の出土から貯蔵穴と判断した。

遺物はモモ核・ヒヨウタン・ウリ類の種子が多量に出土し、モモ核は埋土中に74点、甕内に1点、甕内に66点があり、総数141点となる。ヒヨウタン・ウリ類は埋土中に55点が出土している。これらのモモ核・ヒヨウタン・ウリ類の種子は、自然科学分析の結果から栽培植物と判明した。弥生時代の遺跡からモモ核が出土した例は、県内では西条市八堂山遺跡F号住居址、松山市内では祝谷アイリ遺跡、祝谷土居窯遺跡、釜ノ口遺跡7次調査地にみられ、釜ノ口遺跡3次調査地 S K 3 からは種子出土の貯蔵穴が検出されている。

なお、S K 1・2とも上坑に接して、半円形の小穴が検出された。この性格は今後の検出事例を待つて決めたい。

## 3) 溝

S D 3 からは破鏡1点が出土している。平野では、文京遺跡10次包含層、水溝川遺跡7次包含層、東本遺跡4次S B 302に出土例があり、東本遺跡4次S B 302ではガラス小玉を作っている。本調査地のS B 2 からも多量のガラス小玉が出土しており、破鏡とガラス小玉の廃棄は密接に関係していると思われる。

S D 3・7 は溝底から砂混じりの屑が検出され、水が流れていたことを確認した。これは、S D 3・7 が集落内の用水施設に利用されたと示すものである。

## (3) 古墳時代

### 1) 掘立柱建物址・貯蔵穴

古墳時代に時期比定される遺構は掘立柱建物1棟と貯蔵穴1基である。掘立1は1間×2間の規模で真北から大きく西に振った方位をとる。釜ノ口遺跡では数少ない古墳時代遺物である。

S K 2 は、出土遺物と出土状況より古墳時代初頭の貯蔵穴と考えられる。同時期の貯蔵穴は平野においても数少なく、貴重な資料である。

## (4) 中世

中世に時期比定される遺構にはS D 1 と水田址がある。S D 1 は調査区のはば中央部を東～西に流れる溝である。埋土は砂粒を含んでおり、水が流れていたものと考えられる。調査地の南には旧河川の存在が確認されており(小坂八斗藪遺跡)、S D 1 はこの旧河川に向かって流れていると思われる。

以上、今回の調査結果を簡単にまとめた。本調査地からは桑原地区から続くA T火山灰を検出し、竪穴式住居の改築や、遺物には青銅鏡・多景のガラス小玉・柱材・種子・植物等があり、数多くの資料が得られた。特に青銅鏡の出土は、釜ノ口遺跡が弥生時代後期末において松山平野の主要な遺跡の一つであることを推測させるものとなった。

## 釜ノ口遺跡 8 次調査地

### 〔文献〕

- 才原金弘 1988 「鬼虎川遺跡概要 I 遺物編」 東大阪市文化財協会  
 福永信旗 1988 「鬼虎川遺跡第19次発掘調査報告書」 東大阪市文化財協会、同市教育委員会  
 近藤義郎 他 1995 「南方面池遺跡縄文時代木の火葬坑の発掘」 関山町山陽町教育委員会  
 山元敏裕 1995 「井手東 I 遺跡」 高松市教育委員会  
 渡部明夫 1990 「水井遺跡」 香川県教育委員会、財団法人香川県立文化財調査センター  
 山口謙治 1990 「比恵遺跡群(9)」 福岡市教育委員会  
 渡辺 誠 1991 「第10章比恵遺跡出土の籠類について」「比恵遺跡群(0)」福岡市教育委員会

### 遺構・遺物一覧 一凡例一

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

遺構一覧は相原が、遺物観察表は相原・宮内が作成した。

(2) 遺物観察表の各掲載について。

**法量欄** ( ) : 復元推定値

**形態・施文欄** 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴部→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部~底部。

**胎土・焼成欄** 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長(1~4)、多→「1~4 mm大の砂粒・長石を多く含む」である。  
 焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表25 SB 2 出土装身具一覧

	出土地点	出土個数	完形品個数	報告書掲載個数	径			色		
					4 mm以上	3~4 mm	3 mm未満	青	緑	黄
1	埋土	87	74	81	22	43	16	57	28	1 1
2	廻壁溝	1	1	1	0	1	0	1	0	0 0
3	貼床土	1	1	1	0	1	0	0	1	0 0
4	炉	6	6	6	1	4	1	5	1	0 0
小計		95	82	89	23	49	17	63	30	1 1

※径の欄は報告書掲載用のものだけを対象に個数を表示している。また、破片については復元により径を求めたうえで、表示された個数の中に含めている。

表26 SB 3 出土装身具一覧

	出土地点	出土個数	完形品個数	報告書掲載個数	径			色		
					4 mm以上	3~4 mm	3 mm未満	青	緑	黄
1	埋土	28	12	19	4	13	2	23	5	
2	貼床土①	11	8	11	4	5	2	11	6	
3	貼床土②	11	8	11	1	7	3	9	2	
4	炉②	10	5	8	3	4	1	10	0	
小計		60	33	49	12	29	8	53	7	

※径の欄は報告書掲載用のものだけを対象に個数を表示している。また、破片については復元により径を求めたうえで、表示された個数の中に含めている。

## 遺構一覧

表27 積穴式住居址一覧

積穴 (S B)	時 期	平面形	規 模(m) 長さ×幅×深さ (長径×短径)	埋 土	床面積 (m <sup>2</sup> )	主柱穴 (本)	内 部 施 設			遺物	備 考
							高床	土坑	炉		
1	弥生後期	円形?	4.5a×4.5a		15.9a	5		○		○	第VII層上面検出。
2	弥生後期前葉	円形	6.40×6.40×?	黒色土	40.34	5			○	○	5-VI a 層上面検出。 SD 1・3に 切られ。改築前。 貼床。
	弥生後期前葉	円形	6.40a×6.40a×0.15	黒色土	40.34a	5			○	○	貼床 改築後
3	弥生後期前葉	隅丸方形	4.75×4.60×0.05		21.9	5		○	○	○	貼床 改築前
	弥生後期前葉	隅九方形	5.60×5.15×0.25	(上層) 黒褐色土 (下層) 黑褐色土 (灰褐色土混入)	28.8	4		○	○	○	貼床 改築後
4	弥生後期後葉 ~末	不明	3.6a×3.6a		9.6a	5			○		第VII層上面検出。

表28 積穴式住居址の炉一覧

積穴 (S B)	時 期	炉	位 置	平 面 形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	出 土 遺 物		備 考
							出土遺物	備 考	
2	弥生後期前葉	炉	住居址中央や南寄り	不整円形	舟底状	1.85×1.62×0.22	弥生・石・ガラス玉		
3	弥生後期前葉	炉①	住居址中央や東寄り	整円形	皿状	0.50×0.32×0.08			炭化物・焼土 Ⅰ期
3	弥生後期前葉	炉②	住居址中央や南寄り	不整円形	舟底状	0.88×0.77×0.34	弥生・石・ガラス玉	紅期	
3	弥生後期前葉	炉③	住居址ほぼ中央部	楕円形	皿状	0.55×0.43×0.15			田・IV期
4	弥生後期	炉	住居址中央南寄り	円形	レンズ状	0.65×0.25×0.37	石		地上

表29 積穴式住居址検出の土坑一覧

(1)

積穴 (S B)	時 期	土坑	位 置	平 面 形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	出 土 遺 物		備 考
							出土遺物	備 考	
3	弥生後期前葉	S K①	住居址北西壁コーナー	長方形	皿状	0.72×0.36×0.08			Ⅱ期以前
3	弥生後期前葉	S K②	住居址南東壁コーナー	長方形	皿状	1.90×0.60×0.05			Ⅰ期
3	弥生後期前葉	S K③	住居址南東壁コーナー	不定形	皿状	(1.92)×(0.20)×0.10			Ⅰ期以前
3	弥生後期前葉	S K④	住居址山西コーナー	長方形	逆台形状	1.04×(0.54)×0.18			Ⅳ期以前

## 釜ノ口道路8次調査地

竪穴式住居址検出の土坑一覧

(2)

竪穴 (S B)	時 期	土坑	位 置	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	出土遺物	備 考
3	弥生後期前葉	S K⑥	住居址南壁中央	長方形	直状	0.76×(0.35)×0.04		IV期以前
1	弥生後期	S K①	住居址中央東寄り	不整円形	舟底状	0.63×0.60×0.06		
1	弥生後期	S K②	住居址東側	不定形	レンズ状	2.80×1.60×0.05		

表30 竪穴式住居址検出の溝一覧

竪穴 (S B)	時 期	溝	位 置	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	出土遺物	備 考
2	弥生後期前葉	S D①	住居址中央部	レンズ状	1.45×0.32×0.18		2段掘り
2	弥生後期前葉	S D②	住居址中央部	レンズ状	1.18×0.20×0.15		2段掘り
2	弥生後期前葉	S D③	住居址中央やや南寄り	レンズ状	1.05×0.36×0.08		
2	弥生後期前葉	S D④	住居址中央やや南寄り	レンズ状	1.12×0.12×0.06		

表31 提立柱建物址一覧

提立	規模 (間)	方向	柵 行		梁 行		方位	床面積 (m <sup>2</sup> )	時 期	備 考
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)				
1	1×2	東西	5.50	2.80・2.70	3.18	3.18	N-77°-E	17.5	古墳時代 以降	S P⑤がS D 3を 切る。
2	1×2	南北	4.08	2.08・2.00	2.32	2.32	N-2°30'- W	9.5	不明	

表32 土坑一覧

土坑 (S K)	地区	平面形	断面形	規 模(m) 長さ×幅×深さ (長径)(短径)	床面積 (m <sup>2</sup> )	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	C 10	円形	U字状	0.78×0.75×0.56	0.283	3. 黒灰色土 2. 黑色土(黄色土上覆土) 3. 黑色土(粘性土) 4. 黄褐色土 5. 黑褐色土	弥生、木器、枝、根、石器、陶器、 弥生後期後葉物、粘土		北に平円形の穴 所附あり。 第VII層上)而検出。
2	E 9・ 10	円形	近台形状	0.91×0.85×0.31	0.113	1. 黑灰色土(赤褐色土) 2. 黑色土(粘性土) 3. 黑色粘土(粘性土)	弥生、土器、木片、核、种子、 弥生末～古墳 初頭 粘土		南東に平円形の 突出部あり。 第VII層上)而検出。

## 遺構一覧

表33 溝一覧

溝 (SD)	地区	断面形	規 模(m) 長さ×幅×深さ	方 向	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	A 7 ~ F 7	レンズ状	17.1×0.90×0.08	東~西	[上層]灰褐色土 [下層]灰褐色土 (砂混入)	上層 右包丁	13世紀後半	S D 2, S D 3を切る。 第VI層上面検出。
2	A 6 ~ B 6	逆台形状	4.1×0.56×0.18	南西~北東	黒灰色土	糞生	弥生後期	倒木を切る。第VII層上面検出。
3	D 2 ~ D13	レンズ状	44.5×0.48×0.18	北~南	[上層]黒灰色土 [下層]黒灰色砂質土	馬鹿 右包丁 ガラス玉 鏡	糞生後期木~ 古墳初頭	S B 2, 3, S D 7 を切る。S D 1に切 出。第VII層上面 検出。
4	D 3 ~ E 3	レンズ状	3.6×0.50×0.06	北西~ 南東	黒灰色土		糞生後期木~ 古墳初頭	第VII層上面検出。
5	F 4 ~ 5	U字状	0.80×0.16×0.10	北東~ 南西	茶褐色土		不明	第VII層上面検出。
6	G 5 ~ 6	レンズ状	4.9×0.28×0.11	北東~ 南西	茶褐色土		不明	第VII層上面検出。
7	A13~F11	レンズ状	15.8×0.85×0.26	東~西	[上層]黑色土 [下層]黑色土 (白色物質付)	糞生	糞生後期後葉	S D 3に切られる。 第VII層上面検出。

表34 S B 2 出土遺物観察表 土製品 (1)

番号	種類	法量(cm)	形 態・施 文	調 整		(外側) 色調 (内側)	胎 灰 成	備 考	因版
				外 面	内 面				
1	甕	口径 (18.0) 残高 6.7	口縁部はナデによりわずかに拡張される。口縁裏面に3条の沈漫文あり。頸部下端に木口による「ノ」字状文。	①ヨコナデ ②マツツ	ナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~4) ◎	黒底	41
2	甕	口径 (19.6) 残高 2.4	口縁端部はナデにより面をもつ。	マツツ	ヨコナデ	褐色 黒色	石・長(1~3) 金 ◎	S P ③	
3	甕	口径 (18.0) 残高 9.1	口縁端部は丸みのある「コ」字状。頸部下端に「ノ」字状文。	①ヨコナデ ②ナデ	①マツツ ②ケズリ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~3) 金 ◎	媒 S P II	41
4	甕	口径 (16.0) 残高 3.8	口縁端部は上下方に拡張される。口縁裏面に2条の沈漫文あり。	①ヨコナデ ②ナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~3) ◎	蛋出部	
5	甕	口径 (18.6) 残高 2.5	短頸部の口縁部小片。口縁端部は強いヨコナデ。口縁端面はナデにより凹む。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~4) ◎		
6	甕	口径 (14.6) 残高 2.4	短頸部の口縁部。口縁裏面に1条の沈漫文あり。	ナデ	マツツ	乳白色 乳白色	石・長(1~3) 金 ◎	④区	
7	甕	口径 (10.0) 残高 5.5	長頸甕。口縁部は外反し、口縁端部は丸い。	マツツ	マツツ	乳灰色 乳灰色	石・長(1~2) ◎	S P ③	
8	甕	口径 (10.6) 残高 5.4	長頸直口甕。口縁端面は強いナデにより曲をなす。	ハケ・ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~2) ◎		
9	甕	口径 (17.0) 残高 1.8	広口甕。口縁部外側はわずかに拡張される。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	青 ◎		
10	甕	口径 (34.2) 残高 3.8	複合口縁甕。口縁部外側に5条の沈漫文あり。口縁裏面は丸い。提口縁を有す。	①ヨコナデ ②ハケ(7本/cm)	ヨコナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~3) ◎		41

## 釜ノ口遺跡8次調査地

SB 2 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内側)	胎 土 焼 成	備考	因縁
				外 面	内 面				
11	壺	残高 3.5	肩部片。上端にヘラ状工具による列点文あり。5条の波状文あり。	マツツ	ナデ(ケズリ)	乳茶褐色 乳黄色	密 ○		41
12	壺	残高 3.4	壺の副部小片。本壺文あり。弥生頭顎。	ミガキ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) ○	⑦区	41
13	鉢	口径 (16.5) 残高 2.3	鉢の口縁部片。口縁部は「コ」字状。 器壁薄い。	ヨコナデ	(口縁)ヨコナデ (口縁)ケズリ	乳白色 乳白色	密 ○	③区	
14	高環	口径 (18.8) 残高 4.0	折り曲げ口縁。口縁端部は上方に延張。 口縁端面に2条の沈線文あり。	(1)ヨコナデ (1)ハケ(8木/cm)	(2)ヨコナデ (2)ミガキ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~2) ○	張出部 周空溝	
15	高環	残高 3.8	環部小片。外傾しわざかに外反する。端 接部の縫合線を取る。	(口縁)ヨコナデ (口縁)ミガキ	ミガキ	乳橙色 乳橙色	石・長(1~2) ○	SP ④	
16	高環	残高 5.7	柱部片。先端技法。	ナデ	(2)ミガキ? (2)ナデ	乳橙色 乳橙色	石・長(1~2) ○		
17	高環	残高 7.8	充填技法。柱部内面にシボリ痕あり。	マツツ	ナデ(シボリ○)	橙色 乳橙色	石・長(1~4) ○	⑧区	
18	高環	残高 5.2	焼成前円孔(直径1.4cm)あり。	ハケ	ケズリ	乳橙色 乳橙色	石・長(1~5) ○	SP ④	
19	高環	底径 (10.4) 残高 2.2	脚端部は拡張され、脚端面に2条の凹 文を施す。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) ○		41
20	高環	底径 (20.0) 残高 3.1	外反する脚端部。脚端部は「コ」字状。	ヨコナデ	ハケ(6木/cm)	乳灰色 乳灰色	石・長(1~3) 金 ○	⑨区	
21	甕	底径 5.8 残高 3.4	わずかにくびれ、上げ底の底部。	ハケ→ナデ	ナデ	乳橙色 橙色	石・長(1~3) ○	黒斑	
22	甕	底径 (5.9) 残高 3.3	わずかにくびれ、上げ底の底部。	ハケ(7~8木/cm) →ナデ	ハケ→ナデ	暗赤橙色 暗赤橙色	石・長(1~3) ○		
23	甕	底径 (5.4) 残高 2.8	わずかにくびれる平底の底部。	マツツ	マツツ	乳灰色 乳色	石・長(1~3) ○		
24	甕	底径 2.9 残高 1.9	突出するやや丸みのある平底。	タタキ	マツツ	乳白色 乳白色	石・長(1~3) ○		
25	甕	底径 (5.8) 残高 3.8	突出ぎみで丸みのある平底。	マツツ	マツツ	乳黄色 酒色	石・長(1~4) ○	墨斑 開空溝	
26	甕	底径 (6.0) 残高 4.5	突出ぎみの平底。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ(指痕 痕)	乳白色 乳灰色	石・長(1~5) ○	黒斑	

表35 SB 2 出土遺物観察表 石製品

(1)

番号	器種	残存	材質	法 重				備 考	因縁
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
27	石礫	ほぼ完形	サスカイト	1.60	1.30	0.25	0.507		41
28	石礫	ほぼ完形	サスカイト	3.00	1.80	0.42	1.960		41

## 出土遺物観察表

SB 2 出土遺物観察表 石製品

(2)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
29	石包丁	2/3	粘晶片岩	7.40	4.30	0.70	32.441	穿孔2箇所(貫通せず) 貼床土内	41
30	石包丁	1/5	粘晶片岩	5.20	2.90	0.40	8.539	③区	41
31	砥石			10.40	8.30	5.50	515.000	張出部	41
32	砥石	完形	砂岩	4.60	2.70	2.30	25.649	④区	41
33	磨石	完形		4.60	2.40	2.00	37.223	⑤区	41
34	台石			9.00	8.20	4.90	360.000	一部黒化する。 S P ④	41
35	不明品			12.10	8.20	5.20	716.000	一部黒化する。	
36	不明品			7.40	8.30	5.80	485.000	一部黒化する。	

表36 SB 2 出土遺物観察表 装身具

(1)

番号	器種	出土地点	残存	材質	色	法量				備考	図版
						長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)		
37	小玉	①区	完形	ガラス	青	2.8	4.8	1.6	0.074	GNO. 1	
38	小玉	②区	%	ガラス	青	3.0	3.5	1.0	0.024	GNO. 2	
39	小玉	③区	完形	ガラス	青	2.5	3.8	1.0	0.047	GNO. 3	
40	小玉	④区	完形	ガラス	青	2.0	3.8	1.2	0.043	GNO. 4	
41	小玉	⑤区	完形	ガラス	青	2.0	4.1	2.1	0.048	GNO. 5	
42	小玉	⑥区	完形	ガラス	青	2.4	3.0	1.0	0.025	GNO. 6	
43	小玉	⑦区	完形	ガラス	青	3.8	3.8	1.5	0.070		
44	小玉	⑧区	完形	ガラス	青	1.9	3.0	1.2	0.016		
45	小玉	⑨区	完形	ガラス	青	1.5	2.8	1.0	0.016		
46	小玉	⑩区	完形	ガラス	青	1.6	2.9	1.1	0.024		
47	小玉	⑪区	完形	ガラス	緑	1.7	4.0	2.0	0.036		
48	小玉	⑫区	完形	ガラス	緑	1.8	3.0	1.6	0.017		
49	小玉	⑬区	完形	ガラス	青	2.0	3.1	1.5	0.019		
50	小玉	⑭区	%	ガラス	青	2.8	3.8	1.0	0.023		
51	小玉	⑮区	完形	ガラス	青	3.0	4.0	1.8	0.063		
52	小玉	⑯区	%(破)	ガラス	青	3.0	4.0	0.8	0.044		
53	小玉	⑰区	完形	ガラス	緑	1.6	3.0	1.0	0.019		
54	小玉	⑱区	完形	ガラス	青	1.6	2.7	1.0	0.017		
55	小玉	⑲区	完形	ガラス	青	2.0	2.4	1.0	0.014		
56	小玉	⑳区	%	ガラス	青	2.0	3.0	1.0	0.008		
57	小玉	㉑区	完形	ガラス	青	2.0	2.8	1.0	0.017		
58	小玉	㉒区	完形	ガラス	青	2.3	2.5	1.0	0.017		

SB 2 出土遺物観察表 裝身具

(2)

番号	器種	出土地点	残存	材質	色	法 量				備 考	図版
						長さ(㎜)	幅(㎜)	孔径(㎜)	重さ(㌘)		
59	小玉	④区	完形	ガラス	青	4.0	4.5	2.0	0.097	最大重量品	
60	小玉	④区	完形	ガラス	紺	1.2	3.4	1.0	0.023		
61	小玉	④区	完形	ガラス	青	2.0	3.8	1.8	0.041		
62	小玉	④区	完形	ガラス	紺	3.4	4.0	2.0	0.092		
63	小玉	④区	完形	ガラス	紺	2.4	3.5	1.3	0.050		
64	小玉	④区	完形	ガラス	青	2.0	3.0	1.0	0.024		
65	小玉	④区	完形	ガラス	青	2.1	2.8	1.0	0.013		
66	小玉	④区	完形	ガラス	青	2.8	2.8	1.5	0.022		
67	小玉	④区	完形	ガラス	青	2.2	2.9	1.8	0.020		
68	小玉	④区	完形	ガラス	青	1.7	2.8	1.1	0.015		
69	小玉	④区	完形	ガラス	青	2.5	3.3	1.9	0.022		
70	小玉	④区	完形	ガラス	青	2.5	3.0	1.0	0.026		
71	小玉	④区	完形	ガラス	青	2.2	2.8	1.2	0.023		
72	小玉	④区	完形	ガラス	薄紺	1.2	3.2	1.3	0.017		
73	小玉	④区	完形	ガラス	青	2.0	3.3	1.3	0.018		
74	小玉	④区	完形	ガラス	紺	1.3	2.8	1.3	0.012	最小重量品	
75	小玉	④区	完形	ガラス	青	2.5	4.0	2.0	0.036		
76	小玉	④区	完形	ガラス	紺	1.9	3.3	1.5	0.016		
77	小玉	④区	完形	ガラス	紺	2.7	3.8	1.2	0.063		
78	小玉	④区	完形	ガラス	青	2.0	4.0	1.3	0.027		
79	小玉	④区	完形	ガラス	青	1.8	4.0	1.0	0.014		
80	小玉	④区	完形	ガラス	青	2.0	3.0	1.1	0.019		
81	小玉	④区	完形	ガラス	濃紺	3.0	4.1	1.9	0.076		
82	小玉	④区	完形	ガラス	紺	1.9	3.3	1.1	0.026		
83	小玉	④区	完形	ガラス	黃青	2.0	2.8	1.0	0.020		
84	小玉	④区	完形	ガラス	青	1.5	2.7	1.1	0.015		
85	小玉	④区	完形	ガラス	青	2.0	4.0	1.6	0.047		
86	小玉	④区	完形	ガラス	薄紺	2.7	4.0	2.0	0.051		
87	小玉	④区	完形	ガラス	青	1.9	3.0	1.0	0.030		
88	小玉	④区	完形	ガラス	紺	2.6	3.0	1.0	0.034		
89	小玉	④区	完形	ガラス	青	1.1	3.0	1.1	0.013		
90	小玉	④区	完形	ガラス	薄紺	1.8	4.0	1.5	0.026		
91	小玉	不明	完形	ガラス	青	3.0	4.0	1.5	0.090		
92	小玉	不明	片	ガラス	青	2.5	4.0	1.0	0.025		
93	小玉	不明	片	ガラス	青	4.5	3.5	1.1	0.045		
94	小玉	不明	完形	ガラス	青	1.3	3.4	1.4	0.018		
95	小玉	不明	完形	ガラス	紺	2.0	3.0	1.4	0.032		
96	小玉	不明	完形	ガラス	紺	2.5	4.0	1.5	0.049		
97	小玉	不明	完形	ガラス	黃青	2.2	3.4	1.1	0.032		
98	小玉	不明	完形	ガラス	青	1.8	3.5	1.3	0.027		
99	小玉	不明	完形	ガラス	濃紺	3.2	4.2	1.2	0.082		
100	小玉	不明	完形	ガラス	紺	1.5	2.5	1.0	0.015		
101	小玉	不明	完形	ガラス	青	1.9	3.8	1.8	0.043		
102	小玉	不明	完形	ガラス	紺	2.9	4.0	1.1	0.063		
103	小玉	不明	完形	ガラス	濃紺	2.1	3.0	1.0	0.039		
104	小玉	不明	完形	ガラス	青	1.9	3.0	1.0	0.019		
105	小玉	不明	完形	ガラス	青	2.4	3.0	1.0	0.028		
106	小玉	不明	完形	ガラス	紺	1.5	3.3	1.2	0.027		
107	小玉	不明	完形	ガラス	濃紺	3.0	3.8	1.5	0.048		

## 出土遺物観察表

SB 2 出土遺物観察表 装身具

(3)

番号	器種	出土地点	残存	材質	色	法量				備考	図版
						長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)		
108	小玉	不明	完形	ガラス	黄青	2.0	3.1	1.2	0.030		
109	小玉	不明	完形	ガラス	青	3.0	3.8	1.7	0.044		
110	小玉	不明	完形	ガラス	緑	2.0	3.5	1.2	0.039		
111	小玉	不明	完形	ガラス	緑	2.8	4.0	1.7	0.058		
112	小玉	不明	完形	ガラス	青	2.2	3.2	1.0	0.037		
113	小玉	不明	完形	ガラス	緑	3.2	4.2	1.5	0.054		
114	小玉	不明	完形	ガラス	青	3.0	4.0	1.5	0.068		
115	小玉	不明	完形	ガラス	青	2.0	3.5	2.0	0.031		
116	小玉	不明	完形	ガラス	青	2.0	3.0	0.8	0.015		
117	小玉	粘土土	完形	ガラス	緑	3.3	3.0	1.2	0.038		
118	小玉	同略記	完形	ガラス	青	1.8	3.0	1.0	0.019		
119	小玉	同上	片	ガラス	緑	(3.5)	(2.5)	(1.0)	0.022		

表37 SB 2 炉出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外側) (内側)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
120	甕	口徑(22.2) 底高 7.9	口縁端部はナデにより拡張される。頸部下端に板状工具の本口による「ノ」の字状文を露す。	ヨコナデ ハケ(3本/cm)	ヨコナデ ハケ(6~7本/cm)→ナデ	乳褐色 黒色	石・長(1~3) ◎	濃灰	
121	甕	口径(20.3) 底高 3.6	口縁端部はナデによりわずかに拡張される。口縁端面は面をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色 茶褐色	石・長(1~4) ◎		
122	甕	口径(26.8) 底高 1.8	口縁部は上方に拡張され、口縁端面に3条の沈線文を施す。	マメツ	ヨコナデ	橙色 桜色	石・長(1~4) ◎		
123	甕	口径(14.6) 底高 2.9	口縁部は上方に拡張される。口縁端部はナデにより凹む。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黃灰色 乳黃灰色	石・長(1~3) ◎		
124	高环	底径(15.7) 底高 6.3	焼成前円孔(直径1.0cm)。脚端部は拡張され、脚端面はナデにより凹む。	ハケ(10本/cm) →ナデ (脚端)ヨコナデ	ケズリ	乳褐色 乳橙色	素 ◎		
125	高环	底径(16.5) 底高 3.7	焼成前円孔(直径1.2cm)。脚端部は拡張。脚端面はナデ凹み。	マメツ (脚端)ヨコナデ	ケズリ	乳褐色 乳橙色	石・長(1~4) ◎	62	
126	甕	底径(5.7) 底高 4.5	平底。	マメツ	ナデ	乳褐色 乳灰色	石・長(1~4) ◎		

表38 SB 2 炉出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
127	不明品			9.00	7.50	3.30			
128	不明品			7.10	5.60	4.00			

表39 S B 2 炉出土遺物観察表 装身具

番号	器種	出土地点	残存	材質	色	法量				備考	図版
						長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)		
129	小玉	壇上中	完形	ガラス	青	2.0	4.1	2.0	0.042		
130	小玉	埋土中	完形	ガラス	黄青	2.2	3.0	1.0	0.031		
131	小玉	埋土中	完形	ガラス	緑	2.0	3.8	1.2	0.039		
132	小玉	埋土中	完形	ガラス	青	2.0	3.0	1.2	0.029		
133	小玉	埋土中	完形	ガラス	青	2.0	3.2	1.2	0.028		
134	小玉	埋土中	完形	ガラス	青	1.9	2.1	1.0	0.015		

表40 S B 3 貼床土①出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版	
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
135	石冠	丁	完形	結晶片岩	8.90	4.70	0.60	37.849	穿孔2箇所、扁洞 刃。	42
136	不明品				8.15	7.30	4.50	438.000	◎区	

表41 S B 3 貼床土①出土遺物観察表 装身具

番号	器種	出土地点	残存	材質	色	法量				備考	図版
						長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)		
137	小玉	◎区	14	ガラス	青	4.0	(3.0)	(1.0)	0.037	GNO. 3	
138	小玉	◎区	完形	ガラス	青	3.0	3.1	1.0	0.044	GNO. 4	
139	小玉	◎区	1/2	ガラス	青	3.5	3.0	0.8	0.029		
140	小玉	◎区	完形	ガラス	青	2.0	4.1	1.8	0.046		
141	小玉	◎区	完形	ガラス	青	2.8	3.0	1.4	0.040		
142	小玉	◎区	完形	ガラス	青	2.8	3.9	1.8	0.048		
143	小玉	◎区	完形	ガラス	青	2.7	4.4	2.1	0.044		
144	小玉	◎区	完形	ガラス	青	2.0	4.0	1.5	0.051		
145	小玉	◎区	1/2	ガラス	青	2.0	2.7	0.7	0.013		
146	小玉	◎区	完形	ガラス	薄青	1.5	2.8	1.0	0.011		
147	小玉	不明	完形	ガラス	青	2.0	3.0	1.2	0.028		

表42 S B 3 炉②出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外側) 色調 (内側)	陶土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
148	甕	口径(16.8) 残高 4.8	外反する口縁部。口縁端部は丸みのある「コ」字状。	口コナデ ハケ(8木/cm)	口コナデ ハケ(8木/cm)	乳白色 乳白色	石・長(1~4) ◎		
149	支脚	底径 12.0 残高 4.1	支脚形土器の脚部。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	石・長(1~3) ◎		
150	ミニ チュウ	底径 2.6 残高 2.5	丸みのある半底。内外面に爪跡あり。	ナデ	ナデ	黒色 黒色	石・長(1~2) ◎		

## 出土遺物観察表

表43 S B 3 炉②出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
151	石磨丁	1/3		7.40	4.65	0.85	37.929	再加工作品	42
152	砥石	完形	結晶片岩	16.70	9.20	7.20	1,110.000		
153	不明品	ほぼ完形		14.90	8.50	5.00			42

表44 S B 3 炉②出土遺物観察表 装身具

番号	器種	出土地点	残存	材質	色	法量				備考	図版
						長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)		
154	小玉	埋土中	2/3	ガラス	青	2.4	3.5	1.5	0.025		
155	小玉	埋土中	完形	ガラス	青	2.5	5.0	2.0	0.066		
156	小玉	埋土中	完形	ガラス	青	2.9	3.5	1.5	0.058		
157	小玉	埋土中	1/4	ガラス	青	(5.3)	(3.0)	(1.0)	0.048		
158	小玉	埋土中	完形	ガラス	青	4.8	4.1	1.8	0.112	側面に小円孔あり	
159	小玉	埋土中	完形	ガラス	青	1.5	2.8	1.2	0.017		
160	小玉	埋土中	1/2	ガラス	青	3.0	3.8	0.7	0.027		
161	小玉	埋土中	完形	ガラス	青	2.6	3.0	1.2	0.029		

表45 S B 3 贰床土②出土遺物観察表 装身具

番号	器種	出土地点	残存	材質	色	法量				備考	図版
						長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)		
162	小玉	⑩区	完形	ガラス	薄緑	1.6	2.8	1.5	0.011		
163	小玉	⑩区	完形	ガラス	青	2.7	3.0	1.2	0.036		
164	小玉	⑩区	完形	ガラス	青	2.8	3.9	1.0	0.056		
165	小玉	⑩区	完形	ガラス	青	2.0	2.8	0.8	0.020		
166	小玉	⑩区	1/2	ガラス	青	2.5	3.0	1.3	0.021		
167	小玉	⑩区	1/2	ガラス	青	2.0	4.0	0.7	0.026		
168	小玉	⑩区	完形	ガラス	薄緑	1.5	3.5	1.2	0.027		
169	小玉	⑩区	完形	ガラス	青	1.8	3.0	1.1	0.021		
170	小玉	不明	完形	ガラス	青	2.0	2.9	1.3	0.021		
171	小玉	不明	完形	ガラス	黄青	1.5	3.4	1.2	0.015		
172	小玉	不明	1/4	ガラス	青	3.0	(2.8)	(1.0)	0.032		

表46 S B 3 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内側)	施 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
173	甕	口徑(22.4) 残高 5.1	口縁端部は上下方に拡張。口縁端面に3 条の沈線文あり。	(1)ヨコナデ (2)ミガキ	(1)ヨコナデ (2)ハケ(10本/ cm)・ナデ	乳色 乳白色	石・長(1~7) ○	⑩区	43
174	甕	口徑(19.6) 残高 2.2	口縁端部は丸みのある「コ」字状。口縁 端面はナデ凹む。	(1端)ヨコナデ (2)ナデ	ナデ	乳白色 乳茶色	石・長(1~4) ○	⑩区	
175	甕	口徑(14.0) 残高 7.8	外反する口縁部。口縁端部は拡張する。	マメツ	マメツ	乳白色 乳柑色	石・長(1~6) ○	覆付着 SK⑥ 出土	

## 釜ノ口遺跡8次調査地

SB 3 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外側) (内側)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
176	甕	口径 (14.0) 残高 2.9	「く」字状口縁。口縁端面はナデにより凹む。口縁端部は拡張。	ヨコナデ	ヨコナデ	赤褐色 赤褐色	石・長(1~2) ○	④区	
177	甕	口径 (13.8) 残高 5.1	外反する口縁部。口縁端部は先細りする。 ①ヨコナデ ②マツツ	①ヨコナデ ②マツツ	②ヨコナデ ②ケズリ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~3) ○		
178	甕	口径 (13.4) 残高 3.9	口縁端部は下方に拡張。口縁端面に2条の沈線文あり。	①ヨコナデ ②ハケ	①ヨコナデ ②ナデ	乳黄色 褐色	石・長(1~3) ○	④区	43
179	甕	口径 (19.0) 残高 1.5	広口金。口縁端部はわずかに拡張。口縁端面に3条の沈線文あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	密 金 ○	周壁溝 内	
180	甕	口径 (12.6) 残高 4.5	口縁端部は丸い氣味に丸い。	①マツツ ②ハケ	ヨコナデ	乳黑色 乳褐色	石・長(1~5) ○		
181	甕	胴径 (13.0) 残高 6.8	短頸甕の胴部片。瘤球形。	マツツ	マツツ	乳黃褐色 乳灰褐色	石・長(1~5) ○		
182	高杯	口径 (29.8) 残高 3.5	杯部片。口縁部は大きく外反。口縁端部は丸みのある「コ」字状。口縁端面に1条の沈線文あり。	①ヨコナデ ②ミガキ	マツツ	乳色 乳灰色	石・長(1~2) ○		
183	器台	底径 (23.0) 残高 3.8	器台の脚部。脚端部は拡張する。脚端部に3条の凹線文を施す。	脚端 ヨコナデ 脚裡 マツツ	ケズリ	乳茶色 乳茶色	石・長(1~4) 金 ○		43
184	甕	底径 (4.2) 残高 3.4	わずかにくびれ上昇底の底部。	ハケ(10本/cm) →ヨコナデ	ハケ(10本/cm)	黒色 乳灰色	石・長(1~4) 金 ○		
185	甕	底径 (4.0) 残高 3.0	わずかにくびれる平底の底部。	ハケ→ナデ	ケズリ	赤褐色 乳灰色	石・長(1~4) ○	④区	
186	甕	底径 (5.6) 残高 8.8	平底の底部。	ハケ(9~10本/cm)	ケズリ	乳褐色 黑色	石・長(1~5) ○	④区	
187	支脚	底径 (5.0) 残高 3.0	支脚か?。底部は凹む。	ハクリ(指痕坑)	ハクリ	乳色	石・長(1~3) ○		
188	上玉	幅さ 3.2 厚さ 3.3 はさ 2.5	焼成前穿孔(径0.6cm)。	ナデ		乳灰色	密 ○		43

表47 SB 3 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
189	石包丁	ほぼ完形		10.30	5.20	1.10	81.852	周壁溝内出土	
190	石包丁	1 / 3	結晶片岩	3.50	3.20	0.80	12.503	④区出土 未製品	
191	石斧	1 / 2	結晶片岩	10.50	4.50	5.30	450.000	基部未研磨	43
192	磨石	完形		26.40	4.50	3.40	140.000		
193	研石	4 / 5		24.20	18.00	9.30	5,100.000		
194	不明品			13.90	12.80	8.70	2,400.000		

## 出土遺物観察表

表48 SB 3 出土遺物観察表 装身具

番号	器種	出土地点	残存	材質	色	法量				備考	図版
						長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)		
195	小玉	④区	完形	ガラス	青	2.5	4.2	2.8	0.048	GNa 1	
196	小玉	⑨区	完形	ガラス	青	3.0	4.9	2.0	0.075	GNa 2	
197	小玉	②区	完形	ガラス	青	1.8	3.0	1.1	0.024		
198	小玉	⑤区	1/2	ガラス	青	2.0	(2.0)	(0.5)	0.013		
199	小玉	⑦区	1/2	ガラス	緑	3.0	3.8	1.0	0.017		
200	小玉	⑩区	完形	ガラス	薄青	1.2	2.1	1.1	0.009	透明感あり	
201	小玉	⑪区	完形	ガラス	青	1.8	3.0	1.2	0.017		
202	小玉	⑫区	1/2	ガラス	青	2.4	3.0	1.0	0.017		
203	小玉	⑬区	完形	ガラス	黄青	2.8	3.1	1.0	0.045		
204	小玉	⑭区	完形	ガラス	緑	3.0	3.8	2.0	0.054		
205	小玉	⑮区	完形	ガラス	青	3.2	4.0	1.5	0.086		
206	小玉	⑯区	完形	ガラス	青	2.9	3.1	1.0	0.031		
207	小玉	⑰区	1/2	ガラス	薄緑	2.0	3.5	1.0	0.018		
208	小玉	⑱区	完形	ガラス	青	2.8	3.3	1.5	0.035		
209	小玉	⑲区	1/2(弱)	ガラス	青	3.0	(4.2)	(1.0)	0.031		
210	小玉	⑳区	完形	ガラス	青	3.0	3.1	1.8	0.058		
211	小玉	㉑区	完形	ガラス	緑	2.7	2.9	1.0	0.030		
212	小玉	㉒区	1/2	ガラス	濃緑	2.7	3.0	1.0	0.016		
213	小玉	不明	1/2(弱)	ガラス	青	3.0	(3.5)	(1.0)	0.019		

表49 SB 3 出土遺物観察表 木製品

番号	器種	造存状態	樹種	法量				木取り	備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	直径(cm)			
214	柱材		サクランボ	61.5			14.1	芯持材	S P①	44
215	柱材		コナラ属 アカガシ亜属	45.8			10.3	芯持材	S P②	44
216	柱材		コナラ属 アカガシ亜属	40.0			11.6	芯持材	S P③	44
217	柱材		コナラ属 アカガシ亜属	56.5			12.1	芯持材	S P④	44

表50 SD 3 と思われる出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調査		色調 (外側) (内側)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
218	甕	口径(16.5) 残高 3.3	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は丸い。頭認下に刻文、4ヶあり。	⑪ヨコナデ	⑫ヨコナデ	乳白色 乳褐色	石・長(1~3) ◎		
219	甕	口径(24.0) 残高 1.0	口縁端部はわずかに上下方に彫刻される。(1)縁端面に3条の沈線文あり。	⑪ハケ(6本/1cm) (1)縁端面に3条の沈線文あり。	⑫ハケ(8木/1cm)→ミガキ	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1~2) ◎		
220	甕	口径 5.2 残高 8.5	突出する平底の底部。底部に粘土つまみ上げ痕が顯著に残る。側面に張りがある。	⑪ハケ(6~7本/1cm)→ナデ	⑫ナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~5) ◎		
221	盆	底径(20.0) 残高 2.3	古付盆の脚跡。脚端部は丸い。	⑪下マメツ (脚跡)ヨコナデ	⑫ハケ(10木/1cm)→ナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~5) ◎	黒斑	

S D 3 と思われる出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内側)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
222	鉢	残高 4.4	台付鉢の脚部	⑩ハケ(9~10本/cm)	⑪ナデ	乳白色 乳褐色	石・長(1~5) ○		
223	高 环	残高 6.9	円環状の柱添、器壁は厚い。	⑫マツツ	⑬マツツ	乳白色 乳白色	石・長(1~5) ○		

表51 S B 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内側)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
224	壺	口径(8.0) 残高 4.1	外上方に直線的に伸びる口縁部。口縁端部は丸く、刃目を施す。	⑩ハケ(7~8本/cm)→ナデ	⑪ヨコナデ	乳茶色 乳茶色	石・長(1~3) ○		44
225	壺	口径(16.0) 残高 2.2	口縁部の小片。口縁端部は丸い。	⑪ヨコナデ ⑫ナデ	⑬ナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~3) 金○		

表52 S B 1 出土遺物観察表 装身具

番号	器種	出土地点	残存	材質	色	法 量				備 考	図版
						長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)		
226	小玉	床面	光形	ガラス	白	3.0	4.8	1.5	0.125	G No.1	

表53 S B 1 出土遺物観察表 木製品

番号	器種	遺存状態	樹種	法 量			木取り	備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
227	柱材		シャヤシャンボ	19.30			16.00	芯持材	S B 1 内 S P ①
228	碇板		スタジイ	18.00	10.40	2.90			S B 1 内 S P ①

表54 S B 4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外側) 色調 (内側)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
229	壺	頭部径(18.2) 残高 4.2	頭部に1条の断面三角形状の凸筋を貼付。 斜格子目文の刻目を施す。	⑩上)ハケ(8本/cm)	⑪上)ハケ(8~12本/cm)	乳白色 乳白色	石・長(1~3) 金○		42
230	壺	残高 1.9	広口部の口縁部片。口縁端部に指描き波状文を4条施す。	⑫マツツ	⑪ヨコナデ ⑫ミガキ	乳白色 乳白色	長(1~3.5) 密○	黒斑	
231	壺	底径(5.2) 残高 2.1	厚みのある平底	⑬ナデ	⑭ナデ	暗茶褐色 乳白色	石・長(1~6) 金○		
232	甕	口径(20.2) 残高 3.1	折り曲げ口縁。口縁端部に刻目、頭部に4条の沈抜文を施す。	⑪⑬ナデ	⑪⑭ナデ	乳白色 乳白色	長(1~2) ○		42

表55 S B 4 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
233	台石			12.30	15.70	6.50	1,950.000		

## 出土遺物観察表

表56 振立1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外側) (内側)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
234	高杯	残高 1.9	脚端部は丸い。	⑩ハケ(6本/cm) →ミガキ (捺地) ロコナデ	⑪ナデ	乳褐色 乳灰色	石・長(1~3) ○		
235	甕	底径 (5.4) 残高 3.2	わずかにくびれる平底の底部	⑫下) ナデ ⑬ハケ	⑭ナデ	茶褐色 乳灰色	石・長(1~2) ○		
236	甕	底径 (6.0) 残高 5.0	唇壁は厚い	ハケ	ハケ	乳褐色 乳褐色	石・長(2~4) ○		

表57 振立1出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
237	石磨丁	ほぼ完形		8.00	4.90	0.70	47.61		49

表58 SK1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外側) (内側)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
238	甕	口径 22.5 底径 4.8 器高 32.0	口縁部はやや反り気味にのびる。口縁端部は下方に肥厚する。胴部上位に張りをもつ。底部は、やや小さい平底。	①ヨコナデ ②ナデ→ハケ (10本/cm) もつ。底部は、やや小さい平底。	③ヨコナデ ④ナデ→ハケ (9~10本/1.5cm)	暗褐色 暗褐色	石・長(1~4) ○		45
239	甕	底径 (3.4) 残高 23.2	口縁部を欠損する。底部は小さい平底である。	⑤上) ハケ(10~11本/cm) (胴下) ゲザリ→ハケ	ハケ→ナデ	乳茶色 乳茶色	石・長(1~7) ○		
240	甕	残高 4.1	上方に向かってのびる剥離片。	ハケ(6~7本/1.5cm) →ヨコナデ	ハケ→ナデ	孔黄褐色 孔黄褐色	石・長(1~3) 金 ○		
241	甕	底径 (3.2) 残高 24.5	口縁部を欠損する。胴部中位に張りをもつ。底部は、丸みをおびた平底。	⑥中) ハケ→ミガキ ⑦ケズリ→ハケ	ハケ(9~10本/cm) →ナデ	孔黄褐色 孔黄褐色	石・長(1~5) ○		45
242	甕	底径 (4.6) 残高 16.8	胴部中位に張りをもつ。底部は丸みをおびた平底。	⑧中) ハケ(5~6本/cm)→ミガキ ⑨下) ハケ(3本/cm)	ハケ(5~6本/cm) →ナデ (胴下) ハケ→ナデ	孔茶色 孔茶色	長(1~3) ○		
243	鉢	残高 (2.7)	口縁部小片。口縁端部は先細りで丸みをおびる。	ハケ→ミガキ	ハケ(8本/cm)	乳黄色 乳黄色	密 ○		

表59 SK1出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
244	石鋸	完形	サスカイト	2.10	2.00	0.35	0.957		50

## 釜ノ口遺跡8次調査地

表60 SK1出土遺物観察表 木製品

番号	器種	遺存状態	樹種	法量				木取り	備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	直径(cm)			
245	用途不明品		コナラ属 アカガシ属	46.70	13.00	1.70				45
246	編み物	A	本体部片	26.0	9.0					46
		B	縫部片	21.0	11.0					47

表61 SK2出土遺物観察表 土製品 (1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外側) (内側)	施土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
247	甕	口径(16.6) 残高 4.4	「く」字状口縁。口縁端部は丸い。内外面に明瞭な縦をもつ。	①ヨコナデ (胴上)ハケ	①マツ (胴下)ケズリ	乳白色 乳白色	石・長(1~2) ◎		
248	甕	口径(14.6) 残高 6.5	「く」字状口縁。口縁端部はナデにより縫をもつ。内外面に明瞭な縦をもつ。	①ヨコナデ (胴上)タキ	①マツ (胴下)ケズリ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~3) ◎		
249	甕	口径(14.0) 残高 2.8	「く」字状口縁。内面に明瞭な縦をもつ	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶色 乳茶色	石・長(1~4) ◎		
250	甕	口径(17.0) 残高 3.0	口縁部はやや反り気味に大きく外反する。内外面に明瞭な縦をもつ	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶色 乳茶色	石・長(1~3) ◎		
251	甕	口径(13.6) 残高 2.9	口縁部はやや反り気味に大きく外反する。内外面に明瞭な縦をもつ	ヨコナデ	①マツ (胴上)ケズリ	乳黄褐色 乳黄褐色	石・長(1~3) ◎		
252	甕	口径(12.4) 残高 4.1	「く」字状口縁。内外面に縫をもつ	①マツ (胴上)ハケ(8本/cm)→ナデ	ケズリ	乳黄色 乳黄色	長(1~2) ○		
253	甕	口径(15.6) 残高 23.8	「く」字状口縁。口縁端部は丸い。球形の胴部に丸みのある底部をもつ	①ヨコナデ ②タキ(8~10本/cm)→ナデ	①ヨコナデ (胴下)ハケ	乳黄褐色 乳黄褐色	石・長(1~5) ◎		
254	甕	口径(12.0) 残高 2.7	口縁部は「外方にゆるやかにのびる。」口縁端部は強いヨコナデにより平坦面をもつ	①ヨコナデ ②ハケ→ナデ	ハケ(5本/cm)→ナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~2) ◎		
255	甕	口径(11.0) 残高 4.1	口縁部は反り気味に外反する。口縁端部は先細りで丸く仕上げる。内面に明瞭な縦をもつ	ハケ(10~11本/cm)→ナデ	マツ	赤褐色 赤褐色	石・長(1~3) ◎		
256	甕	残高 3.8	複合口縁甕。拡張部はゆるやかに上外方にのびる。	ケズリ→ナデ	ミガキ	乳白色 乳白色	石・長(1~3) ◎		
257	甕	残高 3.9	複合口縁甕。拡張部は大きめ内傾してのびる。口縁端部は平坦面をなす。5条の波状文あり。	ナデ	抵上ハケ (抵下)ミガキ	乳色 乳灰色	石・長(1~3) ◎		
258	甕	残高 5.0	肩部片。ゆるやかに渦巻する。只縞文を8条施す。	ハケ(1~5本/cm)	マツ	乳色 乳色	石・長(1~4) ◎	黒斑	
259	甕	口径(12.8) 残高 7.0	口縁部は外上方に短くのびる。口縁端部は丸い。小型品。	マツ	マツ	乳白色 乳白色	石・長(1~2) ◎	黒斑	
260	甕	口径(18.4) 残高 5.6	口縁部は外上方にのびる。	マツ	マツ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~5) ◎		
261	甕環	口径(26.0) 残高 3.0	やや反り気味に外反する。口縁端部は丸い。	①ヨコナデ ②ハケ→ミガキ	ミガキ	乳色 乳色	石・長(1~3.5) ◎		

## 出土遺物観察表

SK 2 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外側) 色調 (内側)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
262	高環	残高 4.0	环部下位に丸みをおびた段をもつ。	ミガキ	ミガキ	乳白色 乳白色	石・長(1~3) ◎		
263	高環	残高 4.0	脚部片。器壁が厚い。接合法は差込み技法である。	マメツ	ナデ	乳白色 黑色	石・長(1~2) ◎		
264	高環	残高 5.0	脚部片。器壁が薄い。円孔(直径8mm)を穿つ。	ナデ	ナデ	乳灰色 乳灰色	石・長(1~2) ◎		
265	壺	底径 (3.0) 残高 6.8	厚く小さい平底の底部。	(脚上)タキ (脚下)ハケ→タ タキ	(脚上)ナデ (脚下)マメツ	乳黃褐色 乳黃褐色	石・長(1~3) ◎		
266	壺	底径 (1.0) 残高 1.7	丸底の底部。	ハケ	マメツ	黑色 黑色	石・長(1~3) ◎		

表62 SK 2 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
267	敲石	完形		11.90	9.40	3.80	590.000		

表63 SK 2 出土遺物観察表 木製品

番号	器種	遺存状態	樹種	法量				木取り	備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	直徑(cm)			
268	用途不明品		散乳材	(15.06)	最大1.30	最大0.65			SK 2 W3611	
				現存長	最小0.70	最小0.50				

表64 SD 7 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外側) 色調 (内側)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
269	壺	底径 (10.2) 残高 3.2	厚みのある平底。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	石・長(1~4) 砂 ◎		
270	壺	底径 (8.0) 残高 3.5	厚みのある平底。	ミガキ	ミガキ	乳色 乳色	石・長(1~3) ◎	混底	
271	甕	残高 2.3	口縁部は反り気味に外反する。口縁端部に1束の沈線文を施す。	ヨコハゲ	ヨコナゲ	乳白色 乳白色	石・長(1~2) ◎		

表65 SD 7 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
272	不明品	2/3		12.40	7.10	2.70	220.085		50
273	伏捉斧	刃部大き 欠損		16.10	5.50	4.50	627.000		50

## 釜ノ口遺跡8次調査地

表66 S D 3 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形 態・施 文	調 整		(外側) 色調 (内側)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
274	甕	口径(17.0) 残高 2.2	やや反り気味に外反する口縁部。端部は丸い。内外面に棱をもつ。	ヨコナデ	(口縁)ミガキ (①)マツツ	乳白色 乳褐色	石・長(1~3) ◎		
275	甕	口径(13.9) 残高 3.1	やや反り気味に外反する口縁部。端部は丸い。内面に棱をもつ。	ヨコナデ	(①)ヨコナデ (頭部)ケズリ	乳灰色 乳灰色	砂 ◎		
276	甕	口径(14.0) 残高 3.9	やや反り気味に外反する口縁部。端部は丸い。内面に棱をもつ。	ヨコナデ	(①)ヨコナデ (頭部)ケズリ	乳灰色 乳灰色	砂 金 ◎		
277	甕	口径(19.5) 残高 2.8	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端面はナデにより凹む。	(口縁)ヨコナデ (①)ハケ(10本/cm) →ヨコナデ	ハケ(8本/cm)→ ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	長(1~3) ◎		
278	甕	口径(13.6) 残高 5.6	短くのび外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸い。	(①)マツツ (頭上)ハケ(9本/cm)	(①)マツツ (頭上)ナデ	赤黄色 赤黄色	石・長(1~5) ◎		
279	甕	口径(14.0) 残高 7.8	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部はナデにより凹む。	(口縁)ヨコナデ (①)ミガキ (頭上)ハケ(8~9 4本/cm)→ミガキ	(口縁上)ミガキ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~5) ◎		49
280	甕	頭部径(14.8) 残高 2.7	外面に明瞭な棱をもつ。	ヨコナデ	(①)ナデ (頭上)ケズリ	乳黄色 乳黄色	砂 ◎		
281	甕	口径(14.8) 残高 2.8	複合口縁叢。拡張部は内傾気味に立ち上がる。口縁端部は丸い。	(①)ミガキ (頭上)ハケ(8~9 4本/cm)→ミガキ	ミガキ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~5) ◎		
282	甕	口径(13.6) 残高 4.0	複合口縁叢。口縁端部は面をなす。	マメツ	マメツ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~4) ◎		
283	甕	口径(15.5) 残高 4.0	複合口縁叢。口縁接合部はタガ状にのびる。口縁端部は面をなす。	ナデ	ナデ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~3) ◎		
284	甕	口径(13.6) 残高 4.2	ゆるやかに外反して立ちあがる口縁部。口縁端部はナデにより下方にやや拡張する。	(口縁)ヨコナデ (①)ハケ(7~8本/cm)	(①)ヨコナデ (②)ナデ	乳灰色 乳灰色	石・長(1~2) ◎		
285	甕	口径(12.0) 残高 4.0	やや反り気味に外反する口縁部。	ヨコナデ	(①)マツツ (②)ヨコナデ	乳灰色 乳灰色	石(1)・ 長(1~3) ◎		
286	甕	口径(22.3) 残高 2.7	口縁端部に3条の沈擦文あり。	ナデ	マメツ	乳黄色 乳褐色	石・長(1~2) ◎		
287	甕	口径(23.0) 残高 2.8	口縁端部に3条の沈擦文あり。	マメツ	マメツ	乳黃褐色 乳黃褐色	石(1~1.5)・ 長(1~3) ◎		
288	甕	残高 8.7	大型品。頭部に凸沿1条。	(①)マツツ (②)ヨコナデ	(①)マツツ (②)ハケ(10本/cm)	乳黃褐色 乳茶色	石・長(1~3) ◎		
289	甕	残高 3.3	口縁部わずかに内湾。口縁端部は面をもつ。円孔(直径6mm)	マメツ	ナデ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~3) ◎		49
290	高环	棱径(18.8) 残高 3.3	環部片。環部下位に棱をもつ。	ミガキ	ハケ(6~7本/cm) →ミガキ	乳灰色 乳灰色	石・長(1) ◎		
291	高环	棱径(15.2) 残高 2.2	環部片。環部下位に棱をもつ。	マメツ	マメツ	乳灰色 乳色	砂 金 ◎		
292	高环	棱径(14.4) 残高 2.9	環部片。環部下位に棱をもつ。	マメツ	(环上)マツツ (环下)ハケ(5本/cm)→ナデ	乳色 乳色	石・長(1) ◎		

出土遺物観察表

## SD 3 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外側) (内側)	胎土 焼成	備考	固相
				外面	内面				
293	高环	径 (14.4) 残高 2.3	直立気味に立ち上がる口縁部。	ヨコナデ	ハケ(8本/cm)→ ナデ	乳黄色 乳黄色	長(1~3.5) ◎		
294	高环	口径 (15.0) 残高 3.5	短く外反する口縁部。口縁端部に2条の沈線文あり。	マメツ	〔口上〕ヨコナデ 〔口下〕マメツ	乳灰色 乳灰色	長(1.5~3) ◎		
295	高环	残高 6.5	脚部片。円孔	〔脚上〕マメツ 〔脚下〕ハケ(6本/cm) →ナデ		乳黄色 乳黄色	石(1~2)・ 長(1~4) 金 ○		
296	高环	残高 6.0	脚部片。円孔	〔脚上〕マメツ 〔脚下〕ハケ(8本/cm)	マメツ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~5) ◎		
297	高环	残高 5.2	脚部片。円孔	〔脚上〕マメツ 〔脚下〕ハケ(10本/cm)	マメツ	赤褐色 赤褐色	石・長(1~4) ◎		
298	高环	底径 (12.4) 残高 6.0	脚部片。円孔(底径1.1cm)	〔脚上〕ハケ(5本/cm)→ ナデ	ケズリ	乳灰色 乳灰色	石(1~2)・ 長(1~4) 金 ○		
299	鉢	底径 14.6 残高 4.8	台付鉢の脚部。円孔(底径1.5cm)4ヶ。	〔脚上〕ハケ(5~7本/cm) 〔脚下〕ミガキ		乳褐色 乳褐色	石・長(1~3) ◎		
300	鉢	残高 3.0	台付鉢の脚部。円孔	〔脚上〕ハケ・ミガキ 〔脚下〕マメツ		乳黄色 乳黄色	石・長(1~3) ◎	49	
301	支撑	底径 (12.0) 残高 2.5	脚部片。脚端部は丸みのある面をもつ。	ヨコナデ	ナデ	乳色 乳色	蜜 金 ○		
302	器台	口径 (27.4) 残高 1.5	口縁部片。口縁端部はナデによりやや上方に肥厚する。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳色 乳色	石(2~3)・ 長(1~3) ◎		
303	器台	口径 (21.4) 残高 1.7	口縁部片。口縁端部に2条の沈線文。	マメツ	〔口上〕ナデ 〔口下〕マメツ	乳褐色 乳褐色	長(1~2.5) ◎		
304	甕	底径 (3.4) 残高 3.3	厚みのある平底。	ヨコナデ→ハケ	〔脚下〕マメツ	乳黄色 乳黄色	長(1~2) ◎	黒斑	
305	甕	底径 (3.2) 残高 2.5	厚みのあるやくびれの平底。	マメツ	マメツ	乳褐色 乳灰色	心・長(1~3) ◎		
306	ミニチュア	底径 (2.4) 残高 2.9	小さい平底。	マメツ	マメツ	乳白色 黑色	石・長(1~3) ◎		
307	鉢	底径 (5.0) 残高 3.1	台付鉢の底底。くびれの上げ底。	ハケ(8本/cm)→ ナデ	〔底基〕ナデ	暗灰褐色 暗灰褐色	石(1) 蜜 ○		
308	壺	底径 (5.4) 残高 3.1	くびれの上げ底。	マメツ	マメツ	乳灰色 乳灰色	砂 ○		
309	壺	底径 (8.1) 残高 4.8	くびれの上げ底。	ヨコナデ	ナデ	乳褐色 黑色	長(1~4) ◎		
310	壺	底径 (4.8) 残高 2.4	厚みのある平底。	ハケ(7本/cm)	マメツ	黑色 乳灰色	石・長(1~3) ◎	黒斑	
311	壺	底径 (4.0) 残高 9.2	立ちあがりをもつ平底の底底。	ハケ(7~8本/cm)	ハケ(5本/cm) ハケ(8本/cm)	乳灰色 乳黄色	石・長(1~4) ◎		

## 釜ノ口遺跡 8次調査地

SD 3 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内側)	胎 土 焼 成	備 考	因版
				外 面	内 面				
312	土玉	残高 2.0	ナデにより面をもつ。	ナデ		乳黄色	石・長(1~3) ◎		49

表67 SD 3 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	因版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
313	石鏡	ほぼ完形	サスカイト	2.00	1.40	0.31	0.688		50
314	不明品	完形		5.20	4.90	2.40	96.420		
315	不明品	4 / 5		11.00	9.00	8.00	1,116.000		

表68 SD 3 出土遺物観察表 装身具

番号	器種	出土地点	残存	材質	色	法 量				備 考	因版
						長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)		
316	小玉	埋土	1 / 2	ガラス	青	2.0	2.8	1.0	0.015		
317	小玉	埋土	完形	ガラス	青	2.0	3.0	1.2	0.022		

表69 SD 3 出土遺物観察表 鉄製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	因版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
318	鏡	小片	銅製	19.00- 6.50	8.10- 1.59	2.55- 0.255	11.610		49

表70 SD 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内側)	胎 土 焼 成	備 考	因版
				外 面	内 面				
319	壺	底径 (6.8) 残高 3.4	大きい平底。	ナデ	マメツ	乳褐色 暗茶褐色	石・長(1~4) ◎		49
320	壺	残高 4.9	胴部片。 ヘラ描き沈線文 3 条。	ミガキ	ミガキ	乳色 乳色	石・長(1~3) ◎		49

表71 SD 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外側) (内側)	胎 土 焼 成	備 考	因版
				外 面	内 面				
321	环	口径 (15.0) 残高 3.9	口縁部はやや内凹気味に立ちあがる。 口縁端部は丸い。	マメツ	マメツ	黒灰色 黒灰色	石・長(1~3) ◎		
322	鉢	口径 (21.5) 残高 3.0	大きく外反する口縁部。 口縁端部は丸い。	(口端)ヨコナデ (口)ハケ	(口)ハケ	乳茶色 乳茶色	石・長(1~3) ◎		
323	高环	底径 (13.8) 残高 3.0	脚端面に 1 条の印線文を施す。	(脚端)マメツ (脚端)ヨコナデ	(脚端)マメツ	乳色 乳茶色	石・長(1~3) ◎		

## 出土遺物観察表

表72 SD1出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
324	石庵丁	約1/2	珪基性片岩	6.30	4.20	0.60	27.202		50
325	砥石	3/4		12.10	9.00	6.40	969.000		50

表73 SP19出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
326	不明品	完形		13.2	3.90	1.90	266.000		50

表74 水田址出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
327	不明品			9.60	2.50	0.95	50.000		
328	不明品	4/5		12.00	10.80	6.80	1,035.000		50

表75 第III層出土遺物観察表 土製品 (1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外側) (内側)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
329	环形 受部器	受部径 (12.4) 残高 2.5	たちあがりは欠損する。断面三角状の受 部をもつ。	体上)回転ナデ (体下)回転ヘラ 削り	回転ナデ	青灰色 灰色	密		
330	壺	11径 (7.8) 残高 4.0	短頸壺。口縁部は直く直立し、器部は丸 い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密	○	42
331	擂钵	残高 4.0	口縁端部は上方に被覆する。 内面に8本の筋瘤条認。	回転ナデ	回転ナデ	赤茶褐色 赤茶褐色	長(1) 砂 ○		
332	器台	残高 2.6	器台の柱部。 刻み目と列点文、刺突文を施す。			古灰色 灰色	密	○	
333	甕	残高 3.8	タタキ痕が顯著。	タタキ	ハケ(7本/cm)	黄灰色 黄褐色	石・長(1~2) 密 ○		
334	皿	口径 (11.0) 残高 1.8	口縁部は内湾気味に立ち上がる。 端部は丸い。	マメツ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~2) ○		
335	羽筆	残高 1.3	ツバ部はやや長く横方向にのびる。 端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒色 黑色	密 ○		
336	上釜	残高 10.2	三足付上釜の脚。 直線的にのびる。	マメツ		乳黃褐色 乳黃褐色	石・長(1~2) ○		
337	土釜	残高 8.2	三足付土釜の脚。 湾曲しながらのびる。	マメツ		乳黃褐色 乳黃褐色	石・長(1~2) ○		

## 釜ノ口遺跡 8次調査地

表73 層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外側) (内側)	胎土 焼成	備考	因版
				外 面	内 面				
338	甕	口径 (20.4) 残高 3.2	「く」字状口縁。端部は曲をもつ。	(口縁) ヨコナデ (口縁) ハケ(10本/cm)	(口縁) ハケ(10本/cm)	赤褐色 赤褐色	長(1~4) ○		
339	器台	口径 (24.2) 残高 2.7	円形浮文1ヶ。山形文。	ナデ	ナデ	乳白色 乳白色	長(0.5~1.5) ○	49	
340	甕	口径 (22.6) 残高 2.0	口縁部片。口縁裏面に2条の沈模文あり。	ナデ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~3) ○		
341	高環	残高 3.9	环部小片。口縁端部は欠損。 环部下位に段をもつ。	マメツ	ハケ→ミガキ	乳黃灰色 乳黃灰色	石・長(1~4) ○		
342	高環	残高 2.8	光墳技法。	マメツ	ナデ	乳黃灰色 乳黃灰色	密 ○		
343	甕	底径 (4.6) 残高 2.5	厚い平底。	ナデ	ナデ	乳黃褐色 乳褐色	石・長(1~3) ○		
344	甕	底径 (2.8) 残高 1.9	平底の底部。	マメツ	ハケ	黄褐色 乳褐色	石・長(1~4) ○		
345	鉢	底径 (5.8) 残高 2.4	突出ぎみの平底。	マメツ	マメツ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~4) ○		

表76 他の出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外側) (内側)	胎土 焼成	備考	因版
				外 面	内 面				
346	环底	径 (10.2) 残高 2.4	断面三角形の棲をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) ○		
347	甕	底径 (2.6) 残高 3.4	立ち上がりをもつ平底。 指痕顕著。	ナデ	ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	密 ○		
348	甕	底径 (3.8) 残高 2.3	ややくびれる上げ底。	ヨコナデ	マメツ	乳黄色 乳黄色	長(1~2) ○		
349	甕	底径 (6.0) 残高 3.0	立ち上がりをもつ平底。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	砂金 ○		
350	高環	径 (14.0) 残高 1.9	底部に2条の凹線文を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	長(1~3) 金○		

表77 他の出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	因版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
351	石錐	ほぼ完形	サスカイト	5.10	1.45	0.70	5.007		50
352	敲石	完形		6.90	4.20	3.60	163.910		

## 第5章 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

### I. 箕ノ口遺跡7次調査柱材の樹種同定

#### 1. 試料

試料は、箕ノ口遺跡（7次）調査の柱材、礎板の9点である。いずれもPEG処理が施されていた。試料はNo.1～9であり、結果表に示す。

#### 2. 方法

試料の表面に水を付けた後、カミソリを用いて新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製した。切片は生物顕微鏡によって60～600倍で観察し、解剖学的形質および現生標本との対比によって同定した。

#### 3. 結果

結果は表78に示し、分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

表78 箕ノ口遺跡7次調査出土柱材の樹種同定結果

遺物番号	試 料			樹 種 (和名／学名)
18	No.1	柱材	SB 1・SP 1	丸材
19	No.2	礎板	SB 1・SP 1	
20	No.3	柱材	SB 1・SP 2	丸材
21	No.4	礎板	SB 1・SP 2	
22	No.5	礎板	SB 1・SP 2	
23	No.6	柱材	SB 1・SP 3	丸材
24	No.7	柱材	SB 1・SP 4	丸材
28	No.8	柱材	SB 2・SP 1	丸材
29	No.9	柱材	SB 2・SP 2	角材

1) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科（第101図1・2）

横断面：単独の道管が放射方向に配列する放射孔材である。大型の広放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、單列と大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。イチイガシ、アラカシなどがあり、本州南部、四国、九州に分布する。照葉樹林の主要高木である。高さ30m、径1.5mに達する。材は強靭で彈力に富み、主に農工具に用いられる。

2) モチノキ属 *Ilex* モチノキ科 (第101図3)

横断面：小型でやや角張った道管が、単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径はあまり変化しない。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20~40ぐらいである。道管の内壁にはらせん肥厚<sup>†</sup>が存在する。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、直立細胞のみからなる單列のものと、2~6細胞幅で上下の縁辺部の1~3細胞高が單列のものからなる。

以上の形質よりモチノキ属に同定される。モチノキ属は常緑または落葉性の高木または低木で、モチノキ、クロガネモチ、イヌツゲなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。常緑のものは照葉樹林の主要構成要素である。高さ15m、径50cmに達する。やや堅硬な材で、器具などに用いられる。

## 4. 所 見

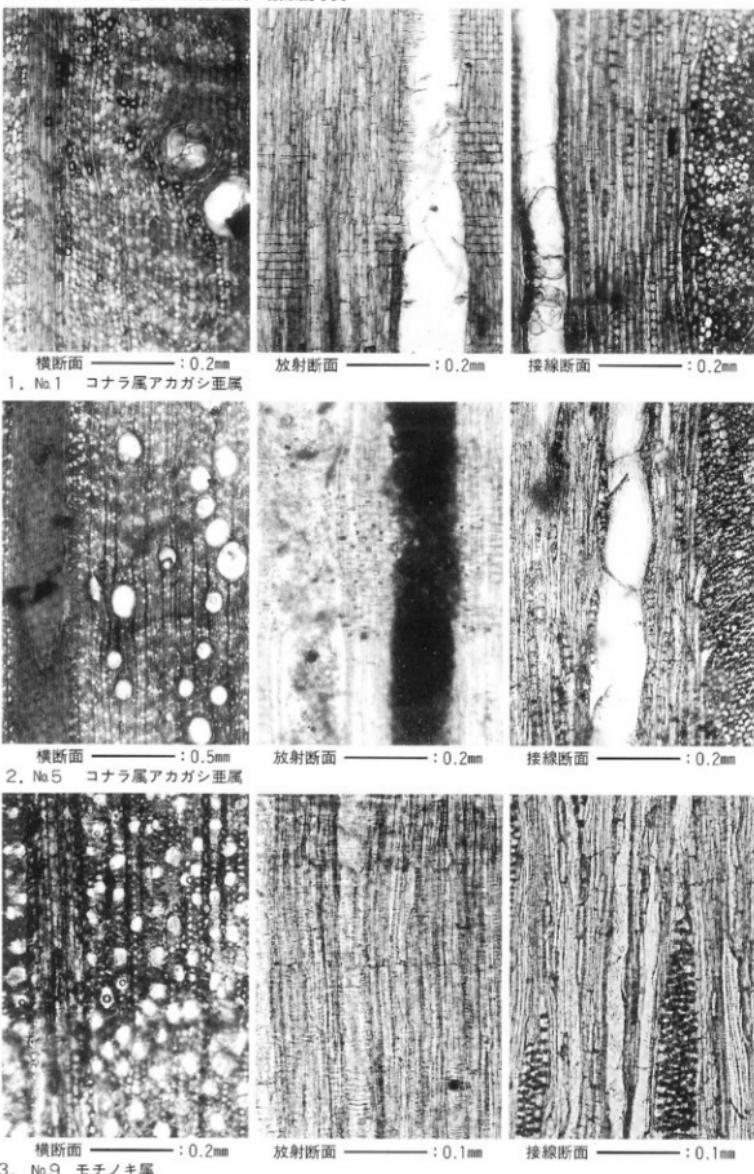
釜ノ口遺跡（7次）調査の柱材、礎板はコナラ属アカガシ亜属とモチノキ属であった。いずれも照葉樹林の主要構成要素で照葉樹林から容易に供給される。SB1はアカガシ亜属ばかりで、SB2はモチノキ属である。造構ごとに異なる樹種が用いられており、建築の単位や時期などが異なると考えられる。

## 〔文献〕

佐伯浩・原川浩 1985 広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、P.49~100。

樹種同定

第101図 差ノ口遺跡7次調査柱材の顕微鏡写真



## II. 釜ノ口遺跡 8次調査における花粉分析

### 1. 試 料

調査対象は、弥生時代の土坑SK1、SK2の堆積物である。試料は、SK1のサンプルNo.1（取り上げNo.2、②層）、サンプルNo.2（取り上げNo.3、③層）、サンプルNo.3（⑤層）、サンプルNo.4（③層、400cc）、サンプルNo.5（土器238内）、サンプルNo.6（土器241内上層）、サンプルNo.7（土器241内下層）、SK2のサンプルNo.1（①層）、サンプルNo.1（②層）の計9点である。

### 2. 方 法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの筋で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、水酢酸によって脱水し、アセトトリス処理（無水酢酸9：1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び水酢酸を加えた後、水洗を行う。

- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類し、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

### 3. 結 果

出現した分類群は、樹木花粉28、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉25、シダ植物胞子2形態の計59である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を示す。

#### 〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、カラマツ属-トガサワラ属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ-シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、ウルシ属、ニシキギ科、カエデ属、トチノキ、クロウメモドキ科、ブドウ属、トネリコ属、ニワトコ属-ガマズミ属

#### 〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属、タデ属サナエタデ属、ギシギシ属、ソバ属、アザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ワレモコウ属、アズキ、セリ科、シソ科、ナス科、オオバコ属、オミナエシ科、タンボボ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

單条溝胞子、三条溝胞子

1) SK 1

SK 1の試料から得られた花粉群集は、草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ科とヨモギ属の出現率が高く、セリ科、アブラナ科、カヤツリグサ科などの出現率もやや高い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属とクリ-シイ属の出現率がやや高く、スギやマツ属複維管束亜属などが伴われる。なお、1-②層、2-③層、3-⑤層、4-③層ではアザ科-ヒユ科の出現率がやや高く、No.12ではコナラ属アカガシ亜属とヨモギ属が多い。栽培植物としては、各試料からイネ属型、2-③層と238からアズキ、241下層からソバ属が検出された。

2) SK 2

②層では草本花粉の占める割合がやや高く、イネ科、ヨモギ属が優占する。また、草本のカナムグラに類似する形態をもつクワ科-イラクサ科の出現率も高い。樹木花粉ではクリ-シイ属、コナラ属アカガシ亜属の出現率がやや高い。なお、②層からは回虫卵がわずかに検出された。

①層ではイネ科、ヨモギ属が優占し、アブラナ科などが伴われる。樹木花粉はやや低率であり、クリ-シイ属、コナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属などが主に出現する。

4. 花粉分析から推定される植生、環境、農耕

SK 1の周囲は、イネ科、ヨモギ属、セリ科、アブラナ科、カヤツリグサ科、アザ科-ヒユ科、クワ科-イラクサ科などの人里植物あるいは農耕雜草の性格をもつ草本が繁茂し、排水のよいやや乾燥した環境が推定される。また、周辺ではイネやアズキ、ソバなどを栽培する水田や畑が営まれていたと考えられる。

SK 2ではイネ科、ヨモギ属、アブラナ科がより卓越し、SK 1の周囲より乾燥した環境であったと推定される。出現率のやや高いクワ科-イラクサ科は乾燥した改變地に生育するカナムグラと考えられる。

森林要素としてはコナラ属アカガシ亜属、クリ-シイ属が優占するため、周辺地域にはカシ類やシイ類の照葉樹林が分布していたとみなされるが、本遺跡の周辺では孤立木のような疎な状態で生育していたと考えられ、森林はやや遠方に分布していたと推定される。

土器内の堆積物である238、241上層、241下層ではアザ科-ヒユ科の出現率がやや低く、238でコナラ属アカガシ亜属とヨモギ属の出現率がやや高いが、構成される分類群には埋土の試料と大きな差異がない。また、特殊な用途に使用される植物に起因する花粉は見いだせない。このことからみて、これらの土器内の堆積物は上坑内の埋土に起源すると考えられよう。

## 5. 小 結

弥生時代の土坑SK1とSK2および土器内の堆積物について花粉分析を行った。その結果、周辺はイネ科、ヨモギ属、セリ科、アブラナ科、カヤツリグサ科、アカザ科ヒュ科、クワ科-イラクサ科などの人里植物あるいは農耕雑草の性格をもつ草本が繁茂し、排水のよいやや乾燥した環境が推定される。また、周辺ではイネやアズキ、ソバなどを栽培する水田や畑が営まれていたと考えられる。

## 〔文献〕

- 中村純 1973 花粉分析、古今書院、p.82-110.
- 金原正明 1993 花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262.
- 島倉巳三郎 1973 日本植物の花粉彫態、大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p.
- 中村純 1980 日本糸花粉の標識、大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p.
- 中村純 1974 イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として、第四紀研究、13、p.187-193.
- 中村純 1977 稲作とイネ花粉、考古学と自然科学、第10号、p.21-30.

## 花粉分析

表79 釜ノ口遺跡8次調査SK1における花粉分析結果

学名	和名	埋 土			238	241土器内		
		②層	③層	⑤層	2440cc	土器内	上層	下層
Arboreal pollen	樹木花粉							
<i>Abies</i>	モミ属	1				2	2	2
<i>Tsuga</i>	ツガ属	1	4	1	1	1	1	1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属復総葉マツ属	11	1	4	6	10	10	3
<i>Larix Pseudotsuga</i>	カラマツ属-トガサワラ属					3		
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	13	14	6	10	6	12	5
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ	1			1	2	1	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌヤマ科-ヒノキ科	1	4	1	2	2	3	4
<i>Juglans</i>	グルミ属						1	
<i>Platanus rhoifolia</i>	ザワグルミ					1		
<i>Ailanthus</i>	ハンノキ属	2	1			1		
<i>Betula</i>	カバノキ属					2	1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ				1	1		
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	タリーシイ属	18	10	40	19	29	31	16
<i>Fagus</i>	ブナ属						2	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ属	9	6	9	3	7	9	1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ属	28	17	48	24	100	29	39
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ		3		1	1		
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	ユノキ属-ムクノキ		1			2	2	
<i>Mallotus japonicus</i>	アカメガシワ					1		
<i>Zanthoxylum</i>	ヤンセンショウ属		2	1				
<i>Rhus</i>	ウルシ属				1			1
<i>Celastraceae</i>	ニシキギ科	1						
<i>Acer</i>	カエデ属		1					
<i>Aesculus turbinalis</i>	トチノキ	1						
Rhamnaceae	クロウメモドキ科				1	2	1	1
<i>Vitis</i>	ブドウ属							
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属						1	
<i>Sambucus-Viburnum</i>	エリトロ属-ガマズミ属		1			1		
Arboreal - Nonarboreal pollen	樹木・草木花粉							
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	5	31	13	17	3	11	7
Rosaceae	バラ科						4	4
Leguminosae	マメ科	1	3	5	8	1		4
Araliaceae	ウコギ科			1				
Nonarboreal pollen	草木花粉							
<i>Typha-Spartanium</i>	ガマ属-ミクリ属						1	2
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属		2		1			
Gramineae	イネ科	98	97	167	89	52	111	126
<i>Oryza</i> type	イネ属型	5	11	6	1	1	11	9
Cyperaceae	カヤツリグサ科	24	18	20	9	3	56	9
<i>Polygonum</i> sect.	タデ属				1			
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サニエタデ節	1	1					
<i>Rumex</i>	ギンジン属			3	1	7		1
<i>Fagopyrum</i>	シバ属						2	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒュ科	15	28	9	12	5	1	4
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1		1				
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属	1				2		
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属				1			
Cruciferae	アブラナ科	16	5	24	6	4	9	19
<i>Sanguisorba</i>	ワレモコウ属			1		1		3
<i>Azusia angularis</i>	アズキ		1					
Umbelliferae	セリ科	14	44	8	56	13	23	21
Labiatae	シソ科			1				
Solanaceae	ナス科						2	
<i>Plantago</i>	オオバコ属		2	4		2	1	1
Valerianaceae	オミナエシ科		3					
Lactucaeidae	タンボボア科	6	5	2	2	2	7	4
Asteroideae	キク亞科	5	17	1	11	1	12	10
Xanthium	オナモミ属			4		1		1
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	48	47	28	45	102	29	38
Fern spore	シダ植物孢子							
Monocolate type spore	單柔溝胞子	6	5	2	5	4	3	3
Trilate type spore	二柔溝胞子	10	9	3	2	3	1	
Arboreal pollen	樹木花粉	87	65	114	70	176	104	76
Arboreal - Nonarboreal pollen	樹木・草木花粉	6	34	19	25	8	11	15
Nonarboreal pollen	草木花粉	234	281	279	229	196	262	233
Total pollen	花粉總數	327	380	412	324	389	377	344
Unknown pollen	未同定花粉	6	6	4	7	4	7	5
Fern spore	シダ植物孢子	16	14	5	7	4	6	4
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

表80 釜ノ口遺跡8次調査SK2における花粉分析結果

学名	分類群 和名	SK2	
		①層	②層
Arboreal pollen	樹木花粉		
<i>Abies</i>	モミ属	5	1
<i>Tsuga</i>	ツガ属	1	
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複椎管束亞属	10	1
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	18	4
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ	1	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	2	5
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	1	1
<i>Castanea crenata-Castanopsis</i>	クリーシイ属	27	19
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	3	5
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	16	14
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	1	
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ		1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草木花粉		
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	15	77
Nonarboreal pollen	草木花粉		
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属		
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属		
Gramineae	イネ科	120	79
<i>Oryza type</i>	イネ属型	1	1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	11	9
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	5	3
Caryophyllaceae	ナデシコ科	2	1
Cruciferac	アブラナ科	24	10
<i>Sanguisorba</i>	ワレモコウ属		1
Umbelliferae	セリ科	6	5
Solanaceae	ナス科		3
Lactucoideae	タンボボ亜科	4	3
Astroideae	キク亜科	11	10
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	59	69
Fern spore	シダ植物胞子		
Monocolate type spore	单条溝胞子	3	7
Trilcate type spore	三条溝胞子	6	6
Arboreal pollen	樹木花粉	85	51
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草木花粉	15	77
Nonarboreal pollen	草木花粉	243	194
Total pollen	花粉総数	343	322
Unknown pollen	未同定花粉	3	1
Fern spore	シダ植物胞子	9	13
Helminth eggs	寄生虫卵		(-)
<i>Ascaris</i>	回虫卵	1	

## 花粉分析

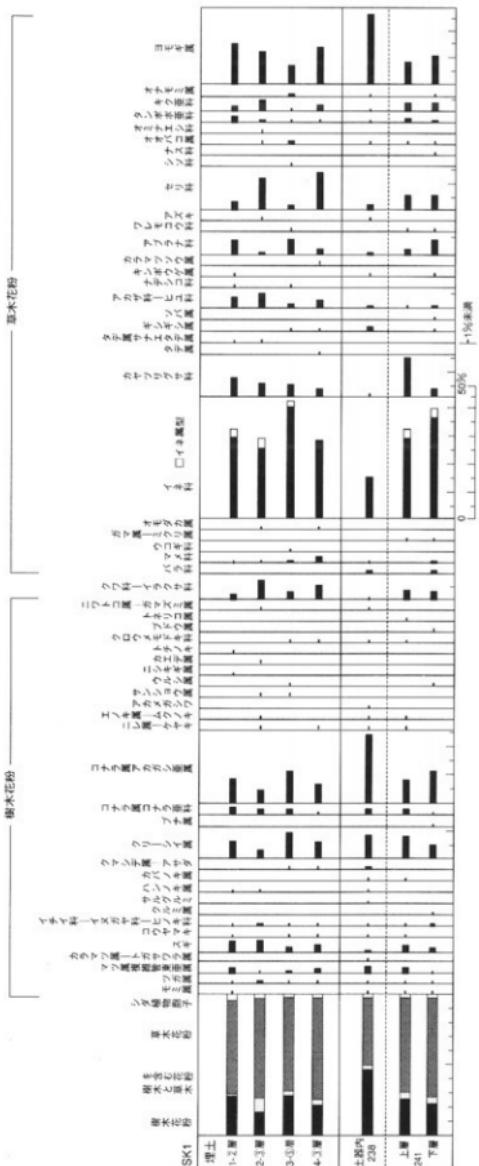


表81 塩ノ口溝跡6次調査SK1における花粉組成図（花粉総数が基準）

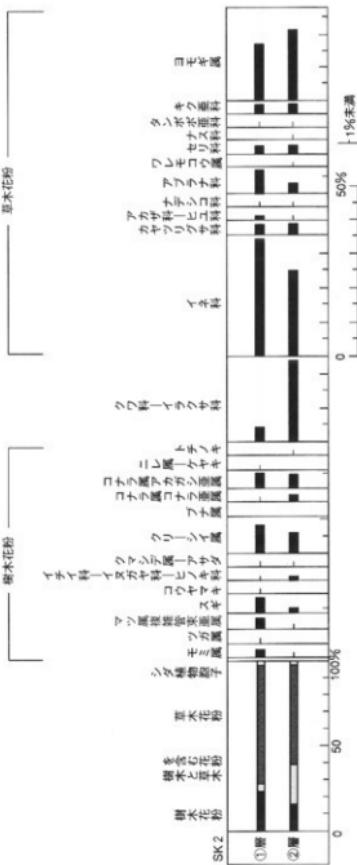
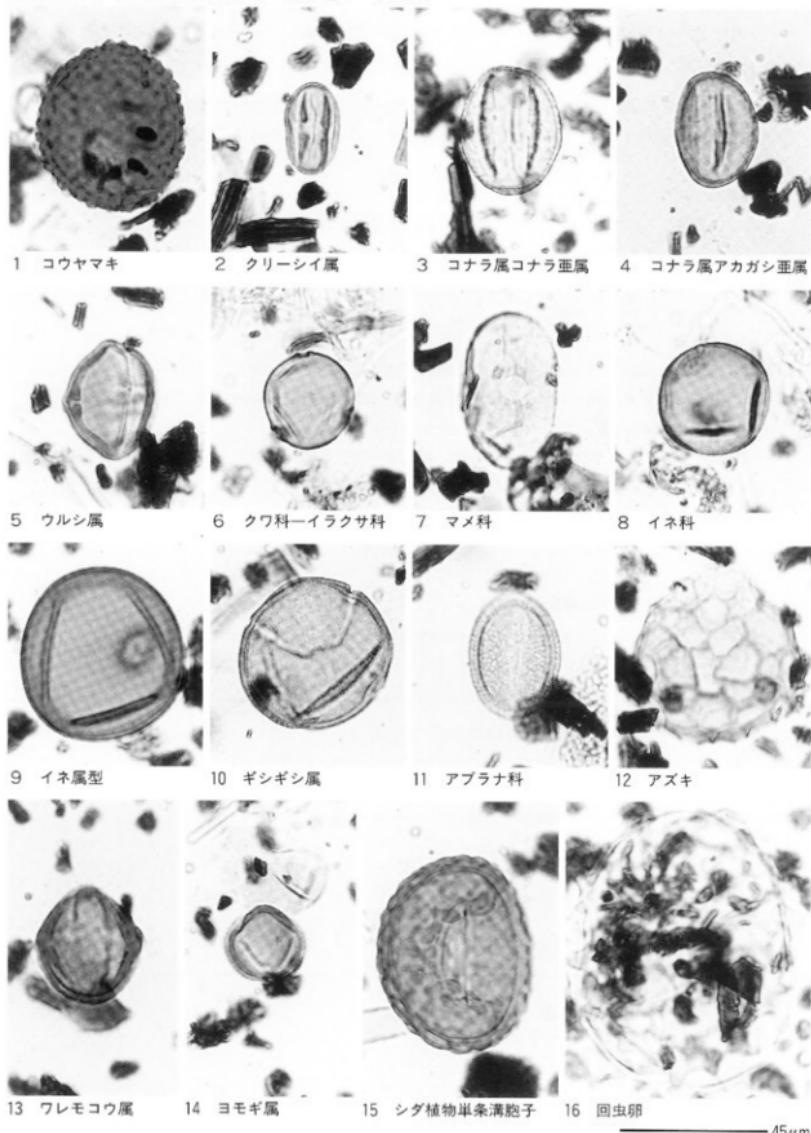


表82 美ノロ遺跡8次調査SK2における花粉組成図（花粉総数が基準）

花粉分析

第102図 釜ノ口遺跡8次調査の花粉・孢子遺体・寄生虫卵



## III. 篠ノ口遺跡8次調査で検出された植物遺体(編み物)の植物珪酸体分析

## 1. 試料

試料は、SK1の③層下部で検出された植物遺体(編み物)から採取された植物片(サンプルNo①、②)である。肉眼観察では、サンプルNo①は木本類、サンプルNo②は草本類の植物片と見られていた。

## 2. 分析法

植物片を洗浄して付着した土壤を取り除いたのち、電気炉灰化法(550°C・6時間)で灰化して灰像プレパラートを作成した。なお、植物片の内部を観察するためプレパラート作成時に灰像の一部を破壊した。観察は400倍の偏光顕微鏡下で行った。

## 3. 結果と考察

観察の結果、各試料とも植物組織内からは植物珪酸体は検出されなかった(第103図1、2)。植物組織の周囲ではススキ属やネザサ節、クマザサ属などの植物珪酸体が検出されたが(第103図3~6)、これらはいずれも植物片の表面に付着していたものと考えられる。

イネ科やタケ亜科、カヤツリグサ科は、葉、茎、地下茎などに何らかの形で植物珪酸体が形成されていることから、編み物に使われていたのはこれら以外の植物と考えられる。

表83 植物珪酸体の顕微鏡写真

No.	分類群	試料名	倍率
1	植物片の灰像	1	100
2	植物片の灰像	2	100
3	ススキ属型	2	400
4	ネザサ節型	2	400
5	ネザサ節型	2	400
6	クマザサ属型	2	400



1 植物片の灰像



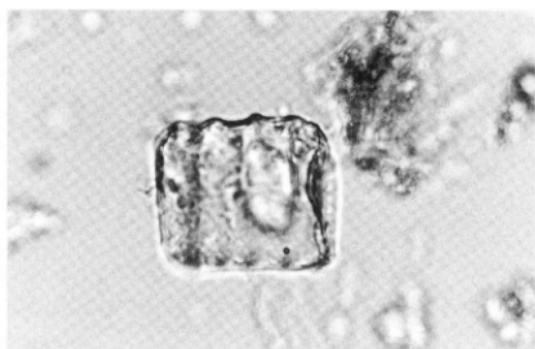
2 植物片の灰像



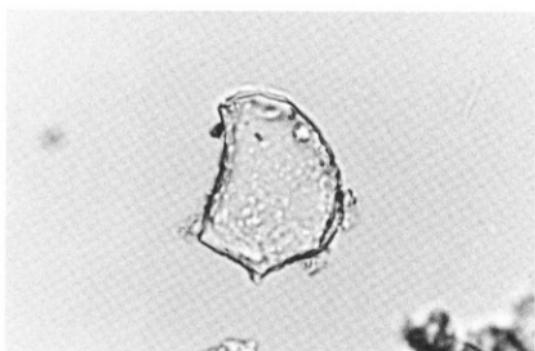
3 ススキ属型



4 ネザサ節型



5 ネザサ節型



6 クマザサ属型

## IV. 爪ノ口遺跡第8次調査における種実同定

## 1. 試 料

試料は、現地で取り上げられた試料と水洗選別用の堆積物がある。取り上げ試料は、SB3の9点とSK2の6点、掘立1の1点、SK1の73点の計89点である。SK1のうち15点は種子として分けられており、他は核として選別されている。水洗選別用の堆積物SK1のサンプルNo.4(③層)、サンプルNo.6(土器241内上層)、サンプルNo.7(土器241内下層)の3点である。ここでは、SK1の試料名を4-③層、238内、241上層、241下層とする。

## 2. 方 法

取り上げ試料は肉眼により観察を行った。堆積物は0.25mmの籠で水洗選別を行い、肉眼および双眼立体顕微鏡で観察を行った。同定は形態的特徴および現生標本との対比によって行った。SK1の堆積物は種実の密度がやや少なかったため採取量のはば全量を用い、4-③層で400cc、241上層で900cc、241下層で600ccを水洗選別に用いた。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

## 3. 結 果

## (1) 同定された分類群

同定の結果、樹木1、草本16の計17の分類群が同定された。学名、和名および粒数を表に示し、主要なものを写真に示した。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

## 〔樹木〕

- a. モモ *Prunus persica* Batsch 桜(内果皮) パラ科

黄褐色～黒褐色で橢円形を呈する。側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起としわがある。比較的丸いものが多く、表面はなめらかである。SK1サンプルNo.18のみ表面に小孔が多数あり異なる。モモは中国原産とされる栽培植物である。

## 〔草本〕

- b. イネ科 A・B Gramineae A・B 類

形態により、A・Bに分けられた。

Aは灰褐色～茶褐色で橢円形を呈す。長さ1.5mm、幅1.0mm。

Bは淡褐色～茶褐色で長楕円形を呈す。長さ1.1mm、幅0.9mm。

- c. ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科

黒褐色でやや光沢があり広倒卵形を呈する。断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に4～8本の針状の付属物を持つ。長さ1.7～1.8mm、幅1.1～1.2mm。

- d. カヤツリグサ属 A・B *Cyperus* A・B 果実 カヤツリグサ科

形態により、A・Bに分けられた。

Aは黒褐色～黒色で狭倒卵形を呈す。表面はやや粗い。断面は三角形である。長さ1.5～1.6mm、幅0.4～0.5mm。

- Bは黒褐色で倒卵形を呈す。表面はやや粗い。断面は偏平である。長さ1.0~1.2mm、幅0.7mm。
- e. コナギ *Monochoria vaginalis* Presl var. *plantaginea* Solms-Laub. 種子 ミズアオイ科  
淡褐色で楕円形を呈す。表面には縦方向に7~9本程度の隆起があり、その間を横方向の密な隆線が走る。長さ0.8~1.2mm、幅0.4~0.5mm。
- f. タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科  
茶褐色で卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。長さ1.3mm、幅1.0mm。
- g. アカザ属 *Chenopodium* 種子 アカザ科  
黒色で光沢があり、円形を呈す。片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。径1.1mm。
- h. ヒユ属 *Amaranthus* 種子 ヒユ科  
黒色で光沢があり、円形を呈す。一ヶ所が切れ込み、へそがある。断面は両凸レンズ形である。径1.1~1.2mm。
- i. ザクロソウ属 *Mollugo pentaphylla* L. 種子 ザクロソウ科  
黒色でやや光沢がある。円形を呈し、1ヶ所が切れ込み、白い種柄がある。表面には微細な網状斑紋がある。径0.4mm。
- j. ナデシコ科 *Caryophyllaceae* 種子  
黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。径0.6mm。
- k. チドメグサ属 *Hydrocotyle* 果実 セリ科  
淡褐色~黄褐色で一端が切形となる半円形を呈す。縁と中央に縦方向の稜が走る。長さ0.9mm、幅0.7mm。
- l. カタバミ属 *Oxalis* 種子 カタバミ科  
茶褐色で楕円形を呈し、上端がとがる。両面には横方向に6~8本の隆起が走る。長さ1.4mm、幅0.9mm。
- m. ウリ類 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科  
淡褐色~黄褐色で長楕円形を呈し、上端の側面は「ハ」字状にくぼむ。長さ6.1mm、幅3.1mmであった。インド原産とされる食用となる栽培植物でマクワウリなど栽培種が多い。
- n. ヒヨウタン類 *Lagenaria siceraria* Standl. 種子 ウリ科  
淡褐色で楕円形を呈す。上端にはへそと発芽孔があり、下端は波うつ切形を呈す。表面には縦に2本の低い稜が走る。アフリカ原産とされる栽培植物でヒヨウタン、トウガン、フグベの栽培種があり、トウガン、フグベは食用になる。
- o. キク科 *Compositae* 果実 キク科  
茶褐色で楕円形を呈し、両端は切形となる。表面には縦方向に8本程度の筋が走る。長さ2.5mm、幅1.0mm。
- p. シャジクモ属 *Chara* 卵胞子 シャジクモ科  
黒色で精円を呈す。断面は円形で、表面には右下がりの螺旋状の隆起が12本程度ある。長さ0.7~0.9mm。

(2) 取り上げ（出土）試料（表84~89、91、93）

1) SB 3

## 種 実 同 定

核サンプルNo.1～9はモモ核の破片である。

### 2) SK 1

核サンプルNo.1～58はモモ核であり、ほとんどが完形であるが半形（半分に割れたもの）と破片もある。

種No.1～15はヒヨウタン類種子で、No.12のみウリ類種子である。

### 3) SK 2

核No.1～6はモモ核であり、完形、半形、破片がある。

### 4) 捣立 1

核No.1はモモ核である。

### (3) SK 1 の水洗選別における検出結果（表90、92）

各試料ともやや種実の含有密度は低かった。

#### 1) サンプルNo.4 (③層、400cc)

4-③層の400cc中から58個の種実が検出された。チドメグサ属、カヤツリグサ属が多く、キク科、アカザ属などが伴われる。

#### 2) サンプルNo.6 (土器241内上層)

241上層の900cc中から55個の種実と卵胞子が検出された。チドメグサ属、カヤツリグサ属が多く、コナギなども出現する。他にシャジクモ属の卵胞子がやや多い。

#### 3) サンプルNo.7 (土器241内下層)

241下層の600cc中から139個の種実が検出された。樹木ではモモ核がやや多く検出された。草本ではイネ科とカヤツリグサ属が多く、チドメグサ属、カタバミ属、タデ属、ヒユ属、キク科が主に出現する。

## 4. 考 察

### (I) 栽培植物

特に弥生時代のモモ核が多く出土し、ヒヨウタン類、ウリ類も出土した。これらは明らかな栽培植物である。

モモ核は、SK 1を中心に多く検出されたが、SK 1 サンプルNo.18を除いて、いずれも形が丸く、比較的表面がなめらかである。モモ核の形態をまとめた金原（1996）によると、核（内果皮）の表面に維管束の通る小孔がなく、表面が比較的なめらかで、形が丸いかやや長めで先端がほとんど尖らないかやや尖るものがあり、平均的な形状としては長さに対して幅と厚さが大きく丸いとされるA類にあたる。長さ、幅、厚さを計数したが（表91、92）、その長さ／幅、長さ／厚さ、幅／厚さの比率の平均値は、A類に最も近い。A類は縄文時代からも出土例があり、弥生時代から古墳時代を通して存在するされるモモ核である。なお、SK 1 サンプルNo.18のモモ核は特徴が異なり、異なるタイプのモモ核である。

SK 1 からヒヨウタン類の種子が多数出土した。大きさの計測値を表10に示す。遺跡から出土するヒヨウタン類（ヒヨウタン仲間）は大きさにより時代による出土傾向が調べられており（藤下、1992など）、それに従うと、本遺跡出土のヒヨウタン類種子は弥生時代から古墳時代にかけて出土する範囲

のものにあたる。また、SK1サンプルNa12のウリ類（メロン仲間）は、藤下（1996など）により調査研究がなされており、長さ6.1～8.0mmの中粒種子（マクワウリ・シロウリ型）にあたり、弥生時代の遺跡からもっとも普通に出土するものにあたる。

## （2）種実同定から推定される弥生時代の植生と環境

SK1の水洗選別試料は3試料あるが、いずれも草本のチドメグサ属、カヤツリグサ属が多く、サンプルNa7（土器241内下層）ではイネ科も多い。他にカタバミ属、タデ属、アカザ属、ヒユ属、キク科などが出現しており、これらは人里植物および農耕雜草の性格をもつ植物で、いずれも人為的要素の強い遺体群である。のことから、SK1の周辺はこれらの草本が生育し、比較的排水のよいやや乾燥した環境が広がっていたと推定される。モモ核以外の樹木の種実が検出されておらず、樹木の少ない開けた景観が考えられる。

サンプルNa6（土器241内上層）からは、コナギとシャジクモ属の水湿地性の植物が出現しており、滯水が示唆される。他の試料から検出されていないことから、一時的な滯水であった可能性がある。

サンプルNa7（土器241内下層）からはモモ核が特徴的に検出される。SK1の掘り下げ途中にも多量のモモ核が検出されているため、土器241内に本来入っていたのか埋没段階に取り込まれたのか判断できない。なお、花粉分析過程において、モモの表皮毛の観察も行ったが、いずれの試料からも検出されなかった。のことからみて、モモは果実ではなく、核の状態でSK1ないし土器241内に堆積されたものと考えられる。

## 〔文献〕

- 笠原安夫 1985 日本雑草図説。養賢堂、494p.
- 金原正明 1996 古代モモの形態と品種。考古学ジャーナル、No409、p.15-19.
- 藤下典之 1982 案内遺跡から出土したメロン仲間*Cucumis melo* L.とヒヨウタン仲間*Lagenaria siceraria* Standl.の種子について。唐津市文化財調査報告第5集菜園遺跡、唐津市教育委員会、p.455-463.
- 藤下典之 1992 出土種子からみた古代日本のメロンの仲間、その種類、波来、伝播、利用について。考古学ジャーナル、No354、ニュー・サイエンス社、p. 7-13.

## 核 同 定

表84 S B 3 モモ *Prunus persica* Batsch核の同定結果

サンプル No.	取り上げ No.	層位 遺構	個 数
1		埋土	破片 1
2		埋土	破片 3
3		炉②	破片 1
4		炉②	破片 1
5		炉②	破片 1
6		貼床土②	破片 1
7		貼床土②	破片 5
8		貼床土①	破片 4
9		貼床土①	破片 1

表85 S K 2 モモ *Prunus persica* Batsch核の同定結果

サンプル No.	取り上げ No.	層位 遺構	個 数
1	1	1層	半形 2
2	3	2層	半形 2
3	5	2層	半形 1
4			完形 1 破片 1
5			不明 1
6			破片 1

表86 捜立 1 モモ *Prunus persica* Batsch核

サンプル No.	取り上げ No.	層位 遺構	個 数
1		S P⑥内	完形 1

表87 SK1 ヒョウタン類*Lagenaria siceraria* Standl.種子の同定結果

サンプル No.	取り上げ No.	層位 遺構	個数
1	1	3層	3
2	2	3層	28 破片6
3	3	3層	1
4	4	3層	1
5	5	5層	1
6	6	3層	3
7			9 破片3
8			1
9			2
10			1
11			3
12			※ウリ類 <i>Cucumis melo</i> L.種子1
13			破片2
14			1
15			1

## 核 同 定

表88 SK1 モモ *Prunus persica* Batsch核の同定結果

サンプル No.	取り上げ No.	層位 遺構	個 数	サンプル No.	取り上げ No.	層位 遺構	個 数
1	1	2層	完形1	30	30	3層	完形1
2	2	3層	完形1	31	31	3層	完形1
3	3	3層	完形1	32	32	3層	完形1
4	4	3層	完形1	33	33	3層	完形1
5	5	3層	完形1	34	34	3層	完形1
6	6	3層	完形1	35	35	3層	半形1
7	7	3層	完形1	36	36		完形1
8	8	3層	完形1	37	37	3層	完形1
9	9	3層	半形2 破片2	38	38	3層	完形1
10	10	3層	完形1	39	39	3層	完形1
11	11	3層	完形1	40	40	3層	完形1
12	12	3層	完形1	41	41	3層	完形1
13	13	3層	半角2	42	42	3層	完形1
14	14	3層	完形1	43	43	5層	完形1
15	15	3層	完形1	44	44	5層	完形1
16	16	3層	完形1	45	45	5層	完形1
17	17	3層	半角1 破片1	46	46	5層	完形1
18	18	3層	完形1	47	47	3層	完形1
19	19	3層	完形1	48	48	5層	完形1
20	20	3層	完形1	49	49	3層	完形1
21	21	3層	完形1	50			完形1
22	22	3層	完形1	51			完形1
23	23	3層	完形1	52			破片3
24	24	3層	完形1	53			完形1
25	25	3層	完形1	54			完形1
26	26	3層	完形1	55			完形5 半形4 破片1
27	27	3層	完形1	56			完形1
28	28	5層	完形1	57			完形18 半形5 破片4
29	29	3層	完形1	58			完形1

表89 箕ノ口遺跡8次調査出土種実同定結果

分類群		S B 3				S K 1					S K 2			建立 SHIN
学名/和名	部位	埋土	炉②	貼床 土②	貼床 土①	2層	3層	5層	土器 241	—	1層	2層	—	
<i>Prunus persica</i> Batsch モモ	核 完形					1	38	6	1	29			1	1
	半形						6			9	2	3		
	破片	4	3	6	5		3			8		2		
<i>Lagenaria siceraria</i> Standl. ヒヨウタン類	種子						36	1		20				
	破片						6			5				
<i>Cucumis melo</i> L. ウリ類	種子									1				
UnKnown (不明)													1	

表90 箕ノ口遺跡8次調査SK1水洗選別(0.25mm篩)における種実同定結果

分類群			4-③層 400cc		241上層 900cc		241下層 600cc	
学名	和名	部位						
arbor	樹木							
<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 破片					33	9
herb	草本							
Gramineae	イネ科A	穎	1				37	
	イネ科B	穎					3	
<i>Scirpus</i>	ホタルイ属	果実			2			
<i>Cyperus A</i>	カヤツリグサ属A	果実	17		16		31	
<i>Cyperus B</i>	カヤツリグサ属B	果実			1		1	
<i>Monochoria vaginalis</i> Presl var. <i>plantaginea</i> Solms Laub.	コナギ	種子		4				
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実					3	
<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	3				1	
<i>Amaranthus</i>	ヒユ属	種子					3	
<i>Mollugo pentaphylla</i> L.	ザクロソウ	種子			1			
<i>Caryophyllaceae</i>	ナデシコ科	種子	1		2		1	
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子	1		1		4	
<i>Hydrocotyle</i>	チドメグサ属	果実	30		14		9	
<i>Lagenaria siceraria</i> Standl.	ヒヨウタン類	種子					1	
<i>Compositae</i>	キク科	果実	5				3	
<i>Chara</i>	シャジクモ属	孢子			14			
Total	合計		58		55		139	

## 核 同 定

表91 篠ノ口遺跡8次調査SK1出土モ核計測値(先形のみ)

サンプルNo	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	長さ/幅	長さ/厚さ	幅/厚さ
1	19.2	16.7	12.5	1.15	1.54	1.34
3	19.2	14.0	12.5	1.37	1.54	1.12
4	23.6	19.4	15.0	1.22	1.57	1.29
5	19.0	16.1	13.9	1.18	1.37	1.16
6	24.7	19.0	14.6	1.30	1.69	1.30
7	20.4	16.9	13.5	1.21	1.51	1.25
8	19.7	16.3	13.1	1.21	1.50	1.24
10	19.4	17.9	14.5	1.08	1.34	1.23
11	19.5	16.1	14.2	1.21	1.37	1.13
14	21.6	18.5	13.8	1.17	1.57	1.34
15	21.1	17.1	13.3	1.23	1.59	1.29
18	30.4	23.5	18.7	1.29	1.63	1.26
19	19.0	16.3	12.9	1.17	1.47	1.26
20	18.5	15.8	13.5	1.17	1.37	1.17
21	20.2	17.8	13.4	1.13	1.51	1.33
22	20.8	17.2	14.7	1.21	1.41	1.17
23	18.7	15.5	12.9	1.21	1.45	1.20
24	20.0	16.0	12.8	1.25	1.56	1.25
25	21.3	17.9	13.7	1.19	1.55	1.31
26	20.3	17.1	13.8	1.19	1.47	1.24
27	19.8	17.4	13.5	1.14	1.47	1.29
28	18.8	15.5	12.6	1.21	1.49	1.23
29	19.5	16.5	13.1	1.18	1.49	1.26
30	19.3	16.8	13.4	1.15	1.44	1.25
31	18.6	16.1	13.4	1.16	1.39	1.20
32	21.0	17.3	13.0	1.21	1.62	1.33
33	20.5	16.9	13.0	1.21	1.58	1.30
34	20.2	16.2	12.8	1.25	1.58	1.27
36	19.4	16.3	13.6	1.19	1.43	1.20
37	19.8	15.2	12.6	1.30	1.57	1.21
38	20.4	17.0	13.4	1.20	1.52	1.27
39	23.8	21.0	14.6	1.13	1.63	1.44
40	20.4	15.9	12.4	1.28	1.65	1.28
41	19.0	16.1	12.9	1.18	1.47	1.25
42	19.4	17.0	13.6	1.14	1.43	1.25
43	21.8	18.9	13.9	1.15	1.57	1.36
44	21.3	17.1	13.0	1.25	1.64	1.32
45	23.2	19.1	13.1	1.21	1.77	1.46
46	19.8	17.2	13.6	1.15	1.46	1.26
48	18.5	17.1	13.1	1.08	1.41	1.31
49	21.3	18.1	13.4	1.18	1.59	1.35
55	21.9	17.9	13.3	1.22	1.65	1.35
	17.2	13.8	11.7	1.25	1.47	1.18
57	20.8	18.3	14.5	1.14	1.43	1.26
	20.0	17.7	14.5	1.13	1.38	1.22
	20.9	17.9	13.8	1.17	1.51	1.30
	19.0	16.6	13.5	1.14	1.41	1.23
	22.4	17.2	13.8	1.30	1.62	1.25
	18.8	16.7	13.6	1.13	1.38	1.23
	24.0	18.7	14.7	1.28	1.63	1.27
	19.2	16.1	12.9	1.19	1.49	1.25
	19.8	16.9	12.3	1.17	1.61	1.37
	20.8	17.6	13.9	1.18	1.50	1.27
	19.0	15.9	12.1	1.19	1.57	1.31
	22.8	19.2	13.8	1.19	1.65	1.39
	20.6	17.0	12.8	1.21	1.61	1.33
	20.0	15.7	12.6	1.27	1.59	1.25
	19.1	15.2	12.1	1.26	1.58	1.26
	18.2	15.4	12.5	1.18	1.46	1.23
	17.5	13.6	11.4	1.29	1.54	1.19
58	21.1	17.7	13.5	1.19	1.56	1.31
平均値	20.4	17.0	13.4	1.20	1.52	1.27

表92 釜ノ口遺跡 8次調査SK1土器241内下層検出のモモ核計測値（完形のみ）

長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	長さ/幅	長さ/厚さ	幅/厚さ
21.2	16.7	12.3	1.27	1.72	1.36
21.9	18.7	14.0	1.17	1.56	1.34
22.7	17.5	12.8	1.30	1.77	1.37
20.0	16.8	12.8	1.19	1.56	1.31
20.8	19.0	13.5	1.09	1.54	1.41
18.1	16.8	13.5	1.08	1.34	1.24
18.4	16.4	13.4	1.12	1.37	1.22
19.2	16.4	13.4	1.17	1.43	1.22
20.6	17.7	13.3	1.16	1.55	1.33
24.5	18.5	14.2	1.32	1.73	1.30
20.4	17.7	13.4	1.15	1.52	1.32
21.4	17.8	13.7	1.20	1.56	1.30
19.3	16.4	12.7	1.18	1.52	1.29
21.8	16.9	13.1	1.29	1.66	1.29
23.6	19.1	13.8	1.24	1.71	1.38
22.0	17.0	12.4	1.29	1.77	1.37
21.4	18.0	13.6	1.19	1.57	1.32
21.6	16.9	12.7	1.28	1.70	1.33
20.0	16.8	12.8	1.19	1.56	1.31
19.5	17.5	12.9	1.11	1.51	1.36
20.5	17.5	13.3	1.17	1.54	1.32
20.9	18.3	14.2	1.14	1.47	1.29
22.0	19.0	14.2	1.16	1.55	1.34
22.0	17.9	13.7	1.23	1.61	1.31
20.1	18.1	13.9	1.11	1.45	1.30
20.6	18.8	15.0	1.10	1.37	1.25
20.6	17.7	13.0	1.16	1.58	1.36
22.2	19.6	14.3	1.13	1.55	1.37
19.6	16.5	13.1	1.19	1.50	1.26
22.3	18.8	13.9	1.19	1.60	1.35
21.3	18.6	13.2	1.15	1.61	1.41
20.1	16.8	14.0	1.20	1.44	1.20
19.9	16.4	13.3	1.21	1.50	1.23
平均値 20.9	17.7	13.4	1.19	1.56	1.31

## 種子同定

表93 釜ノ口遺跡6次調査SK1出土ヒヨウタン類種子の計測値

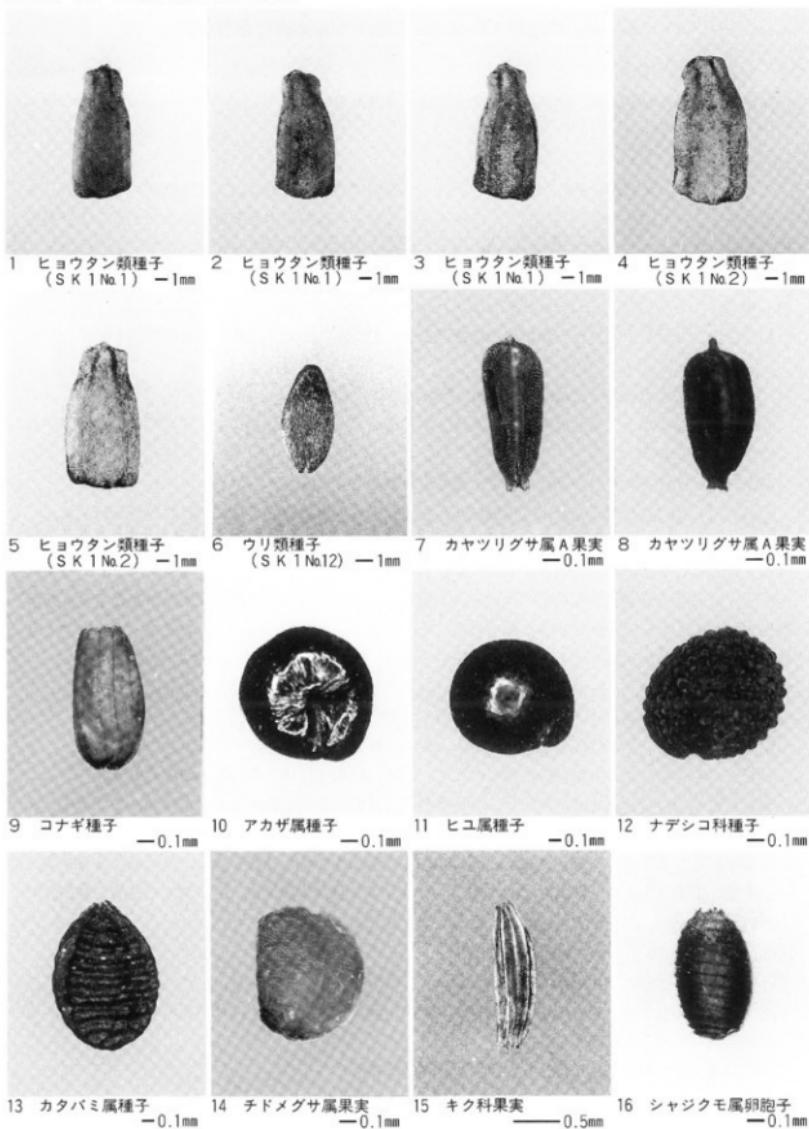
サンプルNo.	層位	長さ(mm)	幅(mm)	サンプルNo.	層位	長さ(mm)	幅(mm)
No.1	3層	11.8	5.3	No.3	3層	12.1	5.8
		12.1	5.5	No.4	3層	11.9	5.9
		12.3	5.7	No.5	5層	11.9	5.5
No.2	3層	11.8	5.8	No.6	3層	11.6	5.5
		12.1	5.6			11.9	5.8
		12.3	5.9			11.3	5.6
		11.2	5.5	No.7		10.8	5.5
		12.5	5.7			11.9	5.7
		10.5	5.5			10.5	5.3
		11.9	5.3			12.4	5.4
		11.4	5.5			11.0	5.7
		12.3	5.9			11.6	5.8
		11.7	5.7			12.0	5.9
		11.3	5.5			11.4	5.6
		12.1	5.9			12.1	5.6
		12.9	5.8	No.8		12.4	5.9
		11.7	5.5	No.9		10.9	6.2
		11.6	5.8			11.9	6.2
No.3	5層	11.9	5.7	No.10		12.1	5.6
		10.8	5.1	No.11		12.0	6.1
		10.2	5.8			11.1	5.6
		11.8	5.8	No.13		10.5	6.3
		11.9	5.6	No.14		11.2	5.6
		11.2	5.8	No.15		10.5	5.6
		11.6	5.6			平均値	11.6
		10.2	5.9				5.7
		11.6	5.9				
		12.1	5.5				
		12.3	5.7				
		11.4	5.6				
		11.2	6.3				

第105図 釜ノ口遺跡8次調査出土種実 I



種実同定

第106図 釜ノロ遺跡8次調査出土種実II



## V. 釜ノ口遺跡8次調査から出土した木材の樹種同定

## 1. 試料

試料は24点の木材である。試料番号と出土層位、遺構を表94に示す。

## 2. 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。樹種同定はこれらの試料標本をその解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

## 3. 結果

結果を表1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

a. マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、放射仮道管内壁の鋸歯状肥厚の程度で同定できるが、本試料は鋸歯状肥厚が存在するものの腐朽が激しく、十分な観察ができなかつた為、マツ属複維管束亜属とした。アカマツ、クロマツとともに常緑高木で、材は水湿によく耐え、広く用いられる。

b. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科（第107図1）

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞がみられる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。

日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽性および耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

c. スダジイ *Castanopsis sieboldii* Hatusima ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は单穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりスタジイに同定される。スタジイは本州(福島県、新潟県佐渡以南)、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。

d. ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。

e. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 (第107図2)

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5mに達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

f. コナラ属アカガシ亜属？ *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ? ブナ科

保存状態が極めて悪く変形も著しく部分的にコナラ属アカガシ亜属の特徴を示すものの同定に至らなかった試料をコナラ属アカガシ亜属？とした。

g. コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinoides* ブナ科 (第107図3)

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で弾力に富み、建築材などに用いられる。

h. クスノキ *Cinnamomum camphora* Presl クスノキ科 (第108図4)

横断面：中型から大型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材

である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のもののみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりクスノキに同定される。クスノキは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ25m、径80cmぐらいであるが、高さ50m、径5mに達するものもある。材は堅硬で耐朽性が強く、保存性が高く芳香がある。建築、器具、楽器、船、彫刻、ろくろ細工などに用いられる。

#### i. クスノキ？ *Cinnamomum camphora* Presl ? クスノキ科

保存状態が極めて悪く変形が著しいため、部分的にクスノキの特徴を示すものの同定に至らなかつた試料をクスノキ？とした。

#### j. サクラ属 *Prunus* バラ科 (第108図5)

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は、同性に近い異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

#### k. ヒサカキ属 *Eurya* ツバキ科

横断面：小型の道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く100を越えるものがある。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅で、多列部と比べて單列部が長い。

以上の形質よりヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10m、径30cmである。材は強さ中庸で、器具などに用いられる。

#### l. シャシャンボ *Vaccinium bracteatum* Thunb. ツツジ科 (第108図6)

横断面：小型で角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく10本前後のものが多いが、まれに单穿孔も認められる。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、直立細胞からなる単列のものと、6～8細胞幅で長い紡錘形を示す多列のものとなる。多列のものはほとんどが平伏細胞からなるが、上下縁辺部と側面部に直立細胞が見られる。

以上の形質よりシャシャンボに同定される。シャシャンボは関東南部以西の本州、四国、九州に分布する。常緑の低木で、通常高さ1～5m、径10cmぐらいであるが、大きいものは高さ10m、径70cmに達する。

m. 散孔材 diffuse-porous wood

横断面：小型の道管がまばらに散在する。

放射断面：道管が存在する。

接線断面：放射組織が存在することがかろうじて確認できた。

以上の形質より散孔材に同定される。なお本試料は小片であり、保存状態が悪く、散孔材以下の同定は困難であった。

n. 広葉樹 broad-leaved tree

横断面：道管が存在する。

放射断面：道管と放射組織が存在する。

接線断面：道管と放射組織が存在する。

以上の形質より広葉樹に同定される。なお本試料は保存状態が悪く、十分な観察が出来ないため、広葉樹とした。

o. 不明 unknown

横断面、放射断面、接線断面共に極めて保存状態が悪く、良好な切片が作製出来なかつたため、観察することが困難であった。

#### 4. 所見

本造跡から出土した木材は、コナラ属アカガシ亜属（カシ類）とクスノキが多い。これらは照葉樹林要素であり、照葉樹林からの木材が主に利用されていたと考えられる。このことから、釜ノ口造跡の周辺地域に照葉樹林が分布していたことも示唆される。

#### 〔文献〕

佐伯清・原田浩 1985 鈴鹿樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、P.20-48.

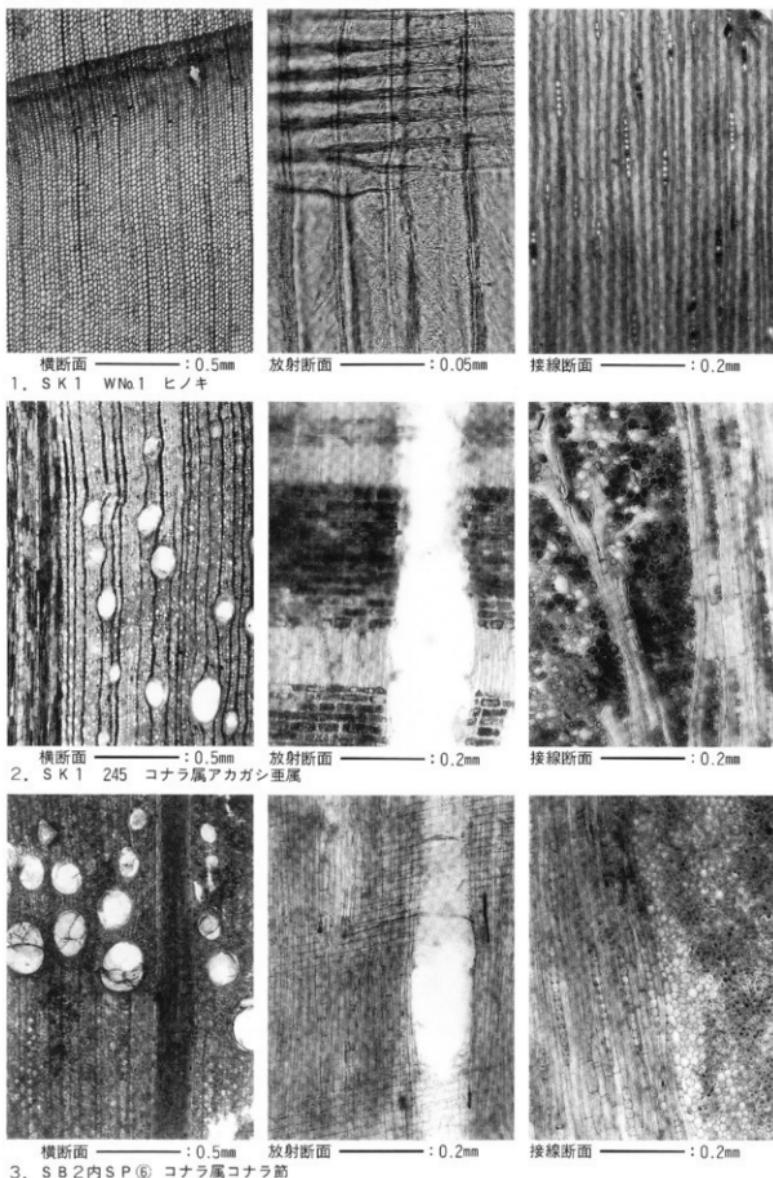
佐伯清・原田浩 1985 広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、P.49-100.

表94 喜ノ口遺跡8次調査出土木材の樹種同定結果一覧表

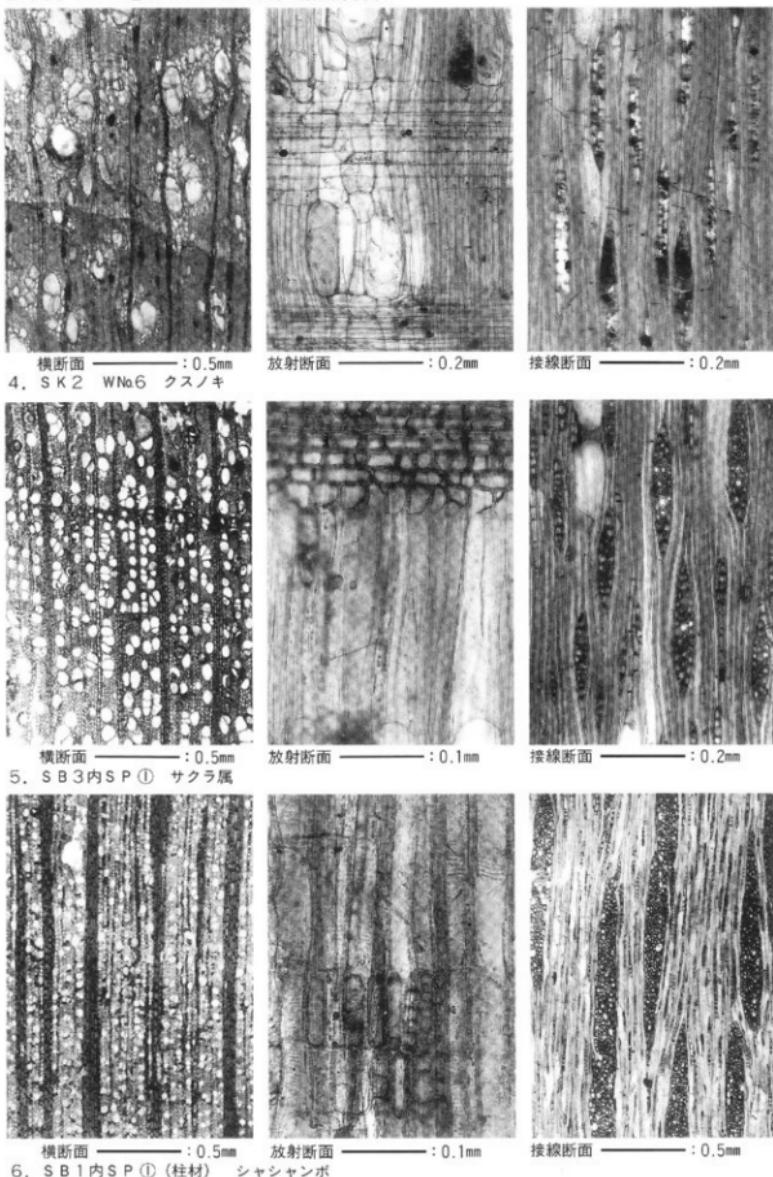
試料番号	試 料	樹 樹 (和 名/学 名)
1	S B1内S P①227(柱材)	シャシャンボ <i>Vaccinium bracteatum</i> Thunb.
2	S B1内S P①228(礎板)	スタジイ <i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima
3	S B1内S P④No.3	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
4	S B1内S P③No.4	ツブライイ <i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky
5	S B2内S P⑥	コナラ属コナラ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Prinu</i>
6	S B3内S P①214	サクラ属 <i>Prunus</i>
7	S B3内S P②215	コナラ属アカガシ亜属 <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
8	S B3内S P③216	コナラ属アカガシ亜属 <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
9	S B3内S P④217	コナラ属アカガシ亜属 <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
10	S B3内炉②C No.2	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
11	S B4内S P⑤No.1	コナラ属アカガシ亜属 <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
12	S B4内S P⑤No.2	ヒザカキ属 <i>Eurya</i>
13	S B4内S P⑤No.3	ヒザカキ属 <i>Eurya</i>
14	S K1 WNo.1	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
15	S K1 245	コナラ属アカガシ亜属 <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
16	S K2 WNo.1	マツ属複維管束亜属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
17	S K2 WNo.2	不明 unknown
18	S K2 WNo.4	広葉樹 broad-leaved tree
19	S K2 WNo.6	クスノキ <i>Cinnamomum camphora</i> Presl
20	S K2 WNo.7	クスノキ <i>Cinnamomum camphora</i> Presl
21	S K2 WNo.8	広葉樹 broad-leaved tree
22	S K2 WNo.9	コナラ属アカガシ亜属? <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis?</i>
23	S K2 WNo.10	クスノキ? <i>Cinnamomum camphora</i> Presl?
24	S K2 268	散孔材 diffuse-porous wood

木材の樹種同定

第107図 釜ノ口遺跡8次調査出土木材の顕微鏡写真 I



第108図 垂ノ口遺跡8次調査出土木材の顕微鏡写真II



## 第6章 考 察

### －松山平野における弥生時代集落出土のガラス玉－

#### 1. はじめに

近年、弥生時代の堅穴住居址からは、ガラス小玉の出土例が増加している。筆者は、1991年に松山大学構内遺跡2次調査の報告にて「松山平野における弥生時代の堅穴式住居址出土のガラス玉一覧」を作成した（註1）。一方、全国的なガラス研究は、藤田 等氏による「弥生時代ガラスの研究」（註2）があり、弥生時代ガラスに関する研究は集大成されたといえる。論中には、愛媛県内の出土品についても触れており、ガラス小玉の造構別の集計がなされている。一方、愛媛県における弥生時代のガラス製品に関する論考は稀薄であり、研究は充分ではないといえる。

本稿は、松山平野における弥生時代のガラス製品について基礎資料を作成することを目的とし、特に堅穴式住居址出土品の集成と、出土状況に注目した整理をおこなうものである。

#### 2. 資 料

松山平野の堅穴式住居址出土のガラス玉は4遺跡12棟、209点である。

##### (1) 稲垣面山遺跡（松山市上野町、註3）

松山平野南部の低丘陵上には、弥生時代から古墳時代までの集落が展開する。このうちの一つが稲垣面山遺跡で、主に弥生時代中期後葉の集落関連造構が検出されている。

S B 5は、中期後葉の円形住居址で、規模は直径6.9m、面積37m<sup>2</sup>である。出土物には、ガラス小玉18点、鉄製鋤先、石棒などがある。ガラス小玉は、炉址に接する地点と、炉からやや離れた位置にある作業台付近より出土している。ガラス小玉の大きさは長さ2.7~3.0mm、径3.5~5.0mm、孔径1.0mm、重さ0.036~0.099gである。色調は、青（水色）と緑がある。

##### (2) 篠ノ口遺跡（松山市小坂）

松山平野の中央部やや北、石手川と川附川に挟まれた沖積地にある弥生時代後期の集落跡。現在までに8次の調査が実施され、1・3・7・8次の調査地からは、ガラス小玉が出土している。

①1次調査1号住居址（註4）は、後期後半の円形住居址で、張り出し部（幅40cm）をもつ。規模は直径7m以上で、面積は42m<sup>2</sup>である（想定、張り出し部を含まない）。出土物は、ガラス小玉6点と土器がある。ガラス小玉は、主柱穴付近に散在する。

1次調査3号住居址は、後期後半の円形住居址で、規模は直径5.7~6.5m、面積32m<sup>2</sup>である。出土物には、ガラス小玉3点、土製丸玉1点はかがある。ガラス小玉は、炉址内から2点と壁体付近から1点が出土している。

②2次調査1号住居址（註5）は、後期後半の円形住居址である。規模は径5.2mで、面積は21.2m<sup>2</sup>である。出土物には、ガラス小玉とモソの種子がある。

なお、1次及び2次調査出土のガラス小玉は整理と保管が不十分だったために、10点以上の出土品は現状では9点となっている。さらに、各ガラス小玉は出土地点が特定できない。ガラス小玉9点は、長さ2.1~4.1mm、径3.4~5.2mm、孔径1.0~1.8mm、重さ0.038~0.098gで、色調は青（水色）と緑がある。③7次調査（本刊3章）では、後期中葉の住居址3棟からガラス小玉が出土している。なお、住居址内の埋土は全てふるいにかけて調査している。

S B 1は、円形住居址で、規模は直径5.1~5.5m、面積22m<sup>2</sup>である。炉内からは、ガラス小玉1点と土器が出土している。ガラス小玉は、長さ4.0mm、径4.0mm、孔径1.1mm、重さ0.075gで、色調は青(水色)である。

S B 2は、隅丸方形の住居址で、規模は6.2×2.4m以上である。炉内からは、ガラス小玉1点と土器片が出土している。ガラス小玉は、長さ2.5mm、径4.0mm、孔径1.3mm、重さ0.053g、色調は青(水色)である。

S B 3は、方形ないし長方形の住居址で、規模は4.5m以上である。炉内からは、ガラス小玉1点と土器片が出土している。ガラス小玉は、長さ5.0mm、径4.0mm、孔径2.0mm、重さ0.094g、色調は青(水色)である。

④8次調査(本刊第4章)では、後期前葉の住居址3棟からガラス小玉が出土している。

S B 1は、主柱穴を検出しただけで、規模は推定直径4.5m以上(面積15.9m<sup>2</sup>以上)になる。ガラス小玉の細片が床面より1点出土している。色調は白色透明である。

S B 2は、円形住居址で、規模は直径6.2m、面積32m<sup>2</sup>である。炉内からは6点、埋土中からは89点のガラス小玉が土器片とともに出土している。ガラス小玉は、長さ1.1~4.5mm、径1.9~4.9mm、孔径0.8~2.1mm、重さ0.012~0.092g、色調は青(水色含む)・紺・茶である。

S B 3は、方形住居址で、規模は直径4.6~5.5m、面積21.9~28.8m<sup>2</sup>である。炉内からは10点、埋土からは50点のガラス小玉が出土している。ガラス小玉は、長さ1.2~4.8mm、径2.1~5.0mm、孔径0.7~2.8mm、重さ0.011~0.112gで、色調は青(水色を含む)と紺である。

なお、終末期から古墳時代初頭のS D 3からはガラス小玉が2点出土している。ガラス小玉は、長さ0.30~0.38+ $\alpha$ mm、径0.20~0.30+ $\alpha$ mm、孔径0.14~0.14+ $\alpha$ mm、重さ0.015+ $\alpha$ ~0.022gで、色調は青である。

### (3) 松山大学構内遺跡(松山市文京町、註6)

松山平野の北にあり、弥生時代後期から古代までの集落跡である。

2次調査S B 7は、後期中葉の円形住居址で、規模は直径6.9~7.1m、面積38m<sup>2</sup>である。ガラス小玉は14点出土し、その大多数が住居址の南半部に集中している。また、ガラス小玉の周辺からは、完形にちかい土器が多数出土している。ガラス小玉は、長さ3.0~4.0mm、径3.5~6.0mm、孔径1.2~2.0mm、重さ0.05~0.10g、色調は水色である。

### (4) 東本遺跡(松山市東本町、註7)

松山平野の北東部、釜ノ口遺跡の東1kmにあり、主に弥生時代後期後半の集落跡である。

S B 302は、円形の住居址で、規模は直径8.3~8.8m、面積58m<sup>2</sup>である。出土物には、ガラス小玉6点、青銅鏡片(破鏡)1点、鐵鎌1点などがある。ガラス小玉は、住居床面に散在し、長さ2.0~3.5mm、径2.5~4.0mm、孔径1.0~1.8mm、重さ0.03~0.05g、色調は青色である。なおS B 302の埋土は全てふるいにかけている。

## 3. 分析

ここでは、出土状況とガラス玉の属性について整理する。

1) 出土状況では、出現期、出土住居、出土地点、出土量についてみる。

出現期：中期後葉の駿河面山遺跡S B 5出土例が最も古いもので、そのほかは全て後期である。特に後期中～後葉に出土例が多い。

出土住居：住居の規模には、直径もしくは一辺が4～7m未満で、面積が15～35m<sup>2</sup>の中型住居には8棟、7m以上で35m<sup>2</sup>以上の大型住居には4棟でガラス玉が出土している。

また、住居址内の出土地点をみると、炉址内に出土が限られる例は3棟、炉址内と住居床面から出土する例は4棟、住居址床面からの出土例は4棟、出土地点不明は1棟である。

出土量：1点が4棟、2～10点未満が4棟、10点以上が3棟、不明が1棟である。特に釜ノ口遺跡8次調査地S B 2・3からは50点以上のガラス小玉が出土している。

## 2) ガラス小玉の属性について、大きさと色調についてみる。

住居址から出土したガラス玉は全てガラス小玉に属するものであった。

長さは1.2～5.0mmとなり、なかでも3.0mmが半数を占める。径は1.9～6.0mmで、2.0～4.0mmのものが多数となる。長さと径の比率は、径が長さをしのぐものが多数を占め、長さが等しいもしくは1.0mm程度上回るものは数点にかぎられる。孔径は0.7～2.8mmで、1.0～2.1が多い。

重さは0.012gから0.112gまでのものがあり、特に0.02～0.05gが多く、0.1gを越えるものは3点にすぎない。

色調は、水色を含む青と紺が多数を占め、白・黄・緑・茶が極少数みられる。なお、青には濃淡がみられる。

## 4.まとめ

松山平野における弥生時代住居址出土のガラス玉には、出土住居、出土地点、諸属性に幾つかの傾向が認められた。以下、傾向と課題を略記し、まとめとしたい。

ガラス玉は、中～大型の竪穴式住居から出土し、小型住居からの出土はない。現在までに、松山平野の弥生後期には竪穴式住居が約100棟あり、ガラス玉出土例は1割を占める。

ガラス玉を出土した住居址には、駿迎面山遺跡S B 5では鉄製鍬先、東本遺跡S B 302では青銅鏡片（破鏡）が伴出土しており、集落内の主要な住居址であったものがある。また、松山大学構内遺跡2次S B 7は、多量の土器と祭祀色が強い土器が出土し、集落内で一定の役割をはたしていた住居址である。一方、釜ノ口遺跡7次S B 1～3は、伴出品や規模からは特別な住居と認められない。よって、ガラス玉を出土する住居には、性格に二面性がみられるのである。

次に住居内の出土状況をみると。出土地点には、炉内と床面上があり、炉内だけ、床面上だけ、炉と床面上の両方から出土する場合があった。炉からの出土例は、釜ノ口遺跡に集中してみられ、出土量も1点もしくは床面からの出土数より少ないものである。一方、床面上例は、10数点が1度に検出され、出土地点が明確なものでは、主柱穴周辺や、張り出し部などで出土している。よって、床面上のものは出土量にまとまりをもち、内部施設と有機的関係が想定できるのである。

つづいて出土品の属性についてみる。ガラス玉は、小玉に出土が限られている。これ等は、長さが最大で5.0mm、重さは最大で0.2gを越えない。古墳時代の竪穴式住居址には、長さが6.0mm以上、重さは1g以上のものがあり、ガラス小玉における法量変化がみとめられる。さらに色調では、弥生時代は青色系が多数を占め、古墳時代ほど多彩ではなく、ここでも時間的変化がみとめられるのである。

なお、今回は取り上げなかったが、ガラス玉の外端部には、丸みに差がみられ、これらは形態（長・径比による）や切り離し手法の違いがあらわれているものと考えられる。

以上、松山平野の弥生住居出土のガラス玉に関する資料の集成と分析を行った。ガラス玉の出土は、

## 考 察

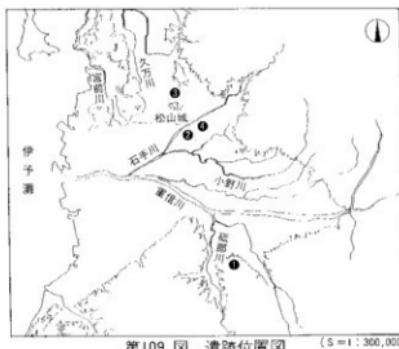
第109 図 遺跡位置図 ( $S=1:360,000$ )

表95 松山平野のガラス玉出土の弥生時代竪穴式住居址一覧

番号	遺跡	遺構	平面形	規模(m)	面積(m <sup>2</sup> )	出土数	色	共伴品	時期	備考
1	帆瀬面山	SB 5	円形	6.9	37	18	青(水色)	鉄製鋤先	中期後葉	註3
2-①	釜ノ口1次	SB 1	円形	7.0<	42	6			後期後半	註4
		SB 3	円形	5.7~6.5	32	3			後期後半	註4
2-②	釜ノ口2次	SB 1	円形	5.2	21.2	7以上	(黄)	モモ拂子	後期後半	註5
2-③	釜ノ口7次	SB 1	円形	5.1~5.5	22	1	青(水色)		後期中葉	本刊3章
		SB 2	隅丸方形	6.2×2.4<	—	1	青(水色)		後期中葉	本刊3章
		SB 3	方か長方	4.5<	—	1	青(水色)		後期中葉	本刊3章
2-④	釜ノ口18次	SB 1	円形か	(4.5)	(15.9)	1	白色透明		後期前葉	本刊4章
		SB 2	円形	6.4	32	95	青(水色合)・緑・茶		後期前葉	本刊4章
		SB 3	隅丸方形	4.6~5.5	21.9~28.8	60	青(水色合)・緑		後期前葉	本刊4章
3	松山大学構内2次	SB 7	円形	6.9~7.1	38	14	青(水色)	土器多量	後期中葉	註6
4	東本4次	SB 302	円形	8.3~8.8	58	6	青	青銅鏡・鐵鑼	後期後半	註7

住居の性格を決定する資料と、住居の廃棄や改築といった習慣を究明する資料があり、出土地点や出土量は重要な意味をもつて。また、本稿では触れなかったが、文京遺跡10次調査では、後期前～中葉のガラス塊が出土し、平野での生産や流通形態についても解明される資料があり、古墳時代との比較も含め今後の課題は数多くある。

## 〔註〕

- 梅木謙一 1991 「IV 科学分析と保存処理『松山大学構内遺跡-第2次調査-』」 松山大学、松山市教育委員会、松山市立埋蔵文化財センター
- 藤田 等 1994 「弥生時代ガラスの研究」 各著出版
- 阪本安光 1981 「愛媛県総合運動公園関係埋文化財調査報告書III」 愛媛県教育委員会
- 長井教秋・大山正風ほか 1973 「釜ノ口11遺跡調査報告書」 松山市立埋文化財センター
- 森 光晴 1986 「小坂釜ノ口遺跡-第2～5次」『愛媛県史 資料編・考古』 愛媛県史編さん委員会
- 梅木謙一 1991 「松山大学構内遺跡」 松山大学、松山市教育委員会、松山市立埋蔵文化財センター
- 高尾和長・山本健一ほか 1996 「東本遺跡4次・枝松遺跡4次」 松山市立埋蔵文化財センター

## 松山平野における弥生時代墳墓のガラス玉

番号	遺跡名	出土地	残存	色	法 規				備考
					長さ(mm)	直径(mm)	孔径(cm)	重さ(g)	
1	帆加山	第5号住居址	完形	青	3.0	5.0	1.0	0.099	『松山市史料集』第2卷18点中13点は保管不備のため不明。
			完形	青	2.8	4.0	1.4	0.062	
			完形	青	2.7	3.5	1.0	0.036	
			完形	青	3.0	3.6	1.0	0.049	
			完形	青	2.8	3.5	1.0	0.040	
2-①②	釜ノ口1・2・3次	18KS B1-3 2次SB1	完形	紺	2.8	5.2	1.6	0.095	『愛媛県史』
			完形	紺	3.4	4.1	1.0	0.079	『松山市文化財調査報告書』第5章
			完形	紺	2.5	4.8	1.5	0.081	
			完形	青	4.1	4.3	1.3	0.098	整理・保管不備のため
			完形	青	2.1	4.0	1.8	0.038	出土地点は不明。遺物
			完形	青	3.0	4.0	1.5	0.056	が不明なものあり。
			完形	青	3.4	3.4	1.2	0.044	
			完形	青	2.8	4.1	1.2	0.053	
			完形	紺	2.4	3.6	1.1	0.039	
2-③	釜ノ口7次	S B1 (伊垣内)	完形	青	4.0	4.0	1.1	0.075	363号17
		S B2 (伊垣内)	完形	青	2.5	4.0	1.3	0.053	27
		S B3 (伊垣内)	完形	青	5.0	4.0	2.0	0.094	31
2-④	釜ノ口18次	S B1	完形	白	3.0	4.8	1.5	0.125	364号17
		S B2	完形	青	2.8	4.8	1.6	0.074	37
			%	青	3.0	3.5	1.0	0.024	38
			完形	青	2.5	3.8	1.0	0.047	39
			完形	青	2.0	3.8	1.2	0.043	40
			完形	青	2.0	4.1	2.1	0.048	41
			完形	青	2.4	3.0	1.0	0.025	42
			完形	青	3.8	3.8	1.5	0.070	43
			完形	青	1.9	3.0	1.2	0.016	44
			完形	青	1.5	2.8	1.0	0.016	45
			完形	青	1.6	2.9	1.1	0.024	46
			完形	紺	1.7	4.0	2.0	0.036	47
			完形	紺	1.8	3.0	1.6	0.017	48
			完形	青	2.0	3.1	1.5	0.019	49
			%	青	2.8	3.8	1.0	0.023	50
			完形	青	3.0	4.0	1.8	0.063	51
			%	青	3.0	4.0	0.8	0.044	52
			完形	紺	1.6	3.0	1.0	0.019	53
			完形	青	1.6	2.7	1.0	0.017	54
			完形	青	2.0	2.4	1.0	0.014	55
			%	青	2.0	3.0	1.0	0.008	56
			完形	青	2.0	2.8	1.0	0.017	57
			完形	青	2.3	2.5	1.0	0.017	58
			完形	青	4.0	4.5	2.0	0.097	59
			完形	紺	1.2	3.4	1.0	0.023	60
			完形	青	2.6	3.8	1.8	0.041	61
			完形	紺	3.4	4.0	2.0	0.092	62
			完形	紺	2.4	3.5	1.3	0.050	63
			完形	青	2.0	3.0	1.0	0.024	64
			完形	青	2.1	2.8	1.0	0.013	65
			完形	青	2.8	2.8	1.5	0.022	66

## 考 索

(2)

番号	遺跡名	出土地	残存	色	法 量				備考
					長さ(mm)	直径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	
2-④	釜ノ118次	S B 2	完形	青	2.2	2.9	1.8	0.020	第4章67
			完形	青	1.7	2.8	1.1	0.015	68
			完形	青	2.5	3.3	1.9	0.022	69
			完形	青	2.5	3.0	1.0	0.026	70
			完形	青	2.2	2.8	1.2	0.023	71
			完形	薄緑	1.2	3.2	1.3	0.017	72
			完形	青	2.0	3.3	1.3	0.018	73
			完形	青	1.3	2.8	1.3	0.012	74
			完形	青	2.5	4.0	2.0	0.036	75
			完形	紺	1.9	3.3	1.5	0.016	76
			完形	紺	2.7	3.8	1.2	0.063	77
			完形	青	2.0	4.0	1.3	0.027	78
			完形	青	1.8	4.0	1.0	0.014	79
			完形	青	2.0	3.0	1.1	0.019	80
			完形	濃緑	3.0	4.1	1.9	0.076	81
			完形	紺	1.9	3.3	1.1	0.026	82
			完形	黃青	2.0	2.8	1.0	0.020	83
			完形	青	1.5	2.7	1.1	0.015	84
			完形	青	2.0	4.0	1.6	0.047	85
			完形	薄緑	2.7	4.0	2.0	0.051	86
			完形	青	1.9	3.0	1.0	0.030	87
			完形	紺	2.6	3.0	1.0	0.034	88
			完形	青	1.1	3.0	1.1	0.013	89
			完形	薄緑	1.8	4.0	1.5	0.026	90
			完形	青	3.0	4.0	1.5	0.090	91
			另	青	2.5	4.0	1.0	0.025	92
			另	青	4.5	3.5	1.1	0.045	93
			完形	青	1.3	3.4	1.4	0.018	94
			完形	紺	2.0	3.0	1.4	0.032	95
			完形	紺	2.5	4.0	1.5	0.049	96
			完形	黃青	2.2	3.4	1.1	0.032	97
			完形	青	1.8	3.5	1.3	0.027	98
			完形	濃緑	3.2	4.2	1.2	0.082	99
			完形	紺	1.5	2.5	1.0	0.015	100
			完形	青	1.9	3.8	1.8	0.043	101
			完形	紺	2.9	4.0	1.1	0.063	102
			完形	濃緑	2.1	3.0	1.0	0.039	103
			完形	青	1.9	3.0	1.0	0.019	104
			完形	青	2.4	3.0	1.0	0.028	105
			完形	紺	1.5	3.3	1.2	0.027	106
			完形	濃緑	3.0	3.8	1.5	0.048	107
			完形	黃青	2.0	3.1	1.2	0.030	108
			完形	青	3.0	3.8	1.7	0.044	109
			完形	紺	2.0	3.5	1.2	0.039	110
			完形	紺	2.8	4.0	1.7	0.058	111
			完形	青	2.2	3.2	1.0	0.037	112
			完形	紺	3.2	4.2	1.5	0.054	113
			完形	青	3.0	4.0	1.5	0.068	114

## 松山半野における弥生時代集落のガラス玉

(3)

番号	遺跡名	出土地	残存	色	法 算				備考
					長さ(mm)	直徑(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	
2-④	塚ノ口8次	SB 2	完形	青	2.0	3.5	2.0	0.031	第4室115
			完形	青	2.0	3.0	0.8	0.015	116
			完形	緑	3.3	3.0	1.2	0.038	117
			完形	青	1.8	3.0	1.0	0.019	118
			残	(3.5)	(2.5)	(1.0)	0.022	119	
			残	青				0.020	未報告
			残	緑				0.014	"
			残	青				0.013	"
			残	青				0.022	"
			残	透明				0.019	"
			残	青				0.111	"
SB 2 内 塚 1	SB 2 内 塚 1	SB 2 内 塚 1	完形	青	2.0	4.1	2.0	0.042	第4室129
			完形	黄青	2.2	3.0	1.0	0.031	130
			完形	緑	2.0	3.8	1.2	0.039	131
			完形	青	2.0	3.0	1.2	0.029	132
			完形	青	2.0	3.2	1.2	0.028	133
			完形	青	1.9	2.1	1.0	0.015	134
SB 3	SB 3	SB 3	完形	青	2.5	4.2	2.8	0.048	195
			完形	青	3.0	4.9	2.0	0.075	196
			完形	青	1.8	3.0	1.1	0.024	197
			残	青	2.0	(2.0)	(0.5)	0.013	198
			残	緑	3.0	3.8	1.0	0.017	199
			完形	薄青	1.2	2.1	1.1	0.009	200
			完形	青	1.8	3.0	1.2	0.017	201
			残	青	2.4	3.0	1.0	0.017	202
			完形	黄青	2.8	3.1	1.0	0.045	203
			完形	緑	3.0	3.8	2.0	0.054	204
			完形	青	3.2	4.0	1.5	0.086	205
			完形	青	2.9	3.1	1.0	0.031	206
			残	薄緑	2.0	3.5	1.0	0.018	207
			完形	青	2.8	3.3	1.5	0.035	208
			残	青	3.0	(4.2)	(1.0)	0.031	209
			完形	青	3.0	3.1	1.8	0.058	210
			完形	緑	2.7	2.9	1.0	0.030	211
			残	透明	2.7	3.0	1.0	0.016	212
			残	青	3.0	(3.5)	(1.0)	0.019	213
			完形	薄緑	1.6	2.8	1.5	0.011	162
			完形	青	2.7	3.0	1.2	0.036	163
			完形	青	2.8	3.9	1.0	0.056	164
			完形	青	2.0	2.8	0.8	0.020	165
			残	青	2.5	3.0	1.3	0.021	166
			残	青	2.0	4.0	0.7	0.026	167
			完形	薄緑	1.5	3.5	1.2	0.027	168
			完形	青	1.8	3.0	1.1	0.021	169
			完形	青	2.0	2.9	1.3	0.021	170
			完形	黄青	1.5	3.4	1.2	0.015	171
			残	青	3.0	(2.8)	(1.0)	0.032	172
			残	青	4.0	(3.0)	(1.0)	0.037	137

## 考 察

(4)

番号	遺跡名	出土地	残存	色	法 像				備 考	
					長さ (mm)	幅 (mm)	孔径 (mm)	重さ (g)		
Z-④	塩ノ口8次	S B 3		完形	青	3.0	3.1	1.0	0.044	註4、草138
				完形	青	3.5	3.0	0.8	0.029	139
				完形	青	2.0	4.1	1.8	0.046	140
				完形	青	2.8	3.0	1.4	0.040	141
				完形	青	2.8	3.9	1.8	0.048	142
				完形	青	2.7	4.4	2.1	0.044	143
				完形	青	2.0	4.0	1.5	0.051	144
				完形	青	2.0	2.7	0.7	0.013	145
				完形	薄青	1.5	2.8	1.0	0.011	146
				完形	青	2.0	3.0	1.2	0.028	147
				細片	青緑				0.001	未報告
				細片	青				0.031	"
				細片	青				0.008	"
				細片	青				0.006	"
				細片	薄青				0.009	"
				細片	薄青				0.007	"
				細片	青				0.007	"
				細片	青				0.015	"
				細片	青				0.021	"
		S B 3 内か2		完形	青	2.4	3.5	1.5	0.025	154
				完形	青	2.5	5.0	2.0	0.066	155
				完形	青	2.9	3.5	1.5	0.058	156
				完形	青	5.3	(3.0)	(1.0)	0.048	157
				完形	青	4.8	4.1	1.8	0.112	158
				完形	青	1.5	2.8	1.2	0.017	159
				完形	青	3.0	3.8	0.7	0.027	160
				完形	青	2.6	3.0	1.2	0.029	161
				細片	薄青				0.006	未報告
				細片	青				0.029	"
3	松山大字構内2次	S B 7		完形	青	3.0	6.0	2.0	0.065	註6、165
				完形	青	3.5	5.0	1.8	0.084	166
				完形	青	3.0	5.0	2.0	0.100	167
				完形	青	3.0	4.0	1.5	0.093	168
				完形	青	3.0	4.5	1.2	0.086	169
				完形	青	3.0	4.0	1.6	0.057	170
				完形	青	3.0	4.5	1.2	0.079	171
				完形	青	3.5	4.5	1.3	0.092	172
				完形	青	3.0	4.5	2.0	0.087	173
				完形	青	3.0	4.5	1.3	0.055	174
				完形	青	3.0	3.5	1.5	0.085	175
				完形	青	3.0	4.0	1.6	0.087	176
				完形	青	3.0	5.0	1.8	0.085	177
				完形	青	4.0	(4.0)	(1.3)	0.050	178
4	東本4次	S B 302		完形	薄青	3.0	4.0	1.8	0.05	註7、第7章281
				完形	薄青緑	2.5	4.0	1.5	0.04	282
				完形	薄青緑	2.0	3.5	1.5	0.03	283
				完形	青	3.5	3.5	1.5	0.05	284
				完形	濃青	3.5	3.5	1.5	0.04	285
				完形	青	3.5	2.5	1.0	0.04	286

## 第7章 まとめ

本書では、釜ノ口遺跡6・7・8次調査の報告を行った。以下、土層及び各時代の遺構と遺物についてまとめをする。

### 1. 土層

釜ノ口遺跡7・8次調査地では、AT火山灰を検出した。AT火山灰は東本遺跡や樽味遺跡がある桑原地区一帯に分布しており、この分布が西南部に広ることを確認した。さらに、旧地形（7次第V層・8次第VI層）は現在の地表面と同じく北東から南西に傾斜していることも判明した。

また、釜ノ口8次調査地の西側には、弥生時代後期以前の路跡が存在し、現在の小坂5丁目から福音寺町北東部は河川の氾濫源と推察される。

### 2. 弥生時代

#### (1) 遺構

釜ノ口遺跡6・7・8次調査地からは竪穴式住居址9棟、貯蔵穴2基、上坑1基、溝9条、円形周溝状遺構1基が検出されている。

① 竪穴式住居址：竪穴式住居址9棟は、弥生時代後期前葉～後葉に時期比定された。ここでは、東本遺跡4次調査の報告で行った分類方法を用いて分析をする。まず平面形態により円形と方形に分け、さらには規模により大・中・小に区分する。

分類の結果、円形住居址には大型1棟と中型2棟、方形住居址には中型4棟と小型1棟があり、規模が明確でない方形住居址が1棟ある。

①大型円形住居址には6次SB1があり、主柱穴5本と炉をもつている。

②中型円形住居址には7次SB1、8次SB2がある。7次SB1は主柱穴4本・高床部・炉、8次SB2は主柱穴5本・貼り床・周壁溝・炉をもつ。

③中型方形住居址には、7次SB2・3、8次SB1・3があり、この4棟は主柱穴・炉・周壁溝をもつことが共通する。

④小型方形住居址には、7次SB4がある。SB4は炉をち、主柱穴は杭状のピットを1基検出しだけで、明確な柱穴と周壁溝は検出していない。

以上より、中型の円・方形住居址には主柱穴・炉・周壁溝があり、大型円形住居址には主柱穴と炉はあるが、周壁溝がないことになる。これは、主柱穴と炉は規模に関係なく存在するが、周壁溝の付設は住居址の規模に関連することを現している。

さて、この分類方法を用いて釜ノ口遺跡1・2次調査地での竪穴式住居について整理する（表97）。なお、3・4次調査地からも竪穴式住居が検出されているが、内部構造が明確に報告されていないため本稿ではとりあつかわない。検出住居3棟は大型円形住居1棟、中型円形住居1棟、中型方形住居1棟に分類される。

大型円形住居址は1次SB1で、主柱穴6本・炉・高床部をもち、中型円形住居址は2次SB3で、主柱穴4本・炉・周壁溝を付設する。中型方形住居址には1次SB2があり、主柱穴4本・炉・周壁溝をもつ。

1・2次調査地の住居址3棟は、形態・規模と内部施設の関係において7・8次調査の竪穴式住居と同じ結果がえられた。よって、弥生後期の釜ノ口遺跡では、竪穴式住居の構築に一定の規格が存在するといえる。なお、この結果より、規模不明の8次SB4は、主柱穴と炉をもつことより中型以上の住居になろう。

次に、8次SB2・3では竪穴式住居址の改築を確認している(第110図)。改築は、主柱を同位置もしくは一部を移動させて規模を拡張し、床面は貼り床を行うものであった。ところで、7次SB1・2は、本文中では高床部と報告したが、検出状況からみると8次SB2・3と同じ構造であり、床面拡張の改築が考えられる。

表97 釜ノ口遺跡検出竪穴式住居址一覧

遺跡名	遺構名	規模	時期	平面形	段	横(m)	面積(m <sup>2</sup> )	壁高(cm)	主柱穴	内部施設	出土遺物	備考			
				長軸	短軸	残存	検出面積	±定面積	直径	床面	柱	漆板	瓦類	個数	
釜ノ口遺跡6次	SB1	大	弥生後期 後葉	円	形	7.10	6.70	35.40	15	5	○		G製 馬口	1	
釜ノ口遺跡7次	SB1	中	弥生後期 前～中葉	円	形	5.50	5.10	21.66	20	4	○	○	○	ガラス	1
#	SB2	中	弥生後期 前～中葉	扇	方形	6.20	(2.40)	12.41	(22.71)	14	(D)	○	○	ガラス	1
#	SB3	中	弥生後期 前～中葉	方	形	(4.56)	(3.57)	14.94	(22.53)	8	(D)	○	○	ガラス	1
#	SB4	小	弥生後期 前～中葉	方	形	3.35	(3.00)	10.43	(14.18)	10	1	○			
釜ノ口遺跡8次	SB1	中	弥生後期 後葉	円	形				(4)		○	○	○	ガラス	1
#	SB2	中	弥生後期 前葉	円	形	6.30	6.50		(31.82)	8	5	○	○	ガラス	95
#	SB3	中	弥生後期 前葉	方	形	5.55	5.15	16.83		28	5→4	○	○	ガラス	60
#	SB4	中	弥生後期 前葉							5	○				
釜ノ口遺跡1次	SB1	大	弥生後期 後葉	円	形	(7.00)	7.00	34.74	(41.13)	16	6	○	○	ガラス	4
#	SB2	中	弥生後期 末	圓	方形	5.70	6.40	26.75		29	4	○	○	土製 馬口	1
釜ノ口遺跡2次	SB3	中	弥生後期 前葉	椭	圓	6.50	5.40	39.38		37	4	○	○	ガラス 土製	3
														馬口	1

2) 貯蔵穴：貯蔵穴は8次調査地より2基(SK1・2)が検出されている。2基の貯蔵穴からは土器・種子・核・植物が出土している。時期は出土遺物から、SK1は弥生時代後期後葉、SK2は古墳時代初頭である。貯蔵穴の出土物は、同時代の食生活を考える上で好資料になる。なお、釜ノ口遺跡内では、貯蔵穴が1次調査地より5基、3次調査地より4基、5次調査地より1基の計10基検出されている。松山平野での弥生後期の貯蔵穴は検出例が少なく、釜ノ口遺跡の資料は貴重といえる。

3) 土坑：6次調査地からは土坑1基を検出した。平・断面形態はともに不整形で、出土遺物は小片であり、性格や時期は判断できなかった。今後の追加資料を待ち再検討したい。

4) 溝：溝は釜ノ口遺跡6・8次調査地から計11条が検出されている。このうち6次SD1と8次SD3は溝底が北から南へ、6次SD2と8次SD7は東から西に傾斜している。この4条は、現在の水路と方向が同じで、埋土に砂を含むことより、集落に付設された流路の可能性がある。

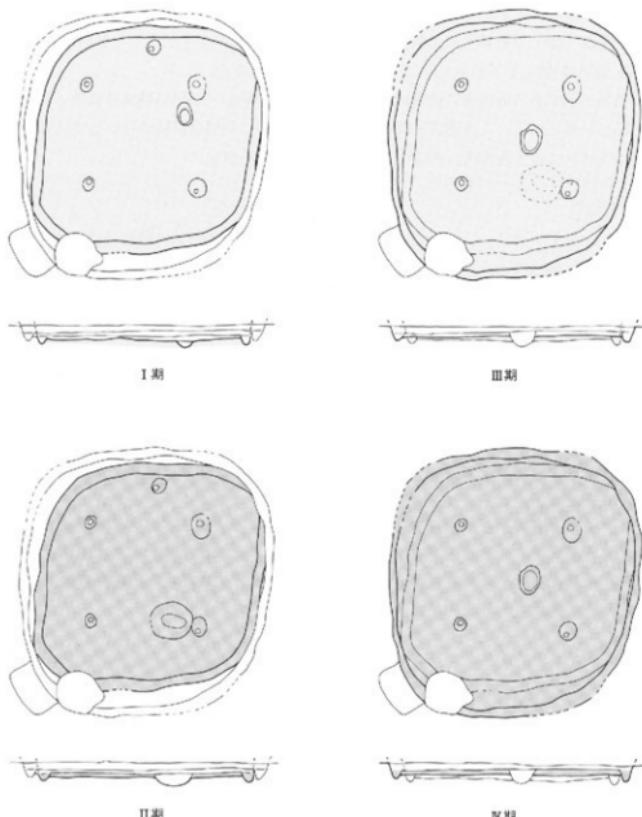
5) 円形周溝状遺構：周溝状遺構は現在までに、松山平野から11基が検出され、中期後葉～後期後葉に時期比定される。平面形態には円形と方形があり、規模にも大・小がみられる。住居区域内で検出されるが、その性格は明確ではない。

## (2) 遺物

ここでは、竪穴式住居址から出土した柱材・礎板とガラス小玉について検討する。

1) 柱材・礎板：釜ノ口遺跡7・8次調査地からは柱材11点、礎板5点が出土した。

7次調査地からは柱材6点、礎板4点が出土し、柱材の法量は、丸材5点が直径12.8~15.6cm、角材が幅15.4cm、厚さ8.9cmである。柱材の表面と切断面は、手斧により丁寧に加工されていた。礎板の法量は、長さ9.2~13.4cm、幅7.2~11.5cm、厚さ3.1~5.0cmである。SB1出土の19と22は接合の結



第110図 釜ノ口遺跡8次調査 SB3実測図(床面使用状況)

果、同一個体に復元された。これより、礎板はまず柱材を10cm前後に切り、2つに割って使用することが解った。また、礎板と柱材は自然科学分析の結果アカガシ亜属であり、同一樹種であることが判明した。

8次調査からは、柱材5点と礎板1点が出土した。柱材の法量は直径10.3~16.0cmを測り、切断面の加工は丁寧に施されている。礎板は長さ18.0cm、幅10.4cm、厚さ2.9cmで、樹種は柱材と異なるものを使用していた。

釜ノ口遺跡7・8次調査地出土の柱材には丸材と角材があり、丸材は直径10~16cmの木材を用いること、礎板の中には柱材を加工し使用するものがあることを明らかにすることになった。

2) ガラス小玉：釜ノ口遺跡7・8次調査からは162点のガラス小玉が出土している。特に8次SB2・3からは155点が出土しており、出土量は松山平野で最も多い。

竪穴式住居出土のガラス小玉は、住居の性格を決定する資料と、住居の廃棄や改築といった習慣を究明する資料とがある。7・8次調査検出の住居は、出土品に特別な遺物がないことより、住居の廃棄や改築に伴うガラス小玉投棄の一例といえる（第6章考察参照）。

### 3. 古墳時代

釜ノ口遺跡8次調査地では、古墳時代初頭の貯蔵穴と弥生時代後期末以降の掘立柱建物がある。釜ノ口遺跡内では、古墳時代遺構の報告はなされておらず、8次調査地が初例になる。これは釜ノ口遺跡が弥生時代後期以降、難統して集落經營がなされたことを示唆するものである。

### 4. 中世

釜ノ口遺跡8次調査地では、13世紀の溝を検出した。8次調査地の南にある小坂八斗蔽遺跡では、13世紀の東西方向の溝を検出している。両遺跡には、住居址や土坑などの集落関連遺構がないことより、釜ノ口遺跡の南西部は主たる居住区ではないと判断される。そして、8次調査地の西には西天山遺跡2次調査地があり、包含層ではあるが遺物が出土しており集落は西側に存在すると考えられる。

以上、6・7・8次調査地からは、弥生時代後期前葉～中世の遺構を検出するにいたった。とくに、竪穴式住居址と貯蔵穴からは柱材と礎板や種・核が出土し、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴式住居構造と植生を考える上での好資料がえられた。今後、釜ノ口遺跡内での調査が進めば、弥生時代後期～古墳時代の集落構造とその変遷は詳細に解明されよう。

# 写 真 図 版

## 写真図版例言

1. 遺構の撮影は、調査担当及び大西朋子が行い、釜ノ口遺跡8次調査は高所作業車・建築用やぐらを用いた。

使用機材：

カメラ トヨフィールド45A	レンズ スーパーアンギュロン 90mm他
アサヒペンタックス67	ペンタックス67 55mm他
ニコンニューFM2	ズームニッコール 28~85mm他
フィルム プラスXパン・ネオパンSS・エクタクロームEPP	

2. 遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カメラ トヨ/ビュ-45G	レンズ ジンマーS240mm
ストロボ コメット/C A-32・C B2400 (パンク使用)	
スタンド 他 トヨ/無影撮影台・ウェイトスタンド101	
フィルム プラスXパン	

3. 白黒写真的現像・焼き付けは、一部を除いて大西が行った。

使用機材：

引伸機 ラッキー-450MD	レンズ エル・ニッコール135mm
ラッキー-90MS	エル・ニッコール50mm
印画紙 イルフォードマルチグレードIVRC	
フィルム現像剤 ゴタックD-76・HC110	

【参考】『埋文写真研究』Vol.1~7

〔大西 朋子〕

第 2 章

# 釜ノ口遺跡

— 6次調査地 —

筆ノ口遺跡 6次調査地



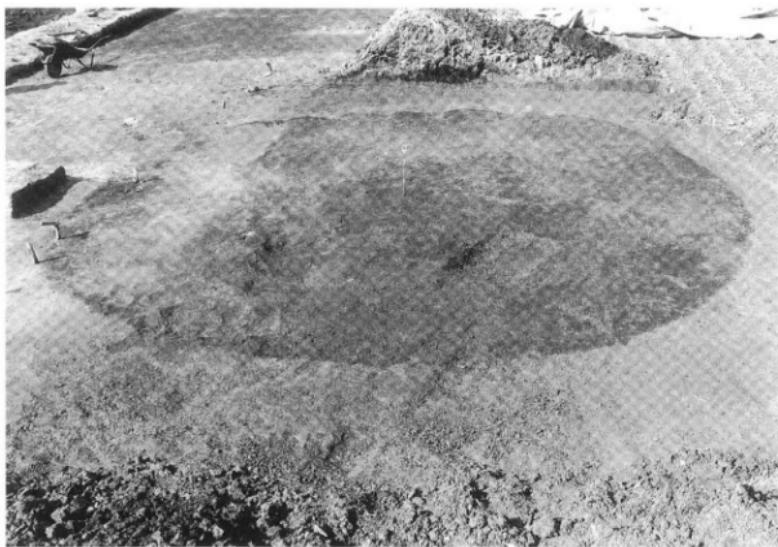
1. 調査地全景（南より）



2. 遺構検出状況（北西より）

釜ノ口道路 6 次調査地

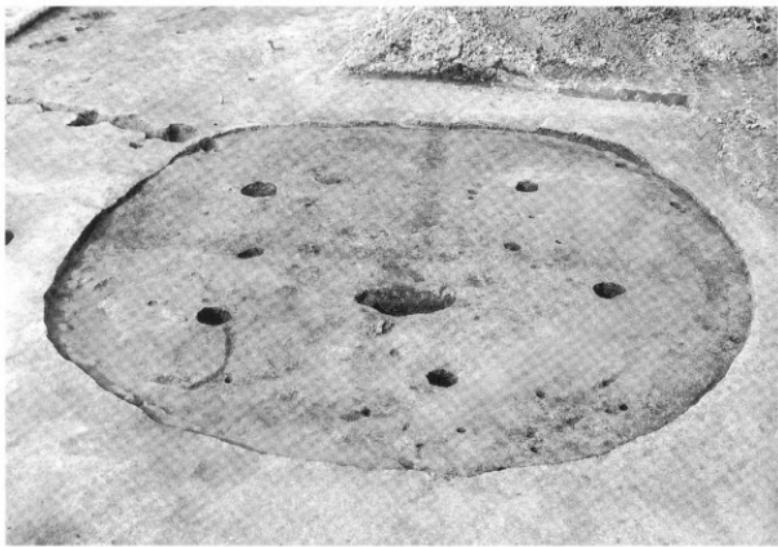
図版二



1. SB 1 遺存状況（南より）



2. SB 1 遺物出土状況（南より）



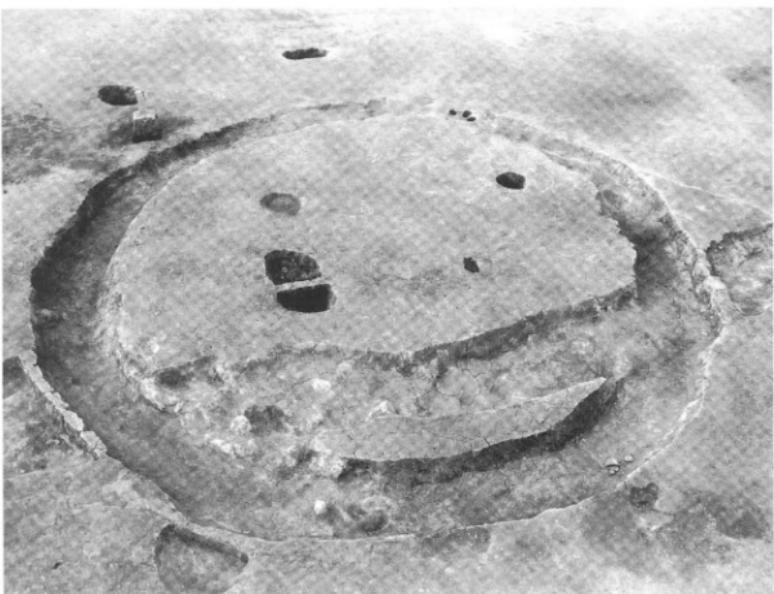
1. SB 1検出状況（南より）



2. 円形周溝状遺構・SD 1遺存状況（北より）

釜ノ口道路 6 次調査地

図版四

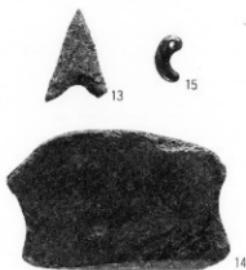


1. 円形周溝状遺構検出状況（西より）



2. SD 2 遺物出土状況（北より）

## 釜ノ口遺跡 6 次調査地



1. SB 1 出土遺物 (7・13~15)、SD 1 出土遺物 (18)、SD 2 出土遺物 (35)、  
その他の出土遺物 (55・57・66)

第 3 章

# 釜ノ口遺跡

—7次調査地—